明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可　明治四十一年八月一日発行（毎月一回一日発行）

# 女學世界

第八巻第十號



博文館發行

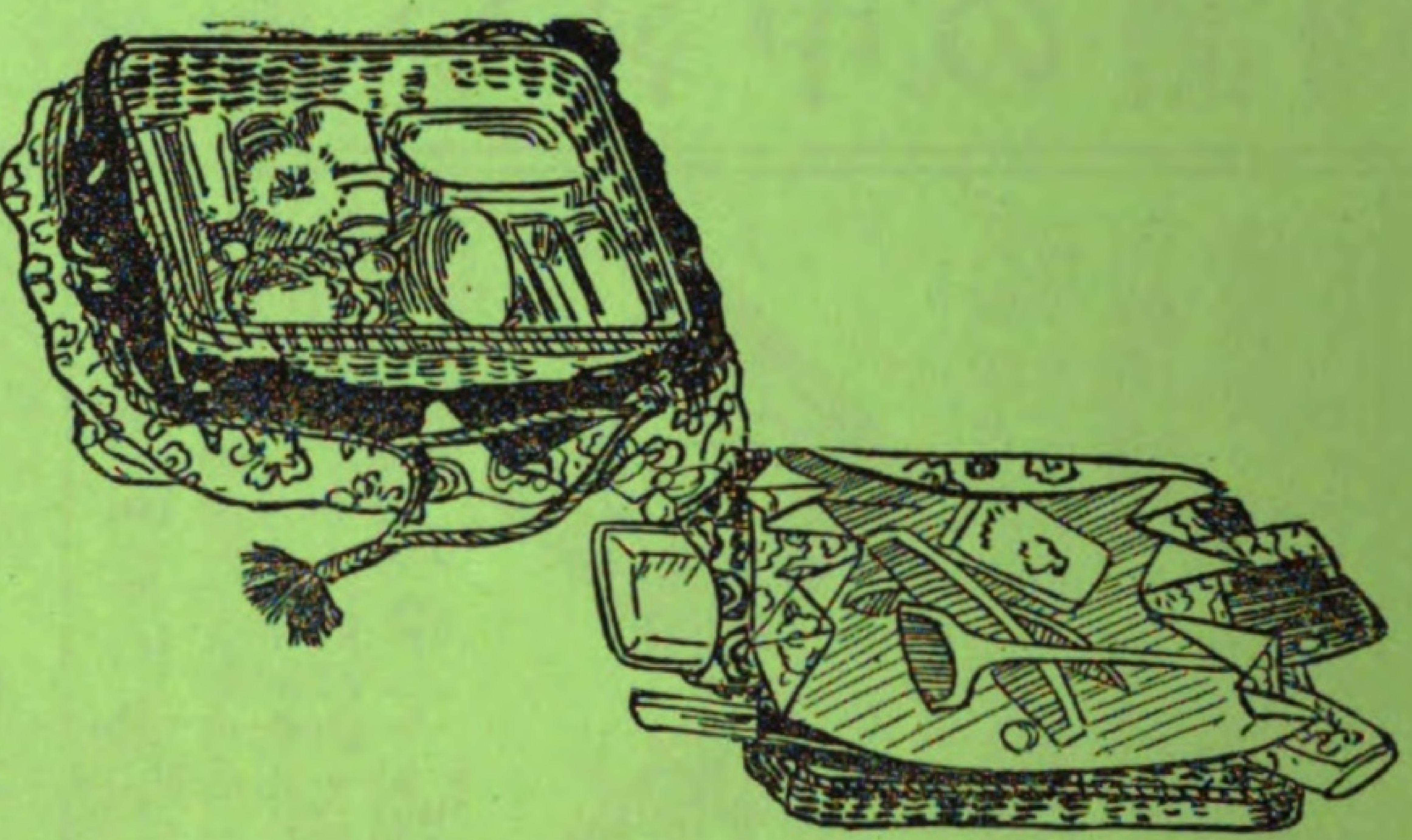
# 女學世界第八巻







# 第拾號目次



# 御旅行用化粧具

日増に熾なる暑熱を山海名勝の間に避け給ふ御婦人方に無くて叶はぬ御旅行用の化粧具は最新の考案になりたるものを種々取揃へ置候間御一覽の上御需めの程奉希候、圖に示したる替匣付き網代製の箱に御髮あげ御化粧具の一式を順序よく納め古代更紗嚢入手提造りのものなり此外鞄形にて金具を押せば側の一面撥て自ら開く仕掛のものあり便利なる事は申す迄もなし

鞄形、甲三十八圓○乙二十六圓○丙二十一圓、以下十二圓より十圓五十錢迄

網代製嚢入(圖に掲げしもの)十三圓○更紗張疊紙入三圓九十五錢○懷中用三圓八十錢等なり

小間物小賣大商店

## 大西白牡丹

東京市京橋區南傳馬町
電本(三十番 三千番)

女(いの一)


瓊姿香油（けいし）は愛すべきバラ。スミレの芳香があつて束髪散髪ニ適し誠ニ時世ニ應じたい、香油です
東京日本橋區通二丁目
柳屋本舖
電話本局二〇一番
本麝香入
柳清香油は充分の精製と芳香の永く保つ点に付他に其比類がありません
きや
美術
漆器
蒔繪
御婚禮道具
家具
其他
製造
ぬりもの陳列場設置有之候間御随意に御縦覧多少ニ不拘御用向被仰付度偏ニ奉希上候敬白
東京市日本橋區室町貳丁目
木屋本店
林九兵衛
電話本局（九百九十七番 千七百十番）
電信略名（キ九）

女(いの三)






女、いの四

若紫



末摘花



一條成美画
三宅花圃書

# ●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

近來何處の婦人科醫院にも常に澤山の病婦を見るが其最も多き病狀を聞くに下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顏色蒼白にて白澤なく從前の病歷を問へば始め必ず「せうかち」に罹りたりと云ふ凡そ是迄に局部の煩ひに經驗ある婦人は迚も一筋繩の治療で全治せぬ事と心得べきなり其病名か子宮病血の道などに云ふ程でも皆な病毒の爲めなれば現に永引きて治らぬが第一の證據である故に本病毒及梅毒・痳病・僂麻質斯等を根治するには必ず唯一丸に限るなり尙其病理、原因、病狀等を精密に調査し最も親切に調劑したる唯一丸の如きは世上未だ其類例なし而も其主藥は現世唯一の驅毒藥なれば實に面白き程效力あり

●根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢
●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（內地遞送無料）
●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

東京市本郷區湯島天神表門中坂上
**發行所** 藥劑師 **中西莊吉**
（振替貯金口座千五百番）

---

於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household, Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan, Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN

ヒゲタ印醬油

宮內省御用達

千葉縣 田中玄蕃釀造 銚子港

女（ろの一）

真正 無毒 高等 化粧

# クイーン白粉(おしろい)
# クイーン水

⊙本品ハ我同盟國ヨリ輸入セル最新最良ノ原料ニ貴重ナル芳香ヲ加ヘ精製シタル化粧品ニテ先祖傳來的ノ陳腐ナル品ニアラズ一度御試用ノ榮ヲ賜ラン事ヲ

▲取次販賣ハ到ル所ノ小間物化粧品店ニアリ若シ品切ナレバ直接ニ御注文ヲ乞フ



東京日本橋區新和泉町

本舖 三井花陽堂

---

## 當今一番よくきく月ざらへは何か

### ●諸孃姉方に急告す●

月經閉止月やく滯りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに從來の月ざらへは其原理を極めず各々大同小異にて殊効ある良藥なし本劑は其病理病症を各專門大家に習得し實地經驗と最新學理とにより普く**特効藥**を蒐集し直接**大醫**に係ると同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滯りを子宮も痛めず快よく下す妙藥也二三ヶ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八歳に至り月經なき人は二週分毎月月經困難は三日分服用せられよ

## 理想的最良藥

# 改良月ざらへ 女月丸



●本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の奇藥也

藥價 一週分六十錢 二週分一圓十錢 特製 四、分二圓廿錢 六週分三圓卅錢 送料各四錢宛

調劑本舖 東京々橋區東仲通中橋和泉町一番地 小宮愛生堂

女(いの二)

ちゞれもくせも毛はへうけあい

二大奇法

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒らぬ人も悉く治りし故夫れで皆樣の進めにより御披露し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

女髪師 東京麹町區飯田町四ノ十六 安部歌子

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

# 肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本●東京市下谷區上根岸町 衛生書院



## ●佛國土產の最新白色新劑

色黑き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈て敎ゆ

東京市東両區小泉町二十七番地 愛隣藥院

根治確証

# わきが

新治療藥 ラピヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ 丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を滌清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

# 毛のはへる

ベグネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

有力なる最新液にして 毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止め●はへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人、まあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髪増生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

# 色の白くなる

ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

# 月やくさらい

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば すぐ下る二三ケ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る 月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す 價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓參拾錢少包料拾貳錢

專賣 東京神田小川町三十九 オリエンタル藥舘 電話下谷二五三五

乳白化粧水『レート』は單に皮膚の表面のみを一時的に抑へ置くのとは違ひ、皮膚の細胞組織から改めて内部から美しいものにする偉効がある上に、高貴な芳香を配合してある上に、皮膚の美醜が分れる脂肪の多少を加減することが出來て、生來の美人になれます、故に一瓶の『レート』は

**色を白くし、肌理を濃にし、荒れを防ぎ治し、色澤を美しくする。といふ本色の外に、ニキビ、ソバカス、吹出物の發生を防いで、日に焼ける氣遣ひもない**

これさへ用へば床しい薫りは邊を拂つて得もいはれぬ快感となりますから他の化粧品は用ふに及びません

『レート』は至る所の和洋小間物店及賣藥店に販賣せり（定價三十錢、五十錢、一圓）




女（ろの四）




宮崎與平筆

1908

# 美形隆鼻術（はなをたかく、つくしくするじゆつ）

本術は唯一回の注射に依て低き鼻を隆くし見事美形ならしめ終身凹むことなく身體に害を及ぼさゞる安全確實の文明的手術なることを保證す

施術 午後三時より夜迄

大學醫院辭職開業

**和田耳鼻咽喉醫院**

神田區今川小路二丁目十一番地（九段坂下御嶽敎會裏通）

---

●●婦人科 小兒科 **專門**

午前宅診　午後往診

▲入院を許す▼

東京市麴町區飯田町四丁目九番地

**女醫　鷲山彌生**

電話番町七八四番乙

---

醫學得業士　中村鐵太郎先生編著

# ▲癩病者の福音

全一冊 四六判六十頁

●病者に限り無料進呈郵送料八錢添へ申込あれ

本書發行の目的は多年の治療に失望せる病者に現代醫學の進歩程度を敎へ併せて來年四月より實施せらるべき癩病豫防法に就て注意を喚起し法律違反等の事無からしむるに在り乞ふ不幸なる病者は一讀して療養に資する處あらば本社の光榮大なり

本書の內容▲癩病に就て▲豫防法と治療法の要約▲癩病は不治の症にあらず▲癩病は遺傳病にあらざる證據▲專門學者の研究報告▲治癩藥として和漢洋藥の種類及效能▲歐米の研究報告▲特效藥の發見▲特效藥の醫治效用 ▲全治者報告（住所姓名、病歷、全治狀態）▲最新治療法▲癩病豫防法（法律第十一號）▲醫師の取締及違反の罰金▲病者の取締及違反の罰金▲法律第十一號に依る豫防及消毒方法 ▲病者に對する希望▲自宅治療法▲以上大要

發行所 ●東京小石川區原町八六 ●治療通信社

---

# 醫師開業廣告

外科一般（特に肛門病 男女生殖器病）

院長診療時間（午前 往診　午後一時より九時まで）

生儀曩に東京大學佐藤外科及築地聖路加病院勤務の處今般辭職の上左記にて醫術開業汎く患者の診療に從事す

神田區淡路町一丁目一番地（寶亭の先）

**自然堂醫院**

院長 醫學士　加藤辰三郎

女（はの二）

通信教授
# 産婆學講義錄
●目下會員募集中●
規則見本要郵券三錢
東京四谷區内藤町一番地
# 東京産婆講習會
新學期開始
毎月一回
六ヶ月修業
本廣告切取り申込者に束修を半減す

男子婦人
# 生殖器科●梅毒痳痔科
●殊に機能障害、神經衰弱、ヒステリー
醫科大學病院辭職
明治療院開設
# 平田章之丞
東京淺草七軒町二（入院隨時）

# ●紅療法
▲本院に紅療部開設▼
診斷用法宜しければ特効あり因て人道の爲め適否を診斷し自宅療法を教へ治療藥を分ち聊か醫の精神に添はん事を期す



にきび●そばかす●こせがさ皮膚病一切如何なる難病も根本的全治せしむる一大奇藥を予が歐米巡遊中發見の結果餘りの不思議さに同病患者救濟の爲其由來册子を進呈す郵券貳錢送れ
●東京品川海岸元芝　岡別邸

# 大腸散
引風一切
速治新藥

藥價
桐箱四十包入金五十錢。十五包入廿錢。七包入十錢。送料各二錢、各地有名藥店に有り若最寄藥店に無き時は直接注文を乞ふ即送す

東京日本橋本町三丁目　藥種問屋　博愛堂

男女
# ちゞれくせ毛赤毛
は何程の難毛も直に根治黒變し良き艶の出る奇術を郵券封入申込の方に無料教授誓て美髮にして差上げます
東京麻布區材木町　岩阪

女（はの三）

# 七百圓の懸賞文藝を募集す

弊園製造の『御園白粉』が海内無比の盛運に向へるは品質佳良の故とは申ながら偏へに世の眷顧厚きに因るなり。弊園は聊か文藝に寄與して此厚き眷顧に酬ゐるの微意を表せんとし玆に總額七百圓の賞を懸けて狂歌、狂句、情歌の三種を募集す。（應募者は女學世界の廣告に依ると付記せらるべし）

## 應募規定と條件

一、内容　狂歌、狂句、情歌以上三種とも御園白粉及び御園各種化粧品の品名を讀込むか又は暗に其特長効能等をほのめかすも可なり是を第一の條件とす。但し品名特長効能等を明瞭に御承知なき方は白粉其他御園化粧品小箱の中に封入せる能書を一讀されよ。

一、制限　投稿用紙は郵便葉書或は葉書同形のものを用ひ最初に作の種類を見易く書し一枚に一首三句までを限りとす、尤も一人にて三種の應募をなすは隨意なれど一枚の用紙に異種のものを記し又は三句以上を認めたるものは總て沒書とす。

一、投稿宛所　は**東京市芝公園第九號地胡蝶園**懸賞文藝係とすべき事、應募者は住所氏名を必ず明記せらるべし。

一、選者と賞金　下記の當選員數は各種を合せる數なり即ち一等三人とあるは狂歌狂句情歌に各一人と云ふ事なり二等以下是と同じ。

一等賞　金參拾圓　三人
二等賞　金貳拾圓　六人
三等賞　金拾　圓　九人
四等賞　御園香水代價參圓　七十五人
五等賞　小説伯爵夫人一揃　百　五　人
田口掬汀先生著代價一圓六十錢（上田屋發賣）
六等賞　小説心　の　影　百五十人
柳川春葉先生著代價七十五錢（今古堂發行）

狂歌選者　黑田撫泉氏――伊坂梅雪氏
狂句選者　柳川春葉氏――伊原青々園氏
情歌選者　中内蝶二氏――石橋思案氏

一、締切と發表　締切は本年八月廿日限り、發表は本年九月廿日以後、當選作品は時事新報、萬朝報、都新聞、毎日電報、報知新聞、國民新聞、東京朝日、大阪毎日、大阪朝日、新愛知、名古屋新聞、福岡日々、河北新報、北海タイムス等に掲ぐべく賞金及び賞品は掲載同時に贈呈すべし。

（はの四）

# 芙蓉



川端玉章筆

あけぼの

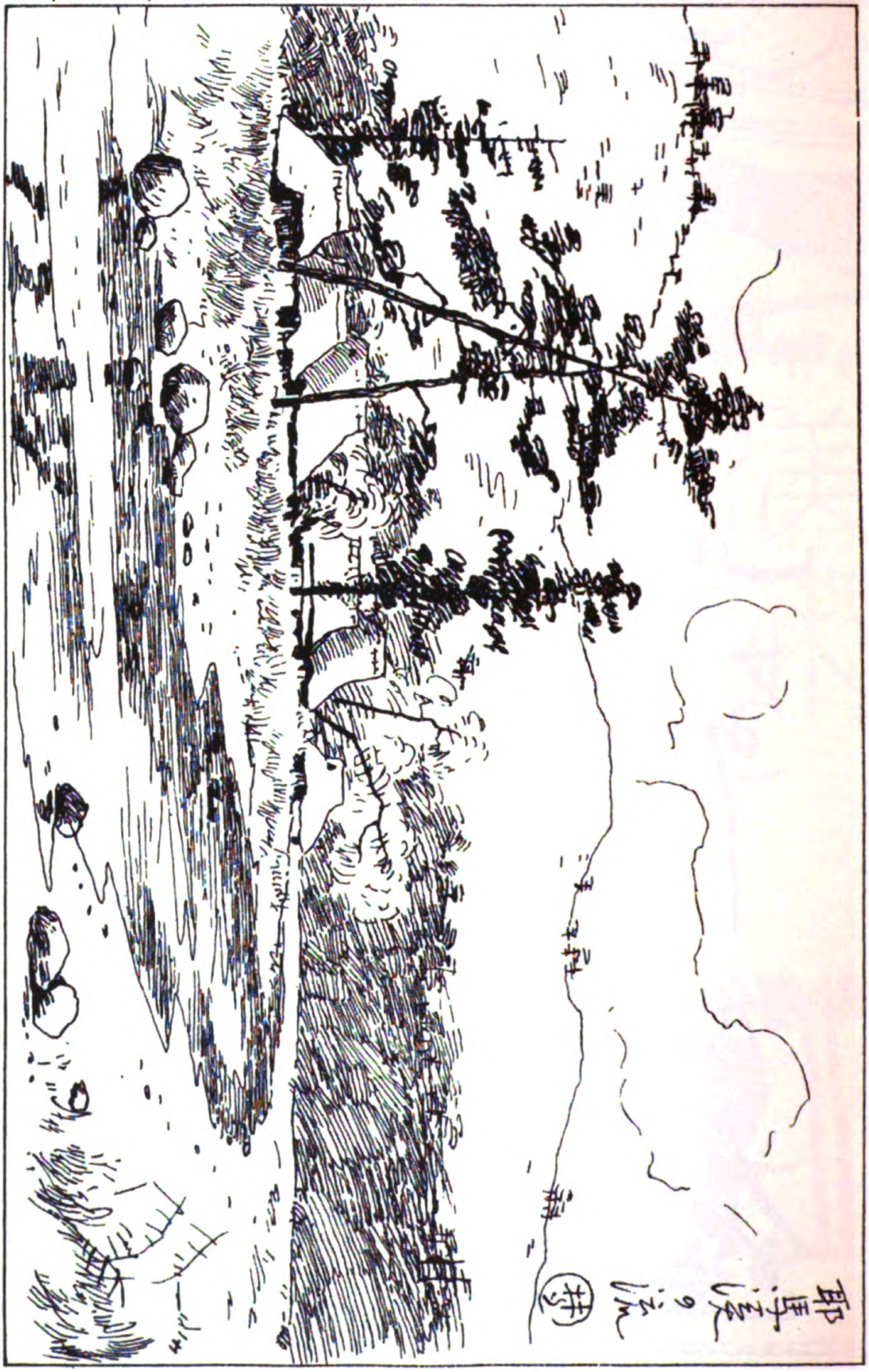


木村朝雲筆

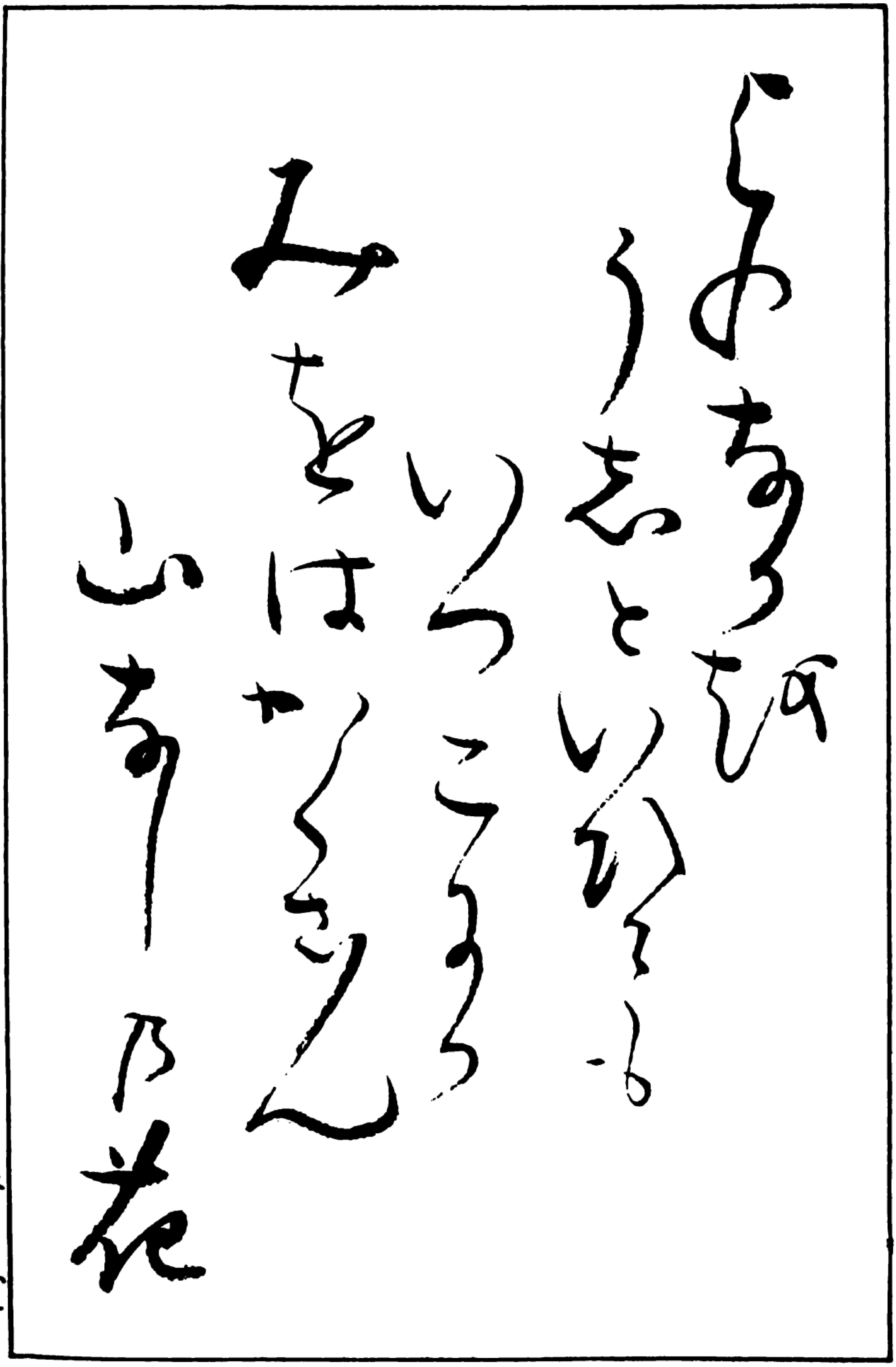


十字屋樂器店
東京銀座三丁目
電話新橋一二五九
振替口座七一五八
金参拾貳圓
金四拾圓
金五拾圓
金五拾八圓
金六拾五圓
金八拾五圓
金百拾五圓
金百六拾圓
和洋オルガン
西洋横笛
(ハーモニカ)
金卅五錢
金四拾錢
金五拾錢
金六拾錢
金八拾錢
金壹圓
金壹圓廾錢以上
金参圓迄各種
舶來手風琴
金参圓参拾錢
金四圓貳拾錢
金五圓参拾錢
金五圓八拾錢
金六圓五拾錢
金拾
樂隊用吹奏樂器
バス、バリトン、テナー、アルト、コルチット、クラリオチット、其他各種
和洋バイオリン
附屬品一式にて
(和製参圓以上
舶來拾参圓以上)

女（にの二）

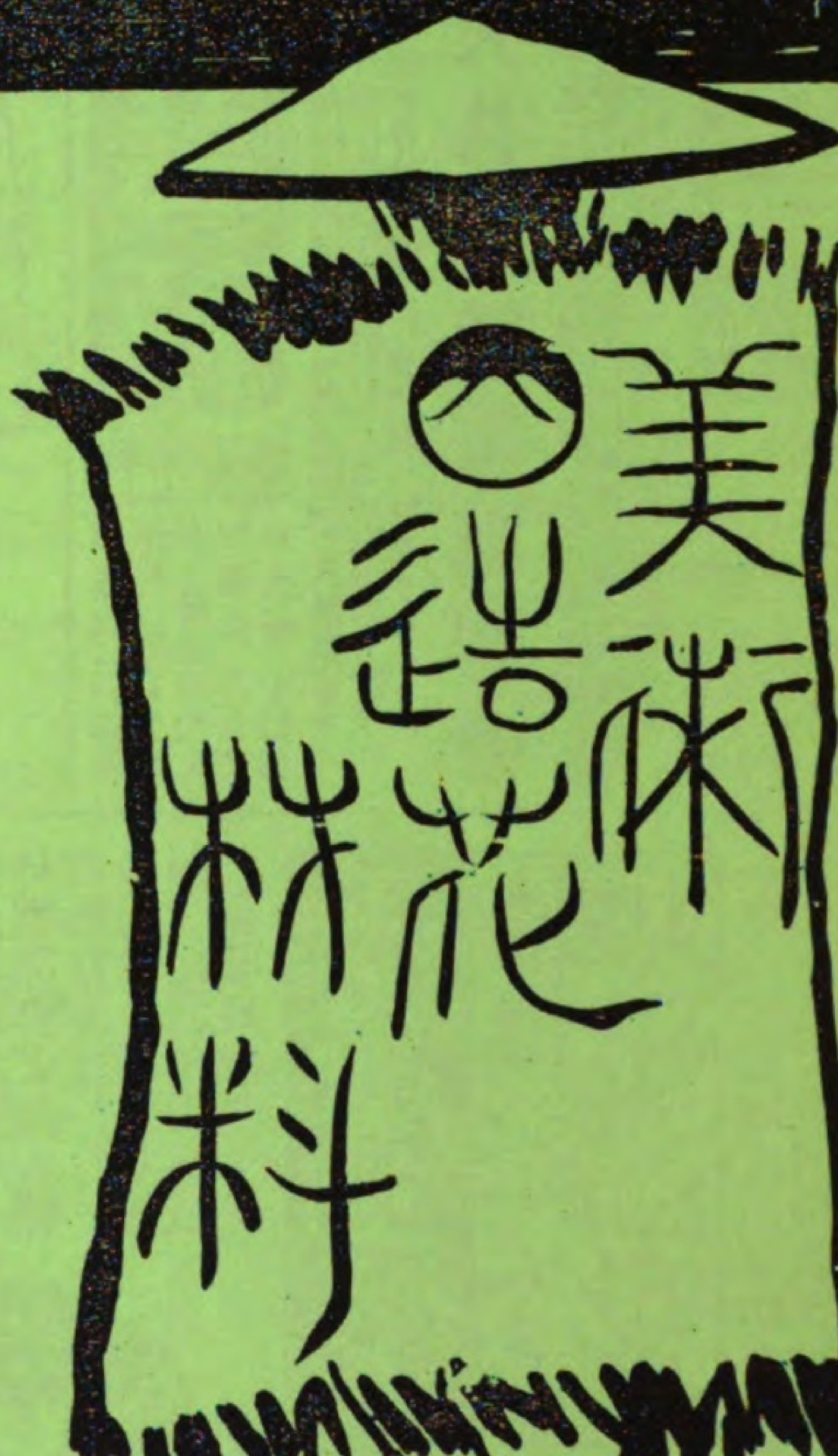



竹久夢二筆



坂口りか子






# 営業案内出版

弊店営業案内第拾五版出版致し候御希望の方は郵券四錢封入御申込み有之度候

東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地

## 美術造花材料商　天野卯兵衛

特電話浪花一六四三番
電信略號（アマウ）
振替口座四九七〇番

（ほの一）

☞第一增刊「文壇の花」は文壇界に高評を博せり☜

# 女子文壇 臨時增刊 懸賞募集

紙數大判二百五十頁

# 文壇の光

十月十五日 臨時增刊

## 投稿募集項目

▲第壹種▼
○小說 總假名付一行廿四字百五十行限

▲第二種▼
○美文 一行二十四字七十行限

▲第三種▼
○お伽噺 總假名付一行廿四字百行限

▲第四種▼
○新體詩 總假名付二十行限
○日記文 一行二十四字三十行限
○書簡文 一行二十四字三十行限
○論文 一行二十四字三十行限

○短文 總假名付一行廿四字五行限
○和歌 一首限
○俳句 一句限
○人物風景圖畫 縱橫隨意二寸五分の三寸位

（此スケッチ畫は可成鳫皮紙の樣なる薄き日本紙を用ふること▲賞は番外一等より十等迄）

▲投稿〆切期限 八月三十一日

（此日の午後十時迄到着を以て〆切る▲投稿規定は次の心得書に就て見よ）

『文壇の花』紙上に於て豫告したる如く。我が女子文壇の第二臨時增刊は『文壇の光』と題し來る十月十五日に發刊すべし。募集の項目と懸賞方法は次の如し。苟も文字あるものは此好機を逸する勿れ。因に云ふ募集の各詩文の選評は凡て編輯局にて行ふこと前の『文壇の花』に同じ其公平懇切なることは應募諸君の信じ給ふ處ならん。敢て傑作の投稿を勸誘す。

## 珍案懸賞贈品

| | 天賞 | 地賞 | 人賞 |
|---|---|---|---|
| 第壹種 | 金拾五圓 | 金八圓 | 金五圓 |
| 第貳種 | 金拾圓 | 金五圓 | 金參圓 |

（正金を呈す）

| | 天賞 | 地賞 | 人賞 |
|---|---|---|---|
| 第參種 | 絹反物（價格七圓） | 舶來更紗（同 四圓） | 絹ハンカチ（同 貳圓） |
| 第四種 | 絹ショール（價格五圓） | 手提袋（同 參圓） | 机掛（同 壹圓） |

【番外】 一等より十等まで（價格五十錢以上貳圓迄）

▲投稿の心得▼

○投稿は女子にして一人一章又は一首限りとす。
○題と文體とは各自の隨意なり。
○投稿用紙は半紙又は原稿紙に限ろ。字體は楷書、假名は平假名を用ふ、但和歌俳句は一首又は一句を半紙半枚に認むべし。
○投稿は各種類を異にする每に必ず別の用紙に認め、題の上に各その項目を書し、題下には必ず住所姓名を明記すべし。
○投稿は句點を施すべし、圈點は附すべからず
○投稿の封筒は女子文壇社編輯局宛、「文壇の光原稿」の文字を傍書すべし但各種取交ぜ開封に差出せば三十匁迄郵稅二錢也、但他の用事の文句を記す可からず。
○投稿は必ず自家の作物たるべきこと若し剽竊の疑あるものは入賞無効とす
○入賞者は寫眞を發表前に通知を受けたる時は差支なき限り送付あれ用濟の上返送す。
○投稿は一切返附せず又不足未納稅は受取らず。但收入印紙を用ふ可らず。
○入賞者へ懸賞品送付は發表一ヶ月後たること。（以上）

發行所 投稿受付所 東京市京橋區中橋大鋸町（電話本局六〇七番） 女子文壇社

女（ほの三）

誰でも出來る暑中の娯樂●御婦人方の智慧くらべ

# 金壹千圓の大懸賞

弊店が今回皆樣の日頃の御愛顧に酬ゆるる爲めに面白き懸賞を催しました所が日々に集まり來る御解答は机上已に山成す盛況であります、シカシ玆に皆樣にお斷を致さねばならぬ事は今回其筋の嚴命により前回の廣告の賞品割當を別項の如く變更せねばならぬ事となりました事で、皆樣の豫望に背く事以ての外でありますが全體の金額に變更がありませんのですから不惡御承知を願ひたいのです、けれども御一人に多くを進呈するよりも、相當の物を多人數の方に呈上するのが寧ろ趣味の深い事と存じますから尙奮つて御應答を願ひます。

**大學白粉**を愛用の御方は何も六ヶ敷事はありません

## 問題

全國中何處の化粧品小間物賣藥店でも賣つて居ります大學白粉の函の外側六面全體に

●大學と云ふ文字が幾つと又た●花の繪が幾つありますか「はがき」に書て被下い夫れと此●廣告を御覽になりました「雜誌」の名を書いて下さい

序でに大學白粉を御買ひ下さいました店の名と町名とを御書添へ願升

●解答用紙は郵便はがきに限り升

●解答の早い御方には德があり升先着の方三千人へは抽籤に拘らず賞品の外に御婦人方になくてならぬ(化粧秘訣)と云ふ美麗な本を差上ます

●解答の〆切は**八月十五日**

御運の善いお方へ**壹千圓**の物を進呈いたします

## 賞品

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一等 | 婦人持十八金側時計 | (二人) | 價格 | 百圓 |
| 二等 | 東京製桐衣裳簞笥 | (三人) | 同 | 九十圓 |
| 三等 | 寶石入十八金指輪 | (三人) | 同 | 六十圓 |
| 四等 | 絽縮緬羽織地 | (四人) | 同 | 六十圓 |
| 五等 | 婦人用流行洋傘 | (五人) | 同 | 三十圓 |
| 六等 | 洋式化粧用鏡臺 | (十人) | 同 | 三十圓 |
| 七等 | 新柄浴衣地 | (三十人) | 同 | 四十五圓 |
| 八等 | 博多織伊達卷 | (六十人) | 同 | 六十圓 |
| 九等 | 絹ハンカチーフ | (百五十人) | 同 | 七十五圓 |
| 先着賞品 | 化粧の秘訣 | (三千人) | 同 | 四百五十圓 |

●解答の「はがき」は東京、大阪有名の新聞社立會の上東京市日本電報通信社に於て最も公平に廻轉抽籤機を以て抽籤致し升

●當籤者は八月廿五日以後新聞又は其他の方法を以て發表致し升

●解答申込所左記御便宜の所へ御申込み下さい

大學白粉發賣元 東京京橋區尾張町一四 大阪東區高麗橋五丁目 **矢野芳香園**

女(ほの四)

才情双絶





讀　書　會　（ウエスト女史の主宰せる）



女學世界愛讀者に限り本店は一割引

## 毛髪を黒く長くふさくする
## 椿油にて精製したる
# ランラン香油



## 色を白く肌を艶麗ならしむる
## レモン牛乳にて製せる
# ランラン化粧水

兩種共一瓶定價各卅錢送料八錢づゝ
（賣捌所は全國到る處にあり）

毛髪の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衞生大家及び毛髪を大切にせらるゝご婦人方の實驗證明せらるゝ處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランランオイルは最も純良なる椿油に毛髪の營養に必要なる藥劑を加へロースバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髪の助育を専一としたる香油也

大阪西區新町通三丁目
發賣元 福田源次郎商店
電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆様のご承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あること發見せられ醫學大家の盛に賛評せらるゝ所となりましたランラン化粧水は此配合に困難なる牛乳とレモン液とを最も完全に調配したる最新最良の美顏劑にして色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日焼け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

（への一）

女(への二)

中根淑先生稿

# 歌謠字數考

全一册

菊判美本
定價金七拾五錢
郵稅金八錢

本書は我國の各種歌謠の字數が五七に定りたる所以を探究論證したるものにして其の事單純なるが如くなれども凡て短歌長歌の古雅なるものより山歌野唱の俗謠に至るまで苟も歌と名くる者は皆この字法に據りて組み立つるものなれば其關係する所甚大なり而して古來いまだ此事の研究に從事したる者あるなし是この書の發行を見る所以なり世の文學者教育家音樂家等にして新古諸體の孰れを問はず作歌に從事する者に取りては必須の好參考書たり

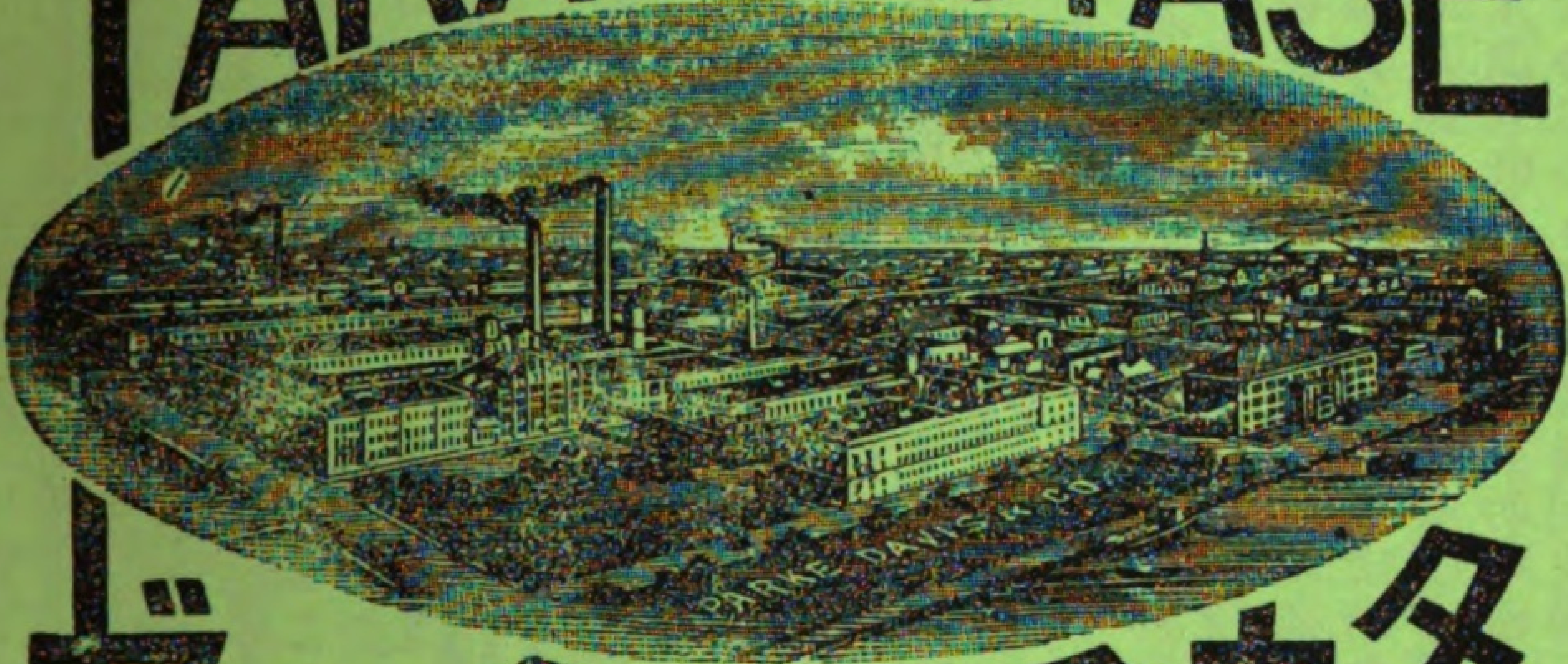
本書は主として我が國歌謠の字數を論ずるものなれども其の例證として掲げたる各種歌謠の起源性質を明かにする爲め毎篇叙論を添へたり其の中前人未發の卓見ありて古來の謬說を破したる痛快なるもの尠からず而して本書に論證したる各種歌謠の概目は大凡左の如し

●短歌●長歌其變格諸體●旋頭歌●混本歌●佛足石の歌●片歌●神樂●催馬樂●風俗歌●東遊●朗詠●雜藝●今様●連歌●俳諧●前句附け●狂句●落首●童謠●和詩●新體詩●平家琵琶●謠曲●幸若●琴歌●淨瑠璃●淨瑠璃諸派●長唄●瞽女節●小唄●諸國の小唄●木琴の歌●伊勢音頭●木遣り歌●舟歌●雲助歌●子守り唄●鳥追ひ●七草の歌●鞠歌●羽根つき歌●茶つみ歌●田植歌●臼つき歌●盆踊り歌●煤はき歌●和讃●祭文●萬歳●厄拂●節季候●ちよぼくれ●尻取り●お月様いくつ●狆わん●一に俵●いつちく●草履近所●かごめ●鴈々

發兌 東京市京橋區銀座一丁目（振替二一九番） 大阪市東區北久太郎町（振替二八六四番） 大日本圖書株式會社

女（への三）

# TAKA-DIASTASE




# タカヂアスターゼ

**世界最大の製薬工場**

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製薬會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規摸の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫薬品を製造す。タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。

**高峯氏發見消化新劑**

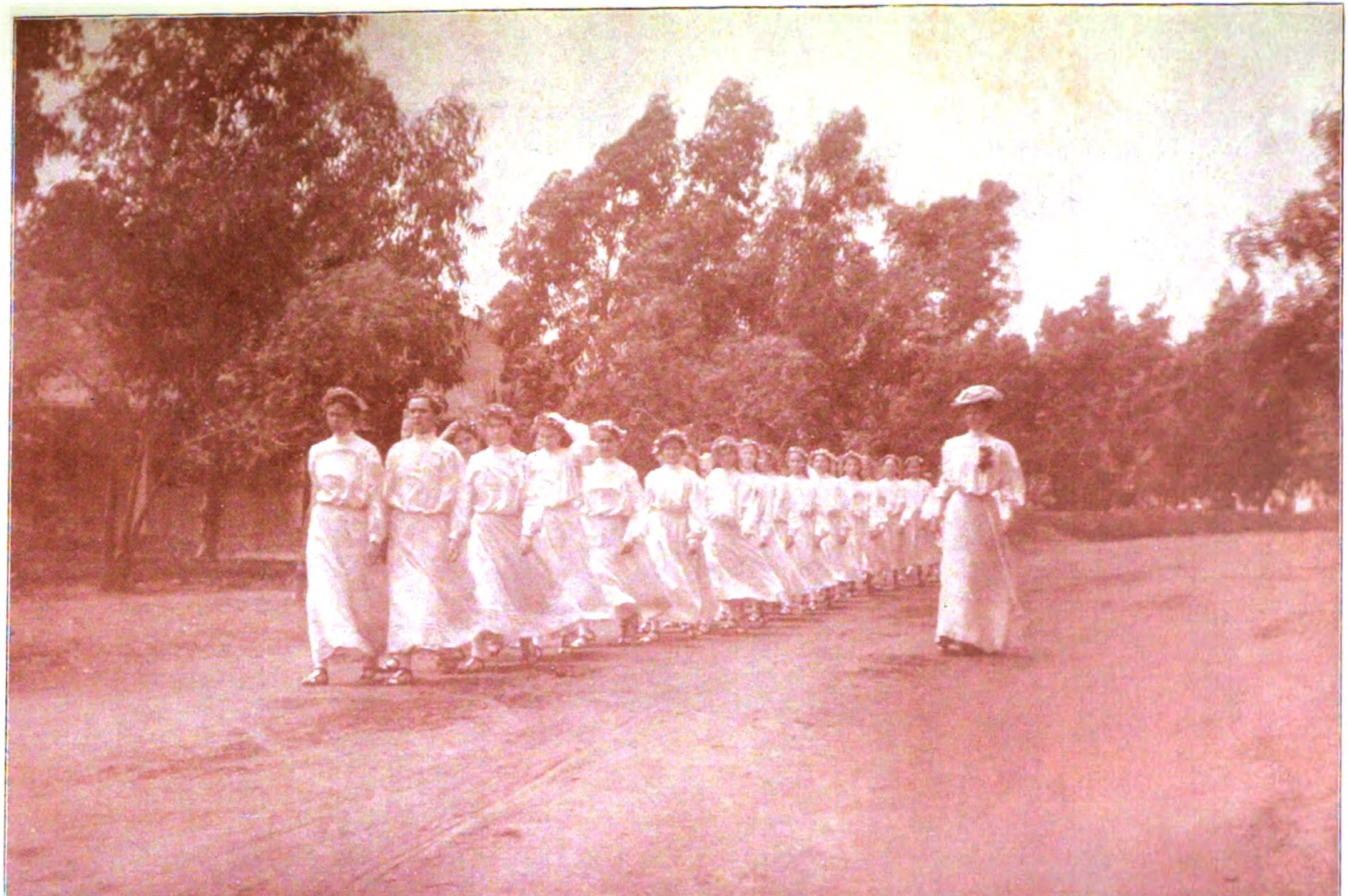
完備せる装置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ本劑は品質純良、毎瓶强度均一にして、又其効力永久不變なり。

醫師及薬舖諸彥！模造品製造者の誇大なる虚僞的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の實品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徴し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地薬舖にて販賣す

代理店　東京南茅場町　三共薬品合資會社

（への四）

米國の女學生



（世界同胞會寄贈）



猪苗代湖の夕暮



多摩川の上流



琵琶湖畔磯崎浦





# 避暑旅行と御洋裝

## ●避暑には洋裝が最も便利なり
## ●令孃令息方に於ては特に然り

本店は時々店員を歐米に派遣して彼れの美點を研究せしむるが故に其の調製にかゝるものは常の最新の流行なるが目下盛夏に際しては海水浴服及び室内用西洋下着貴婦人用夏ショール等も澤山準備致し置候間何卒御用命奉願候

▲材料の精選、技術の精巧、價格の低廉は本店の特色なり
▲本店は男女洋服及び小兒服の調製は勿論、其他一切の附屬品を取揃へあり
▲本店には嬰兒洋裝に對する必要品を取揃へ一箱となしたるベビースボックスあり
▲本店には男女小兒洋服の最新流行の出來合ひ品澤山あり
▲京濱市内は御一報次第直に店員參向す
▲御遠方の御方にはカタログ進呈す、其には御注文に就ての寸法の取方其他の注意を委く記しあり

横濱市辨天通四丁目八十番地
電話三四四番
**中野屋洋服店**

東京市麴町區内幸町一丁目五番地旭館内
(都新聞横)電話新橋三一七六番
**同出張所**

韓國京城
**同出張所**





女(その一)

女(との二)

女(その三)

鹿兒島將校婦人會



# 英語世界

第一號以下數版を重ぬ ▲毎月一回五日發行

年刊十二冊菊判紙數六十四頁 毎號寫眞版及密書數頁挿入

## 第六號要目

●ブラウニング英詩「勇士」譯註……小日向定二郎●短篇夫婦喧嘩譯註……深澤由次郎●英語子音の發音法……岸本能武太●佐久間信恭氏筆蹟●英譯血判取……武信由太郎●コナンドイル講義……今井信之●句讀法……茨木清次郎●英國々歌吟誦法……酒井勝軍●讀本々位解譯練習……增田藤之助●山口神商試驗成績談……奈倉次郎●英語の形式……伊藤彌門●最近科學奇聞……長井氏晸●神戸高商試驗詳解……深澤由次郎●神戸高商受驗談……一合格生●英作文法……武信由太郎●略語の複數……喜安璡太郎●和文英譯と入學試驗……今井信之●如是鷺ペン……長井青郊●同志社英語評判記●文法練習の經歷談●時文研究●英文通信●英學大家蓄音機●讀者研究壇●懸賞披露及新題

## 第七號要目

●新渡戸博士の英文筆蹟●六月施行第七高等學校入學英語問題詳解（深澤由次郎）●ブラウニング作英詩譯註（小日向定二郎）●和文英譯血判取（武信由太郎）●英文句讀法（茨木清次郎）●解釋練習（增田藤之助）●米國々歌吟誦法（酒井勝軍）●神戸高商入學試驗成績談（小久保、小川兩敎授）●短篇小說講義（今井信之）●數詞の文典（喜安璡太郎）●最近科學奇聞（長井氏晸）●英語の形式（伊藤彌門）●譯註夫婦喧嘩（深澤由次郎）●關係を表はす句（武信由太郎）言葉の使い分け（SK）●入學試驗と國文英譯●第四高等學校英語評判記●外國語學校受驗談●英語研究の仕上げ●敎場用會話●時文研究●英學大家氣焰錄●英文通信●讀者研究壇●英語遊戲法●懸賞文發表●同新題●英語倶樂部等尙本號より

**初學欄**（ABC講壇、英文解釋英作文、應用設問）を新設す

## 第八號要目

●英文探偵奇談講義……今井信之●英譯血判取（大尾）武信由太郎●英語と修養……安部磯雄●リーダーに現はる夏の鳥……畔柳都太郎●譯註追剝（マーク、ツエーン）……石川粘助●英文句讀法……茨木清次郎●ナイヤガラ瀑布のイルミネーション……長井氏晸●第一高等學校入學試驗答解……深澤由次郎●解釋練習……增田藤之助●東京高師敎場パノラマ……●子音の發音……岸本能武太●英語の形式……伊藤彌門●東京高商入學試驗成績談……●佐久間信恭氏英文筆蹟……●語句の省略法……武信由太郎●數學式の文法……喜安璡太郎●會話作文資料……笹岡民次郎●時文研究●學校英語だより●英文通信●讀者研究壇●懸賞文披露及新課題……●初學欄（英語の平等無差別、譯讀、英作文應用設問等）

第一號以下取揃應高需 ▲正價金拾錢 郵稅壹錢 前金 十二冊金壹圓拾錢 六冊金五拾六錢外要郵稅

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館


◉東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上）
◉山葉製オルガン（金拾八圓以上）ピアノ（金參百卅圓以上）
◉鈴木製ヴアイオリン（金貳圓以上）
◉獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）オルガン（金參百五拾圓以上）ヴアイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器絃樂器各種
◉舶來樂譜
◉獨乙國製樂器新荷着
目錄御入用の節は往復葉書にて御申越次第御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番　振替貯金口座一四九番

（ちの三）

# 和洋香水界の覇王

本品は全世界を通じて上流社會に
理想的香水として高評を博す

『フランス』交際會の紳士淑女は
ケーパ香水の高尚なる匂を愛せらる




小瓶 廿五錢
大瓶 壹圓

輸入元
日本橋 橘町
竹間商店

## 佛國のラセルフレース會社特製品

---

## ○香水原料（オリヂナル、パーヒューム）
（普通香水の廿倍の濃さを有す）

○一瓶にて半年以上使ひ得る香水原料
○一日一滴以上用ゆるの必要なし

唯一滴にて一週間以上の芳香を保つ其一雫を花簪の莚リボン等に浸さば高尚な芳香には蝶も宿るべく又は扇の地紙に其一滴を潤はさば薫風も滿座の人をして百草の園に在るの思ひを起さしむ殊に最新流行の報知社發賣の薫襟止又は手巾用香水として最も適切なり一瓶、正價金壹圓廿錢當て他に比類なき絶品なり



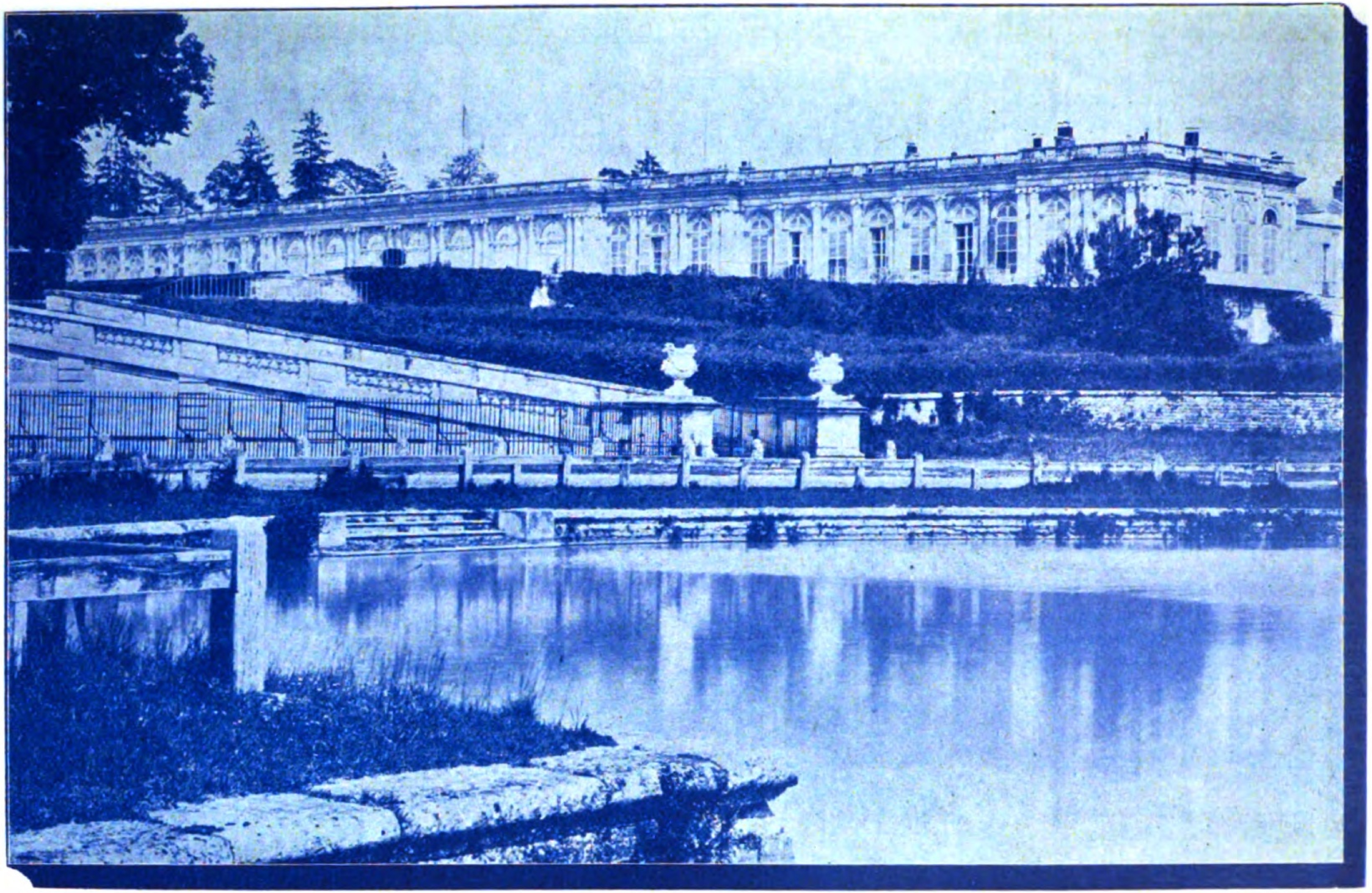
花簪に點滴するの圖

發賣元
東京蠣殻町二丁目
象印齒磨本舗

（販賣取扱）
三越吳服店
白木屋吳服店
大西白牡丹
報知社代理部
實業之日本社代理部
安藤井筒堂

女（ちの四）

# 盛世の偉觀



（ルイ十六世皇后の建設に係る美術館）




は欧米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密薬を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き蠢が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸、昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、はへぎは、まゆげ、ひげ陰毛等の薄を濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し抜毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハッポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥

價塗料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵劵代用二割増の事

取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町從世館藥局主

**本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製**

●大取次左ノ通リ●

東京市

- 本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
- 麴町區紀尾井町三 齋藤藥局
- 日本橋檜物町十八 龜田藥局
- 京橋區八官町八 野田藥局
- 神田淡路町二の四 森田藥局
- 芝田町四の一二 加藤藥局
- 芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
- 赤坂田町四の一 竹内藥局
- 同青山北町五 西井藥局
- 本所吉岡町廿五 小島藥局
- 四ッ谷大傳馬町二 永野藥局
- 高松市片原町 新明藥局
- 堺市大寺南門東入 一色藥局
- 京都市上京區寺町通り石藥師角
- 京都市下京區五條通り富小路行當り
- 大阪市平野町二 丹平商會
- 丸龜市本町 櫻井藥局
- 名古屋京町三丁目 飯田藤七
- 同 荒川長太郎
- 同鐵砲町三丁目 谷田藥局
- 神戸元町一丁目 西村關東堂
- 廣島市橋本町 萬代藥局
- 神奈川青木七軒町 水崎藥店
- 仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
- 岡山市橋本町 加藤藥店
- 弘前市下土手町角 菊地藥店
- 大津市菱屋町 磯崎藥局
- 福知藥局
- 安江洋反物店

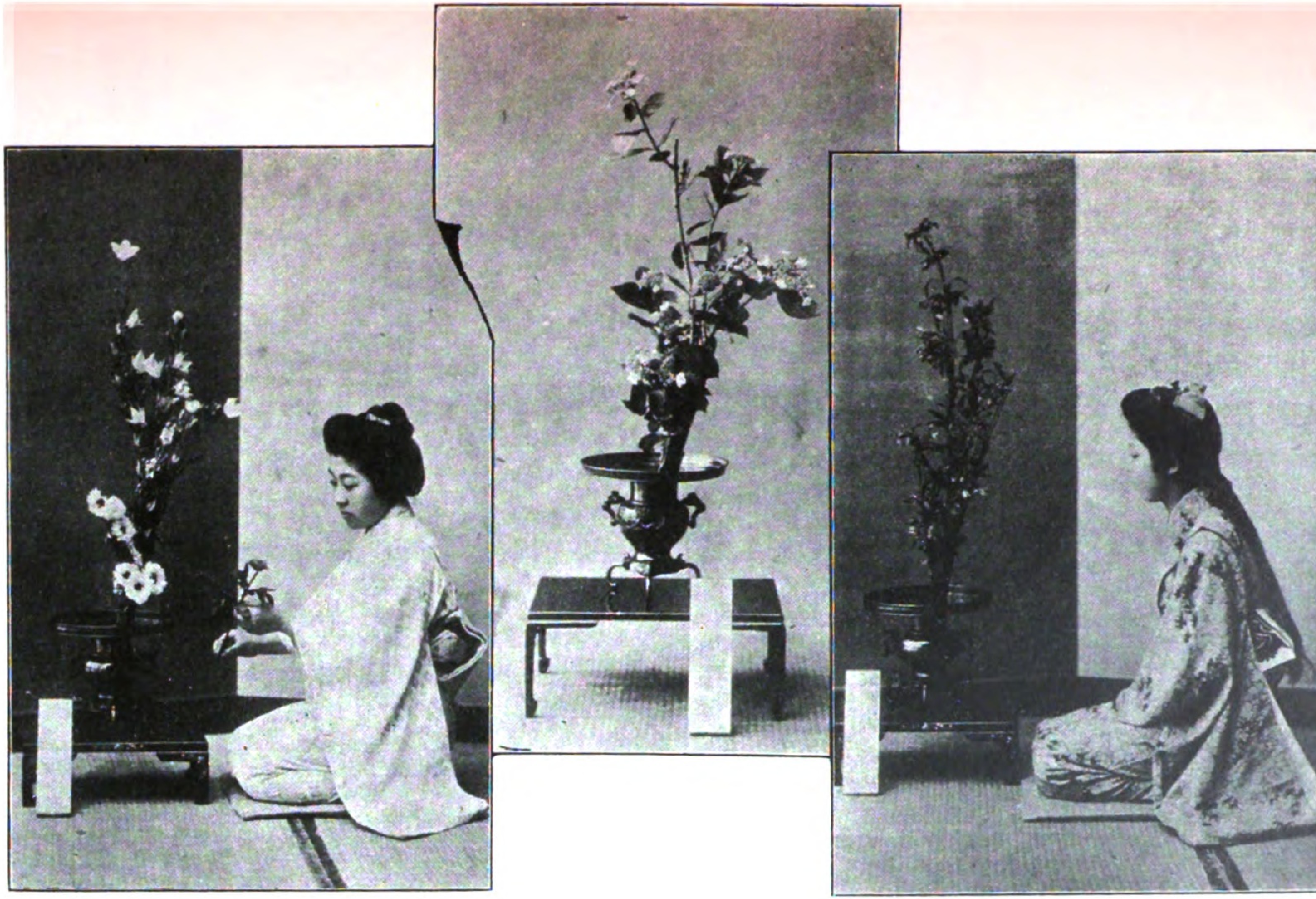
●大取次附近ノ各藥店ニアリ●

女(りの一)

女(りの三)

女(りの四)

挿花の稽古



女(ぬの二)




女（ぬの四）

女子音樂院の同窓會



## 新輸入肉體美容料 白色新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

## 飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病。猛惡なる慢性梅毒。痳毒。リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**を大小便に下し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓也

## 眞正舶來 最優等香水

佛國パリー及英國大會社製造の眞正舶來香水を直接輸入販賣す、彼の外裝及レツテル等を舶來品に模倣し中味は和製品を詰むる粗製贋造物とは價幾分か不廉なれども其香氣の優秀佳良なる點と一滴たらせば確實に一週間以上能く其愛すべき芳香を保存せる點とを比較せらるれば寧ろ頗る經濟的の輸入香水なり、乞ふ一度御試用の上御好評續々愛用賜らんことを

價一瓶二圓半以上拾圓迄數種有之候

## 毛の必ずはゑる確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に係る世界無比の毛髮發生藥なり即ち腫物の痕はげの痕やけどの痕頭髮及はゑぎわの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人本劑特製を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生することを確證す本劑は世にありふれたる種々雜多の毛生藥とは其効眞に天地月鼈の大差あるに付玉瓦混同視する勿れ藥價は特別製貳圓卅錢並製壹圓廿錢

## 血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血、**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



## わきが 腋臭 根治確證新發見藥

醫療實驗百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増のこと

以上六種 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

女(ゐの三)



# 八月（葉月）

**行事**＝一日武藏氷川祭。四日山城北野天神祭。十五日八幡神社大祭。二十五日龜井戸天神祭。此月下旬廿六夜待月見團子枝豆などさゝげて月出を待つ。

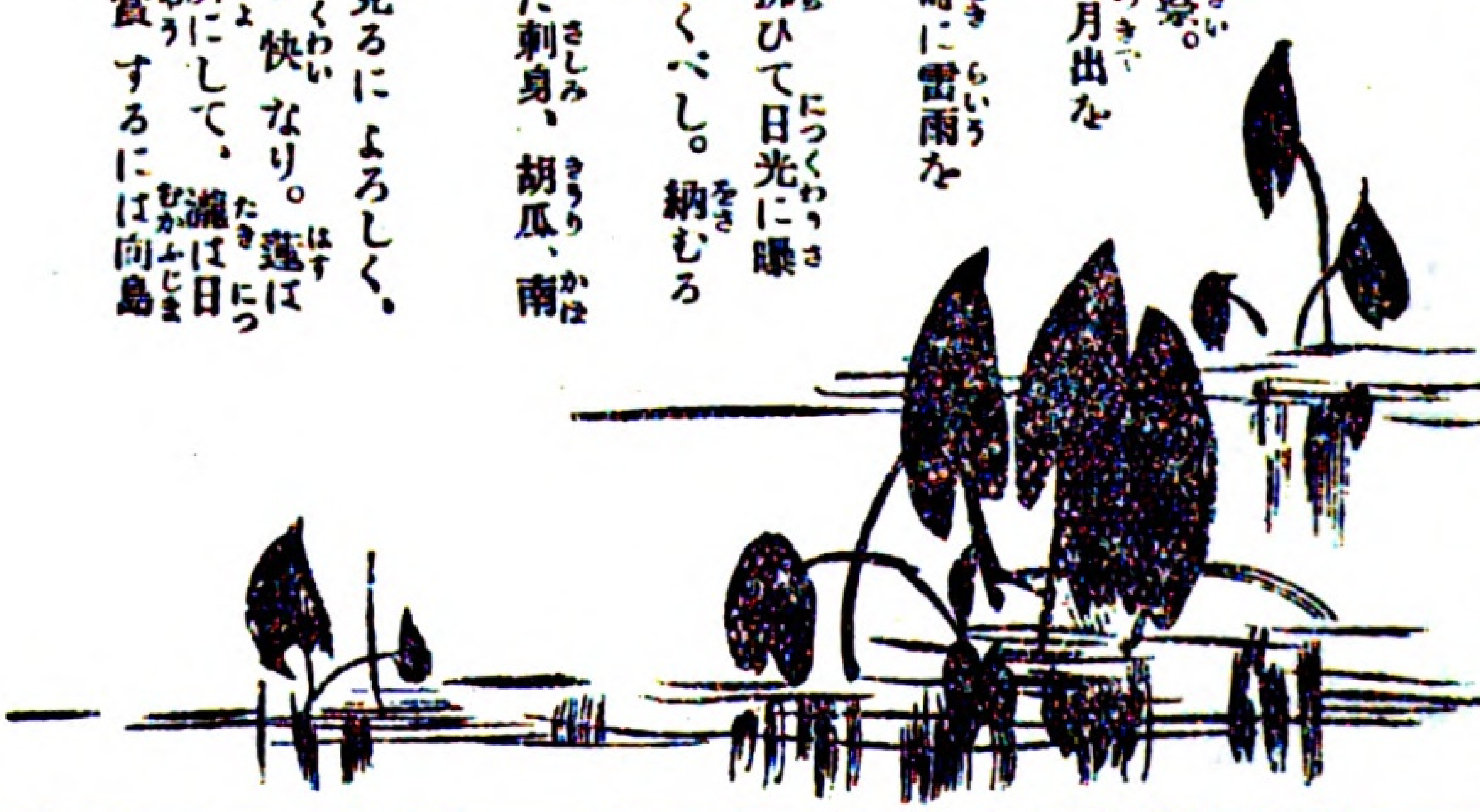
**季節**＝「立秋」。「處暑」。天氣は概ね晴燥にして、南風徐ろに至り、時に雷雨を來す。人は苦熱を避けて、温泉、海水浴に赴くもの多し。

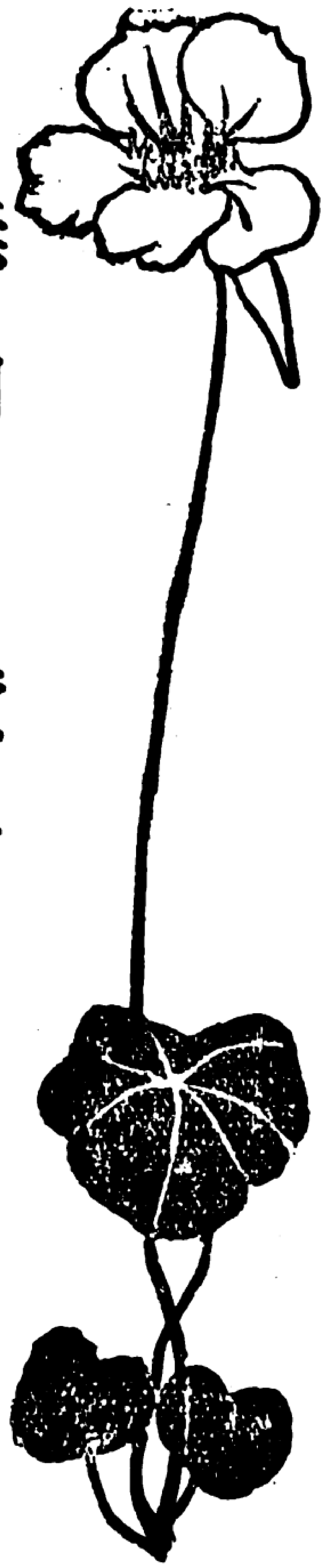
**家事**＝暑中好天氣なれば土用干をなすべし。簞笥、葛籠は底を拂ひて日光に曝らし、衣服は風透しよき室内に綱をはへて陰干にし、日の内に取り置くべし。納むる時は樟腦を少しづゝ紙片につゝみて虫のつかざる樣心づくべし。

**食品**＝鰌、鰻、鮹、石决明の水貝、鯉の洗ひ、穴子の魚田、いなだ刺身、胡瓜、南瓜、西瓜、眞桑瓜、梨。

**遊樂**＝此月の樂みは、露の干ぬ間の朝顔、濁にしまぬ蓮花を見るによろしく、或は遠く避暑遊行を志して、清風冷水に心身を洗ふも亦無上の快なり。蓮は上野不忍池、京都大谷、大阪天王寺、朝顔は東京入谷が名所にして、瀧は日光華嚴、裏見、美濃養老、紀伊那智等幽邃を以て優ろ。秋艸を賞するには向島百花園、廣尾笑花園。二十六夜待は品川、高輪、洲崎等よし。

**日曜**＝二日、九日、十六日、二十三日、三十日。





# 無用と實用

棚橋絢子

今日は實用と云ふ事が大層重んぜられて、何事でも實用的で無ければならぬもの〻樣に考へる事になりました。實用と云ふ事は勿論大切な事で御座いませうが、併しそこに又無用と云ふものが無ければなりません。否一歩進めて無用からして出て來た實用で無ければほんとうに用は爲さないと思ひます。

私共の住ふ家に就て申せば、先づ門があつて、次に玄關があります。所が人の家を訪問するには、俥をカラカラと門内へ引き込むのは失禮ですから、是非共門で下りて、玄關迄テク〱歩まなければなりません。之れは甚だ面倒な無用な話で、成るべくなら、行きなり玄關があつてほしい、其の方が客の爲に實用的だ、と申されるかも知れませんが、強ち其樣したものでもありません。矢張り門があつて、そして玄關へ行く迄の間に廣廣としたお庭があると、何となく奥ゆかしく感じます。

其れよりお座敷へ上がると、一方に床の間があつて、其處に色々裝飾を施してあります。又西洋室にしましても、別段何に使ふでも無く種々雜多のものを飾つてあります。或はランプにしても綺麗な飾り附のものを使

ひます。實用と云ふ眼で見るならば、此等は誠に無用な事ですが、けれ共其れが無ければ趣味も何にも無い事になります。

或は勝手道具にしましても、若し實用と云ふ點から申せば、日々自分達が用ゐて居るものと來客の際に用ゐるものとを區別する必要は無さゝうですが、其れを矢張り臺所用、自分達用、來客用と各々別々にして、箸は象牙或は蒔繪もの、其他膳、椀、皿等も夫々趣向を凝らしたものを用ゐるのは、先に述べた室内に裝飾を施すと同じ道理であります。

一々數へはしませんが、世の中には無用な事は澤山あります。けれ共其れが無かつたならば用は足りません。其れがあればこそ趣味、風流、高尚、品格など云ふ事があるのです。其れ故無用と云ふ事には無用外の用があるものと思はなければなりません。

嘗て私の家へ出入してゐる書生がありました。美術學校の彫塑科へ這入つて居たので、其の卒業間際になつて、どうか私の塑像を作らせて呉れと申しますから、それではと言つて作らせる事にしました。で私の寫眞を持つて行つて、モデルを何處からか雇つて來て、幾日かの後に大體の格好を作つて來ました。そこで尙ほ十分に直すから其處へ坐つて呉れと言ふから、其通りにすると、此處は筋が足りない、眼が下つてゐる、鼻の穴は大き過ぎる、やれ何處が惡い、此處は何うだのと、忰なども指揮して、之れなら似てゐやうと云ふので、二三か三日坐らせられて漸う出來上りました。で見ると成程似てゐる。似てはゐるが、嘆息しました。私は不憫な女だと自身でも思ふては居ますが、其れを見ると如何にも下品な所が現はれてゐるので、ほんとに恁んなかしらんと驚きました。けれ共之れには理由があります。それは、第一其のモデルになつた婦人と云ふのが、僅か二三十錢で雇はれて來る人ですから、氣品などのあらう筈が無い處へ、其れを作つた書生は、別段學問がある

でも無くて、たゞ其んなものを拵える事丈け習ひに行つてゐるのですから、其の作の上に高尙な思想が現はれよう筈が無かつたのです。學問は時には無用の樣に見えますが其の無用の學問も平生深く遣つて置かなければ人間として實際の役に立たぬと深く感じました。

　造花にしても矢張り其樣で御座います。私は造花を學ぶ生徒達に、植物學を十分お學びなさい、又花や植物を實地に見て能く研究なさいと言つて居りますが、其れが身に染みぬから如何かすると妙な處から枝葉が出ます。西洋の草花になると殊に間違が多くあります。此頃は其れを研究する方が多くなりましたから、以前の樣ではありませんが、其れでも折々實際と違つた無理なものを見受けます。そして恁う云ふものを作るにも矢張り色々學問が深くないと花に氣品を持たせる事ができません。且つ其れが深ければ深い丈其のものに趣味が出來て、技術も進歩するのです。

　其れにも拘らず、今日は、詩も無用だ、和歌も無用だ、音樂も漢學も無用だ、其んなものは學ばずともよいと言ふ人があります。漢籍など成程直接に要らぬか知れぬが、其の間接の用は大きいものです。實に昔の學問の仕方は、精神修養が第一になつて、實用は次に或は度外に置かれてありました。それを今日は實用に重きを置くのですから、昔の弊を改ためて誠に結構ですが、而かも實用ばかりで事が足りると思ふのは大きな間違です。精神上の修養が無いと、如何しても高尙な人間になれません。

　諸君は實用的の仕事をして居なさるのは誠に好い事ですが、無用に用が含まれてゐる事を御肝銘下さつて若し時間の餘裕があるならば所謂無用の學問も深く研究なさる樣に望みます。人は兎角精神的の學問が後退りして、實用或は物質的の方面にのみ走る傾があるが精神的の方面も實用的の方面も相並んで十分力を入れられ、立派なる成果を收められん事を祈ります。

（記者筆記）

# 現代女界の暗流

三輪田眞佐子

つら〳〵現時の女界を見るに、最も恐るべき暗流あり。抑も、不健全なる思想ばかり、女界のため、有害なるものはあらじ。大御代の惠の露に潤ひて、文の林いと繁く、學の園いと盛なるべき我が女界に、雜草蔓々として、勢を逞しくせんか、林園の良材は、自づから、妨害せらるゝを免れず。もし敎育界に、不健全なる思想の暗流盛ならんか、女子敎育の効果を空しからしむるは、言を待たざるべし。

凡そ、女子敎育上、恐るべき暗流は、煩悶及厭世の分子なり。さなきだに、女子はヒステリー的性癖を有し、聊か、不如意の事あらば、忽ち、憂鬱に陷り、天を怨み、人を恨み、殆ど、狂氣の沙汰を行ふものなり。これ大に戒むべきことにこそ。

世には、厭世のため、自殺するものあり、煩悶のため、一門知己の心配を釀すものあり。何ぞ思はざるの甚だしきや。抑も、敎育は、斯る不健全の思想を除去せんため施すもの。而るに、文字を解する女子にして、この愆を演ずるは、敎育上の一大罪人ならずや。

不健全なる思想の女子に問はん。汝は何故に、斯る病的思想に罹りしか。汝は己の分を知らざるため、不平を起しゝにあらざるか。汝は忍耐の德を缺きしため、苦痛を感ずるに至りしならずや。汝は安心の道を我に求めずして、他に待つため、煩悶するにあらざるか。汝は不義の行をなしつゝ、厭世の緒を開きしにあらざるか。思ふ、汝は淸風明月の心と行あらば、必ず、幸福の來る理を悟る能はざるものにあらざるか。おのれは、速

に病的思想の暗雲が、汝の身邊より去らんことを祈る。

抑も、人は絶對に單獨なるものにあらず。必ず、親を有し、兄弟姉妹を有し、或は親族關係を有し、或は、知己朋友を有し、又國民の一員、社會の一員たることは、免るべからざる事實なり。若し茲に人あり、煩悶のため、自殺、若しくは、發狂するものありとせんか、自らは、感情を滿足し、又は、苦痛を免かるゝとするも、父母は更なり、親族知人の心を勞せしむるを如何せん。されば、人は我一個たることを思はんよりも、我は人類全般と、不離の關係を有することを思ひて、愼重せざるべからず。

況んや、不謹愼の動作をなせば、己れの家名を汚すのみならず、母校と學友の體面に、累を及ぼすことをも意識せざるべからず、されば我身は我一個の私物にあらざるを知らば、一言一擧を忽にすべからざるなり。

古書に、父母の心を安んずる、これを孝といふとあり、されば、父母より受けし大恩に報ゆる道は、徒に父母の口體を養ふに止まらず、自ら、人らしき人となりて、父母の令名を顯さんことを務めざるべからず。亦國民として、衆生より諸の恩を受くる以上は、これに報ゆる義務として、自ら、心身を勞し、大に活動せざるべからず、而るに、反りて、安逸を貪り、遊惰に流れ、甚しきは、世を憂ひ、厭世の念を起すものあるは、嘆ずべきの至ならずや。

女子は、つねに、快活にして人に接し、たとひ、如何なる難事に逢はんも、勇氣を以て、これに臨むべきなり。さまで、難事にあらざるものを、難事となして、不平の聲を發し、悲運をかこち、悲境を歎き、人を怨む如きは、一般女子の通弊ぞかし。

更に、恐るべきは、自然主義なる言葉の流行なり。即ち、血氣盛にして、定見なき若年の男女が、禽獸的淫慾の行を爲し、これを人類の本能と考へて、斯る名目を附せり。古今東西かゝる不健全の甚しき思想はあらざるべし。おのれ人を教育すること幾十年。畢竟斯る主義を矯正せんがために努力せしなり。

若し、假初にも、今後日本に斯の如き人物陸續出で

んか女子教育界を害する罪、決して輕からざるなり。要するに、女子は健全なる思想を懷きて常識の人となり、終始、道德的生活を營むこそ、教育を受けし甲斐あれ。而して、健全なる思想を養ふ法は、虚心にして先覺者の訓言を守り、學生相互に校風を重んじ、制裁を尊び、以て、知らず識らず、深き信仰を作るより善なるはなし。願くは、健全なる思想の人となれよ。人生の修養の目的これより大なるはあらざるべし。おのれ、社會の暗流を見て、寒心に堪へず。由りて、所感をものすること、斯くなん。





# 私が好んで讀みし書物

女子英學塾主　津田梅子

## 幼時の氣焔

私は幼ない時から亞米利加へ參つて、恰ど居つた家が學者(ランメルといふ人)の許でしたから、讀書には非常な便利を得ました。家に三千部位な藏書があつたので、手當り次第に何といふ事なく、讀んで〳〵讀み拔きました。然も惡い本は固より置いてありませんから、自からに書物の撰擇が施されてゐたも同然でした。

然うですね。冒險談風のもの、アラビアンナイト風のものなどを、非常に讀みました。お伽噺も讀みました。それから小説……。

小説なども大層早くから手にしたので、十一二歳から最う盛んに讀みました。スコットのものなどをいろいろ讀み、デッケンスのものは更にいろ〳〵讀み耽りました。當時に眞正に分る筈は固よりありませんが。

其頃の事です。汽車の中で、或婦人が私に、『本が讀めますか?』と訊きました。幼さい日本人の娘ゆゑ然う申したのでせう。これがグッと私の幼心に障つたので『ハイ今はウイダーの小説を讀んでゐます』とやつたものです。ウイダーは佛蘭西の當時有名な小説家。大人でも一寸分り難いものです。其婦人が吃驚しまして、飛んでもない事だと早速ランメル家へ注意したので、ミッセス、ランメルから『ウイダーを讀んでゐるつて?元來何書を讀んだのか』と尋ねられ、『此書です』といふと、『それならば』と許された樣な事もあります。

## 早く讀んだは利益

まあ隨分詰らないものを澤山讀みました。今からは

恥かしい位小說などを讀んだものです。けれども早くから讀んだのは利益でした。年が經つてからは何うして彼廢物に熱中したかと思ふ位。到底も最う讀まれません。スコットの小說などにしても最う精讀しかねる程ですから、況して探偵小說風のものなど……。まあ早く讀み盡したので善かつたと思ひます。何の利益に？と言はれても困りますが、自からに歷史や地理や社會人情の幾干を知る事が出來たと思ひます。



## 亞米利加の讀書の空氣

私の幼時は右の樣でしたが、一體に米國の子供はよく本を讀みます。それに子供專門の圖書館はあり、子供向の——害がなくて面白い樣に書いた書物は續々出版されますし、圖書館では統計を取つて、子供の大層好く本をチャンと調べて、それは幾部も備へて貸出す樣にしますし讀書が實に便利です。妙齡の娘さんの讀書は學校でも無論世話をしますし、又重に母が監督します、けれど窮屈なものではありません、私は最う自由にされて居りましたが、前申す通り藏書其物が既に撰ばれてをるのでした。書物の外新聞や雜誌の盛んに讀まれるのも無論の事です。

さて夫人や其他の實世間に出てゐる婦人が、又實に

よく讀書します。田舍の村でも必ず附近々々に圖書館があつて、容易く本が借りられる。大抵二週間期間の定めになつてをります。鳥渡他へ一晩泊つて見ても、きつと其處の主婦の讀みかけの本がある。汽車中で讀書するなどは通例の事です。又汽車中へ盛んに小説などを賣りに來ます。或は店に出てゐる婦人ならば一寸の隙にも本を讀むといふ風に、それは讀書を努めてします。寧ろ亞米利加では男よりも女の方が盛んに讀書するのです。それに又面白く平易に書いた書物がずんずん供給されますし、小説でも社會問題や家庭問題、敎育問題などを含めた面白いものが續々出ます。"The Awaking of Helena Richie" これはヂレンといふ人の近著で、一年間の賣高の非常に多かつたもの。評判の小説です。なか〳〵大いなる倫理問題が含まれて居るのですが。

又食事の會とか談話會とか言へば、必ず書物の話が盛んに出ます。ですから自然讀むに張合があります。讀んで非常に『面白い！』と思つても人に話す事も出來ぬ樣では、勢ひ讀む氣が減じて來ますが、米國では周圍が悉くその空氣に充されて居るので、勢ひ婦人の讀書が益々盛んになりゆくのです。

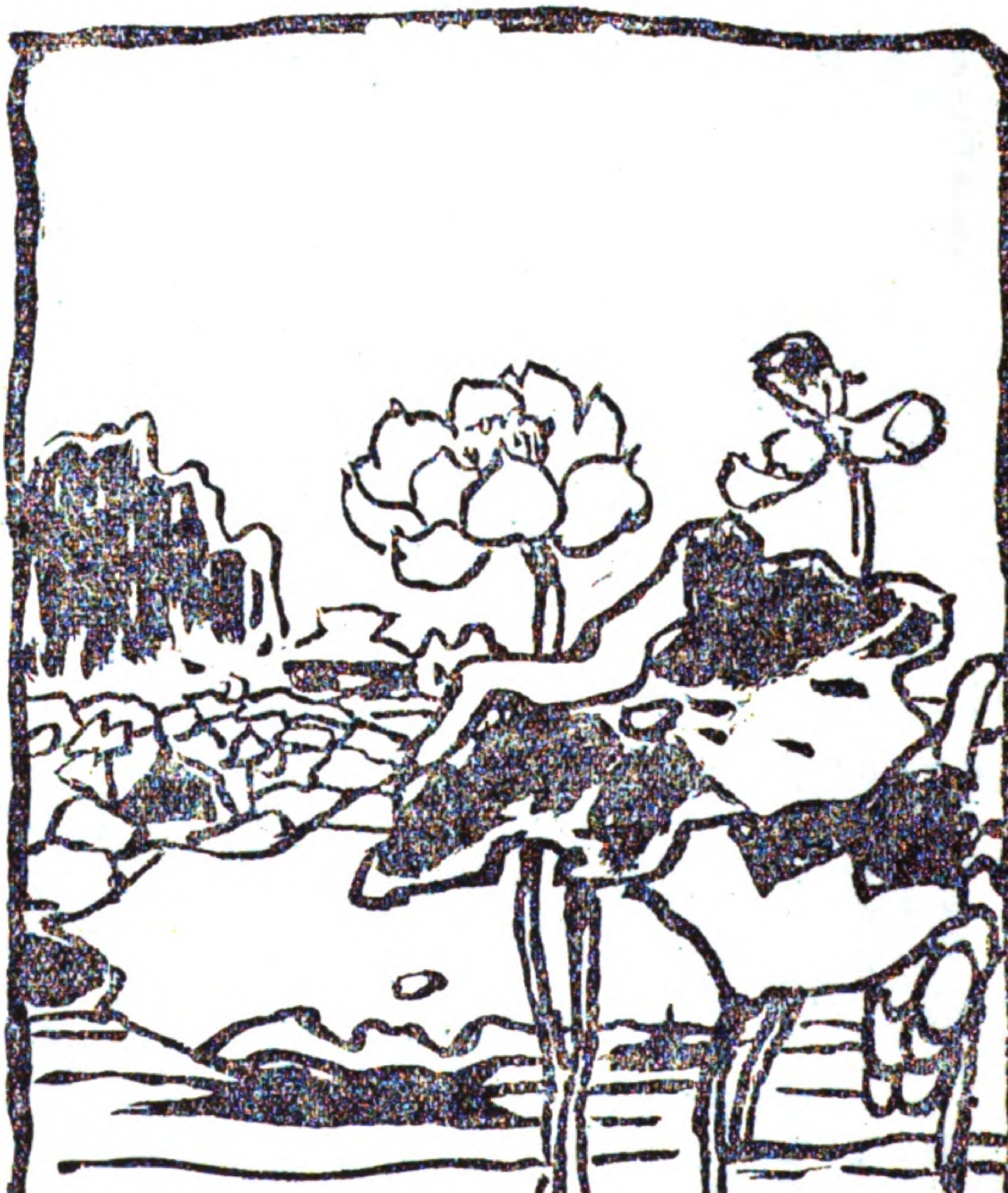
## 私の塾の經驗

夏休み前には毎時貸し與ふべき書物を揃へておいて何なり持つて行つて讀むやうにと奬勵してをりますが何うも餘り讀書好きでない樣です。それに周圍の人がその趣味を全然持たない場合が多いので、例の面白いと思つても話しも出來ず、自然書物に遠ざかつて了ふ樣です。

一つには良書がありませんね。小説も今のは嬉しいのがありませんし、旅行記などは――米國では趣味あるものが澤山あつて、先頃米國からの歸途に伊太利へ廻るについて、少し調べようと思つて見ると、それはそれは非常にあつて到底讀めるなどいふものではありません。日本に關する旅行記や觀察錄などは夥しいもので、それを又彼方の婦人は非常に讀んでをるのですが

——日本では良い者が尠なく、臺灣や樺太の書すら今にまだ碌なものが出來ないといふ姿………。

先頃も或西洋人が『十年以前には我々が英國や米國の話をしても、耳を貸す御婦人もなかつたが、近年は漸々と耳を傾ける樣になつた。漸々と婦人の興味も世界的に、よくなつて來た』と申しました、これは實際然うですが、然しまだ〳〵不可ませんね、塾生など兎角隙がないと申して讀書せぬ姿。一體夫人方もさうで時間の利用法が下手、讀書がお嫌ひの方が多いではありますまいか。



けれど私は若い方に堅苦しい書物を勸めようとは思ひません。道德、宗教も結構ですがまづ普通には最つと碎けた、平易な面白い、趣味を主としたものが可いと思ひます。私なども小說や其の他實に詰らない本を貪り讀みましたがまあ其時代の趣味に合つたものを讀んでゆくが大體よいので、無暗に堅苦しいものを讀ん

で厭に思つたらそれきり讀書趣味は伸びません。害さへなくば面白いものが良いので、今の處まづ傳記などでせうか。

### 讀み耽つた傳記

傳記といへば私はアパットの傳記物を非常に讀みましたよ。シーザーの傳とかジョセフインの傳とかいふもの。三四十冊もあります。歴史としては不精確ださうですが、面白く書いてあるので讀み耽つたものです。

そして又私の面白く讀んだのはダーウインの傳。これは理學の方の興味を得てからのこと。その内さすがのダーウインを何うしても獨逸語が覺えられなかつた事など面白く感じました。私の塾の或生徒が『偉くばかり書いた傳記には落膽して了ひますが、缺點や短所を併せ書いたのには、奮發心が起るやうで面白い』と申しましたが、然うだと思ひます。

まあ無暗に讀んだものですが、その内の節々に奬勵されたり理想を得たりして、讀書から受けた利益は決して尠なくはないと思つて居ります。



# 讀書に依て得たる利益

三宅花圃

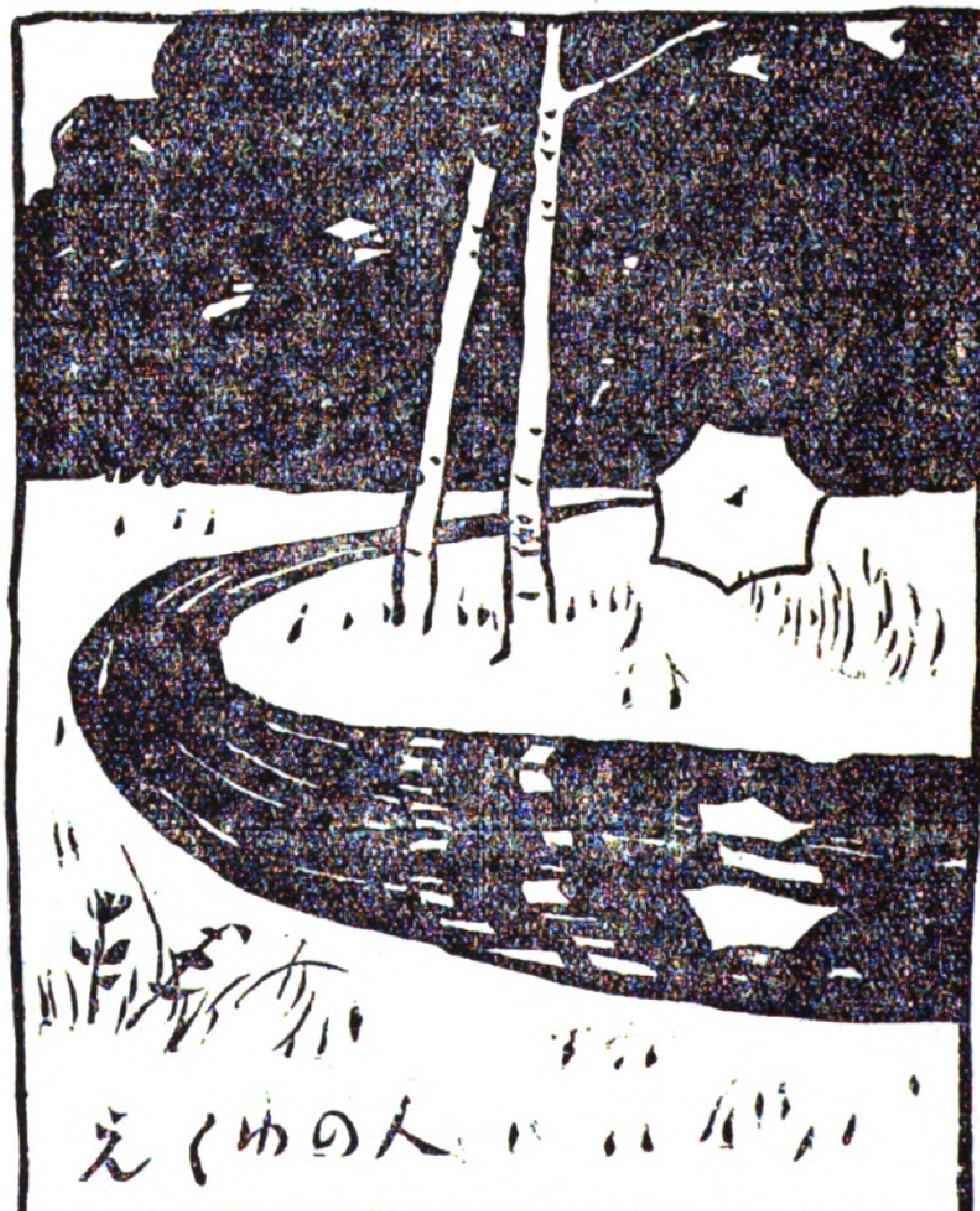
### 熱心なる讀者

私は隨分早く、最う七歳八歳から讀み初めました。今からは鳥渡申し難いやうなものまで、實に亂雜に讀みました。「梅暦」とか「辰巳園」とか、彼麼物を隨分早くから讀んだものです。無論眞正には分らないので、今も覺えてゐるのは小さん金五郎の話位なものですが……。當時は玄關に居つた書生の處へ、貸本屋が始終持つて來て居りましたから、書生部屋へ入り込んでは其書を讀んで居つたのです。

子供は二人きりでしたが、家が妙に華美な繁昌な暮

しでしたから、兩親が子供を關つて居られず、私共は放し飼ひにされて居りましたので、書生部屋や女中部屋へ幾ら入り込んでゐようとも誰も何とも申す者はありません。それに又女中が御殿奉公をしたもので、草双紙類が大好き。當時は御殿の御局の方ではこれが大流行であつたものです。ですから又その女中の借りて置く本を讀みます。よく女中に髪を結はれながら讀んだものでした。

前にも申す通り無暗に繁昌で、當時「池の端の御前」といふのが福地(櫻痴)さんの事、番町の御前といふのが父田邊(蓮舟)の事であつた位で、藝妓だの俳優だの其他いろ／＼の藝人が始終入り代り立ち代り參つてをりました。で、よくお菓子から辻占が出たのを藝人共が讀めなかつたりなどして、ホンの幼さい私の處へ持つて來ると、私が何うやら讀んでやるのです。洒落書をしてある字など讀める譯はありませんが不思議に何となく分るのでした。




ですから草双紙類は隨分讀み盡しました。それに又食ひ入つて讀み耽るのです。夕暮になると其儘縁端へ出て讀む。行燈が點くと其の下でよく讀んだ事を記憶てをります。

## 草艸紙と馬琴

草双紙も讀み盡してからは一時馬琴に非常に凝りました。「八犬傳」とか「美少年錄」とか、これ亦大抵涉獵盡したのです。これは何でも十一二歳――父が北京に居つた時でした。一度「俊傳實々記」にすつかり讀み入つて了つて、（あの俊傳兵衛の事を書いたものです）遂遂徹夜して了ひ、曉方にあの猿廻しの段を讀んで、遂遂泣いて了つた事があります。元來動物が可愛いゝ方で、動物の事が出るとよく泣くのです。

それから又軍談物――漢楚軍談だの呉越軍談だのといふ類も頻に讀みましたものです。

## 漢籍と英書

四角な文字の方では「四書」などを是亦早く習ひ初めました。けれども薩張分りません。些とも面白くないのです。初めは近隣の先生へ通つて居りましたが、其内に宅へ――逸見某といふ方が來る事になり、今度は「十八史略」や「唐詩選」を習ひました。處がこれ亦分る譯もないのに、何だか先生の講義が折々間違つてるやうに思はれるのですよ。どうも間違つてるやうだ〳〵と申して、一日兄かなぞに陰で立聽をして貰つた處が「成程あれは間違ひだらけだ」といふので其限りになりました。

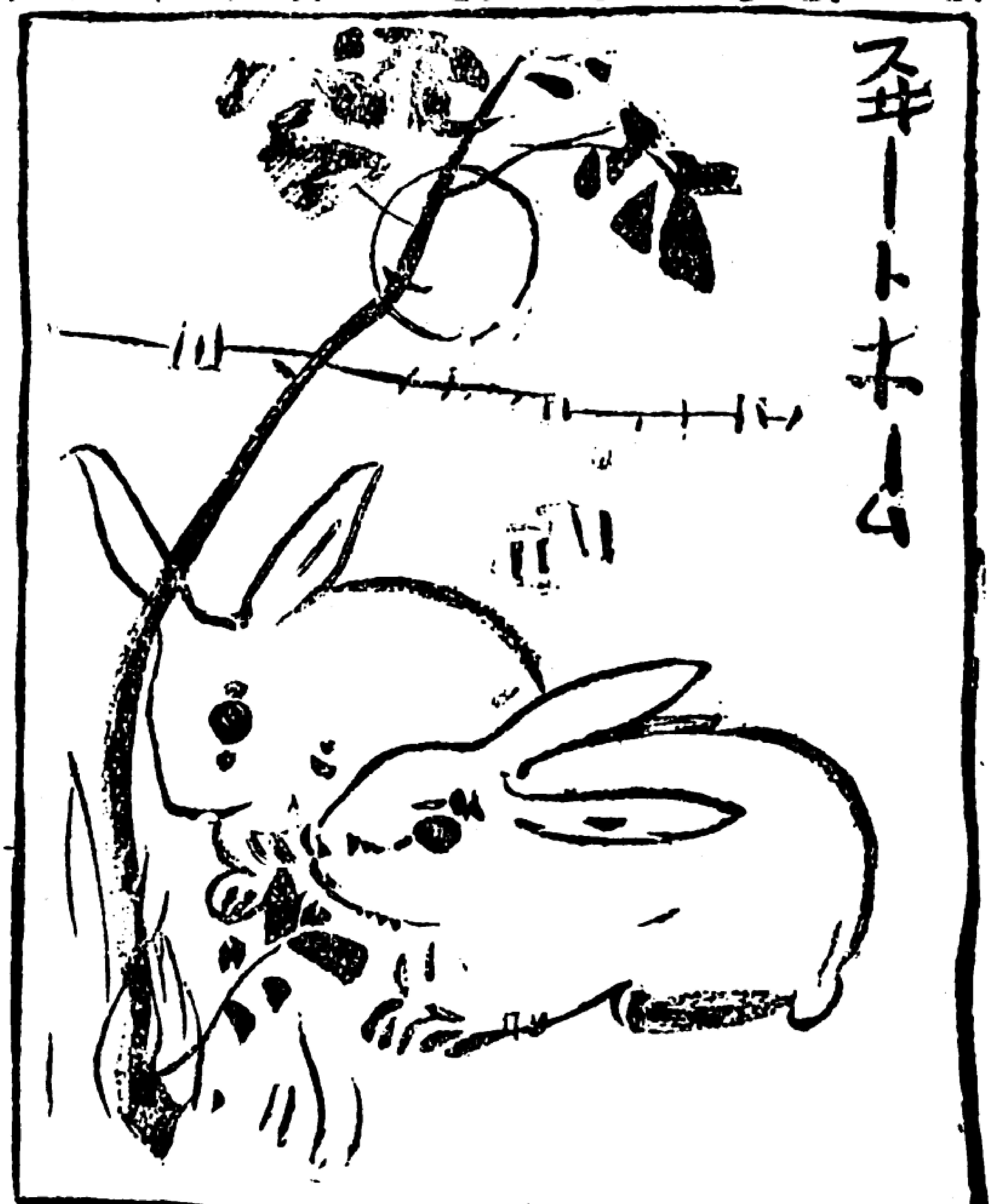
馬琴物に耽つた頃です。宅にあつた「漢書」を一人で頻に讀んだ事などもあります。又宅で「易や」「禮記」を教はり「左傳」を獨りで讀んで見たり、「詩經」を父に習つたり致しました。何れだつてよく分る譯はございません。今も一向印象がないのです。

英書の方は極く淺うございますし、國文の方は勝手に亂讀致しました。關根さんに徳川文學を願ひ、平田（盛胤）さんに「古事記」だとか、祝詞宣命だとか、「萬葉」だとかいふものを些と覗かせて貰ひました。

一番愛讀したのはまあ「徒然草」です。奇警な皮肉な評論が實に嬉しうございましたよ。

## 創作の感興

隨分幼少い頃は臺所の豆の袋でも何でも、字さへあれば取つて讀んだものですが、然し後には最う氣長に讀んで居られない方でした。「本を讀んで居られない人だ」と或お友達によく申されました。最う讀んでゐる内に書きたくなつて了ひます半分位讀む内には――それに暗示を得てか何か知りませんが――最う別に自分の趣向がチャンと出來て了ふのです。さあ然うなると何うしても讀んで居られません。身體が何だかむづ〳〵する樣で迚もいけません。それで止めて了つては書き出すのです。すると四五十枚位は譯もなく書いて了ふ、別に趣向が立つといふ樣な事が無い時でも、それなら手紙でも何でもよいのです。最う書きたくなつて堪らなくむづむづして參るのです。書いて了へば最う引裂いて鼻をかんでも關ひませんけれども何うしても書かずには居られないのです。夜遲くなつても何でも一向關はず……。兄を失くした時分（私が十八歲の折）などは頭腦を惡くしてをりましたが、それで明日きつと具合が惡いとは自分でも



思ひながら矢張夜更しをしては書くのです。

最う出初めると堪らない方で、頭腦ばかり先へ行つて了つて書く方が間に合はないのです。ですから實に亂暴な字――字の形が半分位きり出來てゐないので、それでも間に合はなくなるとズウ〳〵と棒を引張つておいて先へ〳〵と進むのです。後には父が外務省を退いて閑散な身でしたから、毎時淸書を父がして吳れました。其の亂暴極まる字をよく見取つて書いて吳れましたが、棒になると分りません。「あゝ其處は何々でした」と申しては後に補つてゆく樣な譯。で私の原稿はよく父が筆耕をしてくれたのです。(記者曰く女史の父君田邊蓮舟先生は書を以て名高きお方)けれども何うも餘り手が枯れすぎてゐて、活版屋が困りましたさうです。

## 處女作の哀しき追懷

私の兄の事は、お話しすると皆樣が嘘だと仰有るのです。變つてをりました。十二歲の折に――父も官吏で當時は全盛、すべて官吏の威勢が偉い頃でしたのに全く自分一人で考へたのださうで、「どうしても商業で國の富を增さねばならない」と商業に志しました。十四歲の時は最う香港へ參つてをりました。元來大兵でそして斯うずつしり〳〵と力を入れて沈着いて歩く處又物言ひなど、宛乎既う大人でした。兄が大きいのに私は身體が小さい方ですから――唯二歲違ひでしたが――よく私を膝の上へ載せておいて他人と大人見たやうな話をして居りました。十八歲の時には郵船會社の倫敦支店長になつたのです。然るに二十歲の折歸國の船中で歿して了ひました。

其前に父が正直なまゝに人に欺されて、財產上に大波瀾を惹き起し、妾宅や別莊や、それのみならず番町の本邸までも悉皆人手に渡して了ひ、さしも賑やかに出入りしてゐた相撲だの藝妓だの俳優だの藝人共にも總て今後は來ぬ樣に申し渡し、零落の身となつて、狹い處へ蟄して居りました。

處へ兄の死亡。殊に付添の者が氣が利かなかつたの

で、船中の事とて水葬にして了ひ、髪の毛一筋の遺物もございません。然るに僅つた一種。それは兄が圓朝の話が大好きでしたが、英國へ立つに就いて牡丹燈籠を聴き殘して參つたので、それが聴きたい！と申して遣しましたから、私が聴いては歸つて筆記して送つてやりました。それをまあ餘程樂しみにしたものと見えまして、悉皆卷物に拵へて都合七卷ございました。這麼にも樂しみにしたものかと其時つく／＼思ひました（當時あの若林玵藏が出初めで、圓朝物の速記も初めて出たので、比較べて見た處私の記憶で書いたのが少しも違ひませんでした）ですから其の七卷と平生着の衣服とを棺に入れて葬つた事でした。

やがて一周忌。「法事も出來ない」と母が歎いてをります。折から彼の春のや（逍遙）さんの「書生氣質」が出た頃で、讀んで見て私が例のむづ／＼。チヤンと趣向が出來て了つたのです。「それではお書きなさい。私が同郷ですから春のやさんに話して出版を頼むから」と家の書生が頻に申します。遂その通りになつて出版したのが「藪鶯」。そのお金で兄の法事をしたのでした。圓朝初め兄の好きな藝人達をも招きました。

ですから私の讀書は半分位でお止めにしたのが澤山ございます。今では猶更面倒になつて、最う手取早く筋を讀むだけ、細かい處を味ふ事などがなくなりました。でも未だむづ／＼の面影が幾分殘つてをりまして、今でも書きたくなると最う堪りません。書いてゐる時は何麼騷ぎがあらうとも耳にも入らず、一生懸命に凝つて了ふのです。「それまた！最う止さなくちやいかん」と襟上を取つて引立てられる事もあります。無理に用事を吩咐けられたり叱られたり、可笑しい位凝つて了ふのです。で、歌なども數讀みで、出來て／＼仕方のないやうで、歌子に就いてをつた頃も、數で人樣を壓倒するといふ樣でした。

然う／＼幼さい頃は例の全盛で、苦勞は別に致しませんが、唯目まぐろしく人が出入つて煩さく、そして自分は關はれぬので、妙に拗くれた者と見えまして、よく押入へもぐり込んで其處で讀書して居つた者です。



# 如何なる婦人が死神を驅逐するか

中村鈴子

私は前號に於て、婦人自殺の流行に就き、ちよつと管見を述べて見ましたが、今豫防の方法を少しばかり述べて見ようと存じます。

## ▲責任の觀念

佛教では天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩を四恩と申して、日夜に此四恩報謝の心掛がなけりやならぬと云ふので御座います。今時斯樣な事を申すと前世紀の婆さんが棺桶から首を出してお喋舌を始めたとて、お若い婦人方はお逃げ遊ばすから、柄にない責任觀念を御話し致します。併し責任觀念の根は矢張り四恩報謝の心掛に外ならぬので御座います。殿方が乃公は是れほど國家の爲めに盡瘁して居るのに、人が知つて與れないと不平を起されるのも、婦人方が私は斯樣に良人の爲め舅姑の爲め、眞心こめて働いて居るのに、十分の一も察して下さらぬと愚痴を溢さるゝのも源をたゞせば皆四恩報謝の心掛が缺乏して居るからと存じます。八釜しく申すと責任觀念の零なることを意味してるので御座います。四恩の高く深く大きいことを知られた御方は、行住坐臥、四恩の萬分の一でも報謝せねばならぬとお考へなさる事と存じます。始終自分は借方であつて貸方でないとお考へなされば、國家の爲めに芥子粒ほどの骨折をしたり、衆生の爲めに塵ほどの世話燒をしたり、などは當然の事で、少しも恩に着せようとは成さらぬで御座いませう。所が此當然の事をしてさへ昔の聖人は人知らずして慍らず亦君子なら

すやと褒めて居られます。聖人ばかりでなく、世間一般も斯様な人を褒めるので御座います。ソコで厭世など申すものは、自分の借方であるとを少しも心付かず少しも働かずに貪り取らうとして、其要求が容れられないのを怒る我儘者に多い利己的観念に外ならぬとを證據立つて居ります。其極度に達したのが自殺ですから、自殺と申すものは、責任を避け、謝恩を避け、自己の心身を自己以外の事物に微塵も勞さないと云ふ利己主義、贅澤主義に外ならぬので御座います。

### ▲閑の多過ぎるが大毒

小人閑居して不善を爲すと申しますが善人君子でも閑の多過ぎるのは可けません。不善を爲さぬまでも、一つ事を思ひ續けて、思慮を轉換する機會が少いから精神が沈鬱になります。之に反して貧乏暇なしと申すほどに働けば、決して沈鬱になることは御座いますまい。昔の聖人は、博奕を爲すも猶は已むにまさると言はれて居りますが、其博奕と申すのは勿論今の賭博のやうな事では無く、囲碁や將棋ぐらゐの處だらうと存じます餘り感心した事では無いですが、何もせぬよりは増しだと言はれて居るのを見ますと、閑の多過ぎる人には藥となるものに相違御座いません。

### ▲琴棋書畫

と申せば、昔から貴族や富豪のお孃様達が嗜まれたもので、嫁入仕度としての教育の一部分となつて居ましたが、忙しい今の世の中に琴棋書畫など〻申すと、何となく悠長過ぎる様にも見えます。併し婦人に選擧權を與へよなど〻鐘太鼓で騷ぎ廻る婦人達（我國には御座いませんが）に較ぶれば、琴棋書畫を玩ぶ方が幾ら奥床しいか知れません。惡自然主義の小説を讀まるるお暇が御座いますならば、琴棋書畫をお習ひ遊ばす方が宜しからうと存じます。

### ▲臺所の御用

琴棋書畫も精神の結ぼれるのを防ぐに相應しいもの

ですが、臺所の御用を致すのは、琴棋書畫を玩ぶよりもモット精神の藥に爲ります。私の知人に不在勝な軍人の奥様がありますが、以前は女中を二人も置いて居ながら、五六歳の娘一人と乳呑子一人を持て餘して居られたのですが、近頃から女中を二人とも廢して、自ら臺所を働き、洗濯も子守も自分でせらるゝので、餘程心强く爲り、御飯も以前の倍ぐらゐ食べると申して居られます。何でも自分で致すと、薪の燃えるのも、釜から湯氣の上るのも、御飯の粘泡が吹き溢れるのも面白く思はれます。

### ▲洗濯と子守

ジョンソンが夏の朝早く散歩に出掛けた時、或家の娘さんが小さな弟だか妹だかを遊ばせながら洗濯して居たので、ジョンソンは如何にも甲斐々々しい娘だ、自分のやうな貧乏文士は斯様な女子を妻にしなければならぬと考へつゝ、公園をブラ〳〵歩いて、軈て歸途に就いたところ、彼の娘は乳呑子を乳母車に載せて公園へ向つて來ました。而して彼の娘の家には、先刻洗つたシャツなどが干してあつて、百合の花と白さを競つて居ましたので、天然にも人事にも靈眼を備へて居たジョンソンは、我妻とすべきもの彼女の外には無いとまで思ひ込み、トウ〳〵懇望しましたさうで、此に立派な夫婦が出來上りました。誰でもが斯ういふ風に容易く文豪の妻とならるゝ譯ぢや御座いませんが、弟妹に優しく仕事に忠實な婦人は、一寸した機會で具眼者に發見されるものですから、臺所の御用でも、子守でも、洗濯でも、何様な些細な仕事でも、一生懸命に致せば、一面は精神の鬱結を防ぎ、一面は立身出世の端緒となるので御座います。

### ▲農事は尙ほ宜しい

鷄と共に早起致して、菜の葉や小麥を鷄に遣り、しとしと露に濡れて居る草を拔つたり、小山つゞきの赤土を掘り返して畑を作つたり致すと、自分の心と天然とがシックリ密接しますから、クヨ〳〵人生問題など

を考へなくなります。百姓に自殺の少いのは、強ち無學無識で人生問題などを考へぬと云ふばかりに基因するので無く、大地を踏まへて立つて居るので、自ら顧みて身體も精神も安全なからで御座います。高い木の實を取らうとして不安を感ずるやうな事が無いからで御座います。地を離れて人なしと申す通り、踵を土に着けてさへ居れば間違が御座いません。

### ▲一生懸命に働くが宜しい

自分で食物を拵へる婦人が心強く感ずるのも、自分で食物の原料を作る農夫が心強く感ずるのも、生存に最も縁近い物を扱つて居ると云ふ念が頭腦の底の方にあるからで御座います。唯だそれをハッキリ意識しないだけの事と存じます。斯く考へて見ますと、如何しても人に頼つて衣食すると申す事は厭世の大原因に相違御座いません。幼にしては父母に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふ、と申す教訓は至極穏當で御座いますが、二十世紀の婦人方は、此柔徳を修養せらるゝと同時に、衣食だけは嫁して夫に依頼せず、老いて子に依頼せぬだけの覺悟をして戴きたいもので御座います。四恩の中に父母の恩がありますけれども、これは自分が父母に對して報謝すべき恩なのです。自分が父母の恩を着て居るからと申して、自分が母となつた場合に、私の恩を深く感じなさい、厚く報じなさい、と愚痴ッぽく催促したり、厚皮しく要求したり致すのは、實に此上なき醜態で、親の體面に關すると存じます。それで私は最初に申した責任觀念を此に繰返さねばなりません。萬一赤子の時分に父母から棄てられた人が、他日父母となつても、其子を養育し又教育すべき責任あるとは勿論で御座います。況して自分は天地に對し、國王に對し、父母に對し、衆生に對して大なる借方であつて見れば、力の續かん限り働いて、其債務を果さねばなりません。それが出來ないで厭世に陷り、自殺を遂るなどは、自分に向つて死刑を宣告するやうな大耻辱で御座います。婦人なればとて、一生懸命に働きさへ致せば、決して自分に向つて死刑を宣告するやうな大耻辱を見ることは無からうと存じます。



# 卅年前のハイカラ女學生

藤波女

## 想像も及ばぬ珍事奇談

若葉の蔭なつかしき夏の初、府下に於て最も古く創立せられた或宗教女學校に同窓會が催されました。會するもの二百餘名、來會者の内には愛らしき孫君二三人持ち給ふ方さへありました、其等の人々が會食後に於て、せられた懷舊談には今の人人の夢にだも思ひ及ばざる珍事奇談が澤山ありました、で一寸それを記しませう。

### ▲戰場に臨む覺悟

A、海軍大佐未亡人

私の初めて入學いたしましたのは、明治六年で御座います。其頃學校にはまだ名前さへ附いて居りません唐人の塾とか、耶蘇の塾とか人が呼んでをりました。芝邊のある古寺の座敷を借りて、一名の西洋婦人が英語を敎へ、二三の日本人が國語、漢文、算術、習字等を敎へて被下るので御座います。勿論只今の樣に敎科書といふものもなければ、敎授科目も定つて居りませんので、規則だの條例だのと六ケ敷いものはありませんでした。入學するにも入學試驗だの保證人だのと煩雜な手續は要らないので御座いました、誰でも希望者は喜んで入學を許されるといふ樣な極簡單に出來てゐたので御座いますが、學校へ行くと云ふ事は恰も勇者が戰場へ臨む位な決心と覺悟を持たなければならなかつたのであります。

昔から婦人は深窓に閉ぢ籠つて人に接しないと云ふ

ことを婦人の美德の樣に考へて居りました、まして德川時代になりましては婦人の位置が益〻下りまして、なくてもよきものは女の智惠など〻、女は女大學の一册も讀めれば其で充分と考へられて居たので御座いますから、急に英語を學ぶの、漢學の稽古をするのと申しますと天地が顚倒つた程に驚かれるのも無理はないので御座います其で女が一人で外を歩くのは有るまじき事といふので、學校へ通ひますものは、男髷に結つて黑い地味な衣物を着て男子の樣な姿をして參りました、一口に申ますなら黑裝束をして忍むで學校へ行くので御座います。ところが只今とは違いまして、學校へ行くと云ふことは女の不德の樣に思はれて居るのでありますから、友達からは除者にされますし、親戚のものからは爪彈をされます。中にも或る老人などは毛唐人の所へ娘を遣るとは不屆至極だと談判に來られたさうで御座います。斯樣な次第で母などは非常に困つて居りました。恰度只今なら露探の手下位に嫌はれたのでありませう。



其故學校は世人から歡迎されません、部屋を貸した寺の坊さんは非常な强慾ばりで、何事も慾と二人づれの相談で法外の座敷代が取れるところから、耶蘇でも異人でも何でも構まはぬから部屋だけを貸してやると申しましたが、今日は如來樣の日だ、お開山の冥日だ、物

忌みだ、精進だ、方角がとうだとか勸進の布施のと絶えず私共を苦めます。其上日によりては葬式の二ッ三ツも參ることがありまして、其間は聲を立てはならぬ笑つてはならぬと申ますので實に困りました。其に西洋人には佛教の事は、解りませんから、女教師は其を承知されません、坊さんは怒ります、教師も怒りますところが教師には日本語は解らない、坊さんには英語は解らない、また私共にはまだ通辯をすると云ふ力がないので、針で突た程の小な事でも非常な大事件でも起つた樣になるのでございます。其度に詮方がありませんから、麻布まで幹事を迎ひに參りました。此方は英語がお出來になりましたので、此方が被入つて下さると漸く雙方の意が通ずると云ふ譯で、日によつては二度も三度もお迎ひを立てることがありました、今考へて見ますと、實に滑稽至極な事でありましたが、此時は極く眞面目な話で御座います。併し女教師は非常に親切な教育に熱心な方で御座いましたから、斯樣な中でも學校へ行くのが何より樂しみでありました。

## ▲入浴は水垢離のつもり

B、宗教家夫人

私は明治八年に初めて入學いたしました。學校へ入舍した以上は何から何まで記憶なくてはならないと思つて、女教師の食事のお給仕から、寢室の掃除までいたしました。教師も熱心に教へて被下るのです、今から考へますと可笑いですが、食事の時に西洋人は皿を用ゐますので、私共の食器も茶碗でなくて皆皿を用ゐたので御座います。其で中皿に御飯を盛つてホークで頂戴くのであります。西洋風では皿を手に持つて食べてはならないと云ふので、食卓の上に置いて食べますと、いくら氣を附けましても溢さずには食べられません、私などお茶附が好だものですから辛棒が出來かねて時々は皿を持つてサラ〳〵とお茶附をいたゞいたこともありますが、溢さぬ樣に禮儀に欠けぬ樣にと、心配しながら食事をいたす時の苦しみてつたら大變なものでしたよ。

其にもう一ッ可笑かつたのは入浴で、私も後に西洋へ參つて見ますると、大抵は寢風呂で好い具合に出來てをりますが、其頃其樣な事は夢にも存知ませんので湯と云ふものは是非坐つて這入つて居るものと思つて居ました、其を學校の風呂は細長い箱で生温い湯が五六寸の深さの外這入つて居りませんので肩から背にかけて寒くて仕方がありません、寒中などは湯の中でブル〳〵震えて居りましたので御座います。併し其頃の人は何か一ッ仕事を修業するには、非常な忍耐をしなくてはならぬと考へて居りましたので、寒中に水垢離をとると同樣是非辛棒しなくてはならぬものと思ひまして、別に不平もなく過したので御座います。




▲鞍馬山の女天狗

C、夫人

私の家は會津の藩士で、父は早く世を去りましたが祖父は非常に頑固な人で御座いました。維新後日に月に泰西の文明が日本へ這入つて來るのを見まして、非常に憤慨して

居りました、其頃誰云ふとなく西洋人はキリシタンの術を使つて自由自在に人目を暗すことが出來ると云ふ噂がありました。其で耶蘇になるとその奇術を傳授されると云ふので、耶蘇教は魔法を使つて日本國を滅ぼすものだと考へられて居たのであります。祖父が態々私を學校へ入れましたのも此魔法の爲めで、天晴鞍馬山の女天狗位に修業されて、いざ鎌倉と云時にはキリシタンの術を看破ぶらせなくてはと云ふ、意氣込みらしかつたのであります。併し私は水を酒にする法も石をパンにする術も傳授されませんで、三年經ちます内に私もキリシタンバテレンになつて仕舞たので御座います。祖父は甚麽に失望したのでせう私は其を考へますと可笑しい樣な、氣の毒の樣な、云ふに云はれない悲しさを覺えるので御座ます。

### ▲娘の生血を吸ふ

敎育家D孃

私の故郷は九州ですが、幼少の時から叔母夫婦に養はれまして東京で成長しました。義父は政府の或る樞要な地位を占めて居りますので、泰西の事情にも通じて居ります所から、明治九年の春私を此學校へ入學させました、其頃學校は築地にありましてまだ日本には目新しい西洋風の建物で、寄宿舍が二階、教場が階下でありました、私の部屋は海を見晴らして一番景色のよい角の所で、先生は親切にして下さる故、友達は大勢ありますから、至極面白いと思つて居ました、ところが此事が國元へ聞えますと、祖母や父母は大騷ぎで遂に父は私を迎ひに來りました。夫は其頃異人は人間の生血を吸ふ者だと云ふ馬鹿らしい噂があつたからであります。父は學校へ私を尋ねて參りまして、義父は私を異人に貰つたのだと怒つて居ります。私は其時十四歳で何の思慮もありませんでしたが、血を吸ふなどと云ふお伽噺じみた事はないと思ひました。其で父の心を安ずるために西洋人の親切な事や、偉い點など話しますと、父は益〻疑ひを深くしまして、其が怪しい、何も目的のないのに縁もゆかりもない人の娘を物好に

世話する筈がない、屹度斯して係蹄に陥すのだと申ので御座います。其でも私は強情を張つてとう〳〵歸國しませんでしたので、父は仕方なく一人で國へ歸りました、今一寸と考へますと餘り頑固家の親の様で御座いますが、此頃から云ふ評判が高いので取かへしに來る親御が澤山あつたのであります、お若さんと云ふ人の父御なぞ庭の植込みの陰に隱れて居て、お若さんが廊下を通る處を盗み出して歸りましたさうで御座います。つまり親の情愛から起つたことで只今學事を奬勵なさる親御のお心と同じ事であります。



▲天女の降臨　E、商店の　女主人

求めよさらば與へられん門をたゝけよさらば開かることを得むと云ふ聖書の句がありますが、私は常に之を唱へて我身の希望となし感謝として居ります。

私の家は幼少の頃麻布の光善寺町に住で居りました

私は其頃女學校と云ふものが出來て色々敎へて被下ると云ふ噂を聞て、是非其處へ這入りたいものだと考へて居りましたけれど、何處に其があつて、また入學するには如何なる手續があるかと云ふことも存知ません私共子供が知らないばかりではなく大人も大抵知らないのであります。其故詮方なく二三年過して居りました、丁度明治拾年の四月で御座います、私は母に命せられまして、築地の二百十八番まで使ひに參りましたところが其家へ參つて見ますると主人はまだ役所から歸りません、其故待つてをります間、海岸の方を見物に參りました、只今の方は西洋館なぞ見馴れて被居るので別に珍らしくもございますまいが、私は其時生れて初めて見ましたので、噺に聞いた龍宮城ではあるまいかと吃驚して仕舞ました。私は呆れながらキヨロキヨロして歩いて參りますと○○女學校と門に札の出てゐる所へ出ました、私は門の前に立つて、——此處だ私の噺に聞て居る女學校は此處だと眺めて居りますと何とも云はれない善い鳴物の音がいたします。私は何の考へもなく門內へ這入つて行きました、さうして玄關前に暫く立つて居りますと、其內に音樂の音が止むで扉を開けて出て來た人があります、見ますると色の眞白な背の高い奇麗な方で、其方がまた美しい不思議な衣服を着て被居るので、私は本統に天女が天下つたのではないかと思つて謹でお辭儀をいたしました、すると其方が這入れと云ふ樣に招て被下いますから私は其後へ隨いて大膽にも內へ這入りました、只今考へて見ますると餘りはしたない無鐵砲なふるまいであつたと思ひますが、其時は是非學校へ這入りたいと云ふ熱心と、餘り吃驚りしたのとて常識を失つて居たのでありませう、私は恥しさも何もかも忘れて仕舞まして、私の境遇及び希望とを天女の樣な其人に談しました。

至誠天を動すとか申ますが、私の眞心は日本語をよく解することの出來ない其人の心を動したので御座いませう。私の談は大抵了解せられた樣でありました、私は嬉しくて此學校を辭して母の使を果しますと、飛ぶ樣にして家に歸つて參りました、さうして喜び勇む

で母に談しますと、母は大層怒りまして、左様いふ不心得な娘は勘當すると云ふので御座います。それから泣いたり怒つたりして居ます所へ兄が歸りまして、漸く母を宥めて呉れました二三日過ぎますと學校から通知がありまして、月謝食料を免じて入學を許すと云ふことでありました、母は不承知でありましたけれども、兄が色々と說て呉れまして私は遂に學校へ寄宿しました、其は十五歳の時で御座います。



何とも云はれない善い音の鳴物と申ましたのはオルガンで、只今では方々様の御宅にも御座いますし、甚麼子供でも知つて居りますが、其頃には實に珍らしくて其音を聞きますと、なんとなう極樂へでも行つた様な氣がしました、私は夏休の間麻布の宅へ歸つて居りましたが、日曜日毎に其音を聞くために築地まで行きました、

### TRIED EGG-PLANT.

Cut in slices, and lay in salt and water for one or two hours; wipe dry, and season with pepper and salt; dip the slices into yolk of egg and bread-crumbs; then fry.

### 茄子のフライ

茄子を厚く輪に切り、一二時間鹽水に浸し置き、水より出して後、拭き、鹽と胡椒で味をつけ、玉子の黄味の中へ一寸いれ、又パン粉をつけて揚げるのです。

### SCRAMBLED EGGS WITH BEEF.

Chip beef very fine; put butter in a skillet, when hot put in the beef; heat up a few minutes, stirring to keep from turning; season and stir in eggs. It will require but a few minutes cooking.

### 牛肉入りのゐり玉子

先づ牛肉を極細かに刻み置き、バタ(小匙一杯)を鍋の中に入れ、煮立たる時肉を入れ、焦げぬ樣攪き混ぜながら、二三分間煮て味を付け、玉子を入れて又二三分間攪き混ぜながら煮るのです。

(注意)肉四半斤に玉子二個位の割合で丁度よい加減です。鍋を下す前に、醤油一滴を落して攪き廻せば、玉子が鍋の底に着きません。尚此中へ玉葱を細かに刻んで加へるのも妙です。

### TOMATO STEWED BEEF.

Scald the tomatoes; skin and quarter them, and sprinkle with salt and pepper. Bury the meat in a stew-pan with tomatoes, and add bits of butter, flour, a little sugar, and an onion minced fine; let cook until the meat is done and the tomatoes dissolved into a pulp.

### 赤茄子と牛肉の煮込み

赤茄子に湯をかけて皮をむき、四つ位に切り、鹽、胡椒をふりかけて、深き鍋に肉と共に入れ、メリケン粉バタ、砂糖少しづゝを加へ葱をきざみ込みて火にかけ、肉が煮え赤茄子も煮えくつれるまで煮るのです。

### SIMPLE REMEDY FOR A BURN.

For a burn apply equal parts of white of egg and olive oil mixed together, then cover with a piece of old linen; If applied at once no blister will form. Or apply at once cooking soda, then cover with cloth and keep the same wet with cold water. This takes out the pain and prevents blistering.

### 火傷の應急手當

火傷したる時は、速に玉子の白味と同量の橄欖油を混ぜて患部にぬり、其上に布片を當て置けば、水泡になりません、又料理曹達を塗りつけ其上に布片を當て其布片を濕せば痛もとれ水泡にもなりません。

(注意)前記の玉子の白味と橄欖油とを布片にのべて患部に當てゝ置いても宜いのです。曹達をつけた時は最初は一寸熱い樣に感じますが、暫くすると治ります。若し一度で痛がとまらぬ時は二三回つければ治ります。

# 簡易家政術

英語専門 櫻井女塾長 櫻井ちか子

### SALAD DRESSING. I.

The following proportion will make enough for one head of lettuce:

1 tablespoonful fine olive oil.
A bit pepper.
Pinch salt.
4 drops onion juice.
1 teaspoonful lemon juice.
1 teaspoonful vinegar.

Mix all together well. This dressing may be used with lettuce, tomatoes, potato salad.

### SALAD DRESSING. II.

1 egg.
1 teaspoonful salt.
¼ teaspoonful pepper.
1 teaspoonful mustard.
2 teaspoonful sugar.
1 teaspoonful butter.
4 tablespoonful vinegar.

Put all in a bowl and Mix thoroughly, then add lump of butter the size of a walnut and four large tablespoonfuls of vinegar. Set in pan of boiling water and stir until thick as custard.

### サラドにかける汁　其一

材料

| | |
|---|---|
| 橄欖油 | 大匙一杯 |
| 胡椒 | 少量 |
| 鹽 | 一摘み |
| 葱の汁 | 四滴 |
| レモンの絞り汁(又は柚子) | 小匙一杯 |
| 酢 | 小匙一杯 |

以上の分量は萵苣一株にかける量です。凡て此等を能く混ぜて或は赤茄子、馬鈴薯のサラドにかけてもよろし。

### サラドにかける汁　其二

材料

| | |
|---|---|
| 玉子 | 壹個 |
| 鹽 | 小匙一杯 |
| 胡椒 | 小匙四分の一 |
| 芥子 | 小匙一杯 |
| 砂糖 | 小匙二杯 |
| バタ | 小匙一杯 |
| 酢 | 大匙四杯 |

製法

最初の品々を鉢に入れて、よく混ぜ、其中へバタを小匙に一杯と、酢を大匙に四杯入れ其れを直接火に掛けず、鍋に湯の沸騰て居る中に器共に入れ、湯煎にして、汁がドロドロになる迄かき混ぜながら煮て、葛湯の様になりした度合として、別の鉢に用意してあるサラドの上に、熱きうちにかけるのです。

(注意)サラドの材料には色々類がありますが、先づ最も簡單なる馬鈴薯ポテトーサラドを申しませう。

中位の馬鈴薯二三個をゆで、冷えたる後、厚さ二分位の骰子に切り、小さき玉葱一個を極細かに刻み馬鈴薯の上にのせ、其上へ前記の汁をかけ、よくかき交ぜ、全く冷ゆるを待つて食するのです。林檎一個を細かに切りて其中へ混ぜれば一層風味がよくなります。又玉菜又は萵苣のサラドにも同じ汁を用ゐてよろし。

# 野菜と果物の効用

野菜の種類は澤山有るが、一般のものに就いて云へば先づ蛋白質、澱粉、護謨纎維、鐵、水分、其他有機酸等から成つて居る、併し牛肉や鳥肉に比ぶれば皆蛋白質、並に脂肪が少ない、そして蛋白質の多いものゝ、滋養分と心得て、其他の成分に關しては、全く知らないのが常である、殊に將來の生活上肉類を澤山食べれば食べる丈け野菜を採る必要が起つて來るのであるが蛋白質ばかりを以て人間の體軀を支へて行くと云ふとは到底不可能の事である、其代り含水炭素分と云ふものを多量に含んで居る此の養分が人體に欠けると敗血病を起すのである。

◎大根の効能＝これは日本人の食膳に欠くべからざるもので而かも他の野菜は大概食べる所が一部分に過ぎないけれど大根は莖も葉も共に食せらるゝのみならず、成分は糖分及び水を含み、煮ると非常に軟かくなつて胃弱の人に効がある、近來殊に大根卸の中には「ヂアスターゼ」と云ふ消化劑が含まれて居ることが發見され、澱粉質の物を食ひ過ぎた時に大根卸を食べると、直ぐに消化して了ふ、畢竟食を進め胃を調へる効がある。昔から大根が澤山に出ると病人が減ると云ふやうな事も言はれてある。

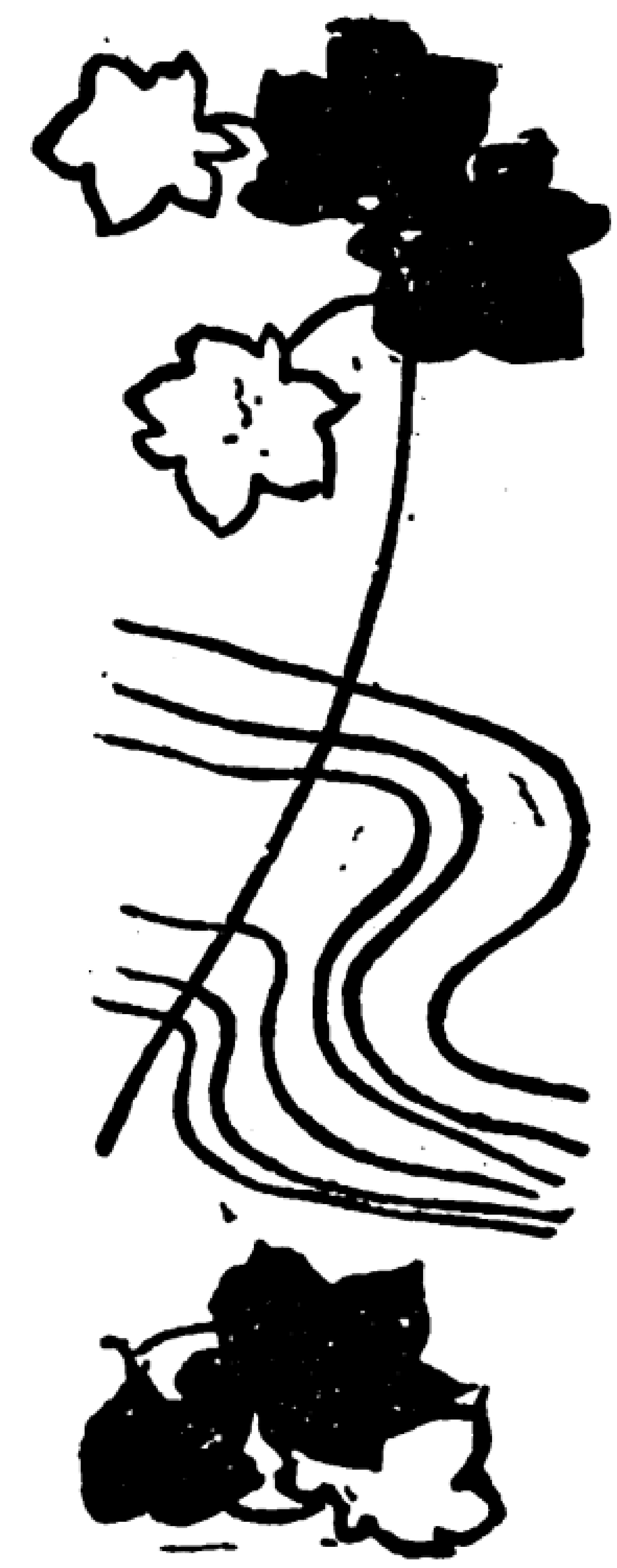
◎葱と玉葱＝葱の成分は水、鹽分、糖分及辛味が主なるもので辛味の中には又一種の刺戟性を有して居つて血液の循環を能くし、唾液や胃液の分泌を增し又消化機能を活潑にし、營養上の益が頗る大なるものである、又玉葱も普通の葱と大差が無い、普通の葱より一層精が強く、神經を和げ休息を與へ且つ多量の硫黄分を含んで居るから、傳染病流行の際などは細菌に犯されず血液を清潔にする等の効もある。

◎牛蒡と胡蘿蔔＝共に精分の強いもので、多量の鹽分を含み、辛味も少し有つて、又糖分も灰分も有る、餘り美味ではないが體溫を促すの効がある、胡蘿蔔は腎の藥にもなると云はれてある。

◎甘藷と馬鈴薯＝甘藷は西國の或地方には米の代りになつて居る澱粉の量も米に續くほどであるから營養上大なる價値もあるが併し消化が遲いので胸につかへる又馬鈴薯の成分は矢張り澱粉質に富み、西洋料理等に多く用ゐられてゐる、之れは獸肉と一緒に食すれば殺蟲の効があると云ふとである。

◎果實類の効用＝水蜜桃、梨、葡萄、杏、李、苺、巴旦杏等これは滋養分は全く無しと云ふてよいのであるが何れも其成分中に有機酸亞爾加里、鹽類、糖分等を適度に含んで酸味と甘味とが能く調和し且つ清涼の味さへ合せ有するから吾人の口に入れて美味を感じ爽快を覺えるのである、而して胃腸の上には他の食品の消化を補助するを以て滋養分としては價値が少いけれども甚だ廣く愛用されて居る之を一層消化し易くし其効用を完全にするには里母那埞に製するのが最も良法である。

◎食後の果物＝又洋食の後には果物を用ゐるが例で日本食の後には菓子が出るが是は自然の理に適つたことで、洋食は勿論肉食が主であるから肉を消化するのは酸である即ち之は酸蛋白を造るのだから洋食後の果物は消化を助くる理である然るに日本食は主に澱粉食だから酸味のものを食後に用ゐれば却つて消化を害する道理で果物を用ゐないのは當然である。



# 何の爲めに書を讀むか

女子英語會　藤生貞子

## 簡易讀書會

東京の築地邊に居る西洋婦人方も催ふしてゐますがあの西洋で行はれるリーヂング、ソイクル(讀書會)といふもの、あれを日本の御婦人方も催ふしたら非常に有益だらうと思ひます。讀書趣味の養成には最うあれに越したものはなからうと思ひます。月に一度とか二度とか、順廻りに會員の家で開くので、つまり寄集まつて其内の一人が朗讀役をするのです。他の人は皆聽いてゐるだけ。然も面白いのは其の聽いてる人は何か仕事をしなければならないといふ定め。編物でもよし縫物でもよし其他の小仕事でもよし、それも決して遠慮はいらぬので、中には破れた靴下を持つて來て繕ひながら聽いてゐる人もあります。日本ならば足袋なり襦袢なり、衣服なり、何でもよいのです。まさか夜着の綿を入れるといふやうな大げさな事は出來ませんが些とした仕事ならば何でも關はないので、必ず仕事を持つて來なければならないのに決めてあるのです。

で、時間も例へば午後二時から四時までといふ樣に御飯時の差支にならない時間を選ぶのです。當番の家では茶を出すきり。お菓子は會の方の費用から出す事にするので、何の贅澤も面倒もしないのです。會費は主に本を買ふためで、月々幾干かづゝ一同出金するのです。

例へば今度コナン、ドイルの新しい小説が出たといへば其れを讀むとか、又小說、文學には限りません、或は植物の智識を面白く書いた新著とか、或は室內裝飾に關する書物とか、いろ〳〵の方面を其時其人によ

つて選ぶのです。會の圖書室といふものがあつて（それは會員の誰かの家か何かに置いてあるので）其處に會の圖書を整理してありますから、其内から讀むべきものを選ぶのです。始終丸善といつた樣な書肆から新著の目錄を取寄せておいて、善さゝうな本を買入れるのです。それは幹事や相談役を設けておいてするのです。婦人雜誌とか雜誌とかいふ樣なものも、始終取つて居ります。

西洋婦人が日本の御婦人方と違ふ所は、決して「否」を言はぬ事です。「次には貴方讀んで下さい」と言はれれば最う必ず「諾」です。決して「否」といふ事を申しません。「私其麼本は讀めないわ」などゝ言つては居りません。「出來ない」といふ事は耻だと思つてるのですから、出來なくとも「諾」です。そして其時までに勉强するのです、ですから力も付いて來ますし、そして朗讀が大變上手になります。

加之恁うして集まれば、自然其時讀んだ書物に就いての話が出る、從つて其の方面の――例へば文學なり科學なり家庭問題なり社會問題なり、或は農業工業、即ち園藝に關する事とか織物や陶器や漆器や新機械の發明や、もしくは又美術音樂に關する事とか、種々な方面の進步の狀況にも通じ智識も廣くなり、研究心も湧くといふものです。

讀書趣味の養成にはこれに越した事はないと思ひます。一人きりで家で讀書するといふよりも、かういふ社交の味と共に讀書の趣味を得てゆけば、知らず識らずの間に讀書の習慣も出來、研究の興味が湧いて參ります。私は日本の御婦人方に切に之をお勸め申すのです、何の譯もなく簡單に出來る事ですから、早く〳〵リンヂング、ソイクルの催しが彼方にも此方にも出來るやうにと切望致します。

## 書物が財產

主人が非常な讀書好きでございましたので、私も化せられて全く讀書好きになりました。主人はそれは夫は讀みましたので、「貴方其麼に讀んで頭腦へ入りま

すか」と申すと、「馬鹿な！　頭脳へ入らぬ位なら讀みます。嫁して參つてからも本を買ひますこと〳〵。お金があれば皆本にして了ふ様な勢。私も元來讀書が大好きなので、「順風に帆」といふ譯で遂々全然同じになつて了ひました。「遂々彼女も本物狂になつた。本さへあれば可い心算でゐる」などゝ親類に申されました。もう他の人が縮緬の衣服

はしない」と申すのです。嫁して參つた時先づ驚かされて了つたのは書物でした。四間の棚に上から下まで右から左までギッシリと、哲學書や何やかや一杯に詰まつてをるのです。其代り他の物は何にも無い。「己の財産は本だ！」と申して居り



でも拵へると聞けば、「私なら書物にするのに！」と衣服などは全然詰らない物に其頃から思つてゐました今もさうです。で、私の書物も遂に二間の棚に充滿。私の集めたのは悉く文學書で、英文の書物も多くありましたが、又近松物、馬琴物、草雙紙類なども大分集めました。

地方に居つた時など、（主人は中學校長でした）新刊の書が着くと直きに書肆が持つて參ります。もう持つて來るものに決めてゐるのです。又新著を買はないのは恥のやうな氣がして居りました。

主人が居なくなりまして、又いろ／＼の都合で、それ等の書物を悉く拂つて了ひました、今は私も少しの隙もありませんから、生徒の爲には讀みますが、自分の爲の讀書は少しも致す時間がありません。又買へも致しません――。でも「古本屋の前へ立たせたら最う一時間でも二時間でも動きやしない」など〻、今でも友人に申されます。此間も電車を待つ間鳥渡と思つて、中西屋の前へ立つて、長くなつて、遂乘換の時間を後れて切符を棒に觸つて……。大笑ひをされて了ひました。

## 最も感動させられる書

私の一番感動を受くるのは、武士道の精神の籠つた書物です。どうも何とも言はれない深い感動を受けて床しく慕はしさに堪へられません。武士氣質の妻や母や娘の事を讀めば、その人に遇つて見たい、或はその人になつて見たい、といふ樣な心地になります。あの何うも凛とした武士道の精神ほど私を動かすものはございません。

ですから義太夫などが大好きです。明治座へ大隅が來たと聞いては、「それぢや是非一晩出かけねばなるまい」と塾生とも申した事です。以前から近松だの出雲だの〻義太夫本を實によく讀みました。そして武士道に感じては泣きました。ですからあの英譯をするにも矢張武士道懸かつたものを致すのです。この頃の小說などは何うも面白くもなく、又譯しても見ましたが西

洋へ歡迎されません。やつぱり寺子屋だとか蝶花形だとかいふもの〻方が喝采を受けるのです紫式部とか源氏物語とか大層に申しますがもう〳〵彼麼物は更に讀まうと思ひません。讀めば眠くなる位なもので、だらだらばかりして些とも面白くありません。寧そのこと謠本を讀んだ方が餘程清淡して可うございます。



## 教會よりも讀書

そして私は讀書からして初めて泌々と宗敎の味を感じました。元來私などは其の方に遠い質ですが、西洋の小說などを讀んでゐる內に泌み〴〵と初めて宗敎の尊さを味ひました。塾生の爲に今ジヨオジ、エリオツトのサイラス、マーナーを讀んで居りま

すが、實に何うも崇高い精神におのづから觸れずには居られません。先般も通學してゐた或奥樣の爲に、ユーゴーのラ、ミゼラブルを讀みましたが、あのヂャンバルヂャンが最う何うとも仕方のないどん底に陷つて玆に宗敎的の光明を得る邊は、讀んでをる私も其の奥樣も涙が催して止められません……。

敎會でミニスターの說敎を聽くよりも、私は讀書から宗敎の味をしんみりと受けました。恁ういふ讀書の經驗を考へると、何と言つてもまだ日本の著作界はだめですね。宗敎の味の深い小說などは一つもありません。誰が何んと言つたつて著作界讀書界はまだ西洋より遙かに〱劣つて居ります。

## 最も愛讀せしもの

私の一番好きのはリットン卿の小說でした。あの末松謙澄さんが譯して、一時大に評判であつた「谷間の姫百合。」あれもリットンの物です。私も最うリットンの物とさへ言へば遁さずに讀んだものです。丸善の小僧が「又リットンを買ひに來たか」といふ樣な顏をした位です。

而してまあ繰返し〱三四遍も讀んだのはビーコンスフィールドの最傑作ベニシアでした。夫が又大好きであつたのです。政治小說ですが……。

其作の力のある事實は偉いものです。夫婦が政治上の意見が正反對で、然も愛に於ては千萬無量なのですで、互に離緣は何うしても出來ません。けれども政治意見では仇敵のやうな立場であるため、遂に別居して了ひました。夫人は古の女皇何々といふ樣な女傑なのです。ですから妻ながらも夫に對して政見は一歩も枉げる事が出來ません。それが長年月別居の末に、遂々一人の娘の切なる懐に動かされ、又深い〱愛の爲に遂に互に政治上の地位を棄てゝ一緒になるといふのです。

今も忘れない一條などは實に歷々と眼に浮びます。其の娘は母と同樣に居ましたが、母は娘の物心を覺えてから唯の一度も「父」といふ事を言ひません。父は有

るものか無いものか幼心に思ひ悩みながらも、母の素振を見取つて孃も言ひ出でません。然るに其家の二階に「明かずの室」が一間あります。秘密は何れ彼處にと雇人なども思ひ孃も思ひますが、其の鍵は母が腰に始終付て日々立代り入代る朝野の政治家に面會する時、さては外出にも在宅にも臥るにも起きるにも離しません。然るに或時母が熱病。孃が看病して背中や腰を摩つた時ふ



と手に障つたは例の鍵。惡いとは知りながらも拔き取つて二階の一室――この邊は劇に絶妙と思ひます――開けて見ると目も眩ゆい立派な室。中央には燦爛たるブライドル、ベット、即ち結婚當時の床――美麗を極めた帷をかけ燃ゆるばかりの眞紅の敷物を布いて、其上へ父の大禮服と母の結婚衣を覆ふてあります。枕頭には小さな筐、蓋を取つて見ると確かにこれはポケーの薔薇の花に違

ひないと思はれるものが、年經て今はぼろ〳〵になつて頽れてをります、目を上げると壁には立派な紳士の肖像畫。此方の机にはフアミリー、バイブル即ち代々相傳の聖書が開かれて、日々繙讀されるらしい痕が疑ひもない。今こそ分つた！　父は此の世にあるに違ひはないもし歿くなつたものならば此の肖像畫は應接室へでも懸ける筈。それを秘密の室に置くは確かに世にある人の證據！　と恁う思つてからは愈々それぱかり思ひ悩み、遂に母と入れ代りに床に就いて了ふ。そして囈言に「父よ〳〵」と言ひ續けるので母は不思議に堪えられない……。

實にかの室は此の女丈夫が女に返つて泣く室でありました。政治を去つて愛に歸り戀に歸り涙に歸る室でありました。然るに

自分の病中この室を嬢が見たばつかりに、今まで自分ばかりの嬢であつた彼女が父に惹き付けられた。そして嬢に懊悩を與へた。えゝ女々しかつた〳〵！　今は戀も棄てる涙も棄てる今日以後此室は「開かずの室」ではない、公開の室、政治の室だと、短刀で散々に其の床や、肖像畫を切り裂いてしまひます。

すると嬢の憂愁は愈々深く〳〵なつて參ります。其後もいろ〳〵の悲しい波瀾を重ねますが、遂々嬢の一念で其の夫妻が再び一緒になるのです。これは當時の英國の政治界を諷したものですが、家庭問題の方から見ても深い意味が味はれると思ひます。

## 女學生お噺しの會

不覺飛んだ長話を致しましたね。然しこれに就けても私は「女學生お噺しの會」とでもいふべきものを催ふしたらば、非常に有益だらうと思ひます。お噺しの會――でも何だか名前が不適當ですね。それでは餘り子供らしく聽えすぎます。けれど趣意は恁ういふのです。演説會や説教會でなくば唯お話の會――寧ろ非常に面白く感じた書物の、その話を上手にして聽かせるだけの會、恁ういふものがあつたらば非常に女學生に取つては、面白くもあり有益でもあらうと存じます。

戯小説にしみ〴〵と宗教の味を感じたならば、その話をしたら必ず聽衆にもその味を傳へる事が出來ます。科學上の事、脚色した小説でも何でも、總て西洋に澤山ある良書を取つて、それの話を面白くして聽かせたら何麼に可い事でせう。恁ういふ事から又讀書の趣味に觸れさせる事も出來ますし、第一精神上の娯樂と教育とに非常になります。塾の婦人にも然ういふ事を少し心懸けては何うですと申して居るのです。

私は亞米利加に居つた頃の先生、南北戰爭の折に三日三夜敵方に捕はれて居つた事のある婦人でしたが、其先生がお話が實に上手で、「今お前達は何を讀んでゐるの」「何書を讀んで居ります」といふと、「あゝそれは私も四十年程前に讀んだ事がある」などゝ言ひながら「彼處に恁ういふ處がある」と言つては其處を面白く話して下さる。その顏の表情や手振などを凝と視ながら恍惚と聽き惚れてゐると、坐ろに書中の女主人公が眼の前へ現はれて來た樣に思はれました。で、恁ういふお話の會をしたらばと始終思ふのです。

然しこのお話の會は廣く衆勢を集めねばならぬことですが、リーヂング、ソイクルの方は所在々々で直ぐに出來る小集。近間のお友達が數人お集まりになればそれで出來ます。それに東京は今は電車の便がありますから譯はありません。リーヂング、ソイクルは直ぐにもと偏にお勸めしたいのでございます。

## ●富士登山の入費

御殿場より須走まで二里餘馬車鐵道あり二時間にて着し、雨具防寒具等は同地にて準備し得べし、日山なれば須走を午前四時乃至五時中に發し御鉢回りを濟して、午後五時中には下山し得べく泊り山ならば午前十時乃至午後二時に發し、六合目乃至八合目に一泊して翌朝日の出を拜し又午前十時乃至一時に下山し得べし須走にては

| | |
|---|---|
| 一金廿五錢 | 御殿場より須走まで馬車鐵賃 |
| 一金廿錢以上 | 辨當料一食分 |
| 一金五錢以上 | 防寒用綿入損料 |
| 一金廿錢以上 | 草鞋代(一人平均五足を要す) |
| 一金十五錢以上 | 雨具代 |

又山内にては

| | |
|---|---|
| 一金四十錢 | 須走より馬返まで乘馬賃 |
| 一金廿錢 | 馬返より假休まで同斷 |
| 一金卅五錢 | 山内石室一泊料(但夕食付) |
| 一金十五錢 | 木賃料(飯食せざるとき) |
| 一金十五錢 | 一食料 |
| 一金四錢 | 辨當所茶料 |
| 一金十錢 | 金剛杖代 |
| 一金一圓 | 強力賃(客五人一組一人とす)(強力賄料は要せず) |

等にて須走の宿泊料は七十錢以上、同所中食料は廿五錢以上なり。(この外に汽車賃を要す)



# 米國の女學生が社會に出るまでの修行の道程

スタンフォード大學教授　進藤道太郎

亞米利加では女子の高等教育が非常に盛んですが、然しまだ晩近の事です。然うですね。カレッヂ(大學)を「い」の一番に卒業した婦人でもまだ五十歳にはなりますまい。ですから婦人が大學などに入るのが良いか否いかも猶問題にされてゐるので、それは言ふまでもなく二派になります。否認論者は曰く「婦人が高等教育などを受けると必ず生意氣に、お俠に、撥上りになつて不可」と、然るに一方には又人智が進み世間が複雜になると共に、婦人にも高等の學問が何うしても必要である。社會が益々それを要求してくる。女子の大學に入る事は愈々盛んになるべきだ」と。スタンフォード大學の總長などは此の意味を大いに論じてをります。が、今は議論を一切省くとして、私の觀た實況を申しませう。

全く亞米利加の婦人がカレッヂに競つて入るのは、社會自然の要求を滿す爲で、決して生存問題、自活問題の爲ではありません。固より獨立思想といふものは亞米利加婦人間には盛んなものですが……。然もその獨立といふのも、つまり眞に相愛して一生を共にしようといふ男が見付からねば、寧そ獨身で暮すがいいといふ處から、獨立の資格を得ておかうといふまでです。私の學んだ大學には女が五百人、男が八百人位でしたが、其の五百の婦人の七八分は皆恁ういふ側の婦人でした。又出てから實務に就く人も勿論あります多くは女教師、又會社銀行のタイプライター、レター

ライターなど、それから漸々其會社の好い位地に進む婦人もある。又特殊の技能ある婦人は畫家とか音樂家とか、それぐ得意の方面に向ひます。中には俳優になる婦人もあります。

△結婚はどんな風に求むるか

ですから大學出の婦人が向ふ所は種々ですが、要するに糊口の必要に迫られてゝはない。複雜な、進步的な世の中は、日にく婦人に高等教育を要求するのです。それに又假りに私にしても、友人が皆大學出の磨きの懸つた婦人を妻にしてゐるのに、自分が無教育者を娶つたのでは肩がひけてやりきれません。ですから勢ひ大學でも出た婦人を求める。つまり婦人は結婚策としても高等教育を受けねばならなくなります。



米國は年に月に富が充實して來る。そこで社會に精神的、趣味的の要求が增して來る。(言はゞ精神上の贅澤が出て來る。)で、眞先に智識の廣く趣味の廣い婦人が需要される事になるので、其の充實的原因から婦人の高等敎育が盛んになるのです。可否の議論は兎も角も、實際の形勢は右の樣なものです。可いの否いのと言つた處で、男子が智識的な、趣味ある、硏磨の加はつた婦人を望む以上は西洋も東洋も、つまり敎育されぬ婦人は負けであります。

## △一緒に敎育される利害

カレッヂへ入つた婦人は必ず二通りに分れる。一つは男らしい女になつて了ふ。一つは愈ゝ女らしい女になる。この男らしい暴つぽいのが出るので高等敎育可否論も湧くのですが、然し先般もお話した通り、この男らしいのは却つて女ばかりの大學から出るので、男女混淆の大學からは槪して出ません。男が何麼學問や長所を持つてゐるか、女ばかりの大學生は知りません鳥渡逢つて話をして見る。と、男は存外(よく言へば)鷹揚で(惡く言へば)茫乎してゐて、自分達の學んだ樣な事を些とも振廻さず分らない樣子。で、全然自分達の方が偉くなつて了つて、婦人同士で男を馬鹿なものに考へ合つてゐる、つまり男子を解せぬから天狗になつて、お撥ねの始末にゆかぬ者になるのです。男女混淆の大學では此の弊が殆ど救はれて遺憾ない程です。つまり男は女の長所を認め、女は又男の賴むべき力量を知るやうになるからです。

混淆にしたら學科が衝突すると思ひますが、成程女に機械工學や鐵道學は無用、男に料理や裁縫は不用ですが、まあ其れ位なもので大抵は共通のものです。婦人とても高等普通學を學んで、智識趣味を廣くするが目的ですから、さう學科は違ひません。

## △女の方は無器用でない

中學程度は固より、高等學校から大學の一二年位までは兎角女學生に敵ひません。なぜかと申すに、女は

何うしても正直で勤勉です。此の書を讀んで筆記して置けと言へば、チャンと讀んでチャンと綺麗に筆記して置く。男は兎角亂暴なのが多い。斯く女は忠實で加之に記憶力が強いから、受容するのが主な右の程度では男に勝つのです。處が組織的の事――論理を使ふやうになると駄目。例へば動物解剖――蛙の解剖でも何でもナイフ、ピンセットの使ひ方も巧みで綺麗にやる。其圖も綺麗に描く。けれども比較研究はだめ。數學でも代數あたりまでは男よりずつと好成績ですが、微分積分や論理を使ふとなつたらだめ。教授生徒一同での討論研究の會がありますが、其麼處へ出ては女生徒は口が開けません。つまり創造力がなく、論理がないのですね。

ですから大多數の婦人が自づと語學文學に向ひます第一語學ですね。語學は實に婦人の領分です。男子の迚も適ふ所でありません。文學も亦婦人の仕事。然しこれもハムレットの性格論、といふ様な深遠な思想力を要する方は矢張だめです。

## △交際はどんな風に

男女の室隣り合ひの下宿屋は放任で、講堂だけ男女席を區別する日本とは違ひ、スタンフォードあたりの講堂では無論混合ですが、寄宿舎となつたら最う嚴然區別されてゐて、一歩も相侵す事を容されません。ですから校内での交際といふものは、青年會の席上とか或は何かの式に當つて學生劇を催す其の稽古の場合とか位なものですが、其外に一つの組織があるのです。

即ち彼のソロリティーといふもの。これは女子の方の會の名前で、男子の方のはフラタニティーといひます。つまり財産家の孃、地位あるものゝ孃など、校内の寄宿舎に居らずに、別に一家を構へて同宿して居るのです。監督者もあり下婢もおき、全く一の家庭を組織して居るのです。それが皆本部を持つて居つて、各大學等へ支部を設け、新入學の婦人を自分の方へ勸誘する様な譯になつてゐます。

多くは新たにソロリティーに加はつた淑女の披露會

です。そのソロリテイーの人は勿論、他のソロリテイーの婦人、フラタニテイーの男子、それから敎授助敎授——斯ういふ人々が集まるのです。幹事たる婦人の挨拶、新入の婦人の挨拶があつて、後は縱横談笑の會になる。手重くする時は舞踏なども催ふします。

つまり是れが男女學生の交際會。やがて交際界の女皇となる婦人も隨分此處から出るのですから、かゝる場合の應對、周旋は巧妙なものです。談話術、表情術——殆ど演劇的の修練を、斯ういふ實地の間に施して見る譯です。

かく一面に開放的の自由を與へてありますが、さて締る處はキユーッと嚴重に締つて居る。もし墮落でもする者があると、それは社會的制裁が許しません。再び最う人中に顏を出す事は出來ぬ。その制裁が十分に鋭く利いてゐますから、自由交際を許してある割合に過ちが尠ないのです。

## △女の身分は風姿でわかる

高等敎育を受けた婦人の服裝は、おのづから一種の風尙を帶びてゐて、少し見慣れると一見して敎育低き婦人との見分けが付きます。一口に言へば瀟洒です。淸楚です。上品であつさりと實に美い風采です。處が敎育の低い婦人になると濃厚と灰汁の拔けない冗い服裝。

不思議な事には日本の上流婦人が日本服では實に沈靜いた好い色彩模樣を見立てるのに——洋裝をすると西洋での低級の濃厚流をなさる。唯さへ着方がお上手でない處へ、さういふものを着けられては堪りません傍目に見てさへ氣が引けるやうです。米國の婦人が又日本服を着ると是れです。友禪模樣などを着て立派な奥樣風の積りで澄してゐるから可笑しいぢやありませんか。日本婦人の洋裝も恰どこれです。

一寸行つて一寸歸つた洋行歸りの男子に、妙にニヤケたハイカラな氣障な風をするので、私共も窃かに閉口してゐるのです。あれが恰ど一寸來遊した西洋人の眼に、友禪が綺麗で目に注いたやうなもの、其處らの

街路や辻を徐歩してゐる西洋の道樂息子の、妙に際立つたニヤケた風が先づ眼に注いて、すぐ其れを眞似るのだから堪りません。よく〳〵知り拔けば米國の眞正の趣味は、矢張高尚な、澁い、瀟洒したものになるのです。

然し流行の樣子が日本とは違ひます。日本では仕立方即ち衣服の形は五十年前も今も餘り違はずに其の色彩と模樣の流行が轉々してゆくのです。亞米利加は反對で流行の變り變つてゆくは衣服の形で、色彩などは──多少どの色が流行するといふ事もあるが──大體は固定したものです。それに色彩は自分の顏色や、髮の色、眼の色によつて選ぶので、自分には何ういふ事が──例へば私は顏色が黑い方だから藤色は似合はないと言ふ風に──大體決まつてゐるのです。成程顏色の黑い人に藤色では全然映えない。不快な色になつて了ふ。處が日本では藤色が流行るとなれば猫も杓子も藤色。自分に合はうが合ふまいが關はない。廂髮が流行るとなれば自分の額付や生え際が何うあらうとも、何でも彼でも廂髮。さうせねば恥のやうにお思ひなさる。ですから二百三高



地が流行り出したので、不幸にも容色を下げたお方が隨分ありませう。縞柄でも模様でも皆その通りで、選び方が自覺的でなくて模倣的一方ではありますまいか

## △身嗜みの精神

これは私の失敗談で、一度非常な説法を喰つた事があります。スタンフォードにまだ生徒の頃、冬の寒い夜、散歩に誘ひ立てられて出がけに、友人が頻に頭髪へ櫛を入れてお清麗をやつてるので、「夜だし、野外を逍遙くのだし、女が見る氣遣ひもないぢやないか」と言ふと其の友達が、「何かえ？ お前は女に見せる爲でなくちや頭髪を掻かないのか!? 己は自重の爲にする慥うして自分を重んずるのだ」と言ふ。全然閉口して了つて、それからは決して其麼失敗をやりませんでした。實際又晩餐の時などに頭髪を掻き顔を洗ひ、シャツや衣服を着換へてキチンとして席に就くと、身體も精神も緊肅つて心持が非常に良いのです。で、全く西洋の人は自重心のために容貌を整頓するのです。何も女に見せよう爲でも何でもない。婦人の身嗜みとても精神に違ひはありません。

これは英國人の事ですが、新嘉坡で山番をしてゐた男――毎日猿と睨め競をしてゐるばかり、と言つたやうな境遇であつたのに、其男は元貴族の家系だつたさうですが、毎日晩餐の折は整然と容貌を整へて、必ず燕尾服で席に就いたさうです。其處に僕をしてゐた男の話です。これが西洋の人の身嗜みの精神です。

## △お互ひにどんな男女を好き合ふか

亞米利加の婦人の好く男子はといふと、まづ身體が大きくなくては不可。そして鷹揚な、寧ろ鳥渡見は茫乎してゐるやうな、それでゐて一つ腹の底に確乎した處のある――一口に言へば男らしい男で、そして一廉の理想を抱いてゐる男に限るのです。敏捷げに、氣が利いて見える男などはだめ。才子風にチョコ／＼などしたら最うお終ひです。全然最う相手にする者はあり

登錄商標




# アクチナ

主治効能◎眼・耳・鼻・咽喉・船暈・汽車暈に苦む人は本具のあるを知らぬ人なり

●本具一個を備へ置けば家族應用の便あり●本具は携帯至便なれば何れの場所にても用ひらる

◎醫藥にて治せざる病は如何にすれば全治するか!!!

登錄商標



# サンデン電氣帶

主治 効能

●神經衰弱諸症●神經痛諸症●中風●リヨーマチス●脚氣●脊髓炎●糖尿病●遺尿●胃擴張
●胃下垂●消化不良●常習便秘●慢性腎臓炎●男女生殖器虚弱●不眠症●遺精●夢精●早漏
●手淫の諸害●貧血●憂鬱●ヒステリー
●月經不順……其他男女共各病後の衰弱

(說明書無代進呈)

## ●變光電燈球

本電球は一燭と八燭、一燭と十燭、一燭と十六燭の三種あります
明るくしたり暗くしたりするに左右に捻りさへすれば誰にも容易く出來ます
在來の電球に覆を附けて暗くするのは熱の爲に火災の出來る恐れが有りますが本電球はそんな事はありません極めて安全で便利であります
本電球は病院旅館待合等は勿論一般寢室用として極めて便利で且つ最も經濟的のものです

## ●金錢登錄器

金錢の出納を即時に記録し厘毛の違算を爲さゞる出納保護器にして張付の煩雜を避け顧客へ對し一々印刷せる領收切符を差出し得る最も文明的利器なり

## ●營業品目

●電燈●電話●電鈴●表示機●電球●避雷針●探檢電燈●懷中電燈●電池類●其他一式●醫療器械●製糖分析機具一式●電球は各種共製造致居候間特約販賣仕候

本店 東京京橋區尾張町二丁目(銀座通東側)電話新橋四一二二番
支店 大阪市心齋橋筋一丁目西側
支店 横濱市相生町四丁目六十三番地 電話横濱一九三一番

# サンデン電氣商會

(その一)

怒濤庵 江見水蔭君著　織田東禹君畫

（その二）

冒險小說

# 大蠻勇

全壹册

四六判洋裝美本　紙數五百五拾頁　定價金五十錢　郵稅八錢

巻中目次 ―▲安房の巻▼―▲東京の巻▼―▲南洋の巻▼―▲紗都の巻▼―▲荒洲の巻▼

國民の新要求に應じて出でたる文壇の大產物は是なり。從來の冒險小說は、餘りに空想的なり、怪談式なり、變化有るが如くにして實は單純なり。著者此舊套を脫し、新生命を加へたる冒險小說を獨創す。基礎を科學に置き、又文學上の價値を失はざらん事を勉めたるを以て、或は難解の虞れを抱くもあらんが、著者が老熟にして若も活氣を失はざる一流の快文字は、全く此弊を脫却し得たり。故に少年諸君の喝采を博するや論無しと雖も、亦家庭に入りて大人方の賞賛を得るも必せり、殊に大蠻勇の主人公たる霧之助が、百難と苦鬪の其間に、南洋航海の遭難熱帶地孤島の生活、北極近き氷山の跋渉等の記事は、悉く實聞に依れるを以て抱腹すべき虛僞を語り、識者の嘲笑を被るが如き事は、萬無きを信ず、實に是科學と文學とを結び、事實を小說に化したる大成功の新著として、江湖に推薦するを憚らざる也。

東京 本町 博文館

土方伯爵題辭　毛利公爵御母堂。三井男爵夫人。遠山女史題詠
青木子爵夫人。松村理學博士。濱視學。棚橋女史。山脇女史序文

寺西綠子著

# 九重編造花法

全五册

菊判クロース金字入
裝釘優美
毎巻二尺に三尺の石
版極彩色大附圖あり
松の巻附豫修法○梅
の巻○櫻の巻既刊○
以下續刊

定價○松の巻附豫修法金九拾錢○梅の巻八拾錢○櫻の巻金八拾錢

九重編造花法は著者の新案に係り從來の編物を應用して造花となすの技術にして近時女子の手藝界に清新の一生面を開ける優美多趣味の造花法なり此の書は著者親しく生徒に教授するに方りて最も教材に適したる內外産の花卉百種を撰擇し之を「松の巻以下五巻」に分ち一々圖解を附し其一小部分より全花を組成する迄の順序方法を詳密に說示せるものなれば手藝學校の教科書として最適當せるのみならず又家庭の獨習用として無比の良書なり且世間斯の技術を研究する人近時漸く多きに拘らず未だ斯の技の教習に資するの書なし本書は即其世間未發の新教授法を發表するものなり目今女子手藝技巧を競ふの時に方り子女ある家庭には必須缺く可からざるもの也

女(その三)

發賣所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地【振替貯金口座第一一七八番】　株式會社國光社

關東賣捌所　東京堂・東海堂・良明堂・至誠堂・北隆館・須原屋・天章閣・春祥堂・上田屋・池田榮進館

關西賣捌所　大阪市東區北久太郎町　積文社

女（その六）

佛國ジー、ギベール原著
陸軍教授兼文部省參事官 牧瀬五郎君閲
帝國教育會監修
前田長太君譯

# 品性論

全一册
洋裝菊判並製紙數約百七十頁
正價金三十八錢 郵稅六錢

教育の目的は智、感、意を完全に發達せしむるにあり、而して此三者を養成する智育、體育、德育なるものは孰れも皆な必要なりと雖も、强き人、賢き人よりも正しき人と云ふ順序より見れば德育を以て最要とせざるべからず。換言すれば敎育の最高目的は德育の完全に發達せる品性の人物を養成するにありと云ふことを得べし、本原書は即ち品性の性質、必要、理想、淵源及び修養等を說き盡して遺憾なし、帝國敎育會此書を以て現時の敎育上に最も有益なる資料參考と認め之を譯述して世に公にせらる苟も其任務にある者は勿論一般人士も亦た採て品性陶冶の資とせざるべからざる好書なり。

博文館

## 博文館發行七月中の臨時增刊賣切

曩に廣告募集趣意書を發するに當り七月發行の本館臨時增刊は其時期より觀るも其標榜より察するも必ず世の歡迎を得んと豫言したりしが其推斷は過りなく左の增刊三種とも非常の好評にて多大の計畫をなしたるに拘らず全部賣り切れとなり遂に破損落丁の殘本迄爭て購讀を受くるの好況を呈せり玆に讀者諸君の眷顧を謝し併せて本號に廣告せられたる商工業家各位の好運を祝す

文藝俱樂部臨時增刊 講談十八番 正價金廿五錢 郵稅八錢
少年世界臨時增刊 歸省みやげ 正價金十錢 郵稅四錢
數學世界臨時增刊 數學遊戲 正價金十五錢 郵稅四錢

尙ほ各地販賣店に殘本も有之候はば御購讀を賜はりたく候

女(その七)


パール
美顔料
毛髪料
コールドクリーム本舗
東京濱町
平尾分店


懐中要薬
清心丹
清心丹特有の効能を常に食後食後に服用すれば消化を速にし胃腸を健全ならしむるにあり
登録商標
高木
東京市日本橋區元大坂町八番地
本舗 高木與兵衛

ません。日本では優男の風流才子が相應に持てるやうですが……。

さらば亞米利加の男子はいかなる婦人を好むか。何處も同じ女らしい女です。ピンシャンと撥ね上りの風を見せたら最うお終ひ、其麼婦人もありますが決して米國の男子がそれを好みはしない。其麼のは最う高等教育ある紳士から決して請嫁される希望はない。淑やかで何處までも女らしく、そして親切な女が好かれます。イヤ猶一條件。即ち男子の理想を解し得る女。夫の事業に同情し趣味を持ち得る女。そこで學問が必要になつて來る。けれど飽くまでも女らしくて親切な恁ういふ婦人が亞米利加の男子の理想的として求めるものです。否、亞米利加のみでありますまい。我々日本の男子とても亦然りであらうと思ひます。少年の時より米國で教育を受けた私とても妻を貰ふ時には恁う云ふ風の婦人を選び度いと思ふて居ります。

### △今日の流行の問題は何

當時教育ある婦人間に最も流行の問題は貧民研究です。それは實に熱心なもの勤勉なものです。尤も有力な先進者が奬勵して流行らせたものですが、然し善い研究ではありませんか。これで又カレッヂ出の婦人などの、何麼事柄に興味を持つかの一班も分りませう。富豪の孃などで大變な同情と熱心とを持つて、大膽にも單身で貧民窟へ入り込む者もあります。女一人で入込むなどは危險至極なのですが、這麼熱心な婦人も出るやうな勢ひであります。





# 自殺傾向の實例

藤井瑞枝子

## △私の經驗せる事實

一體私は痩せてる方ではありませんそれに不斷ピンピンして居ますから『あれは化病だらう』などゝ人に言はれるのですが、併し最う十數年來の半癈人、肋膜炎の後その膜が厚肥して、動もすれば呼吸困難に陷り身體の具合の惡い時は、矢張精神上に影響を受けて、爽快な心持になれません。生理狀態といふものが人の頭腦を左右する事は何うしても免れないので、其力は意外に強いものです私が『超越生活』だといふ事に就

て諸方から手紙や何かゞ舞ひ込んで困りました其内一番弱つたのは駿河の或素封家のお孃さんが、病氣からして最う世を果敢なんで了つて、『死にたい〳〵』とばかり言つて困るから、貴姉の處へ上げるから諭して開悟させてやつて下さいといふお頼み。これには實に弱りました。遂々其のお父さんが庵へ出かけて來られたので、伺つて見ると盲腸炎などで身體が大層惡いやうです。『さういふのならば私の處でなど到底治るものではないそれより温泉へお連れなさいとお勸めしました何うなさいましたか？其内又駿河へ歸つたら消息があるだらうと思つて居ります。

## △失戀の婦人を癒せし事實

曾て地方で、上院議員のお孃さんが失戀で、幽鬱性になつて、傍で注意して紐類や刄物は近づけぬ樣にするなどゝいふのでございました。そしてその失戀といふのは養子の相談があつた處、先の方は學士でしたが其當人は姉樣よりは妹の方が好いと言ひ出して了つた

ので、つまり其方が嫌はれた事になつたのです。そこで、最う全然憂愁に落ちて了つたのでございます。其方を私が托されて暫時お預りしてゐました。別に變つた事も致しません。唯食事の時間だけを一定して食料の品質も注意して、そして散歩も成るだけお勸め致し夜分はよく熟眠する様に、晝は日光浴をする様にと、まあそんな様な處から腸胃を漸々調へて行つて、食事のお旨く取れる様に心を用ゐました。それは氣分も快活に持つ様と元來私は執着のない性分ですから、成るべく快活にする様にと心を用ゐましたが、生理上の注意が大變有効で。やがて健全になられました。



で、恁ういふ場合に親達の楫の取り方があると思ひます。普通は餘まり嚴格しく言つてはと言ふので、そつとして、機嫌を取つておいて、自然臥るも起きるも當人の氣儘にして置くといふ事になりますが、これは考へ物でせう。矢張大體を監督して、幾干か規律を立てゝゆくが善いと思ひます。

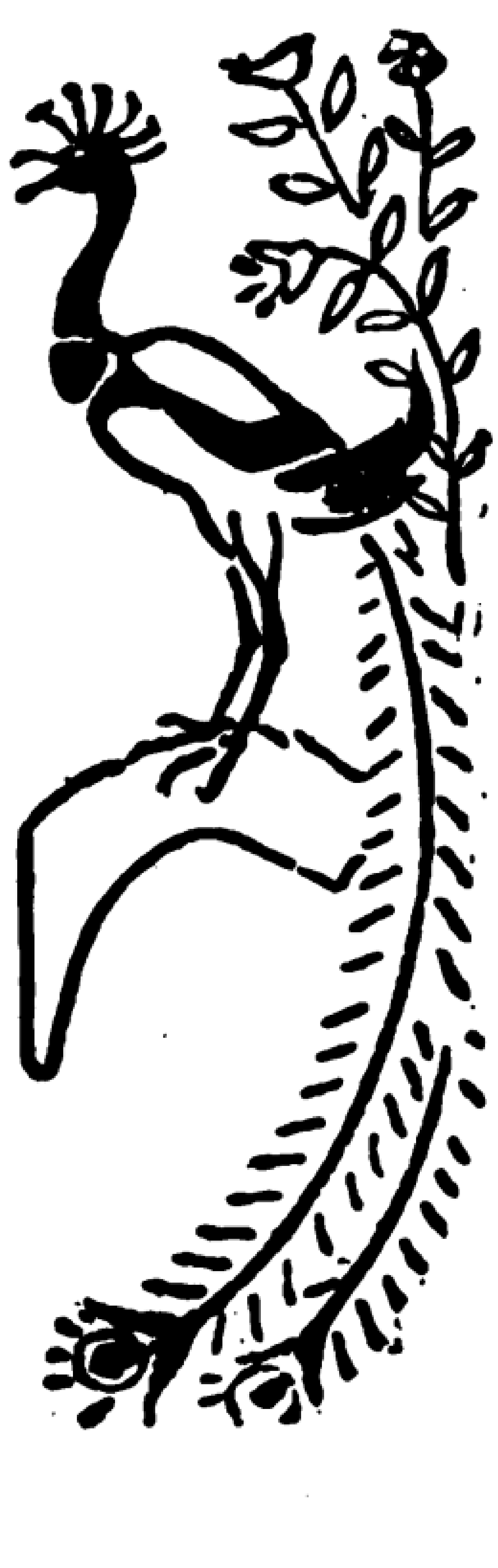
私は厭世家は腸胃に病ある人だと信じて居ります。これは實際です。腸胃の健不健は實に意外の大影響を持つてゐます。これは危険だと思つたら腸

胃を健全になさるがよろしい。厭世や、憂愁や、自殺なんといふ黒雲は病に大抵薄らいでいかうとおもひます。

## △悼むべき自殺婦人

これは地方のこと、兄は大學敎授の博士ですが、其の妹さんが東京へ出て學問したいと、兄さんの歸鄕された時に願つたのです。すると兄さんは女が學問なんか爲たつて仕方がない、と唯一口に言ひ消して了つて間もなく上京して了つたのです。處が汽車で上野へ着き、家へ歸つたかと思ふと直きに電報。妹が死んだといふのでございます。そこで、又直きに引返して國へ歸るといふ騷ぎ。歸つて見ると妹は首を縊つて死んで居るといふ騷ぎ。それは兄樣が餘まり無情だと恨んだ爲の自殺でした。

これには限らず、總て家庭に於ける長者と幼者との思想が違ふのにそれを親切に言聞かせないのが誤りだと思ひます。思想が懸隔してゐるので、同情があつても疏通せぬ勝になるのに、まして同情が至らなくてはお互に個人主義だ、唯我主義だと恨み合ふやうになるのです。兄の博士には其れ相應の意見があつたでせうが、それを優しく言含めずに一口に言放つたものですから、妹には分らう道理がなく、遂に斯る始末に及んだのであります。新舊思想の衝突の甚だしい今の時代には、お互に此邊を注意し合ふ事が必要だらうと思ひます。つまり過渡期に漂はされてお互の考や習慣が齟齬つてゆく爲に、家庭間ですら同情を通はせ得ないのす、これも悲劇の一原因だらうと思ひます。



# 夏の身だしなみ

追々暑熱の加はるに従ひ多數婦人の集會せる場所などに一種の臭氣ありて、蘭麝の薫り馥郁の香も爲めに其美を失ふに至るが常なり。こは言ふまでもなく日本婦人の頭髪の臭氣にして、衛生思想の漸次發達したる今日にては、自然薄らぎゆきたりとは云ふものゝ尚ほ中流以上の婦人の會合場などにこの惡臭の放散さるゝこと決して少なからず、況して本年の如き丸髷の著しく殖へたる樣に見受けられ、且つ束髪には油を附けぬものと思ひ居りしも聞けば西洋婦人の如きも種々髪油を用ゐるよし、固より頭髪に油を用ふるは裝上必要なることなれども、之が爲め多人數集合の場に惡臭を放つが如きことなきやう夏季は少なくとも一週間に一度宛微温度の軟水にて生玉子、若くはグリスリンと少許の石灰汁とを水に溶かしたるものにて洗ふを宜しとす又雲脂は只梳もて盛に梳くのみにては決して取り去り得べきにあらず、大槪雲脂は頭の皮膚の落屑にして餘り強く梳くときは却て其刺戟の爲め皮膚の落屑を多からしめ、少しも益なきものなれば雲脂の多く生じたる場合には飲料アルコールを脱毛若くは脱脂綿に浸して摩擦す可し、アルコールは揮發性故、斯くすれば頭部を冷して心氣を爽かならしめ雲脂の生ぜざること誠に妙なり、但しアルコールも燈用のものは石油を混じある故必らず飲料の品を求むるやう注意す可し。

次に爪の衛生法に就て言はんに、彼の醫師看護婦産婆等は別して常に爪の清潔法に注意し、爪の間隙に垢の這入らぬ樣、目に見えぬ黴菌等の此間に潜伏する恐れなき樣適當なる藥水を以て消毒を怠らずと云ふ、勿論衛生思想の發達せる今日、今更云ふ迄もなき事ながら、中には服裝頭飾五分の隙なく黄金の光燦たる指頭の爪の黒く縁取りたらん如く垢付ける夫人令孃等を公會の席に見かけること珍らしからざるが如し、歐米の婦人等が爪を裝飾の上より大切に爲すことは我々の豫想以上にして、爪磨を一の專門職業となす者さへありと云ふにても其一斑を知るべし。獨り歐米婦人のみならず清國の婦人も爪の美を珍重すること一方ならず、北京に在る貴婦人等は何れも長く生やせる爪を恰好よく摘み切りて、大切に袋を被らせ置くを一の誇りとなし居るよし、爪を清潔美麗に保つは衛生上にも美容上にも大切なることなれば、茲に爪を奇麗にする方法を記せば、石鹼にて好く洗ひたる上、稀薄なる硫酸二グラム、アラビヤ護謨丁幾一グラム、冷水四オンスを混和したる液中に浸すにありといふ。



# 不良小說と讀者の心

井深花子

▲近頃流行の小說

私は近頃流行の軟らかい小說を讀んで後でどんな感じがするかを考へて見ますのに、何も頭腦に殘つたものが無いばかりでなく、何れかと申すと良くない印象を止めるやうに思はれます。小說は元より娛樂的のものですから効能の有無は構はぬやうなものですが、自然の慾情ばかりを寫したゝけで、何か感奮すべき性質がないと一向讀んで快味が無いので御座います。

陳腐な趣味かは知りませんが、敬慕の價ある人物を書いたものが一番面白く、何時までも心の糧となるやうな心地が致して愛讀するので御座います。彼の小公子なぞは私の大好なものゝ一つで御座います。

▲小說に依て墮落せし家庭

米國の或友人の話に其人の懇意に出入て居た或紳士の家庭は、當時模範的として尊ばれて居りましたが、十年ばかり遠く隔つて居て久し振りで訪問いたした際、夫人の机上に在つた二三の小說を見ますと、意外にも卑猥なもので、十年前には斯樣書物は藥に仕たくも無かつたのに扨々淺ましい事と歎息したのですが、四五年たつかたゝぬかの內にその主人は墮落いたし、家庭がすつかり亂れてしまつた實例が御座います。是等は極端の例でせうが、兎に角讀物が家風に及ぼす力は却々强いものに違ひありません。

▲著者の誠心と實高

紐育のセルトンと云ふ人が著はした「御足の跡」と

云ふ書は、近來宗教が世俗に流れ、會堂に於ても金の有る者は得々として尊大に構へ、立派な信仰のある貧者が隅へ推縮められると云ふやうな傾のあるのを痛歎して、遺憾なく攻撃したものですが、非常な喝采を博して十一箇國に飜譯され其賣高は大したもので御座います。世俗に逆つて書たのですから賣れる筈はないのでせうに案外反對の好果を得ましたのは全く著者の赤心に動かされたのだと存じます。私のやうな者が斯樣申すと甚だ嗚呼がましう御座いますが、唯持て囃されたい賣りたいと云ふのを目的として、青年男女の歡心を得やうと計り墮落に誘ふ分子の在る書物が殖えて參りますのは如何にも遺憾に存じられます。年若の方は割合心の淸いもので書中の崇高な人物に敬服する傾は必ず御座いますから、誠心の籠つたものを著して良心を引付けましたならば、著書の賣れぬ譯はなからうと存せられます。

## ▲不精癖を付ける書物

山間や海邊に暑を避けて靜に書物を繙くのは淸い樂しみでは御座いますが、其書物の性質に依ては弊害がないとも申されません。若い婦人を誘ふやうな小說類は最も若い婦人の心を引付けるもので、閑居の際にはいつも好伴侶となるやうですが、ずつと脫俗した批評眼があれば格別の事として、是等の小說に心を奪はれて、空想に耽りますと、頭腦はぼんやりとして活氣を失ひ、不精になり勝なもので御座いまして、折角英氣を養ふための避暑が無効になるばかりでなく、毒芽を靈魂に植つけるやうになりませう。私が愛讀した米國の小說に、某銀行家に二人の娘があつて何れも相當の敎育を受けて居ましたが、姉娘は學問技藝を虛飾に表はす傾が在つて世に時めいて居り、妹娘は好きな音樂を利用して慈善會なぞ企て專ら獻身的の方面に働く方でした。處が其銀行家は一朝破產の悲運に陷り、一家絕望の淵に沈みました際、姉娘は唯狼狽し、煩悶して厭世になりましたのを、妹娘が諫め勵まして豫て習練した音樂を收入のたつきにして一心不亂に働らき、倒

れかゝつた家產を維持したと云ふ健氣な娘の働振を書いたのが御座いました。讀書して不精になる人は斯樣類のものを撰び見るのが一番宜からうと存じます。

### ▲幼少時代の讀書趣味

私の實兄は私の教育に肩を入れまして、教科書類は可なり備へて與れましたけれども、小說類は父が非常に八釜しく申して見せませんのと、悠長な時間の乏しい境遇であつたのとで、觀る機會がありませんでした。それでも馬琴の作の一二や勸善懲惡主義の稗史位は讀んだ事が御座いましたが、泣くやうな處が好きで、千代萩の政岡なぞには非常に感動して、淚を零しながら一生懸命に讀んだ事を覺えて居ります。

### ▲ユーゴーの小說

私が唯今までに一番感じた讀物は、ユーゴーの作のラ、ミゼラブルと云ふ小說で御座います。是はミルエルと申す牧師の高潔な精神を寫したもので、其略筋は斯樣で御座います。御承知の通り佛蘭西の革命時代には貧富の懸隔が實に甚しく、勞働者の困難一方ならぬために、盜を働いて獄に下る者が多く、地位ある人々は此等罪人の出獄者を蛇蝎のやうに嫌ひ怖れて居たのです。ジャンボルジャンと云ふ貧困勞働者も亦貧の盜みのために暫らく入獄して居ましたが、放免後寄るべき知己もないので、ミルエル僧正の許へ賴つて參りました。出獄者と見れば門を閉ぢて追ひ拂ふと云ふ中で、ミルエルばかりは喜んで之を迎へ、手を取つて奧に伴ひ、善き椅子を與へて懇ろに慰めますのを、ミルエルの娘は苦々しき事に思ひ、早く此忌しい人を追ひ拂ひたいものと氣を揉みますけれども、父は一向平氣で御馳走を娘に命じ、娘は父の命を辭みかね乍らも皿をいぢられるのも汚らはしく、父上は何故斯樣醉興をされるかと不平だら／＼で居りました。一同寢に就て後、ジャンボルジャンは復盜心を起し此牧師を殺して家財を盜み去らうかと考へて寢間へ忍び入りましたが、天使のやうな高潔な寢顏に流石手を下し兼て、側に在た

銀の燭臺を一個引浚つて逃げ出す處を警官に押へられミルエルに引渡されました處、是の人は盗賊ではない私方の客ですと掩護して再び家に入れ一層手厚く待遇いたし、銀燭が望みなら尚一個を上げるから一對にして持行かれよと惜氣もなく差出しましたので、流石執拗のジャンボルジャンも愛の光に靈魂を洗はれて悔悟の涙にむせび、遂に良民と化したと云ふ筋道で御座います。一方から申すと如何にも不自然の處も在りませうが、此德高き牧師が通俗的に娘に諭す言葉など眞に迫つて面白いのみならず、此牧師の言行は私共が世に處する座右の銘とでも申すべきものと熟々感じ入りました。私は何か心に蟠りの出來た際には何時も此小說を想ひ起して戒めて居るので御座います。



# 諦めよ然らば汝は幸福なるべし

大町桂月

◎人間の發展、社會の進歩は、あくまでも、積極的の努力に待つこと、固より云ふまでも無し、然れども、萬事程度のあるもの也。否、時と場合とによりて、消極的に引込思案を爲すが、却つて、幸福になり、後來の發展進歩を助くることもある也。

◎人の慾は限り無し、女にありて見れば、學問あり、財産あり、名聲あり、地位あり、顔容秀麗、身體強壯にして、愛を己れのみに注いで呉れる人を夫としたがるべく、男にありては、美にして、身體も發達し、學問藝能も出來、家政に長じ、交際にも長じ、貞操正しき人を妻としたがるべし。されど、世の中には、そのやうに足り揃ひたる人は無し。よしや、そのやうな人ありとも、わが身が餘りに劣り居らば、相手にしては呉れざるべし。人は、一方に、希望ありて、積極的に努力すると共に、一方に、我身の程を顧みざるべからず。よしや、我身に十分の資格ありとも、世には運といふことあり。されば、駿馬痴漢を乘せて走り、佳人拙夫に伴ふと、古人も歎息せり。ひろく世の中を見わたすに、堂々たる名士に、案外に下らぬ妻あり。顔も心も何不足なき女、往々、腰辨當の妻となりて一生を送る。夫婦の間は、とかく、諦めが大切也。金錢以外の趣味を解せざる女が、學者などの妻となるは苦しかるべく、心の高尚なる女が、金錢以外の趣味を解せざる者の妻となるも苦しかるべし。男と女とを比するに、運は、女の方に多きやう也。古人も、女氏なくして玉の輿に乘ると云へり。親が勢力あり、財産もあらば、よしや、器量は二の町なりとも、學問藝能は出來ずとも、よき處より、いくらも貰ひ手があるに、貧家の女、鏡に對して、つく／＼我美顔をながめて、空しく歎息

するも多かるべし。これぞ理想の夫と、積極的に垣を越えて走れば、世は淫奔娘として、闇黒に葬り去らむとす。葬られずとも、その理想の夫、案外の輕薄児なり。もしくは意氣地無し也。すべて、人の長所は、一方に短所となる。氣が利かぬ代りに誠實なりとか、藝能がある代りに虚弱なりとか、美なる代りに輕薄なりとか、醜なる代りに壯健なりとか、一得一失、人はさま〴〵、もし長所を取らば、世に棄つべき人なく、もし短所をさがさば、世に取るべき人なし。諦むることは益ゝ必要也。萬事あきらめ過ぎては、活動停止すべけれど、大小輕重を考へて、大を伸ばさむが爲めに小を諦め、重に就かむが爲めに輕を諦む。一方に諦むは、即ち一方に伸ぶ所以也。諦むるは、必ずしも、消極的に意氣地なきにはあらざる也。

◎世には、可成りの夫をもちながら、子はみな、やくざものにて、一生の後半を闇黒に送る女も少なからず。夫は人並以下なれども、子女はみな出來がよくして、一生の後半は、幸福の光につゝまるゝ女も少なからず。夫に名があるかと思へば金なし。才があるかと思へば事業はしくじる、金があるかと思へば、冷酷也。人が好いかと云へば、働無し。學問があるかと思へば、虚弱也。諦めずんば、人生は益ゝ闇黒也、我身は益ゝ不幸也。諦めれば、光明自から胸に生ず。諦めずんば富も苦しく、貴も苦しく、美も苦し、諦むれば光風霽月、何の處にか幸福を得ざらむ。浮世は、涙の谷とは、所詮、諦めのつかぬ未練者の愚痴に過ぎざる也。

◎社會に處すると家庭に處するとは、用意を異にせざるべからず。社會は闘爭の巷也、大に闘はざるべからず。即ち積極的に進まざるべからず、妄りに諦むべきには非ず。智を振ひ、蠻勇を振ひ、才能を振ひ、斃れて後止むの覺悟なかるべからず。之に反して、家庭は實に平和の天地也。決して闘爭の巷に非ず。力を角すべき處に非ず。世の中は、勇者は勇者と闘ひ、智者は智者と爭ひて、殺風景極はまる。唯仁者に敵なきのみ也。闘爭が社會の自然也。闘爭する能はざるものは社會に立つの資格なきもの也。家庭にありては、夫婦

唯相和すべし。夫と婦と力を角するは、土臺間違ひたる話し也。男は、多くは社會に闘爭す、家庭に入りては、妄りに闘爭を好むものに非ず。社會に力が振へざるもの、往々家庭に蠻勇をもらさむとす、これ例外の變則也。婦は、社會に力を伸ばすこと能はざるものが大多數なれば、やゝもすれば、男子が社會に闘ふやうに、家庭に闘はむとす。夫を尻に敷き、下女を虐使し、親戚をよせつけず、氣に入れば、子女を甞むるやうに可愛がり、癪にさはれば、忽ち、ぶんなぐる。かくて、其人は思ひ通りに力をふりまはして得意なるべけれど、これ家庭と社會とを間違へたる也。かくては、平和の樂園なるべき筈の家庭が、變じて、修羅場となれる也。社會の戰場にこそ、巴將軍が欲しけれ、板額が欲しけれ、家庭に欲しきは、たゞ慈悲圓滿の活菩薩也。夫は妻を愛し、妻は夫を敬し、親は兒をよく敎育し、兒はよく孝にして、毫も闘爭なく、不平なく、和氣靄靄たるは、これ理想の家庭にあらずや。家庭とても、金錢問題が主になる事なれば、三越へ行きたきは、山山なれど、そこは財布と相談して、いさぎよく諦めて、妄りに夫の貧を恨まず、子のねだるものとても、大小輕重を考へ、これも財布と相談して、妄りに贅澤に慣れさせざるが、却つて子女の後來の爲めになる也。富家に甘やかされたる子女に、わからず屋多く、少し不足な家に、親の慈愛としつけとによく敎育せられたる子女は槪して賢也。要するに、闘ひては、家庭が變じて社會となる。家庭の家庭たる所以の實なし。平和にして、はじめて家庭也。家庭の平和のもとづく處は、あきらめ也。夫も諦むべきは諦め、妻も諦むべきは諦め、子女も諦め、舅姑も諦め、而して、十分に力を學問なり、藝能なり、事業なりに伸せば、力が十分に伸びる也、而してこの方に於て、所謂積極的の發達をなす也。

◎頭は使へば、使ふほどよし。なほ身體を使へば使ふほどよきが如し。身體を使へば、身體健全となる。頭を使へば、精神健全となる。ひとり氣を使ふだけは、あまり藥にならず、否、毒になる。氣も少しは使ひて

もよけれど、妄りに使ふべきに非ず。氣を使ふとは、俗に所謂心配也。世に全く心配のなき人なし。もし全く心配なきものあらば、そは瘋癲白痴也。されど、世に心配ばかり人を苦しむるもの無し。その所謂心配といふものは、家庭の天地より生ず。政治家が日夜焦慮して國事に奔走するも、家庭が平和ならば、案外に、心身は壯健也。之に反して、家庭に心配あるものは、元氣早く消耗す、更に進んで早く死す。平和の心配といふも、つまりは、お互に諦めの出來ざるより出づる也。

◎我國は、近年俄に勃興して、歐米と雄を爭ふやうになり、從つて社會の鬪爭益〻甚しくなれり。奮鬪の氣象は益〻之を鼓吹せざるべからず、妄りに諦むるは、大に不可也。然れども、一思せよ、社會と家庭とは、大に事情を異にす。社會とても、物質にあきらめてこそ、大に精神にのぶるなれ。二兎を追ふもの、一兎を得ずとは、こゝな事也。一兎を得むが爲めに、他の一兎を諦むる也。まして家庭は、鬪爭の巷に非ず。鬪爭すれば、家庭亂る。諦むれば、鬪爭無し。諦のなき處、必ず多少の鬪爭あり。表面にあらはれずとも、暗鬪あり。家庭の平和幸福は、貧富貴賤を問はず、すべて、諦むることによりて得らるゝ也。

◎近年女子教育の勃興したるは、これ大に喜ぶべき現象也。否、喜ぶにも、喜ばざるにも、これ自然に然るべき筈也。世には、賢母良妻主義を非とするものあり。それにも一理はあるべし。中には、賢母良妻の型に入れては却つて不利なる女もあるべし。されど、殆んど女の全體は、妻となり、母となるもの也。從つて、家庭に就いて、豫め確たる觀念を有するを要す。家庭と社會との異なる點を知るを要す。むやみに、力を展ばせよ、積極的に進めよとは、これ社會の方面に言ふべきことにて、妄りに家庭に應用すれば、女は所謂悍婦となる。それで、果して其人の幸福が得らるゝか、否かは、大に疑問也。

◎小兒の集りて、いちごを食ふを見るに、始めのうちは、必ずみな大なるものを擇ぶ。されど、食ひゆく中

には、いや應なしに、小なるもの、くされか〻つたものにまでも手が及ぶやうになる。これ萬事に及ぶべし。もがいて〳〵、いよ〳〵意が通らずんば、何人も止むを得ず、諦むべし。愚なるものほど、おそく諦め、賢なるものほど早く諦む。之を社會に見るに、敎育が進めば、進むほど、學問藝能ありても、出世しがたき也。明治二十年以前なら、大學を卒業しさへすれば、默つて居つても、價値よく賣れたり。今日は、大學を卒業しても、一生懸命に奔走しても、容易に賣れず、漸く賣れるにしても、二三十圓の薄給に甘んぜざるべからず。而して、氣位は高けれど、諦めは、つき難かるべし。また社會に處しては、妄りに諦むべきにもあらざるべし。女子敎育進めば、女の方にも、それと同じき境遇に陷るべし。而して今の敎育は、たゞ力をつけて、品性の修養に疎也。其結果は、女子敎育進んで、益〻女子の不幸を多くするやうになるべし。余は、斷言す、諦めの一事、これ家庭の福音也。殊に家庭が主なる女子の福音也。以て今の敎育の餘弊を矯むるに足るべし。

## 歸省する女學生へ

第一高等女學校長伊藤貞勝氏は歸省す可き幾多の學生に對つて左の如く戒めたり。

夏季休業中は必ず鄕里に歸る可く、其の際都會の華美なる風習を質朴なる地方に傳へしむるが如きことある可からず、地方人は一般に東京の文物を慕ふの餘り、適々都より歸京せしものある時は徒らに其の擧動に倣はんとするの風ある可く、又小學時代の舊友に對しても決して輕跳の動作ある可からず、徒らに不快の念を抱かしむるは軈て自己の進學し居る學校の體面を汚し、延ひては女子敎育の發達に阻碍を來すべければなり。

「母さん然う有仰つても先生は然う有仰りました」とは一般の女學生が母に對する新舊思想衝突時の第一步なる可く、又折角學校にて正しく慣れしめた規律も此の夏季休業中に打ち毀される場合頗る多し、又學校に學びし作法は此の間家庭に於て充分練習するの餘地あるべし。

費用と時間と本人の元氣とが許す範圍に於て旅行は奬勵するも決して單獨にて來往する勿れ、必ず信用ある保護者と共に旅行す可し旅行は可成往復の通路を異にして見聞を廣くすべし。

休暇後の始業當日に到りて缺席するもの頗る多し、罪素より本人にある可く、又姑く會へぬからとて兩親が牽き止むる親子の情合は然る事ながら、身は尙ほ修學期にあることを忘る〻なく、始業前に歸京する位ゐに用意すべし。





# 今樣枕の草紙

はる子

誰れやらが、女がもし盛裝して、それこそ振袖の、色は曙色でも、空色でも、裾模樣で、高島田で。綴れか何かの帶を矢の字に結んで、姿見に向つて、立つた時、自分が夫れに似合ふ可くもあらぬ醜婦だつたら甚麼氣持がするだらう。女として恐らく何よりも辛く堪らないだらうぬえ。屹度姿見に背を向けて長い袂で顏を隱して泣いて終ふだらう、と天晴れ一代の警句でも吐き得たやうにいきこうぜんと云つた時、私は冷やかに笑つて、オヤ〳〵那麼しほらしい女が今時一人でも御座いますか、あれば一つ御紹介を願ひ度いもの、今の世に恐らく其樣女を探し度くとも無いでせうが、と云へば、フン、豪いものだね、と先刻の樣子とは打つて變つての悄氣やう。夫れに引換へ此方は乘り出て眞實よ、嘘なら一つ試して御覽遊ばせ。誰れでも女に己惚心の無いもの無しで、色が白げれば七難隱すで威張りますし、黑くつたつて、豈夫落語家の云ふ汚れつぽく無くつて佳いんぢやありますまいが、東京女は却て色の淺黑い方で佳いのだとか云つて、皆ソレ〳〵に己惚れて居ますもの、奈何して振袖に顏を隱して泣くやうな其樣殊勝な女があつて堪るものですか譬へ甚麼女でも鬼も十八。夫れ相應に見られるやうになるものですよ、下々ならば醜女々々と賤められるやうな縹致でも、是が上つ方であつて御覽遊ばせ。高價な化粧品にお顏を飾つて、髮は流行の廂髮にでも結んで、上から下までゾックリした縮緬物で、春四月、花の下を馬車でゞもズッと走らして御覽なさい、オヤ之はと誰れでも屹度見違へる事受合です。其上に此頃漸うと流行りかけた、三越ベールとやらにお顏を包めば又一段と御容色が上つて見え。憐れ其の花の姿に思を焦す方が

有るも笑止ちや御座いませんか。其處へ行けば、

◎氣の毒なのは貧女で、相應の容貌は持ち乍ら、作る品さへ無ければ其の縹致の十分の一も人は買つて呉れず。年中煤にまみれて居るが、飜つて富豪の愛妾にでもなれば、絹物ぐるみで居られようが其代りにもう墮落したと云つて寄せ付けては呉れずサテ／＼不公平な世なるかな、と私も嘆息したいお仲間ですわ。一體に此頃は皆樣お化粧上手に加へて、表情的とやらで、凡べての動作が活々した方が多く、一寸道を歩いても直ぐに其樣人の一人や二人には擦れ違ふ。で皆な夫れ／＼の人が種々の希望を未來に掛けて居るのかと思へば面白く、私も其の一人として、あながちに夫れを實現しようと焦るでもなけれど、又あせつた處で出來なければ夫れ迄ですけれども之も空想とやらの一つだと思つて。



◎住居は

或日、懇意な米國人に招かれた、次手にズッと見せて貰つた其の居間やら寢間やらが氣に入つて了つて自分も出來得るならば斯う云ふ風にしたい、とおもひ、人に問はれても自分の心にも斯う決めて居るので。日本造

りの分けて古風な作りにも風雅で佳いと思はないでも無いのですがまア……和洋折衷と云ふ處の建物が佳いやうで。

◎外見は奈何でも佳い

と云つて餘り小さいのも嫌だから一寸奥深く見えるのが好きなので、勢門を入つてから少し間のある方が佳く、兩側には紅葉の木が有つて欲しい、が一寸植木屋染みる恐れはあるが――。

◎玄　關　は

磨り硝子の二間位で、應接室は無論洋風で、夫れ相應の飾り付けで佳いとして。自分の居間は、寢間も二階が好く。居間は慾張つて二つ、一つは二階で洋風に一つは下で純日本風にして、扨二階のは、夏は涼しげなレース。秋は何色冬は何色と四季折々の色を更へた美しいカーテンを、春の風、秋の風に靡びかせて、或るは捧つて窓越しに若葉を通して遙かに臨む町の甍や高臺ならば猶一入、見下せば庭は唯平らかに廣く。一面に芝を植えて夏ならば桔梗とか女郎花とか云ふ草花を多く、木等は餘り無い方が佳い。が芭蕉丈は澤山に有る方が嬉しいとおもひますね。疊ならば十疊位の廣さで可いので、机を左から光線を取るやうに置いて、其向ふ側には讀まずとも相應の洋書を立て掛けて、本箱の上には、石膏の人形を置いて。水彩畫は好きだから二つ程掛けて置く。右側にはピヤノを据へて、折々の調べ、月好き夜など大に氣取つて見たい。樂譜が廣げた儘に春風にパラ〳〵とかへる、黄昏るゝ春の暮にオレンヂ色のカーテンから私が顏を出す。髮は無論束髮

◎寢　室　は

次の間の寢室は寢臺を中央に置いて、大きな姿見を側には洗面臺。化粧道具に凡て上等品許りを置く。何となく香水の香は滿ちてゐるやうな部屋。下の部屋は六疊ばかりの純日本風で、丸窓の側に紫檀の小机を置き、其の上には、物語歌集、法帖を置いて、友禪の座布團は綿が厚つい。窓を啓けると芭蕉が直ぐ目の前にサヤ〳〵と涼しい葉擦の音がする。沈香の香の籠つて居るやうな、薄暗い部屋で、床には好きな抱一の軸を掛

け、違ひ棚の上には、短冊、色紙を入れた蒔繪の箱を載せ。床の間には美しい香爐。折々の花を挿したのは掛花活が佳い。箏が二面。一つは美しい布で包み、一つは雲井に合した十三絃の、柱は象牙の絃も眞新しいのを。其處に坐る時には桃割れか島田にする。

◎何うせ一度は女と生れた身の振袖さへも着ず了ひとは餘り情無くて涙がこぼれると云ふた人もあつたやうですがなるほど道理だと思ひます。人生僅かに五十年とはよく浪花節でながしてやる言葉。其の五十年の



間に振袖を着る時間は眞の少しなのですから。と云へば何だか自暴半分なやうな調子に聞えるかも知れませんが全くの事で。着物等も平常は大抵御召縮緬か糸織位、併し糸織は餘り體に移らないから御召の方が佳いとおもふ、裾は桔梗色で、私は一體に華派好きゆゑ其の比較にして羽織も氣取つて同じ品で裏は緋の紋縮緬が仇つぽいから佳いとおもふ。友禪の長襦袢に半襟は濃い色に、明瞭と染め抜いてあるのをしたい。春は大方羽織を脫いで、帶は博多がキチンとして〆め佳いから、背負上げは華

派な色、夏になれば色を皆な淡くして、相應なのを着る。

◎散歩に出る時は

朝のしつとり露ばんた時は知らぬ事。後は繻珍の緒の重ね草履か。南部表の小町下駄で、雪のやうな足袋蒲柳の質を自慢げに少しの暑さにもオ、暑いと大袈裟に云つてパッと翳す日傘は、春は藍の無地。夏は白の碁盤縞かクリーム色にレースの付いたの、秋は銀鼠のやうな色。冬ばぐつと濃いゝ色で總體に柄の長いのは云ふ迄も無い。

◎指輪は

誰れでも一つ位は屹度持つて居ますが、自分は二つ程あれば佳い、一ッは金剛石を入れて、他のは紅寶石のにして平常も嵌めて居る、殊にピヤノなど彈く時は餘計佳いと思ひます。

◎時計は

矢張り首から掛ける方が華派で佳いし、鎖には眞珠も入れたいが、自分がもし這麽事を人の前で臆面も無く云ふたら人は何とおもふであらう。那麽飛拍子も無い事を云つて、第一餘り身分を考へ無さ過ぎると云ふだらう。又むかし堅氣のお婆さんなぞは那麽事をしてよくまア罰が當らずに居るだらうと云ふかも知れない一寸云へば贅澤のやうにも聞えようが此位の事はしてゐる人があるのだから、又私だつて出來ないとも限らないとおもふのが現代女性の心かも知れないのだから一概に身分を考へ無いとも云へまいが？　何日の世の事かとも思ふ。夢の〳〵夢の世の事かも知れないが之が又何日實現されないとも限らないと再び念の爲めに云ふて置く。





# 老孃の一日

しげる

## ◎雨中の電車

何かから搖り起されでもした時の樣に、ふつと氣が附いて、電車が今、霞が關の下から貴族院の煉瓦塀に沿つて、日比谷の通りへ曲らうとしてゐるのだ。

溜池を發してから此處迄、何を考へてゐたらう？、まさか睡つてゐたのではあるまい、左手に切符、右手に傘の首を押へて、ちやんと膝の傍に突き立てゝゐる。さう謂へば、車掌が切符を截りに來た時、十錢銀貨を出して一錢おつりを取つて、「乘換は？」と訊かれた時「なし」と答へる事や、虎の門の女學館の土手の下に、石や土や材木が埒もなく積み重ねてあつた事など、幽に――昨日か過日の樣に覺えてゐる。

雨の脚が早くなつたと見えて、水溜りの中の黃ろい絞りが漸々細くなる、乘つてゐる人も至つて少い。外濠線は常に餘り混まない電車だが、今日は特別寂しい、直ぐ向側に書生風の白絣が一人、其隣が、田舍者らしい色の黑い内儀さん、ずつと離れて隅の方に穢い工夫が、右の足を左の膝の上に抱へ込んでゐる、書生を除くの外は兩人外を眺めて、「よく降るなあ」といひたさうだ。こつち側にも三四人乘つてゐる、皆男らしい。

私は何處へ行くのだつたつけ……？。

雨は益〻降る。細い〳〵絹糸どころぢやない、もつと細い菅糸か何かを一二寸に刻んで、機械で振り零す樣だ。泥濁つた土はてら〳〵上光りがして、丁度學校の退け時分だから、女學生がぞろ〳〵通るわ〳〵、合羽のないのは袴の裾にびつしより跳があがつて、當人は平氣らしいが、觀てゐて氣の毒になる。其他種々な人が通る、其足駄や靴や草鞋を見ると、ヽヽ、ヽくしや〳〵いふ音を連想して、如何にも不愉快さうだ。全く氣の毒

だ。中には揚々と自用車を走らせてゐるのもあるが、是とても、幌や桐油をすつぼり閉し固めた裡に小さく成つて行くのは、鬱陶しくもあらうし、寒くもあらうし、あんまり羨しくない。

　が此人々は孰れも止むを得ない用事か任務の爲に、不愉快を忍んで、外出を敢て爲るのだらう。

　私は何の爲に出て來た？。

　いくら考へても、何の用とも何處へ行くとも、一向當りが附かない。

　はてな？、こんな日に毫とも出たくはなかつた筈だが……、是は何物にか誘ひ出されたのではあるまいか、うん然だ！　すつかり解つた。確に、目に見えぬ何物かに引ぱられて、御苦勞樣にも合羽着の足駄穿で出かけて來たのだ。

　一寸其「何物」の説明が爲たくなる。

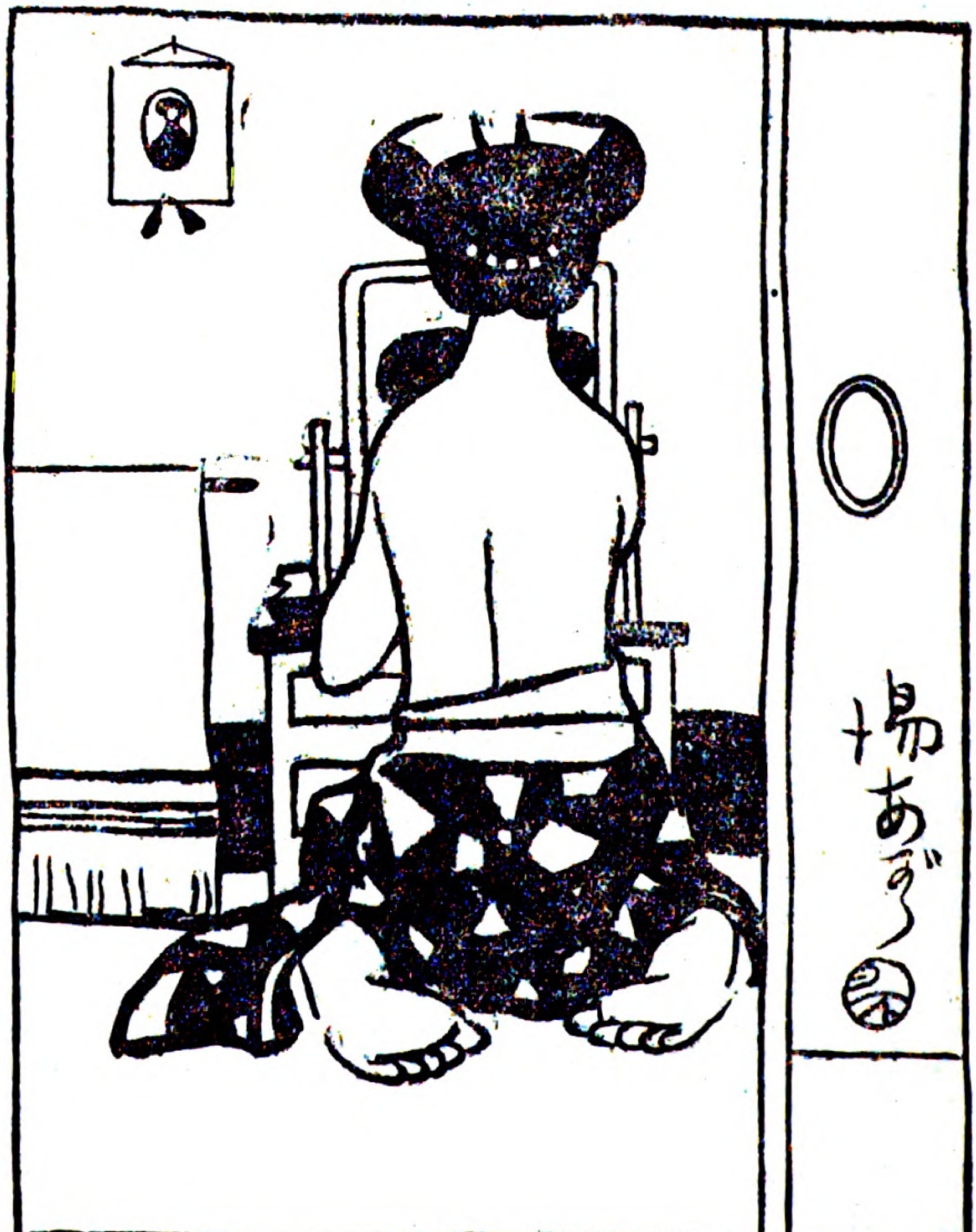
　今朝は陰かつた爲、大に寢過して、食事が遲れる、掃除が遲れる、結髮が遲れる、新聞を讀んでも誰かゞ背後で待つてゐる樣な氣がして落附かない、此外出の依て以て來る所以は是に存したらしい。

　昨夜おかなさんから來た手紙の返事を、今朝早く書いて出さうと思つてゐたのが、右の次第で果さない。床の間の挿花にも水を注さなければならないし。先それよりも、縫ひ掛けの浴衣が急務だから、と南向の六疊へ針箱を持ち出して、せつせと始めたは宜かつたが何分手許が陰つて捗が行かない。寒いけれども爲方がない、障子を殘らず明けるとよつぽど明るくなつた、と思ふのも僅か一分か二分間で、馴れると依然陰い。膝を摩つて閾の際迄のり出して裾かけをしてゐると、襟の方は緣側の央程へ垂れて、しと／＼降り込む頻吹に濕つぽくなる、それでも陰い、而して寒い事、再參が來た樣だ。梅雨中には例年珍らしくない氣候だが、フランネルに綿入羽織を着てゐて、まだ冷々する。手先などは屈む樣な氣味で、少しも軋がないものだから動かす度に緩い指輪が抜けさうになる。背中は自然と圓くなる、首が垂る、肩は凝る、もう堪らないから、長い糸を殘した儘疊んで了つた。まご／＼てゐると

直お午、お腹が空かないから未だ食べられない、けれどもそれを延すと益〻用が遅れて來るから、我慢して輕く一碗食べる。ともう氣が重くなつて了つて、何にも爲るのが嫌になる。

漸と軀を起して部屋へ入つて、さて何を爲樣かと考へ込む。考へる迄もない、おかなさんへの返信を書けば宜いのだ。で机の上の手紙を又一〻反復して讀んだ。隨分長いが大變面白い。手跡は私より拙いが文の自在なのは實に羨しい。「解洗衣乾す暇もなき梅雨の侘びしさも、私はお蔭樣にて天晴命の洗濯いたし候」、など〻洒落れた枕を置いて、過日の演藝會の狀況を、眞に觀る如く聽く如く記してある。專門語めいた字句が交つて、一寸解らない處もある。彼人は遊藝には熱心だから嘸悦んだらう、宜い人に與つて廢る筈の切符が活動した。

さて此返事だが何と書たものだらう。此方からは別に記て遣る事もないんだから、端書でも充分なのだが



先方が恁うして細々と封書で寄越したのに、端書では何だか冷淡な樣に當る。

何しろ墨を摩らうと思ふとチョッ、水入が空だ、こち〳〵叩き附けて見ても一滴も出ない、取りに赴くのも面倒だし、と不精を爲し窓から雨滴を受けた。受けたはいゝがポン〳〵と外部へ撥ね返つて、中には些とも溜らない、絶體絶命、緣側へ起つていつて水を持つて來る。

うか〳〵墨を摩つて了つて、どろ〳〵濃くなつたのに猶返事の文句が浮ばない。

いゝ加減に筆を染めて、初め端書に記出して見たが案外長くなりさうだから三行ばかりで止して、今度は卷紙に書く、自分は文が難澁なんだから、せめて字でも綺麗に記かうと思ふと、餘計手が固くなつて筆が廻らない。又三四行で切つて記直す、やつぱり不可、又切る、又書く、圓めた紙屑が三つ四つ、机の脚の邊に轉がる。

何しろ暗い事夥しい、今日は中止だ。

筆の先を均らして、硯に蓋をして窓の障子を閉める

あゝ〳〵雨の音も聴き飽きた。お肚の底から深い欠伸が綴けざまに出ると、冷い泪が瞼に溢れて、眠い樣な何か爲たい樣な、焦つたい——といふ程激烈ではなくて、極幽な煩悶が生る。ふと、「琴でも彈いて見やう」と思ふ。餘程奮發したもんだ、おかなさんの手紙で多少挑發された氣味かも知れない。

早速抱き下して袋を除ると、あれは何といふのだらう、手元の櫛形の角がぼろりと剝れる、濕氣を崇つたのだ、是だから梅雨は嫌さ、と尠からず機嫌に觸る。

柱を嵌めると糸が軋んで調子が合はない、爪もきしきし不厭な音がする、短い手琴を二曲彈いて、三曲目に「櫻狩」を浚ふと全然忘れてゐて手も出ない、是で機嫌はめちやくちやに損はれて了ふ。ぴしん〳〵柱を脱して袋を被せて、除れた角は机の上へ放り出した。それから如何したつけ？、うんそれからだ、恁して飛出して來たのは。が、電車に乘つたのはどういふ氣だつたらう。冗談ぢやない、全く自分の行先を識らないのだ

何でも榛原か金花堂に用がある樣にも思はれるが、それは四五日前に考へた事で、今では其買物の何だつたかを覺えてゐない。

あゝ丁度宜い、おかなさんの宿所へ赴かうか、いや不可、あの人は四谷だ。何處か下町で訪く處はないかしら。

とつおいつ心臓が躍る非常な罪科でも犯した樣に悔恨が込上て、顔が赧と熱くなる。それが小時經つて醒めたかと思ふと急に筋肉の彈力が減じてぐつたりと帶の上部に胸が乘る、午飯が少量かつた爲、今に至つてお腹が空いて來たのだ。何だか氣が遠くなつた樣に、前側の書生の全身がぼうッと白く見えて、云ひしらず快い感想になる。行先の問題も折々顔を出して解決を促すけれども、其爲に此快感を醒ますのが惜しくて、只無意味に揺られてゐる。といつの間にか停留つた。「日比谷公園内幸町、何とか〳〵方面の乘換」、と車掌が體を斜に中を覗いて機械的に呼ぶ、其聲を背後に聞きながら、乘客は足駄をコトつかせて下りて行く、殘つたのは工夫とお內儀さんばかり、それが如何にも退屈さうで、何故か氣が利かなく見える、私は此處で下りる必要もないんだが、前の二人の容子を見ると居殘るのが嫌になつて、コト〳〵連の最後に續いて下りて了つた。

雨は幾分か小降りになつたが、其代りに風が加はつ

裾模樣。葡萄



濃お納戸、寫生風模樣（白木屋立案）

た。

## ◎用事を負へる樣々の人

交番の前で乘換場を傍觀してゐると却々面白い。一人の男は、呉服屋か小間者屋らしい、廿五六の生つ白い番頭風で、細い縞の單物に茶獻上の帶を横つちよに結び、油紙で覆つた箱形の包を背負つて、無印の番傘を翳しかけた風が、可笑い程氣取つてゐる、餘程神經質だと見えて寸時も靜としてゐない、待遠なのは無理もないが、絶えず内(新?)幸橋の方を見込で、線路の上を往つたり來たり、一寸立留つて「廻れ右」を爲たり、唾を吐たり、大分焦れてゐる。先刻前側に乘つてゐた書生は、超然と背向に公園の青葉を睨んで、騒がぬ態度を示してゐる、けれども駄目だ。其口笛と足拍子とが密に「待遠」を告げてゐる事は、御當人樣お氣が附かない。

其うち南からボギー式のが一臺、雨を押し分けて走つて來ると、氣取屋もすまし屋も、一番槍の功名といふ形で飛び乘る、停るのを待つてゐた連中も、是に勵まされて殘らず馳け附ける。車掌が上から海老腰になつて、「少々お待を願ひます」、と人間をどん〳〵吐かせて又詰込む。中に一人の老婆さんが片脚踏み掛けながら、「こりや淺草へ行きますかい?」、と云つたら、「淺草はお後です」、と突き落とされたのは可愛想だつた。

直ぐ後から又一臺來る、是はがら空で、下りる者も乘る者も至つて少く、前の方が出ると直チンと動き出すと其後は暫く杜切れて又人が溜る、今度は大變女が多い。

## ◎むかしの先生

私と一間ばかり離れて立つてゐるのは、色の淺黒い目の細い、でく〳〵肥つた四十許りの女で、男柄の樣な羅紗のコートを着て、蛇の目をかついで、ぐつと反身になつてゐる。ははあ舊い人に逢つた、小學校の裁縫の先生だ。私は裁縫は不得手の方だつたから、あの先生には隨分小酷く叱られたもんだ。

先方でも一寸振り向いて、「何處かで見た人だ」ぐらゐは思つてゐるらしい。識らぬ顔を爲てゐればそれで

も濟むんだが、何だか氣がさすから名乘つて見た。
「あら然でしたか、ほんとに久濶でしたねえ、只今何處に？」
「赤坂に居ます。」
「ふうん、それぢや御近所だ、私やね、麻布です、○○學校。ちつとお談にいらつしやい土曜日曜は面會が出來ます。」
「有難う、やつぱり裁縫で？」
「うん、いろ〳〵頼まれるもんで此節は萬屋です、今日は何處へ？」
「さあ何處へ行かうかと想つて考へて居りますの。」




◎思出多き裁縫室
種々懷ひ出される。

「はゝゝお氣樂で宜ござんすねえ、お子さんは？」
「子供なんざございませんわ、獨身ですもの。」
「串戲ばつかり。」
「ふゝゝ、」と私は笑つて了つて、別段境遇の説明をする必要もないから
「先生は何處へ」
「うん一寸銀座迄」
困りますねえお天氣が、」其内「築地淺草」が來ると、
「ぢや失禮」、とひい、、よいと乘つて去つて了ふ。相變らず尊大だ。昔の事が

うつかり動くとぱつと塵埃の浮立つ裁縫室、それは二階の突當りで、諸目か何か縁のない疊が廿疊ばかり入ると左側が、竹格子の嵌つた肘掛窓で、眼下に卵塔場が見える。正面が二間か三間の押入になつてゐて、生徒は一同そこから針箱や包を出して各自の板の上へ置く、間もなく彼の先生――比留間先生といつた。其頃の事だから廂髪などは無かつたが、それでも前髪を脹ました大きな夜會結で、袖の長い着物に白つぽい唐縮緬と紫繻子との晝夜帶を、背中一ぱいに背負つてゐた――が入つて來て、禮をする。それから蓋を除つたり包を解いたり、各自にお店を廣げ出す。裁物の時には、半紙の横斷を卷紙の様に繋いで、板の上には尺度と鉛筆と鋏刀とだけを置く、比留間先生は左の手で右の袂を抱へて、白堊を振り廻しながら、「まづ一反を二丈八尺と見て――」と尻上りに云つて、あの細い白い眼で、隅から隅迄ずらりと生徒を見渡す。少し俯向てでもゐる者があると、「何々さん！」、此方を見ていらつしやい、」と其紅くなつた人の顏から容易に眸を放さない。

其教場へ入る時の情ない氣持。課業の終りを告げる盤木の第一音が、救ひの聲程嬉しく響いた事。或時あんまり惡戯をしてゐたものだから、級擔當の先生に引渡されてどえらい說諭を蒙つた事。など止度もなく追懷に耽つてゐると、俄にごーッと風が吹いて來て、傘ぐるみ奪つて去かれさうになる。雨も驚いてこぐらかる。雲も飛ぶ。事に依つたら是で吹霽らすかも識れない。然し佗しい。冷い。

爲方がないから歸らう。お腹が空いた。

# 食堂の感化力

家庭といふ事は家全體に關係したる問題で無形上の事のみならず有形上の事をも含んで居る、然るに我國普通の家屋を見るに、神聖且幸福なる家庭を造るに適せる家は極めて尠ない、家を造る目的は何れに在りやと云へば、多くは他人に見せる爲で外觀を旨として居る。

されば最も壯嚴に造るのは門て、神社佛閣のそれにも劣らぬものが幾干もある、門の次が玄關で、中流以上の家には往昔の侯伯の如く馬車寄抔の設けまである所がある、又座敷中で一番立派に作るのが應接室で、床の柱一本でも五百圓千圓も値ひする物あり、床の間には何百圓何千圓といふ探幽、應擧の幅が掛つて居る、故に家屋の構造を全體より見ると、門より玄關、玄關より座敷といふ順序で、來客の入口より坐る所までは大に注意してあるが、眼を轉じて家族が集りて食事をする臺所は如何にと見れば、多くは薄暗い陰氣な所ばかりである。

又寢室の如きは、主人は立派な所へお寢みになるか知らんが、家族の寢所には日光も風も通はぬ暗い室が多い寢室や臺所は一家内最下等の所にて間に合せ、好い所は座敷、玄關門抔で塞ぐのが我國の慣例である。

併し家屋建設の目的が家族の快樂、健康、幸福な保護し增進する爲である以上は、余は何處よりも先づ完備したる食堂を設けたいと思ふ、食堂は家族が相集りて團欒の樂を共にすると同時に人類生活の第一要素たる食事をする所なれば、一家屋内に於て一番善美を盡しても宜い理である。

食堂に亞いで重要なる所は家族が靜かに休んで精神を慰しめ肢體を養ふ所の寢室である、時々來客に接する應接室の如きは其後に置いても支障あるまいと思ふ。家屋建築の際十分資金を投することを得るならば何處も彼處も壯麗にするに若くはなけれど、ソヽ容易に行はれ難き事なれば、家屋は專ら家族の幸福、衞生、快樂を主眼として建築する樣に望むのである。

斯くて始めて家庭の幸福を進め改善を圖る事も出來やうと信する、余は必ずしも莫大なる資金を投じて家を西洋館にせよ煉瓦造にせよとは云はぬ、日本式でも西洋式でも木造でも石造でも夫れには構はないが、建設の方針は是非共前陳の原則に據らしめたいものと思ふ。

尙ほ我國の家庭には改善を加ふべき點多きが中にも、主人が家族と別れて、獨り座敷で給仕をさせ、一杯傾けつゝ悠々飮食するのに、主婦の方は臺所でこそり食ふて



其際には婢僕も居つて食ふと云ふ様な陋習は廢したいものである。何となれば食事の時は親が子女に感化を與ふべき好機會で、家族一緒に悦ばしく食卓を圍みつゝ父母兄弟が皆揃ふて見合つた時に通する親愛の電氣は、之を解剖して見たならば眞に靈妙偉大なるもので、之が食卓の上に回轉する力は世界中の電線を傳はつて亂る電流よりも強い様に思はれる。

然るに世の父母たる者が、天より授かれる感化力を利用せずに、貴重なる自己の子女を無教育なる僕婢の手に托して顧みぬが如きは不心得も亦甚だしいではないか。故に親子の交際を一層親密にして家族が實際に家族的の快樂、幸福を享め得るやう余は特に世人の反省を促がさざるを得ないのである。（金森通倫氏談片）

## 嫁と姑の反目する所以

婚姻の方面から婦人の病氣を取調べて見ると、嫁入當座に一番多いやうである。是れは全く家風の異つた新家庭に入るのであるから、嫁の難儀氣苦勞は云ふ迄もないが嫁を迎へた方でも從來の親子兄弟水入らずの時と違ひ日常の談話からして嫁の前では多少遠慮勝ちになると云ふ風に、以前の平衡が其れとなく綻び始めて、其の間に自然不調和が築かれ易くなる。

殊に舅姑や小姑の有る家庭になると、嫁の氣苦勞は並み一ト通りではない、舅姑は讀んで字の如く舊い男、古い女であつて、大抵は古風因循勝ちと見做してよろしい假りに舅姑は維新前の者あつて、嫁は維新の教育を受けたとして見れば、雙方の思想の相違の一層甚いのが當然である。

其處へ嫁が直ちに一家の主婦となつて、學校時代から心に描いて置いた理想の家庭を造らうとすれば、聞くにつけ、觀るにつけ、凡てが豫想外のこと計り多いので、日夜身に應へ、心を刺す苦痛は尚ほ一層激くなり、之が不眠症を起したり、神經衰弱に罹つたり、其外種々雜多な病氣の原因となるのである。舅の方は諸事鷹揚であるから、左程心配の種にもならないが姑の方は普通僻み根性のものが多く、從前一人で專有して居た息子の愛情を嫁の爲めに過半取られたかの如く思つたり、或は以前は一人で支配して居た家政の權力をば、嫁の手に奪はれたかの如く考たりして、結局嫁の爲る事爲すと一から十迄何でも氣に入ら無のである、若しも姑の年配が四十五歳から五十歳にかけて居ようもんなら其こそ大變である。なぜなれば此の時期は丁度婦人の月經閉止期であつて



精神が過敏になつて物事に激し易く、氣分が鬱々して來て萬事にふさぎ勝になり、其れ故自然頭痛がしたり物事を氣にかけたりする時期であるから堪らない、婦人は毎月一度の月經の時にさへ氣六ケ敷くなつたり病氣を起したりするのであるのに、是れ限で以て一生涯の月經が全く止んで仕舞ふと云ふのだから、勿論體質の狀態も一變し從つて精神感情の刺戟も一段と烈しくなつて來るのである、すると姑の嫁いびりが餘りに激しいので、息子が見るに見兼れて、マア好い加減に堪忍してお遣りなさいなどゝ口を入れると、直ぐと「お前は左樣甘いから付け上るんです」と出て來て、嫁に對する姑の惡感の念益々增長し、息子は此等の家庭の不愉快に堪え兼れて放蕩でも始めると、今度はお前の不行屆から悴は斯樣不身持になつたのである一人の他人が入つた爲め、老親は心配するかけ替のない悴は廢物となるなどゝ嫌み、當てこすりの有らん限りを毒づいて、自分の落度をも嫁の過失に算入するから堪らない、若夫婦が手を携へて家出を企て、果は夫婦心中に一命を果たすことになるのはこの機會に多いので、是れ畢竟姑の僻根情の爲に、若夫婦の精神を攪り亂された結果に外ならぬのである。（大澤醫學博士談片）

# 元祿と桃山、并に蘆手模樣

我の三十七八年戰役の頃からポツ〳〵流行り出した元祿模樣は、役後益々世人の注意を惹いて、一も元祿二も元祿と云ふ風に、何が何でも元祿でなくては結局が着かぬやうになつた。而して之等の流行が吳服物以外に及ぼした影響も又頗る大きなものである、が然し元祿は粹に過ぎた、故に上下各階級を通じて之を用ゆると云ふことが一寸出來難い、其處で元祿も稍や鼻に附いた頃、之に代つて表はれて來たのは桃山風である。

桃山とは名にし負ふ太閤が全盛時代で、戰亂に倦んだ萬生は始めて茲に愁眉を開き、延いてソロ〳〵奢りに取りかゝつて來た頃。當時太閤が莫大の財を投じて作らせた百雙屏風と云ふがある、今は散り〳〵になつて一處に見る事は出來ないが、却々贅澤を盡したもので、余が桃山模樣を應用するに方つては、實に之に依つて得た處が多い、就いて見るのに宇治の水車だとか、蘆に波だとか又は梅、桐を思ひ切つて多きく描かせて之に疋田や鹿の子を配合つた工合、誠に溜飲も下るやうで轉た太閤の人物が、總ての點に於て偉大であつたと云ふことを想像するに足りる、而して彼の元祿模樣が唯一の圓月脊色と頼む



疋田や鹿の子も、早く旣に此時から應用されて居たのである。之を以て之を見れば元祿模樣の根源も、實は桃山の其れに在ると云はればなるまい。

又た京都の瑞泉寺へ行くと、豊臣秀頼が刄折れ大阪を落ちて高野で切腹した時に、肯六人の妾が頭を刎れられ其死骸を葬つた畜妾塚と云ふのがある、而して這個三十六人の辭世の懷紙を各自着用の衣服の布で表裝したものが遺つて居る、依つて一日同所に杖を枉げ今云ふ表裝の布地の模樣如何を見た、すると其れは彼の百雙屛風に收めたものと少しも變りはなかつたのである、玆を以て察すると彼の百雙屛風なるものは恐らく桃山風の總てを代表して餘りあるのではあるまいか。

桃山と元祿との風には粹なると否との相違がある、殊に模樣に文字を入れたのは元祿時代の特色で、桃山には其れがない、例へば梅を描いた上へ鶯宿の二文字をあしらひ、紀貫之の娘の古事を利かすなどは、實に元祿時代の考案に基ゐたものだ、又三越が嘗て東京博覽會へ出品した、五個の菊花を各々異なつた染めで表はし、其れを四季の文字で割つた遣り方なども、無論元祿式に屬して居る。

當時笠翁と云ふ彫刻家があつた、極めて其技に堪能なるのみか、硯箱などの漆器物へ貝や金を象嵌したり、又は陶器を入れたりする、漆器を大層作つた人で天性器用な質らしい、此人の書いた模樣が今三井家にあるが、其れには文字の入つたもの、蘆手になつて居るもの、和歌を書き込んだものなども大分ある。

近頃白木屋で蘆手模樣を染め始めた、して其れには六歌仙の和歌が書き込んであるさうだ、が然し本來は蘆手模樣なるものは、單に和歌を書き込んだばかりではなく先づ歌の意味に想を取り、名詞を繪で表はし、天爾平波だけを字にして書き加へたものなのである。

友禪も最初は染め分けがあつたのではなく、墨繪で丸紋づくしなどを書いて居た、漸々工夫して行く中に、とう〳〵糊を發明し糊が因で樣々の色を染め出すやうになつた。即ち友禪の發明と云ふは取りも直さず糊の發明である、で友禪和尚の繪を見ると非常に糊を使つたとが分る、例へは菊の葉の葉筋が白く拔けて居るなども顯著な證左だらう、而して其れからと云ふものは何の時代でも盛んに之に倣つた、明治になつても友禪は決して衰へない、が然し明治の友禪は在來のものとはずつと趣を異にし、且つ明に四季物と模樣物とを區別するに至つた。(三越吳服店意匠部松山氏談片)



# 忠實心のなき女學生

近頃修養々々といふ言葉が盛んに學生の間に用ゐられる。修養とは智識を實行に化することをいふので、此點から見れば家庭は正に其好適地である所が世には此家庭を只團欒快樂の場所とのみ心得て居る者が多い

實際今日の女學生等が家庭で何んな振舞をして居るかといふに、學校から歸ると靴も袴も脱放し包み等も取散したまゝ先づ一二時間も休息した上新聞雜誌でも見てから晩餐に取かゝる、食事の手傳や子供の世話など命ぜられても却々素直に唯とはいはぬ、それから復習などに夜を費す。

これらはまだ眞面目な方だが甚いのになると袴も脱がなければ足袋も取らないまゝ脚を伸ばす、横に臥る、對手でもあると漢語か外國語交りで話が始まる、時には演說までやる、昔氣質の老人等が見るに見かねて「せめて身仕舞でもした後にせよ」とでもいふと餘計なお世話だと刎返して了ふ。

かくて夕飯が濟む、ランプを點して机に向ふ、殊勝に勉强でもするかといふと彼處を一頁此處を半頁、それもホンの二三十分間で鼾聲に變る、燻つたランプが物淋しげに夜伽をして居る。

朝は遲くまで寢る、やつと學校の時間に間に合ふか合はぬ位。

更に當世風の交際家と持囃さるゝやうなのになると、今日は何會、明日は何某の訪問、昨日は某孃の來訪といふ譯で、肝腎の修學は無論身邊のこと衣食のこと悉く無頓着。或時一老婦が此種の女學生に向つて「貴女方の召します御袴の襞は縱橫で何程御座いますか」と尋れたことがあつたが、遂に其意を解せなんだといふ話もある。

それでも顏の御化粧や髮飾は誠にまめにやる、紅粉の見立てなども却々巧みなものだが、足袋や襦袢の汚れなどは何日もく\も推し遣つて置て、遂にに面倒臭いからといふので何の角のと文句を拵へて成だけ新しいのを求めて用ふる、洗濯だの張物だの、食物の調理だの献立とかいふことになると、理窟や批評は却々巧いが、自分でやつて見ると何一つ滿足に行かぬ。

女學生が家庭における生活の狀態は凡そこんなものである、これで以て現今の社會の要求を滿たすことが出來るものであらうか、蓋しこれは當今の學風が動もすれば上流社會の風に傾いて居るためでもあらうが保護者の方に於ても責任のあることで最も家庭的訓練に注意する必要がある。(大阪扶桑女學校學監岸川氏談片)





# 避暑地の學問

小天地

銀濤雪浪、巖を嚙んで猛り狂ふ邊、長汀曲浦水靜かに、浪も立たぬ礒濱に、都の炎塵を避けて悠遊し、朝夕の別なく自然の色に接し、自然の聲を耳にし、南極の氷海から吹き送る風に袂を飜さば、夏知らで愉快に樂しく暮すことも出來ます。

さて秋風の立ち初むる頃にはさしも、白かつた肌の色の、赤銅色をさへ加へて、强健なる體を家への土産とするは、此上もなき幸福ながら、更にこゝに朝夕伴侶とする、海のいろ〳〵に就て、學問上の研究をなし、これをも家苞として持ち歸り給はゞ、一入の愉快と利益とで有らうと思ひます。避暑地におはする方々のため、いでや少しく其手引とも成りませう。

## ◎いそぎんちやく

海岸の波うち寄する岩の上に、赤だの紫だの桃色だの、種々の見事なる花の咲いてるかの樣に見ゆる一種の動物は、これ礒巾着であります。

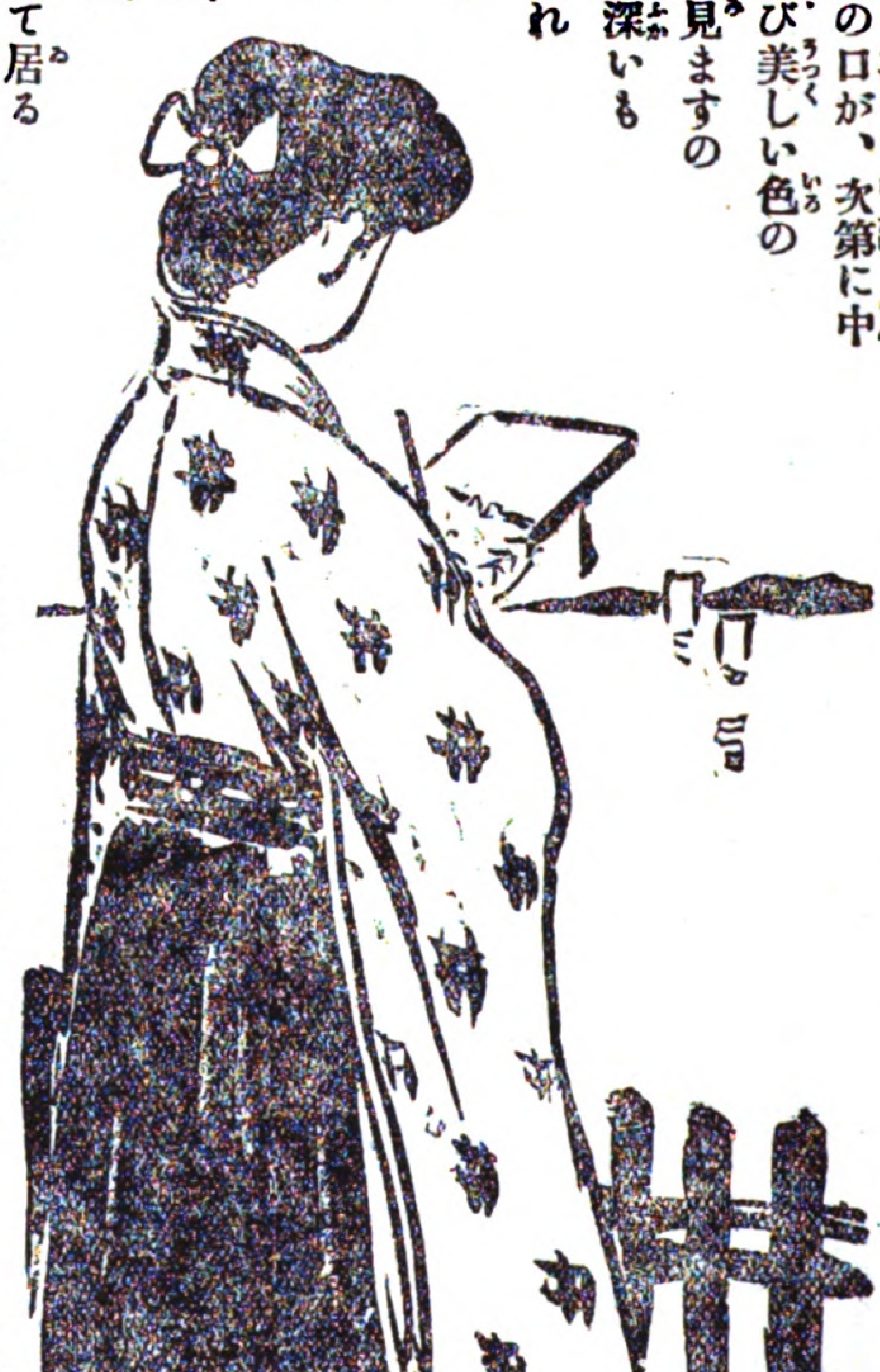
礒巾着は岩の上に附着いたまゝ、殆ど其位置を變へる樣な事は御座いませんから、誰の目にも動物だとは見えないでせう。さても礒巾着が、かく花の咲いた如くに見ゆるのは、彼の口が開いて居る時で、花瓣とも思はるゝ多くの片々は、極めて鋭敏な觸手で、若しも人が僅かに手を觸れようものなら、彼はさも驚いたものゝ樣に、縮んで仕舞ひます。

故に水の流れに從つて、礒巾着の口に合ふ程な、小さき動物が流れて來て、例の觸手に觸れたが最後、急いで手を縮めて口を閉ぢ、獲物を卷き込むのですが、

此の塲合が頗る巾着の口の閉め方に似て居ります、つまり磯巾着とは、こゝらから起つた名でせう。

口を閉ぢた時の磯巾着の形は、丁度葛饅頭に似て居ります、其饅頭の口が、次第に中央から破て、再び美しい色の觸手を現すのを見ますのは、實に趣味の深いものです。而もこれ常に海岸の波うち寄する邊で、容易に實見する事が出來ます。

元來磯巾着の體内には、一種の毒液が含まれて居る刺が御座いますが、かの獲物となつた小さな動物が、體内に送られますと、彼は早速毒刺で殺して置いて、それから悠々と賞味致します。



◎やどかり

海岸の砂原に、小石や貝殼に交つて、不思議な動物が居ます。體は蟹のやうで、夫れが螺の殼を負つて、ゴロ〳〵匍ひ廻つて居るので、如何にも奇妙です。此の動物は、一名をキシヤゴのお化と申し、本當の名は寄居蟲と云ふのです。

寄生蟲と云へば他人の宿を借りて住むとの意味で御座いませうが、彼は他人の宿を借りるのではなくて、無理に奪ひ取るのです。即ち寄居蟲は、生れながらにして、此の様な殼

を有つて居る譯では御座いません、で自分の體に丁度都合のよい螺を見付ければ、先づ其主人公を殺して、肉はみんな食べて仕舞ひ、後で平氣で其殼を占領して、さも自分の物であるかの樣に思はせます。

所がいつ迄も同じ大さの殼に住んでばかり居る譯には參りませんから、やがて稍大きな螺を見付け、前と同じ手段を以て奪ひ取るのです。之れで寄居蟲とは、餘りに寛大な名の付け方で、殺された螺こそ浮ばれないで御座いませう。

前にお話した磯巾着は、寄居蟲とは大の仲よしで、互に助け合つて生活して居ります。元來寄居蟲は、亂暴な振舞をする癖に、眞に氣の弱い者ですから、敵に攻撃されると、縮み上つて仕舞ひます。

が其所へ來ると、磯巾着は落付いたもので、敵が來ても逃げる事は出來ませんが、例の毒液を吐いて刺しますから、大抵の動物は之れに手を燒いて、磯巾着には敬遠主義を執る樣です。

故に寄居蟲の殼の上に、磯巾着が附着いて居ますと、寄居蟲を攻撃しようとする敵動物も、磯巾着に痛い目に逢ふのが怖さに、自分から逃げて仕舞ひますので、寄居蟲は少しも害を受けないのです。

夫れでは磯巾着は、たゞ寄居蟲の保護をしてやるばかりかと云ふに、決してさうでは有りません。一體寄居蟲は、食物を食ふことが下手ですから、半分位は細かく食ひ切つたまゝ、四邊に散らして仕舞ひますので、夫れが水の流れに連れて自然磯巾着の口へ入る仕掛けと成つて居ます。此の樣にして二個の動物は、互に利益の交換をして、世を面白く暮しつゝ有るのです。

### ◎くらげ

波の靜かな内海へ行つて見ますと、松茸の傘を開いた樣な動物の、其緣から多くの糸を垂れて居る、奇妙な形の物が、澤山浮いて居る事が有りますが、これは海月、若くは水母などゝ書く、くらげで御座います。

海月とは海の月、其形が圓くて月に似てるからで有りませう。亦水母とは水から取り出せば間もなく解け

て仕舞ふので、水の母だと云ふのかも知れません、何れにしても此の動物は、種々彩色の異つたもの、形の違ものが澤山御座いまして、其内でも肥前の有明海、備前の岡山灣などで捕れます備前水母と云ふ一種は食料になり、酢の物として至つて淡泊な物で有ります。

水母の體の周緣から垂れて居る糸の如きものは、觸糸と名付けまして、やはり磯巾着同樣、毒液を以て敵を刺します、よく海水浴で水母に體を刺される人が有るのは、誰も知つて居ます。



或る一種の魚は、水母の觸糸の間を、此の上もない隱れ場所として居るさうで、若しも自分が大きな獲物を得れば、必ず其所へ行つて食べるのですが、其時餌物の過半部は、大抵水母の占領に歸しても、魚は少しも不平とせず、却つて喜んで居るかの樣です。

水母の毒糸の間に居れば、敵に攻擊される心配はありません、また水母も其魚が來れば、乾度いくらかの土產物を持つて來て與れますから、之に對しては、少しも危害を試みないのです、此の手段は全く寄居蟲と磯巾着の共生生活と同じで御座います。

見掛けた所はフワ〳〵して居りましても、何しろ屈竟な利器を持つてるので、時には分不相應な大きな魚

を捕へて食ふこともありますが、其代り鯨にでも襲はれようものなら、例の毒を吐く隙もなく、數百の大群も、只一時に敵の腹中に葬れて仕舞ふと云ふ事です。

## ◎えび

海濱の避暑地で、常に食膳を飾るものは蝦であります、蝦は又の字を海老とも書き、海中で最も長壽の動物であると申して、正月の飾物にも用ゐられます。

蝦は潮の流れのよろしき近海の岩の間に棲み、晝は大抵潜み、夜になつて出て參り、介類や蟹などを殊に好んで食べるのです。產卵期は、五月から七月頃迄で、卵が母の腹を出る際には、胸にある肢の動きで、後肢に附着きますから、其所へ雄が來て受精されるのです。

卵は奇麗な赤味を帶び、普通三週間位で孵りますが、仔は親とは餘程異つた形をして居り、甚だ活潑に水の中を泳ぎ廻ります。彼は最初一年の內に、三回若くは四回程皮を脫ぎ、そして段々と成長致します。

脫皮の時節になりますと、擧動が甚だ不活潑で、岩の間や海藻の陰などにかくれ、暫く動かないで、靜かにして居ますと、はじめ頭や胸の皮が縱に裂け、次に腹の甲も裂けて全く舊皮を脫ぎ棄てますが、新しい殼は、甚だ柔かくて、到底思ふ樣に運動も出來ず、從つて此の場合敵に虛を衝かれる事も少くありません。



# 色彩と聯想

あきさめ

土用干しの手文庫から、舊反古のこんなのが出た。何の事はないがこれを見て、追憶の足が一寸十八の昔の頭腦に小憩みをする。

◎淡紅

十歳にみたぬ乙女子の鬟頰可愛う姉に結はせて、青疊の上、花車引きてわたりたらん樣平和の春ぞかくのごとき。

◎赤

黒に接して益ゝ快、白に並んでいよ〳〵赫奕、これをもて誰れか快と興奮とを叫ばざらむ、七色中最もこれに魅せらる。如何となれば仁俠あふるゝごとき我國人のしかも熱情見ゆるものあればなり。法師の袈裟いかばかり崇なる。落椿何ぞ赤き。人ならば理想に憧憬るゝ青春の頃か。

◎濃紅

勇士が戰死後の軍服ににじみたる血しほのなごりとあやしまれて不快の感と共に鬱を感ず。

◎橙

淡紅を曙の色とすればこれは夕陽の色なる可し、はなやかなる夕映えの、海灣に落ちて碎けて金波銀鱗たるものあるをおもふ。こもまた人ならば二十五歲、業なりて漸やく社界に技倆ふるはんとする才ある人ぞ。

◎黄

古の人「黄菊白菊その他の名はなくもがな」と稱へしと。黄。さばかりの美くしの色とも覺えざりし。されど田園の趣味あふるゝが如きものあるを。疲れし腦をもたらして、近郊の散策を試ろむるとせんか、雲雀の聲は黄なる麥生のうちに落ちて、七十の老翁、ため

に興奮の色をあらはす。音ならば、名月來つて相照すの夜、明笛冴えしそれをしのぶ。

◎綠

水邊の楊柳綠烟の糸けぶるあたり、紅顏の唐童子、蹴鞠に餘念なし永久の春はこゝにとばかりいひたらむ樣、いかに快を覺ゆる色ぞあるひは雪間のわか菜若やかに生ひ出でし頃を櫻がさねの襦袢したる年ゆかぬ上﨟の、かなたにひとむれ、こなたにひとむれ、手にせるかたま充てむとする樣をおもふ。

音ならば篳篥のこゑかすかなる。

◎靑

詩人が泣く可き色はこれか、仰げども天この色、俯して見るも地この色、これぞ海に空に通ひて渾沌たらしむる色ならずや。

薄きはいかに粋を覺ゆるよ、花ならば、知らずにすねし水仙か、わざとすねたる杜若か。

湯上りの水島田、赤き蹴出しを風になぶらせて蛇の目傘たよ〳〵とぬか雨の中たどる今春あたり。扨はまた田舍源氏の東雲が、古寺へと志ざして立ち出る夕がほ垣ともおもはゆ。

音ならば二上りの爪彈きか。

◎紫

江戸川の水ゆるう流るゝあたり觀世宗家、の舞臺開かれて人は息を酣なはなるとき、紫總の小鼓をホーと打つたる指の冴えをしのぶ。蘭燈の影うすきはなれ四疊に蘭麝の香高う薰らせて被布の佳人が源氏花散里に餘念なげなるさま。

つくし箏の音をおもふ。

◎牡丹色

かの貫之が古今の序によまれたりけん、花のもとに斧かづきたらむ山がつの烟ふかする樣をしのぶ。あるひはペンキぬりて陋屋に支那料理食ひたらむ樣。

◎白

泥のうちよりぬけ出でし白蓮！法師が目を覺まして曉の露一點に恨を逃べしむ如何に淸淨なる。此の色ばかり潔よきはなし、さはれこの色ともすればよその

色の美くしさにそめらるゝをつるにさむ、こゝろ弱き女にも似たるかな。もとこれ處女の色なり。

◎黒

うき世のちりをこと〴〵く包んで、もだえの人をなげかしむ。罪ふかき色なるかな。

さゆらぎの榊がくれ黒羽二重の袖かむ人に位牌の主の何ならむと胸抉らるゝ樣なる色なり音ならば木琴にもや。

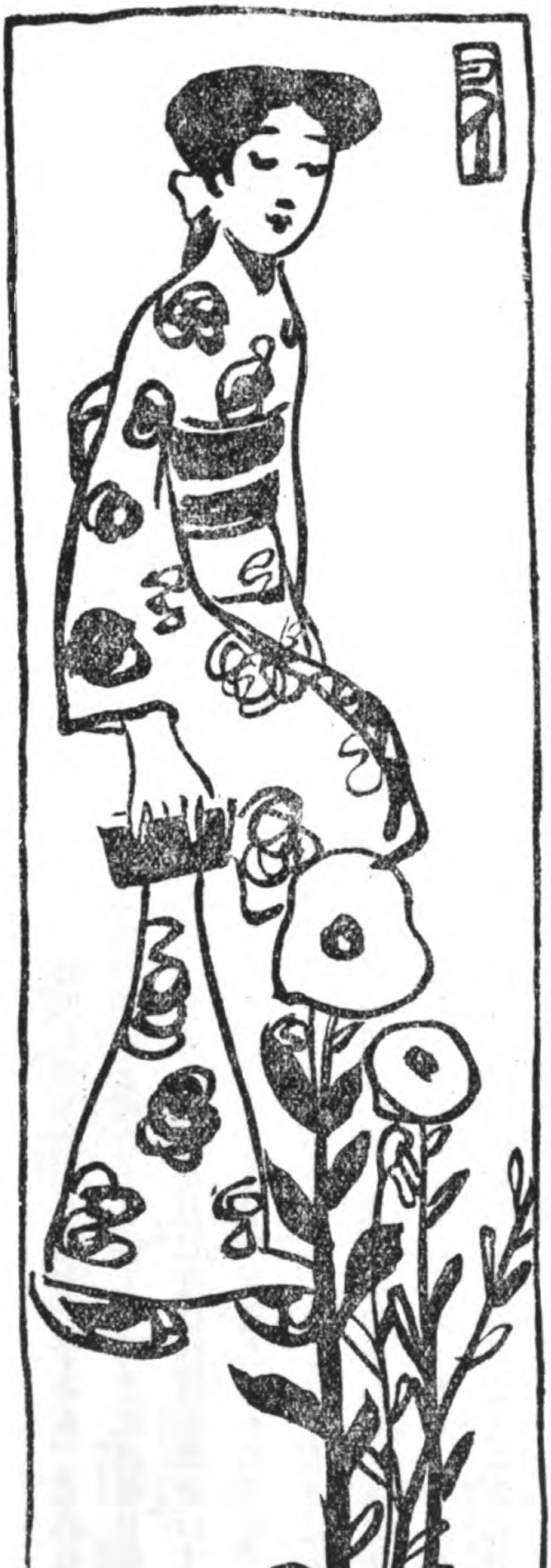
◎灰白

白ほどの清さはなけれど禪味ある色なり。しかも白の如くよその色に染ますある程の色皆に調和を保つ。世のあらましの女はかくこそあらほしと。年わかき比丘尼の水仙さしたる阿伽さげて卯の花がきたどりゆく樣をしのぶ。

◎

音は寂びたるをさめの尺八にわが思通ふ。

以上は當時の色彩に對する主眼聯想だ。異なつた年齢の人が各それに對するものを述べたらよい研究の材料になるであらう。





# 銷夏四疊半

俊子

一年三百六十五日、中にわけてすごし難いのは八月である。そしてまた最も不公平なる世の現象をかもす月である。人は萬物の靈長といふ、靈長である丈けに神經質である、五管に觸るゝ處のものが一寸常規以外だと直ぐにピリヽと感應する。寒けりやすぐにかじけ込み、あつけりや一番にだらけ出す。これ靈長以上に統御者がないからではあるまいか、神といひ佛といひ、これ等は信ずるもの〻神たり佛たりである、虚無の者には何等ひゞく所がないのである、此の場合これ等の人は如何にして此の過し難き夏と闘かうか、此の方法が所謂不公平をかもす所以であるとおもふ。ある人は山に、ある人は海に、あらかじめ備へたる餘財の盡くを掃いて之に費やす。然るにいくらもがいても、つとめても餘財を作る暇のないものがある、これにはいくら休養の效能を述立てられても、また必要を切實に感じても、勢力と境遇が伴はなければ到底遂行するに難いのである。いやでも應でも得んために務め、爲さなければならない。それが神や佛とかつぎまはる人間なら幾分自分自身が好い樣に理由をつけて諦らめもするけれど、さうでないものはとかく怨めし相なが、眼にも出る色にも現はれるのである。ことに女に於て一層はげしい。の代りに辛抱もよくする。

○

其の一人にもれない自分たちも到底贅澤な眞似は出來ない。よそに出かける汽車賃を雜誌代にでもまはさうといふ連中だからとても避暑なぞといふて居られぬしかし同じく今迄同じ土地に居たものだ先方がそんな勝手な事して休むならこつちも何かして一日でも樂な眞似を仕樣と樣々な方法をあみ出す。

○

八月の空氣は東京が一番清い、何故と問へば、あり

あまるお金を使ひ度くてたまらぬ人間は、時こそ來たれで地方に出かけるから、殘つたものは「稼ぐに追ひ付く」主義の連中ばかりだからと答へる。東京の價値は春の日本橋と、八月の空氣にあると假定する。そこで家はと云ふ。家はと聞かれると少々腰折れに詠まれ相ないぶせさである、腸の融け相な景色のないことも勿論である。しかし九尺二間の坪は空いてゐる。生憎桐も藤もないから源氏には及びもつかぬが、梅がある、から梅壺とでも命名してどうにか癪の虫を押へる。茶代に張り込む分で牛乳を五勺增やすことが出來るつゝらを二ツ並べてその上に机をのせてテーブルになぞらへ、天然葡萄酒の空箱をチエアーにして富士ホテルに行つた氣でゐる、心持ち次第、白瓜も龕燈になる世の中だ。さうは云ふものゝ、人間をして恐怖に堪えざらしめ、傍へも寄せつけぬ暗夜の波打際と比較して九尺二間の坪は要するに痩我慢の自製盆石にすぎぬのだ、強て氣どれば「行水の捨て所なし蟲の聲」。これで滿足しなければならぬ。運命なら仕かたもない。誇りの聲も失意の聲も南風にわすれて出來る範圍内の興味を以て眞の樂天地とする。

○

世にすますといふことあり、これに二種あるとおもふ。傲慢の心理發表にあらずんば、自ら欺むかざるの形式である。前者は憎む可き最も醜なる面つきで、後者は愛すべき最も尊き態度であらう。この兩者おしなべて「おすまし」と稱せられてゐる。

○

學生は今や夢寐にも忘じ難き故山に、樂しい朝夕を過して居るのである。ノート新たなる休暇日記には如何なる文字を以て塡められてゆくであらうか、九月に秋の風が吹いて、招く尾花の武藏野に各〻枝手折りにと來られるとき、繰り返して果して意味ある六十日であつたらうかと試ろみられたなら、いかに趣味ある修養法であらう。日記は自我本心の聲である、これぞ我が修養法なりと麗々しく並べたるものに僞りなきは少なし、眞の修養法は眉宇の間にひそんでゐる。

終りにもひとつの銷夏法を云はう。しかしこれはあまりに迂遠だといはれるかも知れぬが。それは外でもない、故人の墓詣りである。

湯上りに浴衣一枚引かけて、目ざす墓地へと辿り着くとする。夏をかぎりの我が世とも知つてか知らずにか蜩がかなしげに血をはくやう。晝のぬくみは夜露に冷されて氷室に身を浸したと、おもはれるこゝちよさ、巨人の女の乳房を見る如き樹木のしげみが覆ひかぶさつて居るこの處に靜かに、心を置いて、現世の胸から幽冥の胸に、親しくかたる、としたならば、おのづと身うちは引しまる、四圍の自然いつしかに少さき人間に「生の恐怖」を起させる。しかしこれはちとやりかたが極端だと批難もあらうがとにかく夏を忘れることは保證する否むしろ大に觸れる所があるのである。





# 銷夏二十法

糸左近

## はしがき

私が今述べようといふ法は、上は金殿玉樓に在せらるゝ王侯大臣より、下は九尺二間の裏店に住む車夫馬丁に至るまで、老弱を問はず、男女を論ぜず、誰にでも容易に行はるゝ所の銷夏法である。若し夫れ中禪寺の湖畔に午睡の夢を貪り、箱根の旅館に贅を盡して、可惜永い夏の日を何の爲すことも無く、唯懦弱塲裡に暮す所の銷夏法に至つては、敢て予の知らざる所である。

## 第一法　汗を流せ

汗を流すやうにするが銷夏の秘訣である。斯う申すと、如何にも牽強附會のやうにあれど、元來汗は何の爲に出るものか、この生理が解れば何人も成程と手を拍たれるに違ひない。生理上で論ずると、汗に二通りあつて、甲を不可見汗と云ひ、乙を可見汗と云ふ。甲は四季晝夜に拘らず、何時も出て居れど、出るや否や蒸發して眼に見えぬ汗、乙は淋漓と玉の如く流れて、甚しきは衣物を搾る程になる汗を云ふ、所が我等の身體には、何時も、約攝氏三十七度の温熱（酸素と食物等との酸化より出來る熱）が必要なもので、これより多くても少くても病的である。然るに外界の空氣温が高まり、從つて體温が一定の温度を越えようとすれば、皮膚上の汗口が自然に開かれ、汗はドン／＼出るし、外界の空氣温が低くなり、之に伴れて一定の體温より下らうとすると、汗口は自ら緊り、汗を少くする。恰も鐵瓶の蓋を取つておけば湯氣が多く出で、その湯氣が熱を奪つて去るし

蓋をすれば湯氣が出難いから、爲めに冷めぬやうな道理だ。汗は斯の如く、體温を調節する上に、身體の老癈物をも溶解して流出す所の大切なる役目を蒙むつてゐるものである。

話替つて、正午から次第に太陽は赫々と照りはたき午後一時乃至二時は屋根の瓦も火炎を吐かんずる勢である。此時に當り嗚呼暑い〳〵などゝ唧たずに汗の定則を考へ、拭掃除なり、水汲なり乃至は鞦韆ピンポン何でもござれ、ドシ〳〵運動するのです。さうすると珠なす汗は瀧なす汗となつて、タク〳〵流れる。斯の如く一時間も働いてから、湯なり水なりで汗を拭ひ、衣服を着換へると、間もなく涼しさを感じ、夏の何物なるを知らぬやうになる。嘘と思召すなら、一つ行つて御覽遊ばせ。

## 第二法　日中の溫湯摩擦

我が國の風俗として夏になれば都も鄙も押しなべて日暮には、入湯乃至行水をするが、これは洵に美風ではあるけれど、日中の入湯は餘り爲されぬやうである又小六かしい生理を擔ぎ出すやうだが、皮膚には反應作用があつて、冷した後は溫くなり、溫めた後は冷ゆるものなることは、毎度本誌上で、冷水摩擦の效能と共に屢〻說いたことである。この道理を應用し、日中の最も暑い時に、少し熱過る位の湯に入浴して、身體を摩擦し、即て浴を出てから、浴衣一つで北窓の下に暫く嘯いて居ると、身は仙鄉に在る思がして來る。行つて御覽じませ〳〵。

## 第三法　衣服を次第に薄くする

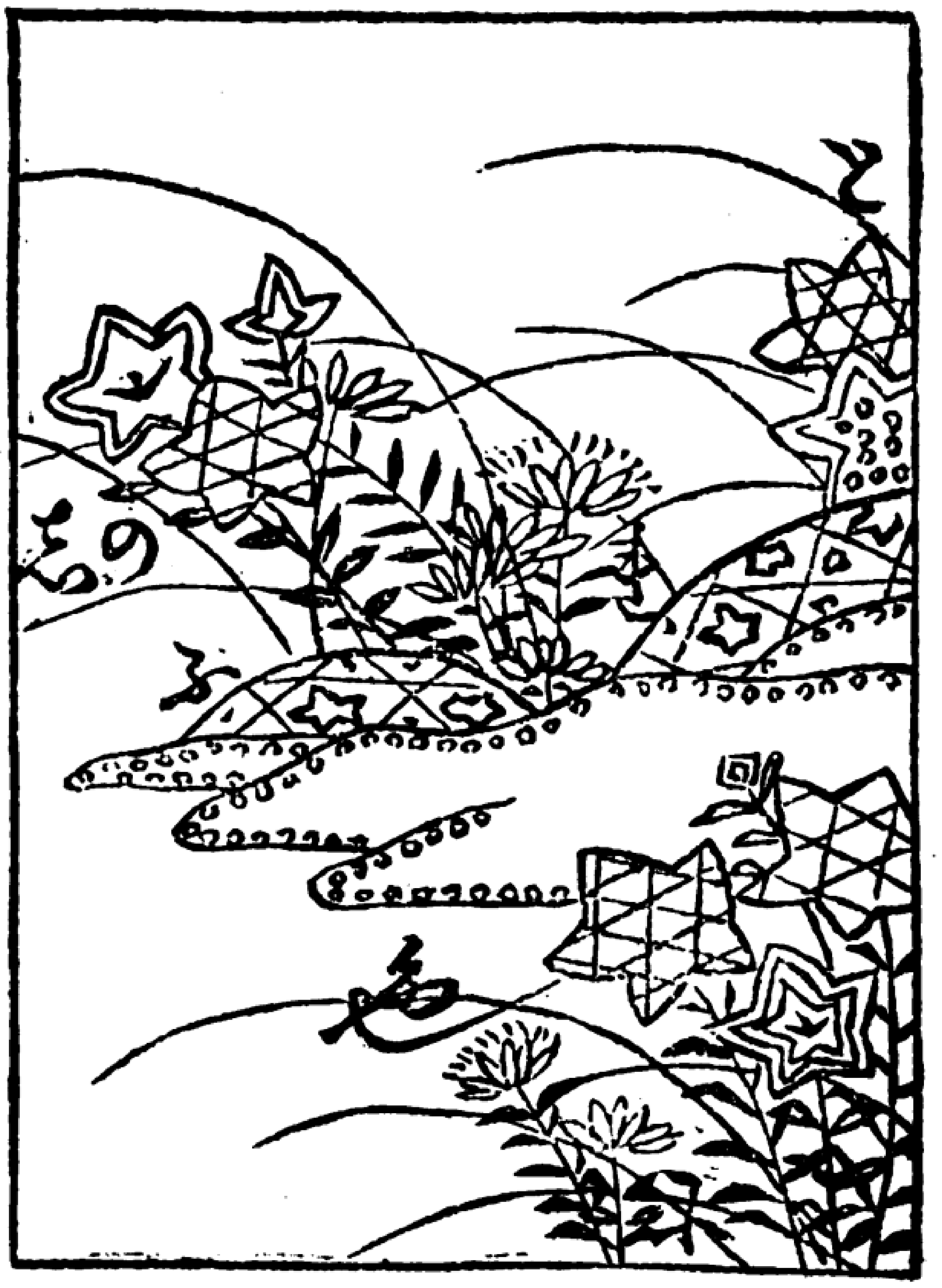
昔の御殿醫は夏になると朝起き出るや單衣物の上に綿入を重ねて居り、即て單衣物を取り、次に袷に着換へ、それより入浴して、浴を出るや葛衣を着、それより登城したといふことだ。斯うすると殿樣の御前に居て、炎威赫々たる日中にも汗の臭氣を嗅がしめ參らすやうな無禮が無いからである。これも道理の有ることなれば明治の我等とても銷夏法の一に應用して宜から

うと思ふ。然るに早朝から兩肌打脱いでるやうな人は日中に至つて豈夫皮膚を剝ぎ取る譯にも行かず、悶へるより外に仕方は無いであらう。

## 第四法　清潔

家の内外即ち押入、戸棚、流し、便所、溝、床下、庭園何くも塵一つ無く、草一本生えて居らず見渡す限り清潔清洒となつて居れば、何となく涼しいものだ。縱ひ金銀造りの結構な廣い大厦でも掃除が行屆かず、蜘蛛の巢は何處といはず氣儘に網を張り、小道具は此處彼處に散亂し、押入には何でも無茶苦茶に積入れられ、流しには茶殻や魚骨が水の疏通を妨げ、便所に入ると屯せる青蠅が群を爲して飛出し、庭は草蓬々と生え茂れる中に、紙屑を捨てゝあるに至つては、縱ひその家は高山の絶頂にあつても、暑苦しく感ぜらるゝは人情の然らしむる所であらう。

蘆手模樣。秋草



地白、茶赤納戸（白木屋立案）

されば夏に入るに先だち床下には厚く石灰でも撒き、可成疊の表も仕換へ梅雨中に濕れる押入戸棚などはよく／＼掃除して空氣を流通させ、衣服夜具なども洗濯或は日光消毒となし、蠅張、鼠不入俎板なども清潔に洗ひ、且つ乾かし、流しや溝の汚物を悉く取除いて、石油でも流し（石油を流せば蚊其他の蟲の發生が大に防がれる）便所へは粗製の石炭酸水やアルボースを撒き、庭園は雜草を取り盡して、毎日掃除し『まア此方の御掃除の行屆いてることは……』と他人に賞められる位

にしておくと、衛生上宜しきのみならず、確に夏の暑さも忘れて心地よく住はるゝものである。或はこれが何よりの銷夏法であるかも知れぬ。

## 第五法　打水

打水は一日に三度は是非行つて頂きたい。即ち早朝に掃除する折、家の周圍から門前まで惜氣なく水を撒き、日中には屋根の上までも注ぎかけ、日沒にも尙又斯せば庭木の梢から雨の降りたる如く、ポツリ〳〵と露の滴つてその涼しさ言はん方なし。説明するまでもなく、打水の水蒸氣は地上の熱を奪ひ去るからである數多の婢僕を召し使はるゝ夫人方乃至は姫御前も運動がてら、お行り遊ばせ、お行り遊ばしてから、

打水の蟬も追ひけり一しきり
打水の音に枝飛ぶ蛙かな
打水のおごりがましや小手枕

といふ按排式に、否これよりももつと上手に一句お詠み遊ばせ、詩興陶然として來ること疑ありませぬ。

## 第六法　涼しくなる食物

毎日三度取る所の食物の如何に依て、我等の體温を大に調節し、冬爲に寒からず、夏爲に暑からず、甚だ凌ぎよく暮すことの出來るものだ。然らば如何樣なる食物を取つて、夏の暑さを忘るゝか、曰く脂肪の少い水を多く含んだ食物が身體を涼しくするものである。例へば胡瓜、茄子、冬瓜などの新鮮なる野菜物を始めとし、其の他梨、林檎などの果物、肉類では鱚、小鯛鰈などの淡泊とした魚類が適せるやうなものだ。然るに舊式の人は果物は毒ぢやと排斥する、これは樹より取つてから日を經たのを而も多く食つて食傷したる例を目擊したからでもあらう。が併し新鮮なるを皮を剝いて、食後間もなく食べれば啻に身體を涼しくするばかりでなく食物の消化を助ける効能がある。自然は夏に適せるやう斯る結構な物を與へてくれるとは、天地も實に靈妙不可思議である。麥飯も脚氣患者ばかりでなく、夏の主食物としては實に宜い、米飯よりも涼し

くする作用あるといふではなけれど、便通を宜くして消化器中に醱酵物の出來るを防ぐ効能がある。運動の少い人は之を用ふべしだ。右の如くに夏の食物を選ぶべき筈なるに、野菜物には滋養がないと、鰻の丼に烏賊（脂肪は少なけれど不消化物）の天麩羅、而も豚肉の味噌汁と來られた日には、見たばかりでも汗がタク／＼と出て來る。序に言つておきますが夏になると刺身を氷の上に載せるけれど空氣中の溫水蒸氣は冷い刺身の表に溜り、却て黴敗の媒をするものなれば、肉を氷と氷との間に入れて、それから引出しては食べるやうあらまほし。

蘆手模樣。桐一葉



地白、もやう濃藍、字茶ぼかし

## 第七法　早起せよ

蚊に喰はれながら夜深をなし、夜深が原因となつて朝寢となり、八時か九時に起きて出て、拭掃除もそこ／＼になし、間もなく朝飯を終れば時は早正午に近づき、すべての爲ることに餘裕なく、順を追うて忙しく、爲に一日中暑い／＼で暮さねばならぬ。所を太陽が漸く地平線上に上つた位の東雲に起き出で、冷水摩擦の濟んだ頃に、露を帶べる朝顏が紅紫乃至は白の打重なりて咲けるを眺むる樂しさは、得も言へぬ。斯くて遲くも六時までには朝飯を終り、十時乃至は十一時頃まで、讀書なり針仕事なり

それ〴〵の職分を務められ、これより暫時休息して前途の第一法若くは第二法等の準備に取懸らるべし。一日中暑さ知らずに暮すことが出來る。これも銷夏法中の主眼なることであらう。

## 第八法　暑くないと思へ

叡聖文武なる　天皇陛下が御所有在す我が瑞穗の國は其位置温帯に位し、山は秀で樹は繁り、河は流れて水清く、而も海水は四周を洗うて氣候を調和し、如何に盛夏とても臺灣を除くの外は空氣温が體温を越ゆることは無い。されば太陽の直射を避けて、家の中に戸を開いてさへ居れば己の體温よりも低い空氣温が入り込んで來るから、決して暑い道理は無いのだ。大きく言へば日本中が避暑地である。斯る樂土に居りながら避暑旅行などゝ洒落るのは實に勿體ないことだ、强ひて言へば不忠の民である。故に寒暖計を見て、九十六度を越えぬ以上は暑い道理が無いと觀察すれば、心身の關係は妙なもので、俄に涼しくなつて來る。繰返して言へば「暑くないと思へ」この一語の味を悟ると涼風颯々として身邊を吹くに相違ない。

## 第九法　游　泳

海岸に住める人は海に、河や湖水の邊に住める人は河や湖水に、何れにもせよ我が家に近い所の水に游泳の稽古するのも、銷夏法の最良なるものであらう。焦げるやうな暑い最中でも、ドブンと水中に飛込んで、十分時間乃至は二十分時間も泳いでゐると、その氣持の快くなることは譬ふるに物がない。即て水を出で、暫時休んでから又飛込み、之を二三回も繰返してから家に歸るのである。夏の中三四十日も續けて實行すると、皮膚の抵抗力は强くなり、心肺胃腸は悉くその機能が盛んになつて、從來の體質を一變するものである昔は海士の外に女として游泳などする者を、非常にお轉婆の樣に擯斥したさうだが、明治の今日となつては誰以て卑しむる者もないから、奥樣方もお孃樣達も、何うか練習して頂きたいものだ。ナニ色が黒くなりま

すと、それは斯う遊ばせ、輕い麥稈帽子を冠り、顔には硫酸規尼涅と單軟膏とを混せた膏藥を一面に塗つておき、游泳が濟んでから拭き取るのです、決して日に焼ける心配はありませぬ

序に一寸御注意申上げておきますが、

一、河海に限らず淸き水を選ばるゝ事

一、始めて稽古なさるには必ず先達に就かるゝ事

一、一日の游泳數は一回から始め遂に三四回に及ぶべき事

一、游泳の時間は三十分時を越さぬ事

一、水を出た後はタオルを以て輕く全身を摩擦する事

あし手。かきつばた



文字鼠、地白、模樣納戸

## 第十法　好める遊藝

一家の内政を掌られる夫人にせよ、又學校通の令孃にもせよ、乃至は髯武者の旦那樣にせよ、人は各々好める遊藝のあるものだ例へば繪を書いてみたいとか、俳句を學んでみたいとか、或は下つて三味線尺八などを行りたいけれど、平常には各々其職分があつて、斯る遊藝を弄ぶ暇が無い。所を夏になつて、人は逗子だ鎌倉だと遊びに出懸ける、その時を利用し、遊びに出かけたと思つて悠々自適、行り始めるのです。嗜な業に從事すると、暑さの苦しみも何の物かは、何時の間にか時日が經つて、世は何

時までも夏であれかしと思はれるものだ。私が醫學校通ひの當時、夏休暇になると、一月は文學道樂を行ることに定めてゐました爲か、夏程樂しい時は無いと、今にもその習慣が除れませぬ。韓退之とかいふ學者が、

人苦炎熱甚　我愛夏日長

と言はれたさうだが、如何にも平凡な句の樣にはあれど、味へば味へる程言ふに言はれぬ旨さがあります。

## 第十一法　一心不亂

之は前者に似て、前者よりも一層高尙な精神になるのだ、前者は覺えずとも濟む業を、人の遊ぶべき時間に稽古して暑を忘るゝのであるが、これは是非學ぶべき事柄や、或は爲さねばならぬ仕事を「虎と見て石に立つ矢のある習ひ」と、華氏九十度の熱も忘れて、一心不亂に行るのである。健全なる精神は一方にのみ傾注するもので、書物なり仕事なりに深く、注意してゐると、蜂が肌を螫してることさへ知らずにゐることのあるものである。私の知つてる某書家は夏になると午前十一時から午後三時まで一心に習字の稽古をすることに定めてゐる。人あつてその故を尋ぬれば「これが私の避暑法です」と微笑んで居られる。實に尊い銷夏法ではありませぬか。

## 第十二法　齷齪せぬ

左近の樣な小人は、「三百六十五日何時も貧乏暇無しで、閑日月といふものは更に無い『八日までに間違はず女學世界の原稿を送つて下さい』といふ手紙が來る「さア書かねばならぬ」と焦立つてる所へ、「豫て廣告致しおき候衞生書の原稿少しにても御送り下され度云々」と書店から催促狀を放つ。それだけならまだしもだが、世に處するといふものは、色々の複雜な事件が不意に起つて來る。斯うなれば、心は千々に亂れて、縱ひ夏ならざるも頭は常に熱し、血は絕えず湧いてゐる。然るに大人君子になると爲すべきことを整然と前以て處置し、胸中常に閑日月があるから、縱ひ大山前に崩れて來ても、ピクともせぬ趣がある。斯る人は蒸すが如

き夏の日中でも、悠々閑坐、團扇片手に雲の暁昏に變ずる樣でも眺めてゐるから、夏の暑さも左程苦にもせず、樂しく光陰を過さるゝのである。世には左近のみならぬ、此も爲ねばならず彼も行らねばならぬと齷齪日を送つてる人が澤山ある。否人はいざ知らず左近も今日といふ今日よりは、斷然行を改めて、何事も早めに事を爲し、業務に追はれぬやう、淸い心で明日から暮しませう。何某法師の詠まれた通り、

とりわけて淸き心に
夏三月

と、斯うさへなつて居れば、夏は更に暑くないのである。

裾もやう。芙蓉



地色サビ納戸、白ぬき

## 第十三法　家庭平和

『お母樣只今――誠に遲うなりまして……』

『なんの、嘸々暑かつたらう、さア お涼みなさい』

と姑が團扇で嫁を煽いで遣る。『お母樣、まア勿體ないこと』

斯う云ひながら逆ひもせず、姑の爲すが儘に煽いで貰ふ。これは圖々しいのではなくて、老人が折角の好意を無にせぬ眞心である。之に反して

『斯んなに遲くまで何して居たんです』『家中に寢轉んで居れや暑いことも解りますまいよエヘン』『今の一言もう一度言つて御覽なさい』事茲に至れば寒中でも心

は赫々と燃えて來る、況や夏に於てをやだ。されば前者の如く互に禮讓を厚うし、一家團欒アハ、オホ、で暮せば八月の夏も、家は春風駘蕩の氣候と變り、此上なき樂しい月日を送られるのである。これ唯に銷夏法たるのみならず、亦以て避寒法ともなるであらう。

## 第十四法　裸體

忘れもせぬ一昨年の八月十三日であつた。所用あつて團子坂まで行つた序に、立志小說の名家、堀內新泉氏を訪ねると、氏は莞爾として己が書齋に迎へ、『時に裸體は衞生上害になるものですかねえ』と尋ねらる。余答へて曰く、華氏の寒暖計八十四度以上を示す時は裸體でも何等の害はありませぬ』と、『然らばお互に實行しようぢやないか』是に於て『失敬』の鸚鵡返をしながら、腰卷一つになり、打寛いで一時間餘を話したことがある。斯の如く炎々たる太陽の暑さに射られて歩いた揚句に、家に入り、窮屈さうに坐つてゐるのは實に暑いものだ。斯る折に、主人から實行して裸體を勸められるのは時に取つての大御馳走であつた。或人は『裸體は唯一の避暑法である』と、されど余は思ふ青年の男子が人の見ぬ我居間で日中だけ裸體になるのは敢て不道德とも言はぬけれど、妙齡の婦人否妙齡ならざるも、婦人の身として、人の前をも憚らず、裸體美を示して銷夏の一法となされることは、衞生上は兎もあれ、餘り好ましからぬ避暑法である。

## 第十五法　水茶を呑め

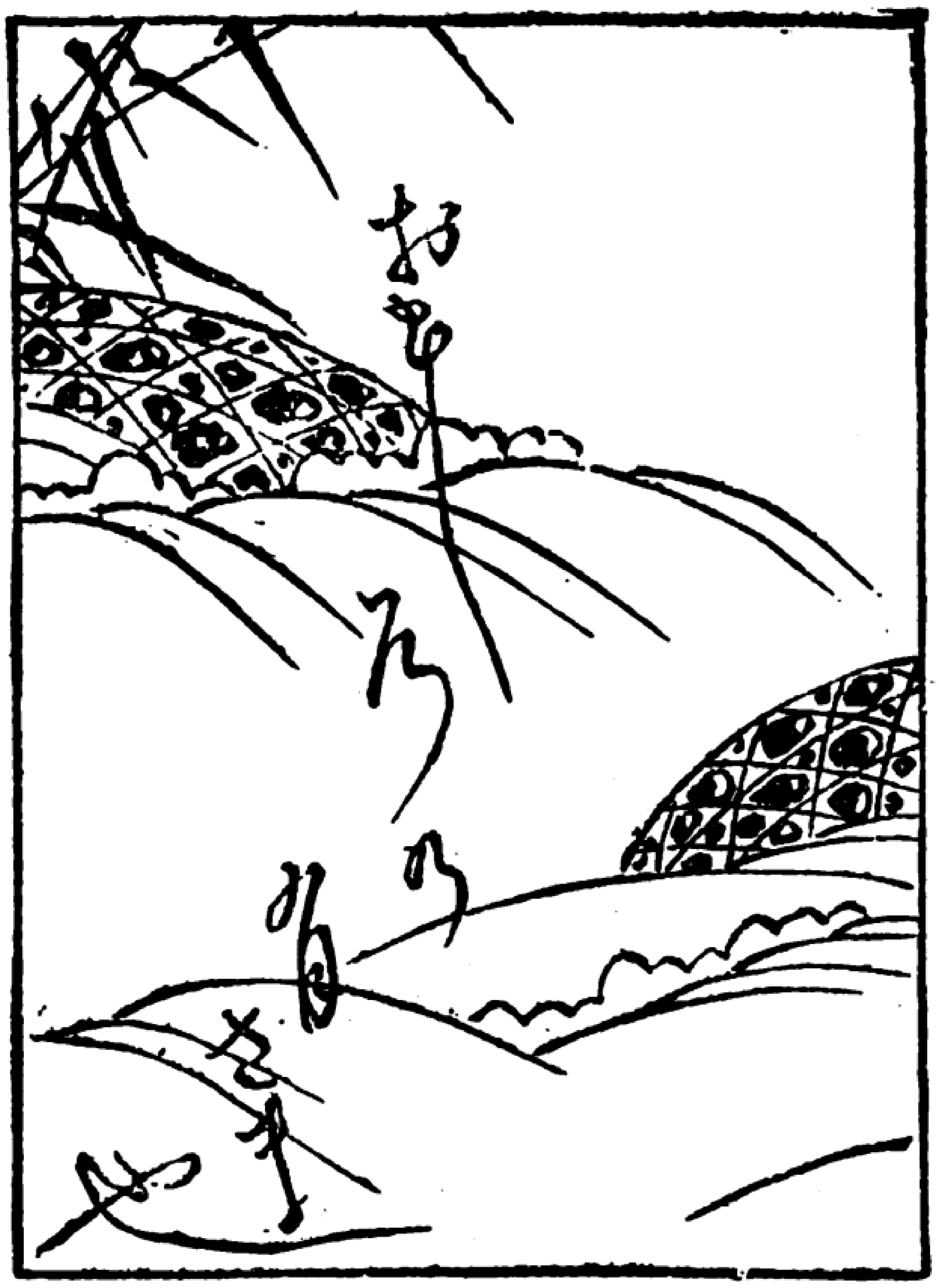
水を熱すると段々沸いて來て、水は次第に氣體となり、その氣體は外部の冷えたる空氣に觸れて、再び水の微粒となる、之を俗に湯氣と云ふ。而してその氣體が液體に復する際に熱を奪はれるものである。この理により大にその熱を奪ふ作用ある依的爾の樣な物を應用すれば、人造氷が出來るのだ。尙之を詳しく說明せんとするのは物理學上の潛熱といふことから知つてかからねばならぬ。乃で兎に角氷までにならざるも、齒に泌みる位の冷水を作るには、クタ〳〵沸騰せる水を

大きな德利に充し、之に護謨のコロップを栓し、井底に浸けておくと、熱は水の爲に奪はれ、其の井の水よりも冷くなるものだ。之を午後の二時頃即ち一日中で暑さの最も盛なる折引上げ、その水で上等の茶を入れて飲むと暑さは何れかへ逃げ、睡魔は自ら去るものである。上等の茶といへば贅澤な様だが、家庭團欒して飲んだ所ろで、一度分數錢に過ぎぬ。これで懶惰の心を一洗することが出來れば、實に廉いものだ。倘この水ならば小供の飲料に供へても害は無い。今日より實行して御覽遊ばせ。

## 第十六法　淡い色

蘆手もやう

地空色、濃白ぬき、字白茶暈もやう



夏は衣服其の他帷などは、すべて淡い色殊に白を用ふるも銷夏の一法であらう。斯う申すと如何にも平凡な事を言ふではないかと批難せられるかは知らねど、前にも申した通り、平凡な所に何とも言へぬ眞理が籠つてるものだ、諸姉が疾の昔に知つてゐらるゝ通り、白い太陽の熱を撥ね反し、濃い色殊に黒は太陽の熱を吸收するものなれば、黒勝の衣服を着てると、その暑さを、感ずることは數倍である。或人が家の西方なる壁の外面を白壁に塗り變へ、倘白布の幕を以て被ひたれば、家の中なる寒暖計が、五六度下つて頗る凌ぎよくなつたと言つて居る。されば絽の羽織も、紳官然たることを構はぬとすれば、與

白にして、紋だけを黒にするが宜いと思ふ。

## 第十七法　善き装置

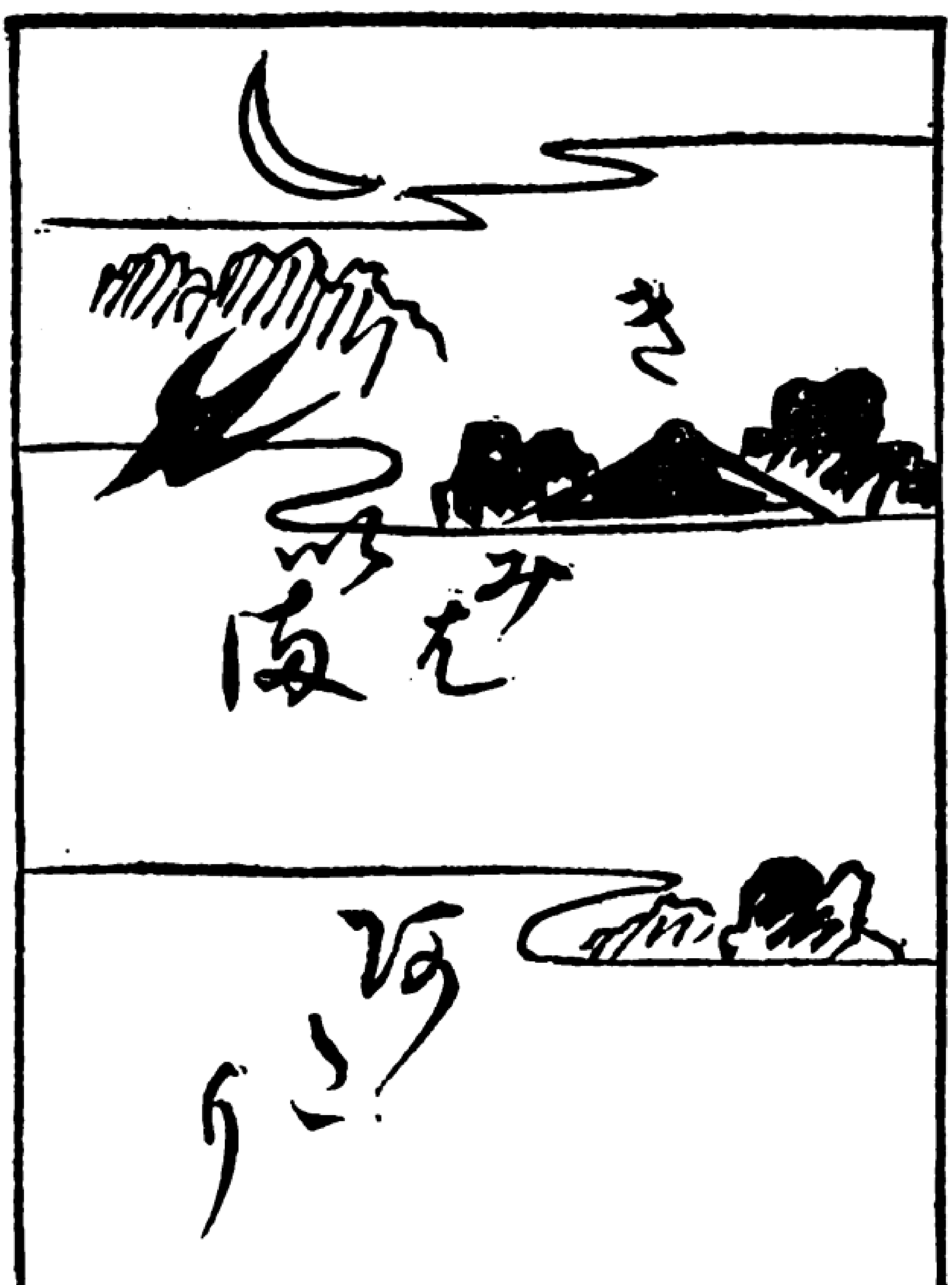
縱し、拭掃除は十分に届き、何の言ひ分ない程、淸潔になつてるにもせよ、萬事の装置が之に伴はぬと涼しくないものだ。近い例を擧げて言ふと、余は過日或人を訪問したれば、家の内外共に頗る掃除は行屆いてるが、室内の装置が如何にも惡い。第一床間の掛物が極彩色の佛畫で、その下に眞赤な花臺を据へ、花瓶には撫子を活けてある。それから隅の方にビタ金の屛風が少し開きかけに立つてゐて、違ひ棚には銀瓶や蓄音機を陳列してある、之を見ると如何にも富裕らしくあるかも知らねど、主人の心の程が見え透いて、何となく暑苦しく感じて來た。やがて此家を辭し、某知己の許に行くと、僅に六疊と四疊半との二室しか無く、庭とても二間四方に過ぎねど、言ふまでもなく掃除は到れり盡せりで、二室の境には小さな簾屛風を立て、床の間には何人の筆かは知らねど、飛流直下三千尺といふやうな墨繪の瀑布の幅を掛け、薄鉢に河骨を淡白と活けてある。軒前には鐵馬がチリン〳〵、庭には紅葉、松、石松などの盆栽が五つ六つ棚に載せてある。されば狹い庭なれど、十分に餘地があつて、廣い庭のいぶせく樹木の茂れるのを眺むるよりは却て涼しさうに感ぜられる。主人は理學士で今尙大學院に研究中なれど机の上には只一册の辭書か有るだけで、その他の書物は悉く押入に入れてある、示威的に飾立てるやうな學者でないことの奧床しさが、何となく嬉しい。四方山の話をして一時間程經たが、その間は夏の暑さも殆んど忘れてゐた。斯樣に家の装置も銷夏の一法として忽せに出來ぬものである。

## 第十八法　山水の跋渉

日光とか輕井澤とかいふやうな一つ所に贅を盡して遊ぶのではなく、着換の衣物一二枚位を携へ、草鞋穿になつて、氣の合へる友どちと、八月のさ中に、山水跋渉と出かけるも銷夏の一法として實に樂しいではあ

りませぬか。或時は峩々たる高山の絶頂に雪を嚙み、或時は一瀉千里の激流に口嗽ぎ、或時は白砂青松の間を踏むべし、或時は寒村僻地の巷を辿るべし。かくて一日に五里でも六里でも足に任せて歩き、日中だけは涼しき樹蔭なり濱邊なりに休み、日暮には最寄の旅館に着き、明日は又朝早く出でゝ進み進めば、土地の變ると共に風物も變り、『斯うだんべいの言葉』『さうぢやおまへんか』の話、皆悉く愉快の種になるものである纖弱い婦人の方といはず鬚蓬々の男子といはず、斯る旅行は何人にも心身の衛生上試して頂きたいものだ。

蘆手もやう



模様薄墨ぼかし字繪

# 第十九法　天幕生活

一昨年の夏であつた、富豪三井家の令息達は夏の休暇を利用し、輕井澤に天幕生活をせられたとて、各新聞にその殊勝なる行を紹介してあつたが、これは敢て男子に限ることでもない、女學校通の令孃なり紳士の夫人なりが同志數人と、老爺でも使ひながら、靜づかな山間に天幕生活をして、不自由な自炊を試みられるも、亦一入愉快であらうと思ふ。自然に落ちてる枯木を拾うて薪とし、自然に流れる渓水を汲んで湯を沸かし、『貴女はお米をお磨ぎ遊ばせ、妾はお料理をいたしませう老爺一走りにお豆腐を

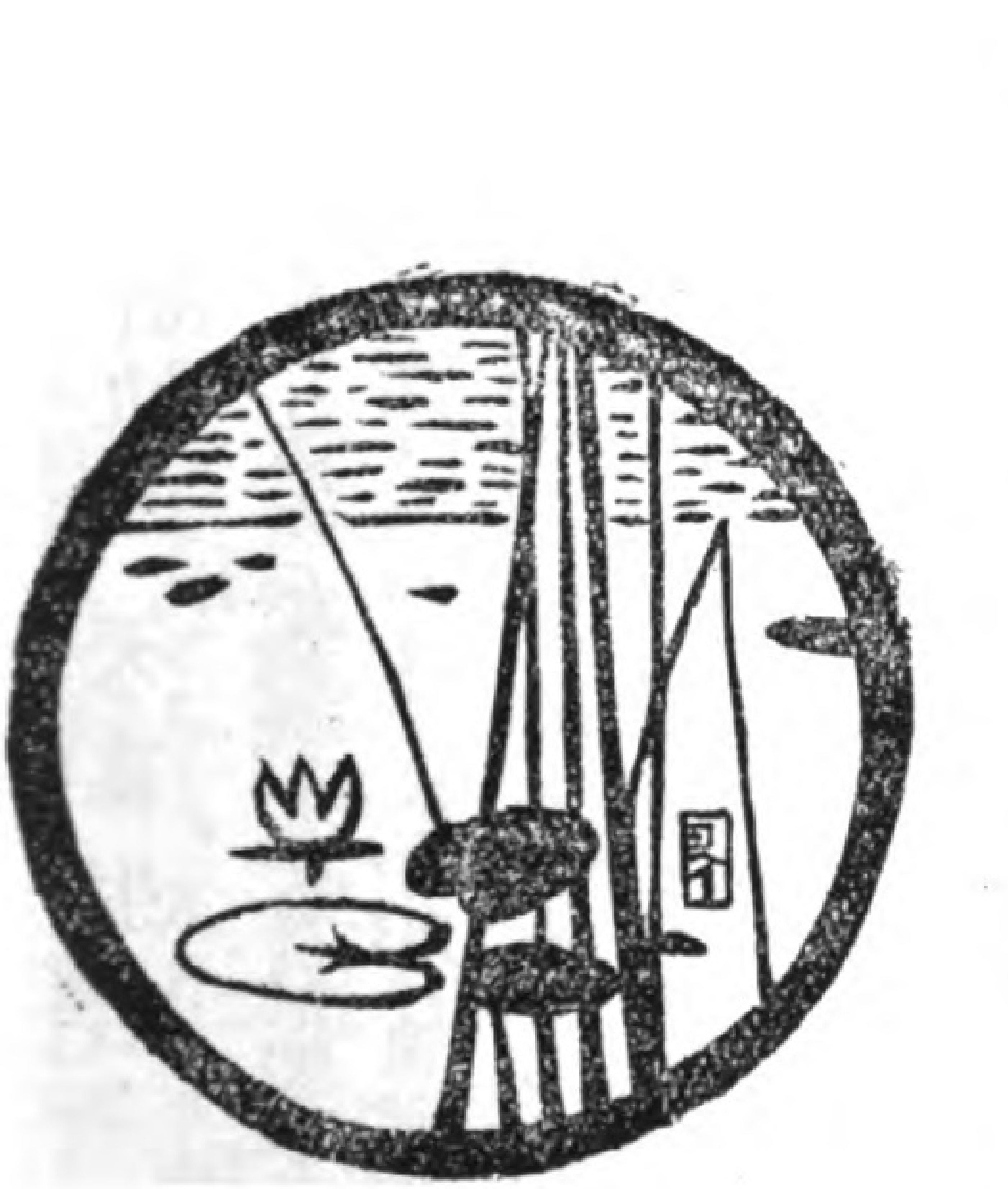
買つてお出で』『一走りたつて一里半ありますァ』『オホホ急の間に合ひませんね』即て食事も終つて一人が琴を彈ずれば、一人は歌を唄ふ、松風は浸々として之に和し、水流は潺々として之に合ひ、その樂しさ迚も拙い筆では形容の出來るものではない。歇私的里や脚氣乃至は心臟病などの疑ある方は暑い時を幸として、斯る銷夏法を試みられたら、病も亦美化するであらう。

## 第二十法　變化ある趣

人情の常として、萬事萬端何につけても變化のあることは面白いものである。如何に樂しい遊びでも、同じ事を毎日續けてゐると、更に樂しくないやうになるは何人もさうであらうと思ふ。されば最も暑いこの八月一月の日割を爲し、今日は友垣を集めて合奏の會明日は家に籠つて小説を讀み其次の日は伯母のがり訪れて親戚の情話を喜び、其次の日は押繪の如き細工物でもするといふやうに、色々の樂しき事を考へておいて、それからそれと移り變り、灼くが如き炎暑を變化ある趣の中に忘れて了ふのである。さりながら斯る遊び事も、規律正しく行らぬと、本心を咎めて左程樂しからぬやうになるのだ。例へば學生の身であつて見ると、午前半日は學課を復習するとか、或は一家の奧様であつて見ると、内政を整然と調へておき、その傍左程入費のかゝらぬ範圍内に於て、一點疚しからざる銷夏の方法を講ぜられたいのである。

尙申上げたき事は山々あれど拙き筆の長話は徒に欠伸の種、さればこれにて筆とめまゐらせ候あら〱かしこ

（完）



# 衛生顧問

五月六日より六月五日までに到着したる質問を内譯にすれば左の如し。

内科＝六十四問。口中の病＝十二問。皮膚科＝六十一問。婦人科＝五十八問。鼻の病＝十六問。美貌に關すること＝五十六問。毛髪に關すること＝五十九問。眼科十三問。藥物に關する事＝五十八問。月經に關する事＝五十七問。眞の衛生＝五問。外科＝一問。雜問＝五十九問。生理＝一問。衛生顧問外の事＝七問。

合計五百二十七問

## ▲内譯の說明

口中の病は内科等に、毛髪は皮膚科に、月經は婦人科に、美貌は皮膚或は雜問の部に入るべきが正當なれど便宜上斯く内譯したのである。

衛生顧問外の事とは「女子大學へ入學する方法を問ふ」とか「妾の和歌を添削して下され」とかなどのお門違をいふ。

雜問とは「聲を善くする法」「小便が近くて困る」等の如く何科へも屬せぬやうな問をいふ。

## ▲七年間の經驗

小生が女學世界に執筆したは明治三十五年の八月號即ち第二卷第十九號からであつたと思ふ。併しその以前とても、時々質問書を送られた方が往々あつた。それは兎もあれ、足掛七年間に最も多くあつた質問は毛髪に關することで、その次は色を白くする方法は無いか、その次は鼻を高くする法、瘦せる法、丈を高くする法等の美貌に關する事。其次は皮膚病、其次は月經に關する事、其次は子宮病、其次は神經病、其次は肺病等の順序である。而して眞の衛生に關する事柄や小兒に就ての問は實に尠い。概括して言ふと、我が國の婦人方は失禮ながら衛生思想に乏しくて、而も個人本位であると思はれる。されば

## ▲答者の希望

を述べると、「便所を清潔にする法」「襁褓の注意」「夜の換氣法は如何」「滋養物とは如何なる物か」「牛乳の善惡を鑑別する法」「藥を飮むの可否」「家を新築するに就ての注意」「小兒急病の手當」「小兒が啼泣する時の注意」「復習時間の注意」といふが如き日常適切なる事柄即ち吾人の健康を維持するに就ての疑問を主とし、次は面と醫師に對つて問ひ難い事柄、例へば「月經時に入湯しては害あるか」「初めて月經ありし時の注意は如何」などの如し。而して其次は諸病に關する事柄といふ順序が望ましい所である。

## ▲書方に就ての希望

葉書に一問を毛筆で、楷書に、即ち讀み易い樣に認め、本姓名か又は匿名ならば極めて異樣なる名を附け、其上に「女衛」の二字を記されたき事。

### ▲答者の嬉しき事

澤山來る質問帋の中で最も答者の嬉しきは質問心得に悉く合つてる葉書、衞生問を試みたら其の効があつたといふ報知、老父母や小兒に就ての問、讀者一般の健康に關する有益な問などを受けることである。

### ▲答者の嬉しからざる事

走り書に叩きつけたる物、故らに英語などを挿みたる物、例へば「或る醫師」を some doctor といふが如し。言葉の野鄙なる物、例へば「村の藪醫者が申すには云々」の如し「村のお醫者の申さるゝには云々」とありたし。其次は、我は女學世界の愛讀者である、汝は我の問に答へる義務があるぞといふが如き語調のある物、面白半分又は猥褻に亘る物等。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

## ▲純衞生の部

（衣服と糊との關係）問夏の單衣物に糊をつけるは衞生上如何なるものに候や（加賀の洗濯女）

答柔かで肌に接く衣物には少量の糊をつけて衣服と肌との間に隙のあるやうにするは衞生上宜しきことであるが、餘りコテ〳〵つけて衣服の氣孔を塞ぐは甚だ宜しくない。況や飯が饐くなつたから勿體ないとて之を糊にしてつけるに至つてはその害言ふまでもありませぬ。

（パンと飯）問パンを以て飯の代用に供しても差支之なく候や（東京の百歳女）

答脚氣病或は其の他病氣の爲に代用するは宜しけれど我國に住まはる以上は米飯の方が宜い。何となれば米飯はその滋養物がパンよりも多く吸收するからである。

（喫茶について）問茶は何時飲むが最も宜しきか（京都の好茶生）

答朝又は午後の二時頃即ち夏ならば睡魔の侵さんとする時一二碗程を飲まれよ夜は成るべく飲まざるを可とす。

（鐵啞鈴に就て）問女子が鐵啞鈴を使用すると過激の運動になりますまいか（麻布の膓病女生）

答御自身に輕過ると思はるゝ物から用ひて順次にその度數を殖されたら決して過激ではありませぬ。お行り遊ばせ〳〵。

（運動と深呼吸）問深呼吸の利益は屢々伺ひましたが運動なすれば自ら深呼吸もする事ゆゑ運動を怠らぬ人は態々深呼吸をなせざるも可ならんと存ぜられ候如何にや（信州の某女教員）

答御考の通りである。

## ▲生理の部

（老人の始め）問人は何歳まで身體衰へずに居らるゝものにや（淡路の千鳥女）

答弁輩學者多數の說に從へば、女子は二十歳までが成長期、四十五歳までが平均期、四十五歳以上より衰頽し始めるものとの事。されども五

十三歳で分娩したる婦人もある位だから、眞に衛生を實行したら、七八十歳までは若やかに衰へないで居らるゝに相違ないと余は信じてゐます。何となれば人間は確に百五十歳までは生きられるものであるからである。

## ▲内科の部

〔頭部の病氣〕

問 三ケ月前より頭重く偏側の頭痛を覺え、四肢倦く、心臓の動悸は高ぶり易く、醫師の診察を乞へば「血の道」なりとその療法を敎へ下され(靜岡の愛讀女)

答 御地の醫師殿が、血の道と答へられたのは察するに通俗的に言はれたので、その實は偏頭痛病と診斷して居らるゝのでせう。果して然らば重い病では無けれど、容易に治りませぬから、氣長に療治せねばならぬ。服藥は診察してその原因を究めれば申されぬけれど、一般の治療法を記せば、(一)精神を安靜にする事(二)適度の運動をなす事(三)頭部を冷す事(四)芥子湯を以て足を温める事(五)便通を調ふる事(六)茶珈琲酒の如き興奮飲料を禁ずる事(七)冷水摩擦を實行する事(八)滋養食物を取る事(九)電氣を通ずる事(十)相當の服藥をする事

問 今年二十歳逆せ性にて常に頭痛し耳は痛みを覺えたり、むづ痒がつたり或はガン〳〵鳴ることあり。その自宅療法を問ふ(日本橋姫百合子)

答 醫師に就て診察乞はれよ。併し葉書の文面に依て臆斷すれば、或は輕き腦充血症に非ざるか、腦充血症ならば原因にも依るけれど、(一)精神の使用を當分止め(二)茶酒は絶對的に禁じ、(三)耳の後部を蛭に吸はせ、(四)氷嚢を以て頭を冷し、(五)當分は暗い室に居り、(六)上膊に芥子を塗り、(七)足を芥子湯で温め、(八)時々下劑を服み、(九)火或は劇しき日光に逢はぬやうにし、(十)冷水摩擦を一日に三度も行ひ、下劑は左の如し。

(一) 硫麻二・〇〇　稀鹽酸一・〇　單舍一〇・〇　温湯一〇〇・〇

右一日三回分服　或は

(二) 人工加爾々斯泉鹽一五・〇　水一〇〇・〇

右一日三回分服

(一)は烈しく下痢するから、一二日試みて止め、(二)は四五日位連服しても差支なからう。素人療治としては(一)よりも(二)を危險少しとす。

問 毎日顏がポッポと火照つて逆上し、雲脂が澤山出て困ります、その療法を(陸中の宇宙の外)

答 矢張診察せねば斷言出來ぬけれど、兎に角前者の療法を參考せられたし、雲脂は刷子を以て落し、石鹸をつけて洗ひ、少し許の油を毛に塗られよ。

問 夜になりて四邊靜まれば耳中に數十の蟬一度に鳴くが如く覺え、又時々耳中を何か走るが如く感じ、頭は重く、目は眩み、卒倒せんとすることもあります。老人ならばいざ知らず、十六歳の身を以て、斯の如き有様とは如何にも心配に堪えず候。原因療法注意など敎へ下され(尾張

の惡耳口生)

答 同じく腦充血症ならん。原因は(一)酒類、茶、珈琲の飲み過(二)月經の閉止(三)藥の中毒(四)熱病(五)頭部のできもの(六)心臟病(七)腎病(八)過度の勉強(九)心配(十)劇しい咳嗽(十一)咽の狹くなる病(十二)劇しき日光或は火熱に頭部を曝せし事(十三)本中の遺傳などであるが、御身の原因は右の中何であるかは診察の上ならでは答へられず。注意及び療法は前者を參考せられよ。

右の外(岩手縣春野花子)(廣島縣熱心新女)以下大同小異の問は澤山あれど以上を應用せられよ。

(肺炎肋膜炎後の攝生法) 問 本年廿一歲。看護婦。三年前に肺炎を患へ。翌年九月肋膜炎に罹り。四ケ月程にて全快。されど咳嗽、喀痰、呼吸困難熱發は止ます。醫師の勸めに從ひ、海邊に轉地。昨年の十一月より咳嗽益々甚しく。現時は食欲進ます。身體も頗る瘦せ候看護婦は矢張致し居候。何卒根治的療法を御敎へ下され(滋賀縣久榮子)

答 (一)看護婦を止め給へ、何となれば病者に接するは大に宜しからざるが故なり(二)暖地の孤島若くは半島に移られよ、滋賀縣は山地にして高寒なる土地なればなり(三)治養療法として淡泊なる河海の魚肉、牛乳、鷄卵、豆腐、軟弱なる野菜類を取られよ(四)日光浴を爲されよ(五)早く寢て比較的遲く起きられよ(六)精神も愉快にせられよ(七)深呼吸を一時間每に十五六度づゝ爲されよ何となれば深呼吸をせぬと肺臟に在る不潔なる空氣の新陳代謝が十分行はれ難いからである、(八)冬を除き春夏秋の三季は晝間は大抵外に出て散步するが何より宜し、但し熱發時は然らず(九)每夜臨臥に溫浴を十分間爲し身を溫包してから寢られよ、(十)悲哀と立腹は何よりも身の毒なる事(十一)時々按摩をして貰ふ事(十二)音樂、活花などの風流な樂みが藥なり(十三)2％の食鹽水を一日に五六回蒸氣吸入する事(十四)熱發の折は余の經驗上安知歇貌林一回量〇・三五乃至〇・四を朝夕に服する事(十五)强壯劑として幾那煎、百弗聖、還元鐵の類を醫師に相談して連服する事(十六)結核的の藥例へばグアヤコール、ケレオソートの類は余の經驗上用ふるに及ばぬ事(十七)根を詰めぬ仕事殊に己が好める業ならば時間を限りてするは却て宜しき事(十八)高尙知識に就て餘り無常迅速を談ぜぬやうな宗敎談を聽くも宜しき事(十九)氣の合へる朋友と交る事(二十)小說を讀まぬ事等。

尙外に(越前の勁役生)以下十數名此の種の問あれど前者を參考せられよ。

(腹膜炎に就て) 問 慢性腹膜炎に罹り甲醫學士は水を取るが宜しと言はれ乙醫士は水を取らぬが宜しと申され候何れが宜しいでせうか三月に質問致し、四月の本誌を樂しみしがお答なし。五月を樂みしも矢張なし、六月を樂み、同じく無し、依て又お伺申します、何卒七月に(山口縣硯海捨小舟)

答 直接に診察してすら甲論乙駁になる程の大病、然るに書の未脉を

取る様なことを申した所で、何の益にも立たぬから、答へずにおいたのです。況や膣膜炎にも種類があり、その原因も澤山あるに於てをやです。されども先輩の說に依れば外科的の療法即ち開腹術を行うて、水を排泄せしむるに非ざれば、眞の全治は六かしいものであると。余も亦之に賛成せん。

【蟯蟲か將た十二指腸蟲か】問昨年より腸胃の具合惡しく候所、この度肛門より白色の二分程の蟲二向出で、驚き申候。十二指腸蟲ではありませぬか、それとも蟯蟲でせうか、何れにしてもその素人療法を御敎へ下され（鳥取縣愛子）

答十二指腸蟲ならば、非常なる貧血を來すものなれば、多分蟯蟲でせう。素人療法は六かし、何となれば劇薬を用ひれば、驅逐し難いからです即ちその内服薬は、

珊篤寧〇・一　甘汞〇・三　大黄末一・〇　白糖一・五

右分三包、一日三回一包づゝ

斯の如く調合するのであるが、珊篤寧も甘汞も素人の方には實りませぬ。故に醫療を受けられる方が何よりの得策である。若し又十二指腸蟲とすれば、尚一層に素人療法では危險である。

問十二指腸蟲を五六回も除去致し候へ共、春は必ず發生致し候。即ち全治しては又生ずる有樣に候。發生せざる豫防法は無之候や（大阪朝顏女）

答十二指腸蟲の發する原因は、該蟲の卵を含んだ水や野菜物を飲食するからである。故に口嗽する水でも、一旦煮沸したる物を用ひ、野菜物は十分に煮焼して食はればなりませぬ。人糞を肥料にする我が國では此の注意が實に肝要である。若し斯くの如く攝生して居らるゝのに再發するとすれば、そは全く除去せぬのでせう、即ち卵が少し位殘るのではありますまいか。

【意味の分らぬ質問】問上略幼時より胃とわづ候ひしが今より二十年前に胃がひに候樣に痛み下略（横濱小人敬者）

答内科の病氣と思へども、小生にはその意味了解し難し。

▲（東京府下さつき女へ）＝御子さんの病氣なるか、貴女のなるか、曖昧にて何とも答へ難し。

▲（兵庫縣揖保の國女へ）＝「シンノウエン」にかゝり引續き、心臟病に云云」とあるが、シンノウエンは心囊炎の事か、さすれば矢張心臟病に非ずや。兎に角容態を詳しくお記しありたし。

右にて内科の六十四問は悉く合蓄せられてあるのである。奇妙なのは、爾來七ヶ年の間に、肝臟脾臟等の病は、殆ど無きことである。





# 辛苦多き妻の一日

紅涙女史

## 朝のつとめ

昨夜も例の御連中（飲酒黨）で十二時過ぎにやッと床に這入つた、こういふ風に毎日夜を更したので睡眠不足の爲めもあらうし、又此の頃どうも勝れないから其の所爲もあるのでせう、今朝は頭痛のすることおびたゞしい、けれどもまだ五時だらうと云ふ時分、時計の樣な百合子はもう目が醒めて機嫌が好い、元氣好く床の中から出たり這入たり、乳をしやぶつたりして大滿足、恐らく人間一生の中で今が一番百合坊の嬉しい時、幸福な時そしてほんとうに天國に登つた心持だらう、さア何時迄御相手をして臥ても居られまい、もうそろそろ起きなけりやならないなと思ひながら、身體がだるいので起き度くもない、アーたつた一晩でも好いから、ゆつくりと夜中に目を醒さずに朝の六時頃まで延延と寐て見たい、此の頃つくぐ＼と思ふのは、何にしても女は兩親の傍に居る間が一番花だらう、呑氣で、そして我儘が通せて、遠慮がなくて、氣兼も要らず、あゝほんとうに娘の時代が思はれる。

それから考へて私の今の身の上の辛さ、併し人の妻となつて、どんなに辛らくとも頼る夫に一點の愛があつたら？如何なる苦しい辛抱もしよう、けれど、けれどもね……。考へるとつひ悲しくなる、いろ／＼な事を思ひつゞけると止め度なく涙が湧いて頰に傳はる。

百合子は不思議さうな顔して。

「母ちやんポン／＼痛いの」といつて顔をのぞく。

あゝ何と云つても世の中は親の事だ、親より以上可

愛がつてくれるものは廣い世間にない。

「あの俊はまだ起きないのか、いつまで寐て居るつもりだらう、先刻から坊の聲がして居るぢやないか。」

お舅姑の聲が百雷の落ちた樣に私の耳にひゞく、どツクリ飛び起きて大急ぎで着物を着替へる、鬢櫛でザツと亂れ毛をかき上げて百合子にも着替させる。

「オヤまだ臥て居なさるか、もう日が上りましたぞ。」

「ハイ起きまして御座います。」

手水使つて手早く化粧して神佛にお茶湯や御供物を上げながら心の中で今日一日の無事を念じる、夫の出勤の洋服を揃へて縁側にお三人の御手水を出し、楊子齒みがき、シャボン、手拭などを揃へておく、兎角する間に皆お起きになる、お湯を取り上げてて舅樣のお背中をお拭ひ申して、直ぐ用意のお茶を入れる。

「昨晩求めました新茶で御座います、如何で御座います、向ふでは飲める樣に申ましたが」

「うん、どうりで匂ひが好いと思つたよ、お前も飲んで見な却々此の茶は飲める。」

と仰る、まづお茶は及第した、今朝は朝から好いぞと嬉しく思ふ、そう／＼百合の顏拭くのを忘れてた、叱られぬ先に大急ぎで拭ひてやる。八時に食事もすむ、味噌の味が變つて居るとまづ御小言受けた。此の頃どうも升本屋はずるい樣だ、少しの間藤村屋から取らう、そしたら注意をするだらう、と下女に云ひつける、どうも頭痛がなほらない、昨夜の寐汗が無暗に氣にかゝる。

「オイ」と奥から呼ばれる急いで行くとカラーをおつけになる處だ、直ぐ後に廻つてつけて上げる、チクタイ、洋袴、チヨツキ、上衣と順にお着せ申して、一寸好い折を見て、「此頃餘り身體が勝れませんからもしやあのよし子樣の樣にでもなるといけませんから念の爲めにお醫師に診察てもらひませうか。」

「どうせ醫師へ行けば左程でなくとも病名はつけるものさ、お前なんか別に顏色が惡いぢやなし神經が手傳ふから、出もせぬ咳を出すんだ、併し中が好かつたからよし子さんがお迎ひに來たのかも分らんね。」

と例の調子です仕方がないから默つて送り出す、お姿が見えなくなると急に情なくなつて遂涙がこぼれる。
それにしても母様や父様は此間上げた私の手紙見てどんなに案じて居らつしやるだらう、もう御返事の來る頃だア、もし私が實家でこんな風に惡かつたらどうして其儘に………。

## お晝の用意

おもひ直して漸く其處らを片付けて仕舞ふ、その中に酒屋が來る、魚屋が來る、八百屋が來る、姑樣に一一御指揮願ふて午食の御菜を伺ふ、お二人は茶碗蒸しをしてくれと仰る、夜はお國料理の「ピリンチ」と極る、それで一圓の鯛を骨付き半身に車海老二尾、八百屋から椎茸五合、糸三葉一把、干生姜一錢、百合一つ、新豆一升、取つておけと仰るのであつらへる、別に昆布の佃煮がもうなくなつて居たので、今夜夜業に切らせておかうと出し昆布百目云ひつけろ、茶碗蒸しは此間蒸籠で蒸して大變手間取つて困つたから今日は一つ御飯蒸しで蒸て見よう、丁度若い方の女中の糸が臺所番だから敎へてやるつもりで、まづ鰹節の「だし」を取つて冷して置いて二人前に玉子を三つつぶす。
すると女中は「こんな大きなお茶碗に三つ計で、水見た樣な此のお汁があんなに固りませうか」と不審しさうに尋ねる。
それからお茶碗に一鹽した小さな鯛の切身と、沸湯を通した糸三葉と、うす味付けた椎茸一つと湯煮した海老の皮をむいたのを順序好く並べてそして此お汁をお入れと云ひ付けて蒸させると直きに吹き上つて見事に蒸せる、女中はまあほんとうにと感心するこれで疑ひもとけたらしい。
男樣は新豆がお好きだから鹽煮にしてあげる。百合子は鯛の目が好き故、アラをうしほにしてお惣菜にする、お午食もすんだ、豆の鹽氣が足りなかつたさうでまたお小言頂戴する私は少しも食が進まない、すぐ晩の御飯に入れる玉子を、薄く燒いて椎茸を火鉢にかけておく。處へお守の石が飛で來た。

## 親しき友

珍らしく私の處へお客樣だ、しかも大の中好の北澤の奥樣千代子さんだ、ほんとうに嬉しい、百合子までが大喜びでまといつく。お互に四角張つてあいさつする樣な中ぢやない、私の顏を見るが早いか百合子を膝の上でゆすりながら、



「マア何ンてお痩なさうたらう、そして顏色が大變惡いぢやありませんか。」

「ヱ、どうも身體が惡くつてしやうがありません」

「ぢやまたお目出度いのぢやなくつて？。」

と變に笑ひながら、

「い丶えさうぢやありませんわ、さうなら私だつて心配もありませんがね、何だか身體はだるしそ

して咳も出ますし寢汗もかきますよ。」
「イヤですよ貴女また芳子さんの二の舞しちやアいけませんね。」と涙ぐまれるので逐い悲しくなる。
「ぢやお醫者樣は誰です。」
「いゝえまだ見てもらひませんの。」
すると友は恐しい權幕で、
「マア何て方でせう貴女も芳子さんで大分御經驗があるぢやありませんか今日今からでも行つて診ておもらひなさいよ手後れになつたら仕方がないぢやありませんか私一緒に行つて上げませう。」
「でも貴女そりや私の思ふ樣にやアならないんですもの。」
だつても、外の事とはちがひますよ、病氣の事ですものそして旦那樣は何と仰るのです？」
「いゝえ別段何とも申しませんが予神經だらうから、拋棄て置けつて。」
「よしや神經にしろ何にしろ診てもらつたらいゝぢやありませんか神經だつたら結構なんですわね、内密で診ておもらひなさいよ。」
「でも行く事がむづかしいのですもの。」
「そんなら私から使を上げませう明日ね、それにしても貴女はほんとうに馬鹿な人ね。」
兩人は暫時無言やがて、千代子さんはまづ思ひ出したやうに、
「さう〳〵百合ちやん其處の御包み取つて頂戴好いものあげませう。」
先刻から四邊の形勢不穩なのでしほれて居た百合子は元氣好くひざから下りてお包みを持て來る中から、
「ヘイこれはお約束のお人形さん。」
黑繻子細工の島田の人形と小さな美しい箱入りの洋菓子二箱、溶さうな顏して百合子は大喜び。
それから色々と學校時代の御友達の話が出る、誰さんはお子さんが年子に三人出來て困つて居らしやる、誰さんは田舍に行つて教員の妻君になつて子供も四人御自分も同じ學校の裁縫の教師をして居らつしやる、常から風采の惡いあの方、田舍へ行つた上に澤山の子

持とてたま〳〵御里にお出でになつた時御目にかゝるが、頭は櫛巻にして十文字に赤坊背負つては御出での風つたらないつて千代子さん思出し笑ひなさるけれど併し心に滿足して夫婦圓滿に過して行けば之れ以上の幸福はなからうと私はうらやましくおもひました。誰さんはもう私達より二つも年上の今年は廿八とやら、それにまだミスで御出でださうだ親御が因業な爲めに、あり餘る財産を持ち、美くしく生れ付いて居ながら嫁にといふ人がないさうな、御當人餘程厭世氣味であるので氣の毒なと仰せなれど、扨それが不幸なのやら幸福なのやらわかりませんわと申せばそれもさうねと千代子さんはしんみりとなさる、夫からそれへと御話に枝が咲いて毎日の御菜に困とるいふ事やら家政がどうだとかお話はなか〳〵盡きません。



　程なく千代子さんはお歸りになる。

お送りして門の處まで出て郵便を受取る、嬉しい實家の母からだ一寸明けて見ると案の條大變なお案じ方、そして爲替が十圓……私は思はずお手紙を頂く、胸が一パイになつて急いで巻いてしまふ。

# 下婢の同情

其中主人も歸つて來らつしやる例の如く、着物をお脫せ申しほこりを拂つてたゝんで居ると、

「オイ今夜又宮原と阿部と外に三人計り來るから二三品で好いから晩食の用意をしてくれ。」

ア、今夜も又御客樣かと情なくなる。

「何だ變な顏して居るね、客だと云ふと直き貴樣は嫌な顏するぢやないか。」

と仰るそりや變な顏したかも知れないが每晩の事だから少しは御氣もとがめるらしい。

「イヽエ別に嫌な顏するんぢやありませんが、ソリヤ貴方私だつて身體は惡いし、一晩や二晩ぢやなし、此間から每晩の御客樣でおそくはなるし、隨分辛からうぢやありませんか。」

と遂一言申上ると。

「何ツと云ひ樣よけるいとまもあらばこそピシヤリと橫顏を打たれました。どうして此樣に手荒いのか、仰つても分るものを……こうなると最ういくら叱られても口を極めてのゝしられ樣が、叩かれ樣が、蹴られ樣が私は默つて居る、云へば云ふ丈損ですもの、涙も何も出やしません。此んな事見て居ると百合子の小さな心に傷がつきはしまいかと案じられて仕方がない、私なんか兩親の云ひ合ひなさつた聲なんか聞いた事もありません、まして手などを、性質でせう、私が默つてるので張合拔がしたものと見えて夫も默つて私を見て居らつしやる、お互に手持ち不沙汰だから其處ら一通りサツサと片付けて臺所に來て女中に

「お客樣だから氣の毒だが八百屋と魚屋に一走り行て來ておくれ」

と云ふと女中は目を圓くして。

「オヤ〳〵今夜もで御座いますか。」

口には何も云はぬが可愛想にねむい盛りの年だもの辛からうとつく〳〵思ふ。

「奥樣本當にお嫌で御座いませうネ、何ともない私でさへ辛う御座いますもの、貴女はお身體がお惡いのに、

イ、エお氣の故計ぢや御座いませんですよ、なんなら診てもらツて御覧ん遊せ、何處かお惡いですよ此間もねお松どんがお前さん處の奥様も御可愛想だ、よくまア彼様舅姑の御機嫌を取つて居らつしやる、そりや舅姑さんのむづかしいのは世間にたんとはない、けれどあきらめもつくさ、だが旦那様のお氣六つかしさ一通りぢやない、ほんに辛抱强い方だと賞めて居りました」とはしたない下女の其れでも同情の積か云ふて異れる志は嬉しいけれど。



「此れそんな事大きな聲で云ふてお異れでないよ。何にもネ私が足らないからだわネ。」

「いゝえさうぢやありません、みんながさう申しますよ。」

「好いよ聞えると惡いからよしておくれ、さうしてね早くしないと又叱られるから、さうだ、お吸物の種になる様なものは今朝位の鯛なら片身迄は要らないがまア片身取つてお出で、お殘りはお味噌にでもつけませう、それにおさしみを六人前、牛肉を一斤半、六つに切らしておくれ

八百屋からめうが竹を、一把と、サラダ少し何二三錢もあれば澤山よ。」

## 酒客の來襲

それから直ぐにお仕度に懸る、ピリンジの御魚を油でいためて、昆布と鰹節の半々の「ダシ」を濃く取る、お姑樣にお加減を見て頂く、少し甘いと仰るのでお醬油をさす、百合子がお守りの石と歸つてくる。

「母ちやんおもちろいとこ行つたの。」

とニコ〳〵してすがりつく。

「そう何處でせう敎へて頂戴な。」

ウフ、つて石やの顏見て笑つて、

「きれい、姉ちやん、ペン〳〵〳〵〳〵彈いてかうして踊るのと、變な手付きで首を曲げて身振して踊り出すをかしさ、姑樣も私も笑ひ出すと石や涙を出して笑ひこける。

「何を見せたのかい。」

「今日藝者屋のある方へお連れ申したら踊の温習をして居りましたのが大變御氣に召してどうしてもお歸りにならないのです、餘りおそくなりますので嫌だつて仰るのを無理にお連れ申したのですよ、そうすると姉ちやん、ペン〳〵つてお脊の上で一生懸命眞似して居らつしやるもんですから、途中で皆さんがお笑ひなさるんですよ、さうするとお孃さん好い氣におなりなすつてお踊り遊ばすんですもの。」

歸ると百合子は飛び出してお祖父さんの處でお腹をよらせてゐる夫も笑つて居らつしやる、ほんに子供つて直き眞似するものだ、孟母が三度居を變へたも無理はない、併し百合子は私より腕がある、家の中では子供が王樣だと思ふ。

女中の糸が歸つてくる、姑樣と三人懸りで仕度をする、姑樣も毎夜の事とて、流石に不平らしい、お客樣はだん〳〵御出る、お座敷はにぎやかになつて來た、お銚子の數も增す、お談話は次第に花が咲く、却々に濟さうにはないし、遲くもなるので、御兩親や百合子にも夕食を進めて私も下女もすませて仕舞ふ、百合子

眠いとてぐづ〳〵云ひ出すので、一寸後を姑様に願つて臥かす、疲れて居るので好い氣持ちになつて百合子より先きにツイトロリとなる

奥様々々と呼れてビツクリ目が覺める、

「御飯と仰います、それにお菜が足りないから何かこしらへろと仰るので御座います。」

「ア、そう、困つたネ、アノ玉子はあつたかヱ、ヱ、五つ計り御座います。」

「よわるネ、何をしようかしら、お姑様は。」

「先刻お部屋へ入つしやいましたよ。」

「今何時。」

「十時頃で御座いませう。」

「それぢやアネ、石に云ひつけて玉子十計り買はしてお呉れ。」



御飯も冷めたらう、サア此うしては居られないとツツと脱けて臺所へ來て見る、美しく片付けてある、又汚させると、思ふと使ふて居る者にも氣の毒だ、一寸御飯を蒸しに懸けよう、今からもう面倒だから玉子の半熟をこしらへて出す、やつと御膳を引いて仕舞ふと十一時、食後の果物にはイチゴを洗つて出す、御話は盛だ、お話の要は大抵來る獵期の話と此頃の漁獵の話で持ち切つて居る、サア又十月になると大變だと今更の様に皆さんのお顔が眺められる、それでも阿部さんは、

「どうも毎日上りまして御馳走になります奥様のお嫌

な話計りして居ります。」
とてくすぐつたさうに笑て居らつしやる。
「却々御熱心ですからもう鳥も今から用心して居りませうよ。」
「イヤアどうも、とれないと云ふ諷刺ですか。」
とて皆さんがお笑ひなさる、罪のない人達だけどもお尻が永いので弱る、併しお顔を見ると皆呑氣な方計りだから嫌な心持ちはしない、毎日でないと本當に好いけれど、來られる私は困るが、お歸りを待つて居らつしやる奥様達もあるものを、さぞお嫌だらうおねむからうと同情する、却々御話は盛で居らつしやるが、もう別に用はあるまいと下女二人を臥らしてやる、長火鉢の鐵瓶とにらみくらをしながらウツラ〳〵とお舟をこいで居る、夜になると咳が出るので苦しい、咳で目が覺めては又靜るとねむくなる、現つ心で聞いてるとお座敷では此度の土曜から日曜にかけて相州海岸に漁獵に行かうと決定したらしい、十二時が打つ！
「ヤアもう十二時か」
と皆様そろ〳〵お尻が上る、燈を持つてお玄關へ送り出す。
「どうも失禮いたしました又どうか、奥様によろしく。」
と送り出す心の中では幾ら來しつても宜しいから、此れからは夜をお更し被下ぬ樣に來て下さいと念じました、夫は機嫌が好い、先刻の事なんか忘れて居らつしやるのだらう、お尻が長くて嫌だけれど此の御連中が入らつしやると何時でも御機嫌だから其れ丈でもよいのだ。
「もう何時だとおつしやるから先程十二時打ちましたと申上るともうそんなになるか話して居るとちつとも分らんなと、思ひ出した樣に笑つて居らつしやる、お茶入れて上げて、お座敷を片付ける、朝一緒に洗ッて貰はうと臺處へ片よせておく。
もう皆眠たかと仰るから「エヽ可愛想ですからお先へ臥らせて仕舞ました。」
お前も眠いだらうつてお笑ひなさるから、私も仕方なく

なしにヱ、眠う御座いますよ。

「目がくッついて仕舞つてるせ、いや御氣の毒様で御座います、毎晩御睡い目をさせまして其の替り此度の日曜は鯛を澤山取つて來てウンと御馳走いたします。」なんて大變な上機嫌で床にお這入りになる何時もこうだと好いのにと私はおもひました。



サア此れからが私の樂天地だ、手早く寝衣に着替へると先刻來た母様の御手紙がパラリと落ちた、ザツと目を通した儘だつたから讀みなほす、何度讀んでも讀でもあふれる樣な御文、しみじみと讀み返して、ボンヤリ考へて居るとチンと一時……。

正氣づいて落しては大變と簞笥の中に仕舞ひ込んで一通り火の用心を見て、夫の枕元に水指や嗽ひ水をさし上げて可愛いゝ百合子を抱き取りました。



# 令嬢日記

金盞花

▲十四日火曜、曇り。

漸つとお化粧がすんだ頃歌子さんが本郷座へ行く〳〵夕方迄宅で遊ぶ心算で被入つた。

御召の顫ひ付き度い程の佳い柄の着物に繻珍の帯を恰好好く結んで髪は矢張り束髪の油氣なしで、左に一輪紅薔薇を挿して被居る。纖削で奈何して彼あ恰好が好いのかしらと歌子さんを見る度に羨やましくてならない。母様と面白さうに話して被居るから私は座を立つて兄様に歌子さんが被入つた事をお報知しようと思つて、ソッと廊下を音のしないやうに抜き足で行つてお部屋の把手をくるりと廻すより早くパッと開けて、顔を出すと影も形も無い。オヤ、と張合抜けがして、「兄様」と的も無く呼んで見る。兄様は脳が悪いと云ふので此の一週間程ブラ〳〵して被居るのです。

「何だい。」と窓の下で聲がするから吃驚して窓の傍へ行くと兄様一生懸命に菫を弄つて被居る。薄日がさして何だか四邊が黄ろいやうに見える。今日は何だか兄様のお貌の色が特別に蒼白いやうに思はれる。櫻の花が其處等に一ぱい散らかつてゐる。私は唯笑つて兄様の顔を見乍ら立つと、

「素敵に大きな聲で兄様と來たからな、吃驚りしたよ、僕の耳がガアーンとして了つて、久潤くは何の音も聞え無かつた位だ。よく那麽大きな聲が出るね。」と仰在つて憎らしい薄笑して被居る。まア眞實に憎らしいわと思はれたので、

「えゝ、何とでも仰在いよ。いゝわあらもう切角佳い事をお報告せしようと思つて來たんですけれども申ませんから、澤山何卒何とでも仰在つて頂戴。」

「イヤに威張るね。處が幾等威張つても菊さん君が自

慢して今に奇麗な花が咲きますわ。とか云つた菫が此かい、え、けちな花だよ見たかい。こら。」と一輪摘んで私の目の前につき付けて仰在る私は故意と、

「あら！　私のを取つて、厭アね。母様に云つてよ。兄様は私の悪口許り仰在つて、加之に菫も……切角大切にして僅た三輪しかないのに其一輪を摘んでお了ひなさいましたつてよくつて？」

と大袈裟に云ふ。

「大きな聲だなア。菊さんは那麽大きな聲を持つて居乍ら奈何して琴の時は彼麽蚊の鳴くやうな聲しきや出ないんだらう。不思議だねえ。」



と首を捻つて考へるふりをなさる。私は先刻から口惜しくつて〳〵堪らないから、何とか云つて一つ意趣返しをしようと思ふけれども生憎旨い事が見付からず。仕方がなしに。

「ちやア私もう云はなくつてよ。」と一寸兄様の氣を引く。

「何だい？　まア云つて御覧ん。」

「厭アよ。」

「何故？　云つて見給へ、奈何しても云はせる。」

「ほゝゝゝお目出度う御座います。」

「何が？…」と白ばつくれて被居る。もう歌子さんの來て居る事は整然と知つて居乍ら、

「嬉しいでせう？　だからそら、幾等すまさうと思つてもすませないぢや有りませんか。」

「何だい？　僕には薩張り分らないよ。」

「まだ白ばつくれて被居るの、だめよ私もう整然と見破つて了ひましたから。」

「ふゝん。何をさ。」

「何をさなんて、歌子さんが被入つてよ。」

「何だ那麼事かい詰らない。」

「あら詰らない、なんて嬉しくつて堪らないのでせう。」

「馬鹿な事を云つちや不可ない。」

と仰在り乍らも何だか嬉しさうな御樣子、私はもつと揶揄つて上げようかと思つたけれどもまア此位で堪忍して上げて又引き返す。

「菊子さん何處へ行つて被居つたの。」と歌子さんが仰在る。

「今ね兄樣の處に歌子さんが被入つたつて報知て來ましたの。」

「まア……。」と歌子さんは眞紅になつてお了なさる、あゝ惡い事を云つたと後で氣が付いたがもう遲い。

「何ですね菊さん那麼事を云つて御覽んなさい髮がこはれ掛つたぢや無いか、奈何して然うお轉婆だらう。」と母樣は笑ひ貌を强いてしかめて被居る。一寸髮に手をやると束髮のまいた毛の先が弛くなつて、全く解け掛つてゐる。

「だつて洗髮ですもの。」と負惜みを云ひ乍ら直す。

「貴女お島田にお上げなすつたつてねえ。拜見したかつたわ。」と歌子さんは笑ひ乍ら。

「厭アネ可笑しいんですもの、乾度お笑ひなさるわ。」とつい赧くなる。

午後からはお友達の噂やら今度お誂らへになつたお召物の話やら。意氣が佳いとか上品なのが佳いとかいふお話しをして。三時半頃から着物を着替へたり髮を結び直したり。念入りのお化粧りをして出かける。

本郷座は随分大入りだつた。浪子に大に同情して了

ふ。宅へ歸つたら十一時すぎ。何だか草臥れたやうな心持ち。女中がお召物を疊みませうと云つたけれども故意と氣取つて。長襦袢丈衣桁に掛ける。濃い葡萄色の地に派手な大きな蝶の模樣の友禪が夜目に恐ろしく艶めいて見えた。兄樣が菊さんは浪さんに同情して大に泣いたね。なんて散々冷やかしてお了ひなさる。床に入ると恰度十二時が打つ

▲十七日金曜、晴天

午前は別に之と云つてした事もなく。花壇の花を摘んで私の部屋の洋盃に挿して、夫れから木蓮と八重櫻を二杯母樣のお居間と兄樣の處へ活けて上げる。旨く活からないで散々癇癪が起つた。午後からもお裁縫をする。山内さんから電話が掛つて來た。用は別に無い、御手紙に明日電話を掛けますからつて云つて來たから甚麼珍らしいお話が有るかと思つたら。明治座へ行つたとか、お兄樣が此度洋行なさるとか云ふ僅た夫れ丈、隨分彼の方の大袈裟にも驚ろく。



夜は何にも爲るのが厭になつたから一人で茫然考へてゐた窓を開けると月が餘り佳いから庭下駄を穿いて庭へ出る。春の月にしては清く澄んで朧月とは云はれない。夏に近いやうな月。父樣が櫻がお好きだから庭には可成ある。夫れが一時に咲いたので、庭へ出ると闇にも薄明く見えるだらうと思はれるやうな。振り仰ぐと花で閉した處は月さへ射さない。春の夜風が習々と私の

逆上せた顔を撫でゝ佳い氣持。千斷れ〳〵の綿のやうな雲が飛んで。一時サッと花吹雪が私の袖や袂にかゝる。恐らく髪にも止まつたらうと思はれる。靜かで何の音もしない。唯折々思ひ出したやうに地蟲がジーと細く鳴く。私は櫻の木に倚り掛つてゐると不意にバイオリンの音がする。初めは調子を合せるのだらう。ポツン〳〵と妙な音がすると思つてゐると軈て弓を擦り初めたのでやつと佳い音がする。讓さんが又初じめたのだらう。眞實にバイオリンが好きだ事。と思つてゐると突然兄樣のお部屋の窓が開く。

「誰だい？」と兄樣のお聲。私は返辭をすまいかとも思つたがそれぢや惡いと思ひ返して、

「私よ、此處に居ますの。餘り佳い月ですから。」兄樣も被入いな。」

「菊さんかい。おどかすぢや無いか。僕は泥棒かと思つたぜ。」

「まア臆病な方。」と私は笑つた。

部屋に入ると俄にムッとするやうな氣がする。私が寢てからもまだ讓さんのバイオリンの音が聞えてゐた

▲十九日日曜、晴れ。

從兄の文雄さんが先日赤羽とかへ行つたら、大變に櫻草とかゞ有つてソレハ〳〵奇麗だつたから一度行けと是非進めるので奈何しようかと思つたけれども、謙ちやんのお友達も行つたと云ふので行く事になつた。同勢は、兄樣讓さん、文雄さん、私。歌子さん謙ちやん謙ちやんのお友達に女中が一人と八人して上野から汽車に乘る。上野迄の電車の中で讓さん可笑しな樣子でもして居る人があると袂をちよい〳〵引張つては獨逸語で惡口を云ふ。

「菊さん。」と少さい聲で云ふから、「え？」と私も低く返辭をすると「前の女學生は不景氣だね、あの樣子を見給へ。

「イヤ、もう惡いわ。」と云つたが思はずクス〳〵と笑つて了ふ。

上野の停車場は大變な人で皆な大方飛鳥山へお花見なのだらう。踊りのお師匠さんとも思されるやうなの

や大勢が乗り込む。屹度這麼人が花吹雪の中を三味線を弾いたり踊つたりするのだらう、と赤羽行きは止して飛鳥山へ行つて見たいやうに思はれた往きから相談が極つて私達女連三人と文雄さんを退けた後四人は田端で降りて何處とかゝら舟で行くと云ひ出した。無論皆さん方はボートが御自慢なのだから甚麼舟でも平氣だと云ふ事。四人は田端で降車る。之か



ら荒川の堤を櫻を眺め乍ら舟で行くんだから愉快だなア。なんて大層な威張り方。櫻草のある何とか云ふ原で待ち合す事に極める。王子迄來たら皆んなが一時にドヤ〳〵と降車る。飛鳥山の處では大勢人がズラリと立つて居て汽車が來る度びにワアッと云つて囃す。赤羽の、停車場で降りて兵隊屋敷を抜けて随分道が有る。熱い太陽は眞直ぐに照り付けて、日傘

で遊ばたつてなか〳〵熱い。まだ〳〵近いと思つたら遠いのねえ。とか何とか云つて、散々文雄さんに愚痴を零して漸つと原に着く。眞赤に櫻草が咲いてゝ、ベッタリ櫻草の花莫座でも敷いたやうな。處々に名の知れぬ黃ろい花が交る。ズッと向ふは打ち霞んで畑打つ男の手拭許り白い。麥の靑いのと菜種の黃なのとが、一ッ置きのやうに見えて、何とも云へぬ長閑さと田舍めいた趣が染々身に迫る。ピイ〳〵と向ふの笹——竹の林かしら。其上邊り、雲の中の雲雀が鳴くのが幽かに聞える。丈の高い芦の枯れたのが河の堤に添ふてズラリと並ぶ。中には刈られたのもある。折々の風に河面は小波を立て乍ら緩く春らしく流れる。時折は白帆も送る。私達は唱歌を唄ひ乍ら根から折つて花束を二つも造らへた。草臥れた時は其處に半帕を敷いて坐る。大勢櫻草摘りに來て居る人がある。

二時間程經つても皆んなが來ないので奈何したのだらうと皆なが急に云ひ出す。這麽に遲い筈は無いと文雄さんは大變に心配する。で少し經つてもまだ來ないので兎に角停車場迄行く事にしてクロ〳〵行き初じめると、少しして、後ろからバタ〳〵と馳け出して、「菊さん、」と云ふので振り向くと讓さん汗だらけの少し陽に燒けた貌をして、馳け寄る。

「奈何したの。」と一時にきく。

「兄樣は？　私達はもう三時間も前から待つてたのよ。奈何なすつたの。舟は何處にあるの。」

ときくと笑ひ乍ら、

「奈何して〳〵風があるものだから二間行けば一間も一間半も戻されるんだもの。皆んな一生懸命になつたんだがもう誰も草臥れて了ッて、此處迄來られないんだ。斷念めちまつて歸らうつて云つて居るんだが兎に角皆んなに云はうと思つて僕一人來たんさ。」

「まあ、ほゝゝゝ。」と氣の毒だけれども笑ふ。

「だつて切角此處迄來たんですもの、櫻草を取つて被入いよ奇麗。」「もう皆んなへと〳〵だもの無益だよ。此處迄來る勇氣は有りやし無い。」

「何處に舟が有るの。」

「あれ、彼處に小さく白い物がポツ、と見えるだらう彼れさ。」

私達は目を大きくしたり細くしたりして一生懸命に見ると成程ポツリと小さい白い物が見える。彼れが兄樣の襯衣だと云ふ。

「ほゝゝ丸で膝栗毛のやうね。」と歌子さんが笑ふ私は

「膝栗毛つて？」と聞くと、

「あら彌次郎兵衞、喜太八ちやありませんか。」と云ふ。私には何の事だか薩張り分らず。

「何有？。」と又云ふと、

「はゝゝ彌次郎兵衞を知らないのかい。驚ろいたなア。」と讓さんが笑ふ。

歸りは下るのだから樂だと云ふので矢張り其儘舟で行く。私達は汽車。宅へ歸つたのは五時頃。私達の方が一時間も早かつた。

舟の話で家中は大笑ひ。皆んな掌に豆が出來て、痛くつて〳〵堪らないと云ふ騷ぎ。斯うなつては短艇の撰手も何もあつた物ぢやない。

何しろ大變な波だつたからとの云ひ譯がついた。お湯に一緒に歌子さんと入つて、車で直ぐお歸へりなさる。私は早く寢る——九時半。



# 處女の述懷

ゆき子

○

甚麼に言はれても戀愛などあつた例のない私、失戀とかいふ浮くに浮かれない淵瀨に沈んだ事もなければ、只もう樂しさ愉快さに引かれて、今日まで繼けて來ました。するとあたら花咲かせずに朽ち果てさせるは惜しいとか可哀相とかいつて、結婚談を持ちかけて來る方が數多ありますけれど、何れも〳〵皆空吹く風と聽き流して居ますが、さすがに頑固だとは自分ながらも度々思ふ事があります。異性相愛する嬉しき夢など、いろ〳〵書物では見て居りますけれど、さて何んなものやら露ほども想像はつきません、齡はもはや二十に五ッを重ねて居りますけれど、うぶな心に、世上の知識は皆無、年若き人々の愧らふ時にすら情とい

ふものを解し得ません、ほんにまあ女性でありながら女性でない私かと我ながら疑ひも起らぬではありませぬが、私は少しも奢るなどいふ念はありません、白粉一ツ買ふた例もなければ石鹸や香水を使ふ氣も起りませぬ、若し人から貰へば直ぐに進上て了ふといふ始末、左樣かと云つて束髪グル〳〵卷の殺風景でもなく袴を穿いて、大手振りつゝ大道歩く私でもありません。

○

人並に生れて暖い血と涙とは矢張人並でありますから、何事に付け同情を以て共に悦んだり、泣いたりして上げます、私のやうな者にでも秘密を明かして信じて下さるお友だちがあつて、勉强の暇費すこともありますが、それも浮世の人付合と存じて情なく拒絶する事も出來ず、結局は我身に迷惑被さうな事あつても力を盡して上げます、お友だちの一人が斯々と包まずその身の秘密を打明かされたのを、ちと迷惑とは思ひましたがさりとて斷りもならず、早速その用向で或る紳士をお訪ねした事すらございます。

○

小鳥の囀づる聲に夢驚かされて、目醒めると、細やかな糸幾筋も引きて日光は昨夜机に讀みさした書物の上を射て居ます。唱歌、ピアノ、繪畫の書は机の上に下に取り亂されてゐる、之れが私の獨居を慰むる友です。私は一生讀書に耽り、音樂を嗜みて、お友だちの悦びは共に悦び、悲みは共に悲んで獨身生活を營みませう。

○

一年二年と暮るゝ年波重つて、世は種々に變り行き、友だちの誰れ彼れ、今は一人二人の子持ちとなつて、何方も眞面目に家事を司つて居られるが私のみは何時迄も獨身の氣樂者、けれど子供を見ては矢張可愛と思ひ林檎の樣な頰、無邪氣な物言ひ、紅葉の手もて大人の眞似などして笑くぼつくる樣は、飛付きたいほど愛らしうて、膝に上げ、頰ずりしますから、自然付き纏はれるので學校の歸途に、散歩の途上に、美しい玩具でもあれば、それを小さなお友だちに買つて持つて行くのが例です。

○結婚なすつた方を見ると、何うしてまあ知らない方とよくも一緒に居らつしやれる事よと、私の心には妙に感んせられます、私は何時迄經つても全然で小兒の了簡、結婚するのは男と一緒に住ふ事とおもへば氣味の惡い事。何うあつても私の心は結婚に向く事が出來ません。一般婦人の心理を解し得ぬこそ不思議です、路行く折、夫婦仲睦じく打連れたまひて、散歩やらんお出かけ遊すを見る時、よくも彼の立派な御婦人があの様な髯武者な旦那樣に……彼の紳士にも不似合な奥樣お持ちで……などと夫れは〳〵不可解とでも申さうほど、假りに私に結婚撰みを致させましたら、古代の英雄豪傑に二十世紀の情愛有たせたらん人ならではと、自惚心の甚しさ、其れで私は何うか、と云へば、二十世紀のおかめよろしくの容貌、されど今の世に獨身生活ときめこむ方は多くまあ斯る所を樂しみたまふでせう。



○

獨身で生活す時は朝起きるにも、夜寢ぬるにも心の儘です、夜の更くるをも知らず、讀書に心奪はれる事も度々あります。晴やかな日には獨り郊外に遊びて、草を摘み、小さな花束を作つて机上に置き、薔薇や菫花などの庭園に咲いて居るのを取つて、遠く別れたお友だちに送るなど、舊交を温めます。黃昏時には靑葉の下を逍遙して、詩歌を誦し、天地の美を歌ひます、茲三四年お目に懸らぬ長崎のお友だちから到來した手紙に、『御存知の兄がお世話に成りし方の媒介なれば兩親には泣つかれ兄よりは賴まれ、私一人の身を捨つれば何んでもないと當方に參るは參つたものゝ、敎育も學問もなき人に候へば談話など致して精神の快樂を覺ゆるなどは四年が間未だ一日も無之、たゞ〳〵昔し都に物學び致せし事ども思ひ浮べて果敢なき身の不幸をかこつのみに候よ、黃金を山に積みても、そは幸か、不幸か、寧ろ妾は貧しくとも精神的快樂を希ひ居候』云々と書かれました、此の手紙を讀み終つた時に私は、急に私の八疊の室に奇しき光りが入り來て、愛讀の書は永劫の慰安を示すさまでした。

### ▲一粒米

森恒太郎著　博文館發行

この書の表題頗る珍、一體どんな事を書いたものであるかとまづ讀者に疑問を以て迎へらるゝであらう。著者は某地方に相當の地位もあり。學問もある人であつが、原因は不明なれども中年に兩眼を失して盲目となつた、失望の餘り自殺を企つ事一再ならず、後飜然悟るところあつて失明境中に樂地を求め絶望の中に光明を見出しこれより、一身を犧牲にして社會公共の爲めに盡さんと決心し遂に村長に撰まれて治績を擧げたといふ頗る奇特の經歷ある人である、この書は即ち自己の失明以來の心的情態を記述したもので、人生境遇の變轉個人苦樂の觀念は去る事ながら、さてどうしてこの書を著はしたかといふに、元より盲人の事であるから、始めは點字板やポイントタイプライターで書かうとしたが遂に成らず、後口述筆記によつて稿この書を成したといふ由來を聞いては何人も感奮せずには居られないとおもふ。新渡戸博士、坪谷水哉氏の序文によりて著者の人と爲を得べし。(定價四十五錢)

### ▲女子禮法敎科書

中島義一著　博文館發行

實用の學問が進むと共に行儀作法が段々衰へて來るのは止むを得ぬ次第であるが、それが爲めに日本固有の美點をも無くするのは歎ずべき事である。この書は大日本婦人正風會を發起せる中島義一氏が我が國固有の禮法に則り今日の社會並に家庭の實際に考へ合せて作られたもので、小學校用、女學校用、家庭用の三方面に區別し、簡より繁に入り、三方面を通じて婦人一切の作法を敎へ女子交際上の心得はすべて洩らすところなく一々圖畫もて丁寧親切に說示したものであります。(定價三十八錢)



# 虚榮の夢に呪はれたる人の空中樓閣

抱雷女史

## 悪魔の手引を警戒せよ

まゝになるならば彼もして見度い、斯うもしようと自分で思つて夢のやうな事を考へる。

氣まぐれな小雨がたら／＼と廂を打つ、寂しい靜かな物思ふ人の喜びさうな宵である。

◎居室は

先づ住居なんかは敢えて大厦高樓で無くとも好い、併し少なくとも西洋間と日本造りの五六間位は無くては困る、而して自分が其家の女主人で誰れにも頭を押へられない自由な身で有りたい。

夫れから庭だけは思ひ切つて廣くしたい、と云つても決して池が欲しいの築山が有つて欲しいのとは云はない、何はなくても自然のまゝ少しも造らないのが好い、箱庭の樣にやれ石燈籠の、やれ泉水のと云ふよりも、雜木林なんかの方が反つて趣味が有つて嬉しい、秋になれば段々梢が淋しくなるのも好い、落葉して枯木ばかり目に入るのが甚麽によからう。

而して其女主人即ち私は出來ない相談ではあるけれども奈うかして何時迄も廿前後の歳で居たい、で自分の室は西洋室と日本室と二た間は要る、隅の方にピアノを据付けにして、洋書を入れた硝子戸の本箱と並べる繻珍か何かの華美な坐褥を置いた纎細な奇麗な椅子、机の上にはインキや何か普通の物が一通り有れば好い

而して美しいソフワーにでも倚り掛つて靜かに英詩でも讀んで居度い、と扨斯うなると第一其女主人からして注文がしたくなる、何んでも痩せぎすの細そりした色の白い髪の眞黒な、眼付の人をひき付けるやうな表

情に富んだ黒目勝、そして金縁の眼鏡でも掛ければ一層好い。

日本造りの方の居間は八疊敷位で澤山、床間には式の如く花でも活けて、雪舟か雪村の軸でも掛けとけば夫れで最う大した希望も無い奇麗な紫檀の文机に蒔繪の硯箱、青貝か何かの手箱でも置いて、座蒲團だけは綿のふつくりとした少し大形の、紫縮緬の無地かさもなくば大きい蝶の何か華美な模樣を白で拔いたのに限る。

◎化粧道具は

化粧室は西洋造りで明るい、小ぢんまりとした大きな姿見鏡が二つ無くつては後姿や帶の結び方を見るのに不都合だから是非要る、併し一つは鏡臺になつて居るのも好い、瓦斯を引いて何時でもお湯が使へるやうにして置く、而して凡べての化粧道具は成可揃へなければならない、白粉ならまア白、肉色、青等此部屋へさへ入れば直ぐにお化粧が出來るといふやうにして香水も然う澤山も要らないけれども、在宅に居る時は極く淡いローズかヘリオトロップなんかを香はせて、外出の時はリヽーだのヴワイオレットのやうな强いのをつける其時によつて異つた香をさせたいから何しても種類は多く無いと困る、例令へば百合の模樣のお振袖でも着た時には成る丈襦袢の襟にも百合、帶の形にも百合といふやうにしたいから何うしても斯ういふ場合には嫌でも百合の香水をつける、夫れから髮結道具も一通り揃へる、束髮の三枚櫛も金などはキラ〱するばかりで餘り賤しく、物欲しさうで好かぬから、鼈甲に限る、ピンは成る丈細くて長いのや、針金のやうに細いのや是れも却々數多く要る。

此髮だけは私も最う一生懸命で種々に結つて見る、前髮の出しやう一つで隨分顏の形が違つて見えるものだ、苦心するだけ樂しみなものだと思ふ、根の思ひ切つて下つたのも好いし又高く結ふのも好い、日本髮なら銀杏返しのぐつと意氣にする、前髮を廣く取つて根を心持ち下げて、輪は掻きつぱなしにして置くのが私は一番好き、何んでも上品なさもなくば意氣に造くる

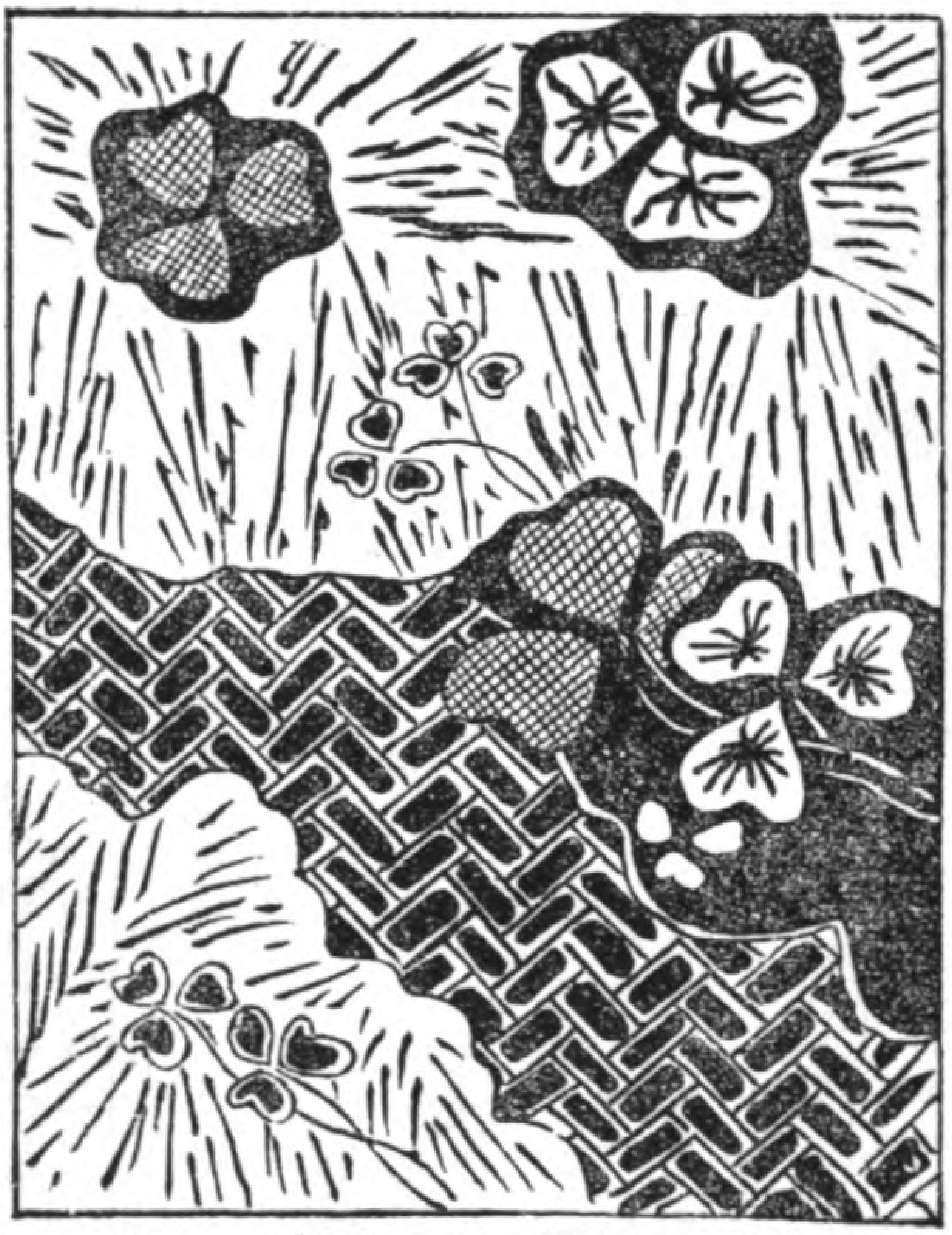
のが好い中途なのが何よりも嫌ひだ。

◎裝身具は

私は何でも好いから他の人のしない事がして見度い何爵令嬢だの令夫人だのなんて根つから振はない御容色で、感心も出來ないのに、イヤに澄し込んで高慢で、容體ぶつて居る、活人形達の鼻を開かせるやうな眞似がして見度い。

私は夜光珠と紅珠が大好きで眞珠は餘りぞつとしないから、指輪も夜光珠と紅珠ばかりにする、わけてルビーは指が奇麗に見えて美しい、けれども襟留の寶石だけは奈うしても大きな夜光珠に限るやうに思ふ、首掛時計も平常用と外出のと盛裝した時のと三つは持つて居なくては肩身が狭い、夫れに準じて指輪も少なくとも七八つは欲しい。

羽二重地。酸漿絞り　（三越立案）



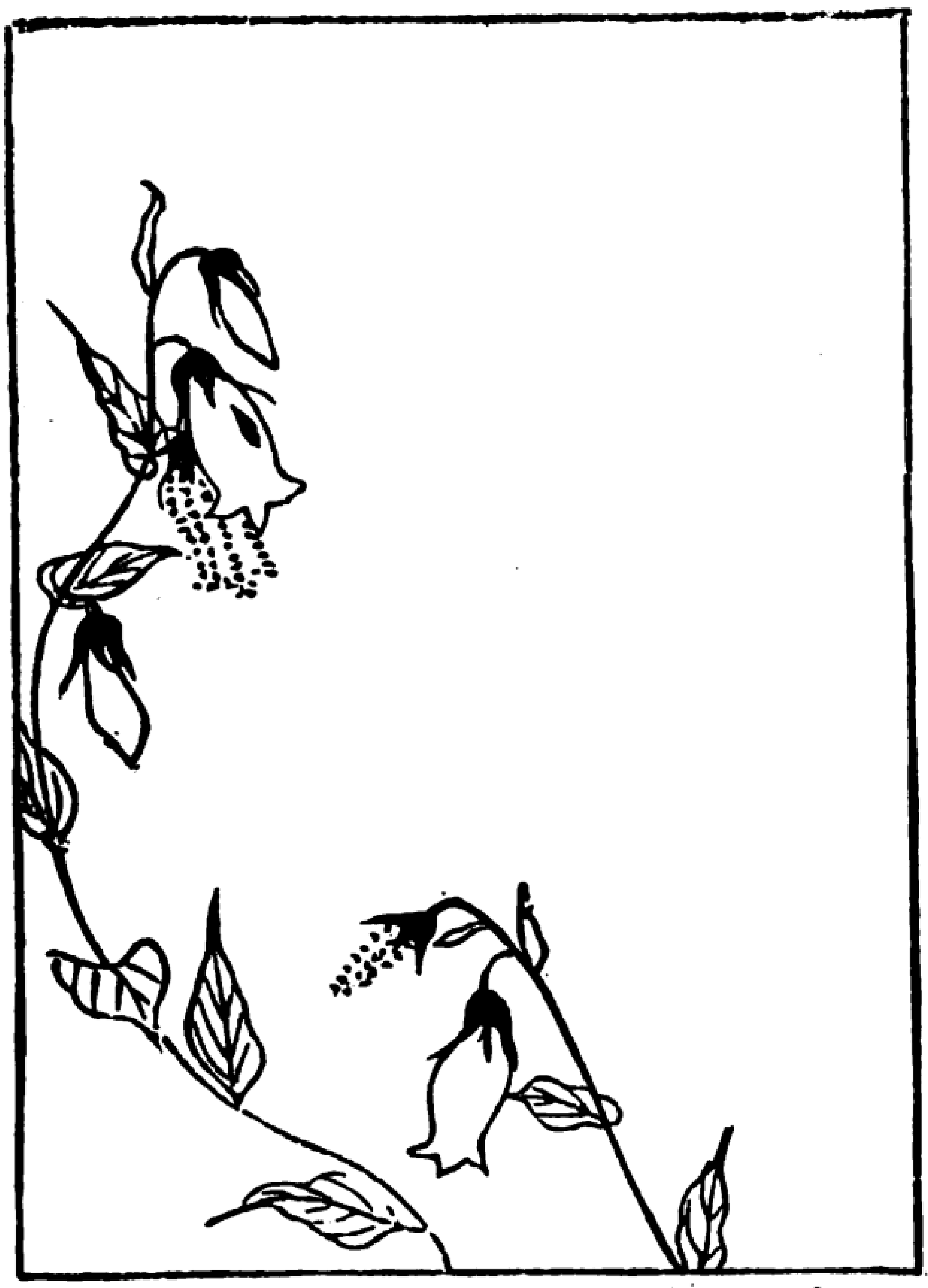
着物や身の廻りの持物だけは流行に後れないやうに氣を付けなければならない、例令ば洋傘にしろ去年と今年のとは同じやうで居てもよく見ると幾程ゞゝか形が異つて居る、深張りになつたかと思へば淺くなる、柄が長くなつたりする、だから毎年春先にさすのと盛夏にさす眞白なのと二三本は要る、縞も好いが華美な縫ひ模樣の有る空色のが一番好い、而して杖は比較的に長くないとすぼめた時に形が惡い、斯いふのをさすには腕車に乗つても母衣は掛けずしやなり〱として居なければ似合はない。

◎衣裳は

夫れから着物は平常は夫れほどめかさなくとも好い

けれど、絹物は何と云つても姿をよく見せるからまアお召縮緬位な處だらう、飛白か縦横縞等が好い、羽織も同じ物かさもなくば絹縮や山繭入りのをぞろりと羽織る、夏ならば紺飛白の代りに大島紬、帶も夫れに相應した博多か羽二重位の處で結構だ、其代り外出する時となつたら少し位陰口を聞かれても構はないから思ひ切つた装がしたい、華美もよし、質素もよし、馬車に乗るのは猶好い、恁麼事を考へながらふつと我に返へると空中の樓閣は消へて跡なき夢のごとし、何とも云はれぬ淋しい感じがした、が併し眞面目になつて考へて見ると若し現在自分が人の妻となつて居ながら、萬が一にも今の世にこんな樓閣を實現しようといふ野心を抱いたならばどうであらう、試にその結果を想像して見ようか若し私が官吏公吏の妻であつたならば、やがて良人は收賄罪で刑事被告人となるであらう、もし私が文士の妻であつたとしたなら、鋭利な剃刀が良人の頸動脈を切斷するであらう、若し私が商家の妻であつたなら我家は忽ち破產の宣告は動かぬ處ろであらう、若し私が銀行員であつたならば、行金費消で惡名を流すは必定である。

裾模樣　螢



　思へば恐ろし、嗚呼恐ろし、さても虚榮の夢のおそろしさよ實に虚榮の夢は惡魔の手引である、身を斷つ斧である、婦人の身にして一たびこの虚榮の夢に呪はれたらば底知れぬ淵に身を沈めたと同じ事で、終世浮ぶ瀬はあるまい。返

す返すもこんな事を夢見てはならない、苟しくもこの世に生息してゐる間はこんな馬鹿らしい夢を見てはならないとおもふ。と思へば消へて跡なき空中樓閣こそなか〳〵に今の我身に取つて嬉しき極であるされ人間萬事は心の作用である、自分の心の持ちやう一つで甚麼苦痛の中からでも樂しみを見出す事が出來る、奈うせ人間だから外觀は甚麼に幸福に見えても實際はさうで無いかも知れない、自分が現在の身に安じて而して其内から幸福を見出したらば、悲しみを包んだ美い、衣服着た人よりも以上に幸福を得られるかも知れない、よし又得られないにしろもつと〳〵理想を高くして他の方面から求めれば好い、と思ふと何だか嬉しいやうな氣もして、自然に自分の心を慰められる。

## 夏季講習會

▲東京女子音樂傳習所＝飯田町二丁目河岸の同所にて、八月一日より同十五日迄、唱歌、オルガン、理論、教授法等の講習を爲す、講師は納所辨次郎氏二名にして、科外に樂器修繕及び取扱法の有益なる講話もありと。

▲東洋女藝學校＝仲猿樂町同校にて講習會を開く、第一回は七月廿七日より八月廿日迄、第二回は八月一日より八月廿五日迄、講習時間は午前四時間、午後四時間、科目は刺繍、摘細工、造花、洋服裁縫、編物、袋物等講習料は一科金二圓、二科以上三圓、又同校にては、九月十一日より第三回短期講習會を開く、科目は右と同一にて、毎日三時間教授し、三ヶ月にて卒業す、講習料は毎月金壹圓なり。

▲東京府教育會＝神田橋外同會に於て八月一日より同十五日迄、中等教員志望者其他の爲に女子技藝講習會を開く、科目は造花、編物、袋物、講師は三好幸子、鈴木梅子、種村仲子の諸氏、講習料は一科目金壹圓五拾錢、二科目金貳圓五拾錢、三科目金參圓なり、又同會に於て別に市立小學校女子教員志望者其他の爲に八月九日より十五日迄唱歌、行進、競爭等女子に適切なる新遊戲、普通體操、教授時間中氣養運動等につき講習會を開く、志望者は八月五日迄に申込むべし、講習料は金壹圓なり。

▲東京實用女學校＝飯田町四丁目同校にて八月一日より十五日迄國語、文法、洋服裁縫、造花、果實、袋物、編物、作文に就て、同十六日より二十六日迄和洋料理に就て、講習會を開く、講習料は一科目壹圓乃至壹圓五拾錢、二科目二圓七拾錢、三科目三圓八拾錢、四科目五圓なり、因に云ふ、同校にては、婦人の趣味の向上を計る爲に、毎月一回講習會を開き居るが、第二回は去月十九日神田橋外和强學樂堂に於て催され、婦人の一生下田次郎氏、女子と精神中村讓氏、三河武士の花山路愛山氏、物さしの話田丸卓郎氏、女子と讀書力校長村上直治郎氏等の出演ありて、頗る盛會なりき。



# 婦人胸中の秘

桐一葉

目に見えてうつりやすいは殿方のお心、そこへ行くと女子のは罪がふかう御座います。胸板三寸の奥裏に虚榮、嫉妬、媚、その他あらゆる赤い舌の蟲を秘めて置きながら、表面は紀伊の音無川、波立つ思ひをじつと堪へて殊勝によそほふあまだれ聲、おもへばいぢらしいもので御座ります。一層襟元の水ぎわ立つた粋人さまなら、おもひたいまゝ、怒り度いまゝ、泣きたいまゝの氣隨氣儘、果ての擧句にあゝ思ふまい〳〵とさつぱりあきらめておしまひなされうなれど、素人はそれの自由がきゝませぬ。一度、何かの影が撮つたら、あけてもくれても其のことばかり、積り積つて、名工の鑿よりも鮮やかに刻みつけられて終ひます。無理もないでは御座いませんか、きまりきつた料理や裁縫、それはまだしも女が家でせねばならぬと、どこのどんな世話やきが極めたかありがた迷惑な仕事、まづは辛抱もいたしませう。けれどこれが、この平凡な行事が死ぬ迄で御座いますよ、死ぬ迄なさねばならぬ運命だと定まつた時は、口に云はずもつらい話では御座いませんか、殿方にした處で若い身空を何々省の雇で候とお定まりあそばして、それから毎日腰辨の、そんなことはおありなさいますまいけれど、君が一恩給はこゝからといふことになつたとしたらどうなさいます。あんまり意氣地のある顔もなされますまい、そんならなほのこと氣のせまいと相場のきまつた女を氣がはれる樣にしておやりなされたら宜いでは御座りませんか。

初々しい赤手柄の時分といふものは、簞笥の中も充分なら、長持の中の絹夜具も、蟲がつかぬ樣に氣をつけて障腦の塊を投り込む位、ずるい女は別として大かたの奥樣は物質上の何物をも望んでは居りませぬ、望

む所は只一とつ、夫の愛といふものでは御座いませんか、それを玩具か何ぞの樣に心得て始めのうちこれ散步を口實に緣日公園を引張りまはしもあそばせ、半年立たぬうちに、よきは八疊の座禪修行、あしきは御自身お一人で、お氣に入るやうなことばかりいふ町へ御みあし繁くといふおうまれ付き、それでゐてお小遣御入用の折りは三枚目か壯士芝居でも遊ばしてかと思はれるおやさしさ、みにくさもし返事でも少し煮え切らぬ時は忽ち地金の紋切文句「あゝ持つまじきはわけの分らぬ女房」とか何とかほんに男の氣まゝには愛想もこそもつきはてまする。

とは申すものゝもと〳〵殿方ばかりをお責めいたすのでも御座りませぬ喧嘩も一人がよければはじまらぬわけ、五分〳〵の弱味は兩方にあるにちがひ御座いませぬ。さらけ出したおはなしが、女ほど世の中に打ちこはしなものは御座りません、近いたとへが家一軒をかりるにしても、御自分は家の中に坐り込むで、自分の氣に入る家をあたまに立てゝ御出あそばすそれでゐて旦那樣のおみあしをわづらわし漸やく見付かつたりと元氣よくおかへりなされてこの事御臺所に御相談あれば今月は便所が鬼門に在てはなどゝ大變な理由をおつけあそばし、どゝのつまりがとをかく見ねばとのあり難き御諚、これに幾分の元氣を拔かれたまひて、「ぢあまあお前が行つて見て來るさ」。かゝるのに「あなた氣に入りましたから早速ね」なぞといふお目出度いのは滅多になし、それ位なら、もと〳〵御自身がよい樣に御運動なされればよいものを散々御亭をわづらはした末がかゝる打ちこはし、これだからこれ、またはじまつたと思ひつゝも、つい旦那樣のおなき言も聞いてあげねばならぬ樣になりまする。そこで私は思ひまする、やさしい樣な顏をして、人の仕事を打ちこはす女といかつい顏をして陰で愚痴をこぼす男とどちらを高いともやすいとも申しませぬが、とにかくさうしたもので御座ります。

一體女が捨てられ易いとか、家の中が面白くないとか、それは考がへて見れば、皆女の心からでは御座い

ますまいか。と申すと身に覺えのある殿方は「そちはうまいことをいつてくれた」とつい淺はかに己惚れておしまひなさるかもはかられませぬが、種蒔きは男の方であること勿論で御座います。只その蒔かれた地面の合性かどうかで花も實もある畠となります。

あまり卑近で恐れ入りますが種蒔きである殿方をかりに權兵衞といたしますなら、ほじくりかへす女は烏で御座りませう。

可愛さうに權兵衞さん毎日テク〳〵と暑い中を種蒔いて、やれ〳〵と腰のばす、傍から烏がつゝつきまはす、現實暴露の悲哀とやらも無理のない話しと存じまする。第三者の案山子なら知らぬ顏して居ることも出來ませうが權兵衞さんも活きた人なら、終ひには腹を立てます、詰らんなあと悲觀いたします、とう〳〵自棄になつて仕舞つて、一合の德利酒ではやけの蟲が承知しなくなり、馬鹿らしいとは知りつゝもつい奇麗相な處へ高飛びなさいます。すると只さへ粹のきかぬ女、こゝに至つて氣も湧く樣に天から逆上つて自分の惡いことは少しもさとらず、「權兵衞なぜ種蒔かぬ」といふことに立ち至ります。かうなつてはもうおしまひで、仲裁に立たせられるものが見當ちがひに首しめられます、これらが煮ても燒いても往生が出來ぬといふ一件物で御座んせう。

けれども、この烏がかゝるほじくりをやるもとはと尋ねたら矢張り權兵衞さんの鉢卷の仕樣がゆるいのか、鍬の使ひ樣がまづいのか何れともせよ少しずんべらなのがもとで御座んせう。しかし烏の奴も憎う御座います、身の程しらずな高慢ちきな。

この兩方が和睦いたしますのはまだ先きの遠いはなし、どちらにしてもお骨が折れますにちがひ御座いませぬ、權兵衞さんがフロックコートを着、烏が鷺になつたら、そこに何の苦情も起らぬにちがひ御座いません。女心は要するに烏が鷺になりたいともがく我儘なので御座います。存外單純なもの、はじめに赤い舌の蟲と申しましたはこのわがまゝにつかはれる道具にすぎませぬので。

# 改良洗濯法

日本在來の洗濯には別に是れといふ方法もなく、唯だ石鹸を塗りて揉出すといふ位に過ぎざるを以て、清潔を期する事も覺束なく、殊に白布の如きは純白に復する能はざる上に、地質を損すること多く、而かも非常の勞力を要するより、勢ひ西洋洗濯屋に依賴する事となるなり。左れど目下日本にありて開業し居る西洋洗濯技師など云へるものは、獨逸國の式によりて多くは苛性曹達を用ひ、之を以て洗濯すべき布を煮詰めたる上、短きは五時間長きは十二時間も鹽酸石灰に浸すを常とするが故に、地質を損する事甚しき上に、其洗濯料も廉ならず。左れば若し家庭に應用すべき洗濯法ありて地質も損せず高價の貨錢も要せざることゝならんには家庭の幸福此上はあるべからず。

## ◎カラーの洗濯法

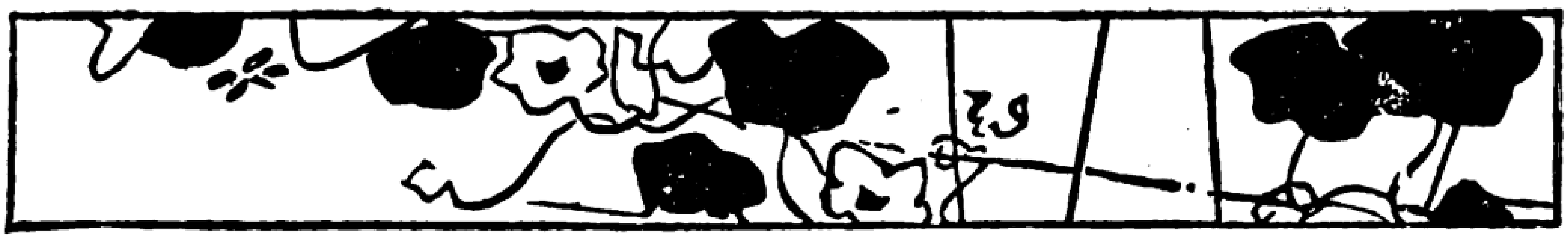
扨て普通の家庭に最も必要なるはホワイトシヤツ、カラー、カフス、シヤツ、靴下、足袋等にしてホワイトシヤツ、カラー、カフスの洗濯は苛性曹達二匁を湯四升の内に混じて琺瑯引鍋の内に入れ、之にて洗濯すべきものを充分に煮沸し、然る後清水にて附着したる糊を去り、後ち再び元の鍋に投じて十分間以上煮沸すべし、扨て一方には鹽酸石灰五匁を白布に包みて陶器製の器の内に溶解し置き、更に木製の桶に六七十度の湯三升を盛り、此内に前の溶解したる鹽酸石灰を投じ、暫時攪拌たる上左手に重炭酸曹達五匁を持ち、右手には先きに苛性曹達中に投じたる洗濯物を持ち、左手の重炭酸曹達を投ずる瞬間に右手の物を投ずれば如何なる汚染も奇麗に拔けるなり。

## ◎純白にする法

又普通のシヤツ及び靴下、足袋等の如き蠟引にあらざるものは、苛性曹達中より清水に移して糊氣を去るの手數を省く丈けにて、他には少しの異りもなし、夫れより清水にて數回洗滌し、藥品の臭氣を去りたる後、硫酸二匁を水一斗の中に浸け置き、四五回水洗ひして青味を附ければ純白となるべし。此青味附けは水溶ベレンス一匁を絹布に包み、揉出して適宜の色を染附け、糊を附けて日光に乾燥するものと知るべし。

## ◎糊のつけ方

ホワイトシヤツ、カラー、カフスの糊附方は生糊一合、



白蠟一匁を湯三合位にて溶きて普通の糊となし、充分に揉込みて日光に晒し、一度乾きたるに濕りを與へて火熨斗を當つるなり、其方法は七輪の上に鐵板を置き、其上に鏝を載せて充分に燒き、手に水氣を含ませて之を打ち、其音響によりて熱の加減を爲し、扨てシャツに霧を吹き掛け、力を籠めて鏝を當つるなり、尤も鏝の燒加減、掛加減等微細の點に注意を拂はざるべからざるを以て二三度は失敗することあるべきも、熟練の後は洗濯屋へ託したると同樣の好結果を見るべし。

## ◎半襟其他の洗濯法

家庭に最も必要なる半襟類、其他絹布の洗濯に付先づ之に要する藥品の分量を示すべし。例へば洗濯すべき物百匁の品なれば

| | | |
|---|---|---|
| 過酸化曹達 | 三匁 | 湯四升 |
| 硫酸 | 三匁 | 同 |
| 醋酸 | 二匁 | 同 |

其方法は先づ過酸化曹達を湯に入れて充分に攪拌せ、之に半襟其他の洗體を浸して十分間許り經過したる後、例へば綸子若くは紋羽二重など云へる織物なれば極めて叮嚀に洗濯板の上に擴げ、皺の寄らざるやう注意し、柔かなるブラシを以て斜めに垢附たる部分を摩擦し、若し垢の落ちざる部分あらば爪を以て輕く削ぎ落し、再び溶液に浸したる後疊込んで兩手にて壓し、之を第二の硫酸液に入れ、十分許りにして水洗ひを爲したる後、第三の醋酸の稀薄なる液に通じて乾燥せしむるなり。若し洗濯物がモスリンの如き織物ならんには手を以て柔かく液にて揉み、直ちに硫酸に通じ水に洗ひて乾燥せしむべく、若し又縮緬類ならんか、縮緬は縱絲の細きものにて之を引けば品物を損ずるの虞れある故、靜かに横に手繰り、兩手に其端を持ちて洗ひ淨めたる後、硫酸及び醋酸液に浸して乾燥し、之れに青味を附す事木綿と同樣なり、尤も縮緬は火熨斗を用ふるを禁ずるが故に、湯熨斗を爲すものと知るべし。

## ◎六ケしき事に非ず

木綿、絹布共に以上の方法を以て洗濯せば如何程垢に汚れたるものにても、新物と異らぬ樣奇麗となるのみか、從來の洗濯方の如く光澤を消す事なく、極めて功多くして勞少なし、夏季に向ひて洗濯物の多き此頃家庭にては是非とも右の方法を習ひおゝの必要あらん。

（獨逸式洗濯法研究家　高山繁氏談片）





# 臺所科學

## 鐵器と銅器の錆に就て

海軍大藥劑士　小林増作

今更管々しく云ふ迄もなく。臺所の道具に錆は如何な塲合でも禁物である。木器陶器の類には錆の出る恐れは無いが、鐵や銅の金屬器には兎角錆が出來易い。近頃は衞生思想が進歩して臺所に銅製の割烹具を使はぬ樣だが昔は隨分銅製のものがあつて其風雅な細工を誇つたものである。のみならず、料理通は色彩に苦心して綠青をさへ食物の内に加へた例もあつた。今でも隨分湯沸しには銅製のものを見掛けるが、客來の時に此銅壺から湯を汲み出して茶を入れる流儀があるには甚だ恐れ入る。

### △鐵の錆と味ひ

鐵製の道具では、鍋、釜、鐵瓶の類を初めとして、フライパンやソースパン、ダブルボイラーやオープンの類、其他種々のものがある。此鐵製の道具は手置きが惡いと直きに錆がつく。殊にじめ〱と濕めッぽい天氣には一層錆び易い。何う云ふ理由で錆が出來るのか其徑路を尋ねて見ると、何れ空氣中に存在する炭酸が、濕氣といふ媒介物を得て鐵の面を侵し、茲に炭酸鐵といふ一種の新生體が出來て、其炭酸鐵は更に速かに酸化して含水酸化鐵即ち鐵錆が出來るのである。鐵の錆は、飲食物に混ぢつても、人體に大した害は無いけれども、不快の味を持たせる事は著るしい。のみならず、茶の色を黒づませて山吹色の旨さうな色彩を殺ぐこと一通りでない。人體中の血液には約一匁の鐵分を含む割合であるから、鐵を服用する事は營養上良いやうな

ものゝ、鐵の錆では一向體內に吸收されない。故に臺所の鐵製道具は常に能く洗つて水氣を去り、錆の出來ぬやうにして置く必要がある。

### △琺瑯引の鐵器

近來は臺所道具もだん／＼進歩して、錫引、琺瑯引の鐵器が盛んに用ゐられるやうになつた。是は衞生の趣意に叶つて誠に結構であるが、未だ和製の琺瑯引（瀬戸引ともいふ）器具は熔着力が充分で無い爲めに、屢屢熱に遇ふと、內部外部共にところ斑らに琺瑯質がはせて取れ、甚だ見苦しい格好になる。此琺瑯引器具に就ては、鉛と砒素を少しでも含んではならぬと達せられて、一應檢査濟の品でなくては販賣させぬ事になつて居る。其の試驗法は、百分中四分の醋酸を含む水を容れ三十分間煮沸して、之に硫化水素を通じても、異狀のないものとしてある。其れ故市場に賣つてゐる新しい品は大概無害であるが、使ひ古して斑らにはせた琺瑯器は、時に依ると甚だ危險な事がある。

### △古き瀬戸引と鉛毒

元來琺瑯質は珪酸アルミニウムを主として作られるものであるが、熔着を容易くする爲めに、有害なる鉛丹を加へる事が間々ある。之れは溶着の時の溫度の加減で、たとひ加へてあつても、百分中四分の醋酸を含む水には容易に溶けて來ないが、一旦表面のところ／＼が剝離した塲合には、此試驗で折々其れが溶けて來る私の實驗でも、新品には殆んど反應を顯はさないが、只一部琺瑯の缺損した品には、三十種類の內で一種位の割合に、鉛を發見してゐるから、斯う云ふ道具は酢の這入つたものは煮ぬ事にするがよい。

### △綠青の危險

又銅製の道具は。前にも述べた通り、當今は餘程使用が減じてゐるが、それでもまだ玉子燒鍋や油揚の鍋、魚串や金網の類、其他種々のものがある。此銅製の道具は、鐵製のもの程目立たぬけれども、手置きが惡い

と、矢張り直きに錆が付く。此錆は鐵と同じやうに、濕つた空氣中で炭酸が銅の面を侵して、鹽基性炭酸銅といふ一種の新生體を生ずるのである。之れは綠靑と云つて、甚だ恐ろしい有害のものであるから、決して飮食物に混ぢることを許されない。若し誤つて綠靑の這入つたものを飮食する時は、直きに中毒して嘔氣を催し、胃腸を害ふ事が夥しいのみか、量の工合では取り返しのつかぬやうな中毒を起す事がある、臺所で注意すべき事は種々あるけれども、錆を出來すと云ふ事は第一其家庭の締りのない事を證明するやうなものであるから、勗めて此點に注意されたい。鐵や銅の錆は骨董物に愛玩せられるけれども、臺所には全く禁物である。





# 鮎の料理法

八百善主人

### △鮎の名産地

諺に水清ければ魚棲まず、と申しますが、この鮎ばかりは最も奇麗な河に棲み、濁水には決して棲みませぬ。そして水の清い處ほど香氣が強くて味が結構です。其産地としては長良川、大井川、鴨川、耶馬溪、靑梅、多摩川、武州熊ヶ谷、荒川等がまづ屈指の所で、東京附近では荒川産が一等としてあります。尤も近年交通が便利になつて京都、美濃、駿州、豆州邊からもドン〳〵送つて來るけれども、遠方物は魚が新らしくても、眞の味が拔けますから何うもいけません。それ故荒川や多摩川で漁れたものを擇べば結構な鮎が食べられるのですが、さて産地の鑑別が却々六ケ敷うムいます。併し大體を申せば、荒川や多摩川の産は背に靑味を帶びて肉附の良い割合に頭が小さうムいますが　それが熊ヶ谷や伊豆邊のものになると靑味よりも黄味が勝つて、形が稍や細長くなります。又ずつと遠方物になると、一見香氣がなくて姿が惡いから、注意す

れば素人方でも能く判ります。

### △味の好い季節

鮎は若鮎といつて五月頃から走りが出ますが、これは價ばかり高くて皆とも美味くありません。やはり八月から九月へかけて、子持七分といふ所が最も味が宜しうムいます。そして山間の急流に捕れたものは一般に脂肪が強いから、天麩羅やフライに適し、長良川のやうな緩流に捕れたものは淡泊ですから酢鮨とか魚田とかに適します。

### △鹽燒の仕方

鮎の料理法はいろ〳〵ありますが、一番お旨くて香氣の好いのは鹽燒です。これを拵へるにはちと呼吸があります。唯だ鹽をまぶつて外見ばかりよく燒くのなら別段六ケ敷もありませんが、それを美味しくするには第一鹽加減と火加減が肝腎です。其の仕方は、先づ腹を開き、腸を除いて、内部をよく洗ひ、鹽を澤山にふりかけて、十分ばかり其儘にしておき、それから水洗ひをして竹串にさし、火を強くして、燒き乍ら手先で串を捻り廻し、焦附かぬ程度に炙るのです。

### △照燒

鮎の腸を去つてよく洗ひ、串を打ち、鹽をふつて、二三十分の後洗ひ落し、中火で燒くのです。之にかける醤汁の加減は、味醂六分に、醤油四分を混ぜ、之を中量に煮詰め、魚の燒上るまでに此汁を三回かけるのです。それは一度かけては炙り、又注けては乾かし、更に又かけて炙るので、能くすれば段々飴色の艶が出て所謂照燒になります。又この附合せとして杏子の含め煮を添へますが、それをつくるには、乾杏子を水に浸け、軟くなつた頃に笊へ揚げ、布巾でよく水氣を拭き取つて鍋の中に入れ、それに砂糖をかけて、其上へ美濃紙を掩ひ、紙の上から少量の鹽をふつて、弱い火にかけ、二時間ほど煮るのです。

### △山吹蒸

八九月頃の子持鮎を三枚におろして小骨を去り、薄鹽をふり、三十分の後水に洗ひ、二つ折にして竹の皮にのせ、其上へ煉卵の黄味を裏漉にして振りかけ、二十分ほど蒸籠でむすので、之は主に會席膳に用ゐます。

### △魚でん

中位の鮎を押んで腸を抜き、よく洗つて水氣を切りたる後醤油の中に浸し、五分ばかりの後取出して串にさし、中火で焦げないやうに裏表を燒き、燒上つたらば煉味噌をつけてざツと又火に焙すのですが、此味噌の煉りやうは、三州味噌に適宜の砂糖を加へ煮出汁で摺り延し、之を裏漉しにかけて文火で煉上るのです。

### △天麩羅

大きな鮎を三枚に卸し小骨を除いて水氣を切り置き、さて一合のメリケン粉を七八勺の水で溶き、鶏卵を一つ入れてよく攪混ぜ、之を衣にして胡麻油で揚げるのですが、油は鐵鍋に入れて烈火にかけ、青い煙の立つ頃に右の魚を鍋の端からそつと滑り込ませ、三四回裏返しをして揚げ

るのです。又注汁は煮出汁四杯に醤油一杯の割で拵へます。

### △フライ

鮎を三枚に卸し充分に水氣を去つた後、少量の鹽と胡椒をふりかけやきまて一合のメリケン粉を卵で溶き、それを五勺の牛乳で延し、之を衣として揚げるのです。油はサラダ油が一等良いのですが、普通はケンチ脂を用ゐます。これは何處の肉屋にでもあるから其都度買はれます。で其脂肪を細かく刻んでトロ火にかけ、箸で攪廻すと漸々溶けますから、充分沸騰させた所へ魚を入れて兩面とも狐色になるまで揚げるのです。

### △背ごし

之は鮎の頭を切つて腸を拔き、小口から薄く輪切にして二杯酢をかけて食べるのです。二杯酢は酢一合に醤油と味醂を盃に一杯づゝの割合に混ぜて製ります。之に配ふものは鴨川海苔が一番結構です。唯だ背ごしにする鮎は特に新鮮でなくては可けません。

### △酢おとし

鮎を三枚におろし、肋の骨をすき取り、鹽をふりかけて十分ばかりの後洗ひ落し、ざつと煠上て椀に移し、そこへ煮出汁と鹽、醤油で加減した清汁をかけ、更に少量の酢を注しおろし大根を添へて出します。

### △鮎 膾

三枚に卸して肋骨をすき取り、淨山の鹽をふり、十分程の後水洗ひをして酢の中へ漬け、三十分ばかり經つてから取出して皮を剝き、細かに切りおき、さて胡瓜を小口から薄く刻んで鹽をふりかけ、ざつと水洗ひをしてよく水氣を絞り、之も酢の中に浸して搾り上げ、右の鮎と共に皿に盛分け、それに甘酢をかけて食べるのです。甘酢の加減は先づ五勺の味醂と一匙の醤油を小鍋に入れて遠火で煮立せ、鍋の下し際に同量の酢を加へて冷すのです。

### △二杯酢

これは鮎を漁りに行く時、口の廣い壜に醤油二杯、酢一杯の割で二杯酢を拵へて携へ行き、鮎の捕れ次第生のまゝで其中へ入れて置くと魚はだん〳〵鼈甲色に漬ります、之は鮎の產地でなければ出來ぬことですが、燒いて御飯の副食にもなれば其儘で酒の肴にもなるから、至極重寶な物です。

### △蓼 酢

鮎の腹を開き、薄鹽をふり、二三十分の後水洗ひをして串に刺し、燒きながら味醂で加減した醤油汁をつけて附燒にするのです。又蓼酢の拵へ方はよく洗つた蓼の葉を擂鉢ですり、其處へ煮冷したる酢を小口から入れて擂りまぜ、それを裏漉しにかけて燒上つた鮎に塗るのです。

### △卯の花鮓

普通の卯の花鮓ですと 鮎の腹におから、、、を孕ませて酢に浸けるのですが、之はそれと少し異ひます。先づ鮎を三枚におろして酢の中へ浸し、三十分ほどしてから爪で叮寧に皮を剝いて細かに切り、煎り上げた豆腐

の糟に混ぜ、酢に浸けた微塵生姜を入れて供するのです。其豆腐糟の拵へやうは、先づおからを擂鉢でよく擂つて裏漉にかけ、それに卵一個と煮出汁を適宜に加へ、鍋の中へ入れてよく掻きまぜ、中火にかけて炒り、パラ〳〵に炒り上つたらば少量の醤油で味をつけ、鍋を下して冷めたところで魚に混ぜるのです。

### △鮎鮨

拵へ方はいろ〳〵ありますが、東海道山北の名産の鮎鮨は、先づ三寸位の鮎の腹を開き、尾頭を去り、一寸鹽をふつて鹽の溶ける頃清水でよく洗ひ、酢に浸し二時間の後酢飯を腹につめて一夜酢に浸け、壓石をかけて翌朝食べるのです。飯は炊く際酒を少し入れて、炊上つたならば米二升につき酢一合と鹽と味醂で味をつけて、攪廻しながら冷すのです。

### △生乾鮎

鮎を背開きにして腸を去り、鹽水で二時間ほど浸した後に布巾でよく拭ひ、二本の金串で五六尾づゝ貫き、その串の兩端へ紐をつけて天日に一日ほど干し、膳に上す時さツと焼き味醂したのをつけて食べるのです。之は會席料理に最も妙です。

### △鼈甲煮

鮎十尾位を鐵鍋に入れ酒鹽で煮、其の沸立た頃少量の味醂と醤油を加へて更に煮立たせ、それから水飴を五錢ほど入れて鼈甲色になるまで煮詰める。之は何時までも貯へて置き不時來客あつた際に頗る重寶です。

## 手輕に出來る子供の洋服

私立裁縫専門女子共立會主　松江美佐子

### 五歳男兒用スイッツ

此形は、貳歳から六歳位までの男兒に用ひます、そして、此スイッツと申すのは、總て始め二三歳のうちは、ズボンが見えかれる位に長く即ち膝のド位迄の長さに着せて置きまして、成人するに從ひズボンの多く見えるやうに致します、尙六七歳になりますと、普通の水兵服のやうに裾にゴムテップを通して、腰の處でくゝつて着せる事が出來ます、夫故、猶丈も、始めのうちは、口先きをヒダにして、裏に折り返して置き、短かくなつた場合には、此をのばしてヒダの代りにギヤダにして、カフスをつけますなら、肩行も變更へなく、長年用ふる事が出來ます。地質は、夏なれば、セル、リンネル、綿リンネル、小倉及び、縮、ケンドンなども宜しふ御座います。冬なれば、フランナ、子ル、ヘル、ビロード等を用ゐます。用布は、一尺八寸巾即ち小倉巾ならば、五歳兒のために六尺五寸（即ち二ヤール七分）三尺六寸巾ならば、一ヤール三分を要します、尙釦等までに右地質の代價を概略記して置きます。

○白小倉　五十錢位
○霜降り小倉　七十錢より一圓位まで
○白綿フランネル　一圓拾錢位
○上等セル地　三圓以上
○ラシャ及メルトンは　二三圓以上ずつと上等まで、澤山の種類が御座います。

但し右は何れもズボン共の代價で御座います。

飾ボタンは、飾りになるのでありますゆゑ、成るべく直徑五分位の大きさを用ゐます。



## ◎形紙の拵へ方

此スイツツの形紙を拵へるには、先づ左の通りの寸法で、正數四角の紙を九枚拵へます。

夫より各所々々を右の寸法通りに、其他は適宜に裁ち落して、各所の印は落ちのないやうに悉く寫して置きます。

## ◎切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

形紙が出來ましたなら、左の通り一尺九寸巾六尺五寸の切れを擴げて左圖の通り、後身頃はワナで取り、其他は地の目をよく見て正數裁ち切り、縫方に必要なる、ヒダ及び山の印などは、糸で夫々寫して置きます。

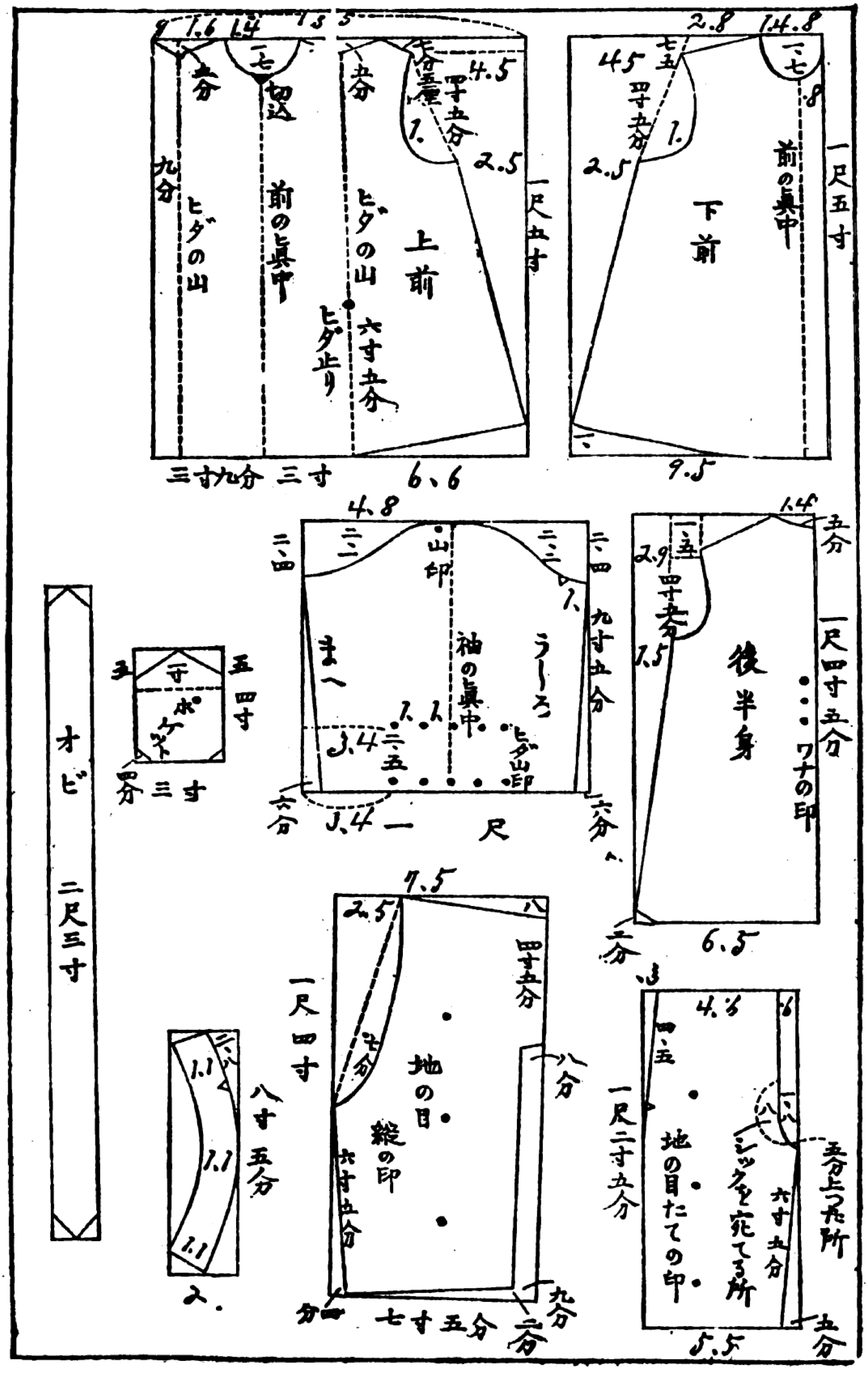
飾殘り切で、形紙の前ズボンにあるタックを三枚裁つて置きます。

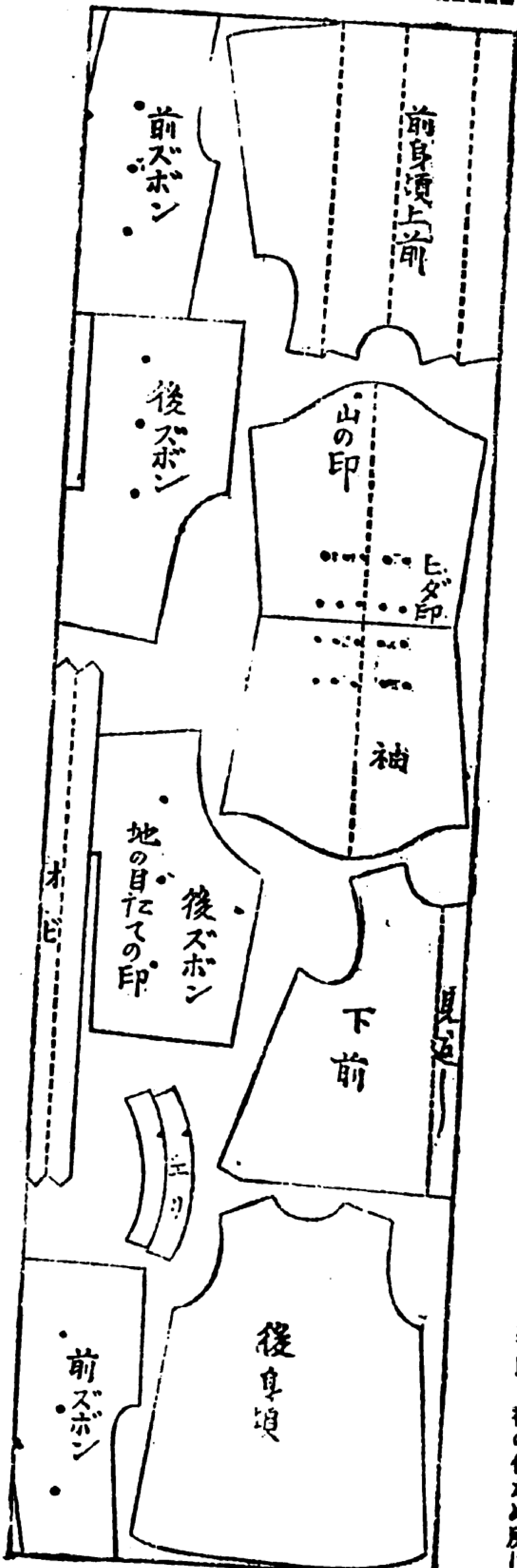
又後ズボン、前ズボン、の腰裏や見返しも殘り切れの中で裁ちます。

## ◎縫方順序

先づ第一ロタックリズボンの右左の脇に見返しを付けます、此より、前の股上にシックを付けます。此は、先づ三枚の中の二枚を合して外廻りをぐるりと縫ひ、表へ返してぐるりと飾ミシンを掛け、下前へ持出しとなし、次に今一枚の方は上前に縫ひ付け、見返しとして置きます。次に前後合して脇を縫ひ、折りは前の方に向けて飾ミシンを掛けます、次に前の身返しを後の見返しの上へ正數重れて止め、ミシンを掛けます、夫より前の股上を縫ひ、折りは上前に向けて、シックを付けたる飾ミシンと區別の立たぬやうに飾ミシンをかけます。

次に後の股上を袋縫ひに致します、若し地質の厚い場合には一度縫ひして縫代は兩方へ目立たぬやうに、まつりつけます、次に腰裏を付けます、此腰裏の寸法は、後が巾二寸二三分前は一寸二三分になし、丈は何


上前
ヒダの山
前の眞中
ヒダ止り
切込
六寸五分
一尺五寸
三寸九分
三寸
6、6
下前
前の眞中
9.5
袖の眞中
まへ
うしろ
山印
ヒダ山印
一尺
後半身
ワナの印
一尺四寸五分
6.5
ポケット
三寸
オビ
二尺三寸
八寸五分
地の目
縦の印
一尺四寸
七寸五分
地の目たての印
シックを充てる所
一尺二寸五分
五分上つた所
5.5




れも腰の寸法だけになして縫ひ付け、表から飾ミシンをかけます。夫より裾を七分位折り込んでまつり、股下の縫目からゴムテップを通して足の廻りに合してとめます。最後にボタンの穴をあけて、肌着に吊します次は前後の眞中に縦に一ツヾヽ二ツ兩脇は何れも横に四ツ、都合六ツあげます。夫より上着にかゝります。此は先づ第一に、袖口先きの印を山にして三分のヒダを外向きに取り、次に袖の袖下を袋縫ひ、又は二度縫ひに致し、口先きを一寸程裏へ折つてまつり付けます、夫より、前身頃の上前に、印を山にして七分のヒダを外向きに取り、但し左の方は下から六寸五分上つた所まで、右の方はずつと下まで縫ひます。次に下前の身返しを折り次に肩を縫ひ衿をつけます、但し此衿は、横で合ふやうになつて居ります故、其の積りで、衿の切込と上前身頃の眞中の切込みとよく合し、下前は、肩から五分下つた所まで付けます。そして下前の衿の付かぬ所は見返しを付けて置きます。

次に脇を袋縫ひになし袖を付けます。但し袖下の縫目は脇の縫目より一寸前へずらし、山の印と肩の縫目と合して付けます次に身頃の裾を一寸五分位折つて表から飾ミシンをかけます、次に出來上り圖をよく見て適宜ボタンを四ツヾヽ八ツ付けます、此の内左の方は飾ボタンになし、右の方は上前に穴をあけ下前にボタンを付けてかけます。

そして、此の穴をあける處及ボタンを付ける所へは寸切れを宛てゝ致します。向衿はホックかけになし、下前の上部即ち衿の付かぬ所は下

らぬやうに矢張りホツクでかけるやうに致します。

### 始めて此の記事を御覽になる方に御注意

本誌には、右の通り順を追ふて、一ツ〱記して居りますか、何分紙數に限りがありまして、挿繪を入れるとか、或は出來上りの寫眞其他、十分の說明を記す事が出來ません故、若しも、一時に色々お好み通りの形をなさりたいとお思ひになる方があれば拙著「小供西洋服の拵へ方」(日本橋區檜正町、服部書店發行)には、凡そ三十餘件の形紙に就て四百餘の說明圖を入れ、委敷記して御座いますから、何人にでも容易くお仕立てになる事が出來ます。

▲夏季休暇女學生日誌　博文館發行

日誌を記す事の有益なるは更にも言はじ、夏季休暇中に於て特に然り、本書は即ち此の休暇中に用ゆる爲に出來たる日記帳なり、暑中の心得を初めとし、色々趣味多き記事を欄外に記しありて、體裁も却々好く出來たり。定價金十二錢

▲夏季休暇小學生日誌　博文館發行

本書は夏季休暇に際し兒童の常識を養成し併せて日誌の記載方を練習せしむる目的にて編みたるものにして、日々之に記しゆくうちに不知不識智識を得る樣出來居る所は一寸重寶なり。定價金七錢



## 誰にも氣の付かぬ衞生

ボールス夫人

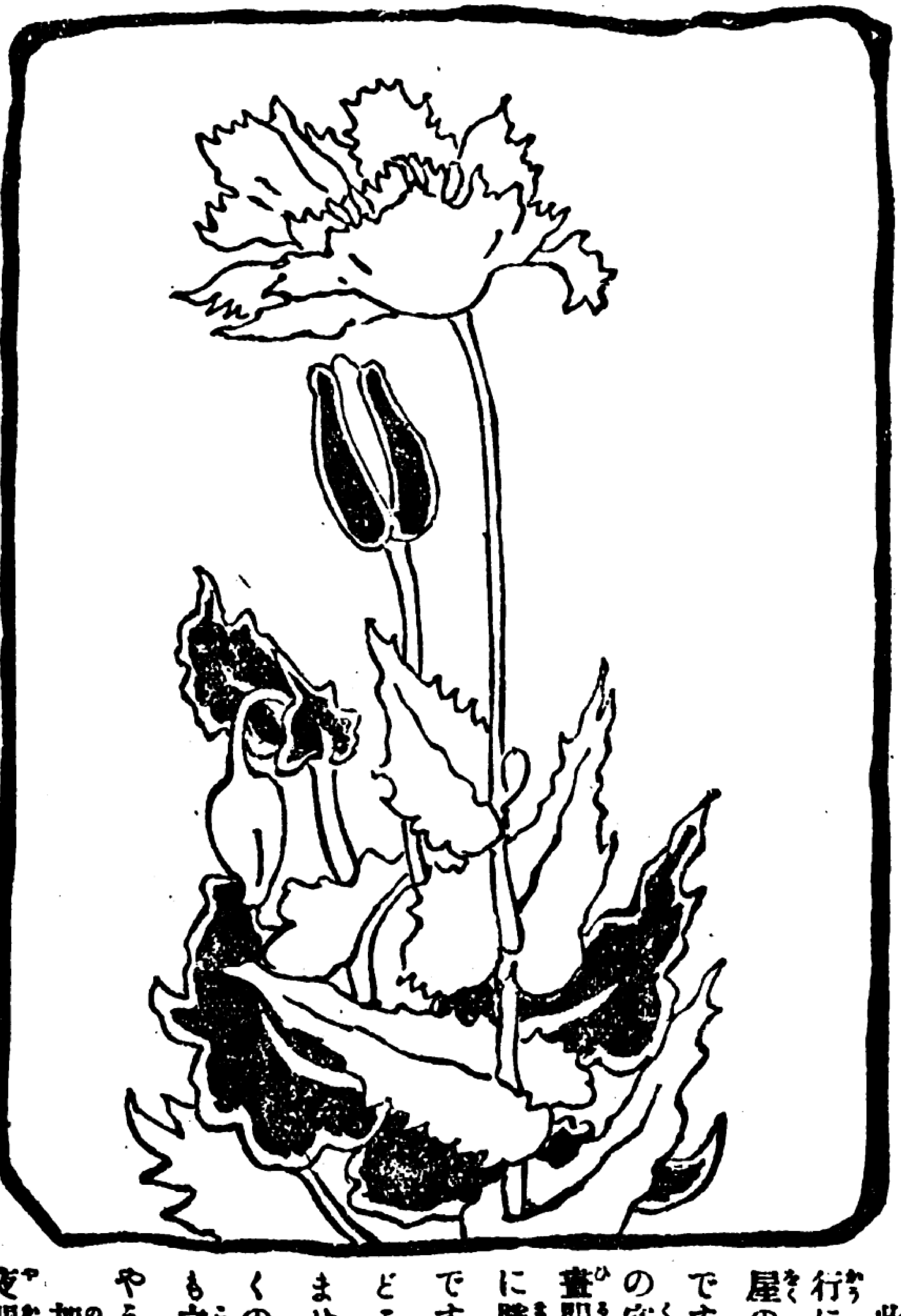
### 夜中新鮮なる空氣の必要

目下東京市は實に忙しい都と申してよいでせう。物質上の進步を要する關係から繁劇なのも無理はありません。電車は走り、高架鐵道は架設され、市區改正は行はれ、實に目の廻るやうであります。

斯樣に多忙な都會に住む人々は、其の身體の健康—衞生問題に就いては大に注意する必要があると思ひ

ます。醫術の方の研究が日本で努められるのは實に結構な事ですが、茲に最も必要で而かも危急なのに、まだ多くの人々が注意を拂はぬ一事があります、それは外でもない「夜中新鮮なる空氣の必要」といふ事です。

近年獨逸や米國でも醫學の進歩が著しく、種種の新智識が得られた中にも、此の夜中の空氣の問題に就いては實に一大發明が出來ました、即ち藥劑を減じて新鮮な空氣を呼吸させるが可いといふ斷案も其の方法です。



## 誤解せる日本人

此の問題の實行には第一に家屋の改良が必要です。日本家屋の空氣の流通は晝間は西洋家屋に勝ること數倍ですが、夜は殆どこれが得られません。然も多くの人々は少しも之に氣附かぬやうです。

加之却つて、夜間の空氣は晝間の空氣よりも寒冷で濕氣があるから、人體に有害だ

と語る人があります。さればと言つて閉ぢ籠めて少しも新鮮の空氣を通はせなかつたら何うでせう。ですからよく注意して、身體を溫暖に保ち、殊に頭部と耳とに直接に風が感觸せぬやうな設備をして、そして新鮮な空氣の通ふやうにせねばなりません。風邪の原因は多く寒風が耳から入つて來るにありますから、此點はよく注意すべきで、米國では「ナイト、キャップ」卽ち夜の被物と言つて、恰ど嬰兒の頭巾のやうなものを用ゐます。

## 種々の實例

數年前の事、紐育の動物園で猛獸を買入れましたが此等の猛獸共は暖國の物だといふので、夜間は殊に注意して寒冷を感ぜぬやうに、堅く戸を閉ぢた處が三ケ月の後殆ど皆死んで了ひました、又次に二匹の猿を買入れた時は、前に懲りて夜も十分に空氣の流通する樣にした處、二匹とも至つて健康で、やがて子猿までも設けました。これから獸醫間に夜中新鮮の空氣の必要が唱へられました。

又米國で一時インフルエンザの大流行があつて、それが肋膜炎に變じて多數の患者を出し、何處の病院も皆滿員の姿となりました。餘儀なく應急手當として、戸外に床を張つて上に屋根を葺き、此處に多くの患者を收容しましたが、三週間の後室内患者は殆ど死亡したにも係らず、戸外患者は大概全癒して退院しました此れが又醫學界の問題になつて、夜間空氣の流通の良いのが病人に大良藥だと分りました。

それから此の方法で多くの肺病患者が癒されました北米キャロラダ州の或地方は國中で一番空氣の清鮮な處ですから肺病患者が澤山療養してゐますが、多くの病院や養生院が、皆患者を夜中戸外に臥させる方法を施して居ります。嚴冬の頃夜中の看護婦が見廻る時、寒さに震へる事があるさうですが、それにも拘はらず患者の大多數が全快してゆくのが論より證據です。

種々の病氣の中でも殊に肺病は、醫藥や食物の注意も無論必要ですが、新鮮の空氣は此等に勝ること幾倍

です、肺病の人がよく此點に注意し、夜間新鮮の空氣を呼吸する方法を試みたならばこの病氣を全然追ひ拂ふ事が出來ようと信じます、勿論頭部と耳を保護する事、又蒲團や毛布を十分にして身體を溫暖に保つ事は決して忘れてはなりません。必要あらば湯タンポを多く用ゐてもよい、戸外に臥て毛布を澤山使ふなどは、不經濟といふ人もありませうが、病氣の治る事を考へたらば何でもない事です。



## 寢臺を用ゐざる國民の急務

空氣の流通は何處の人にも必要ですが、殊に日本人には必要が多いといふのは日本人は寢臺を用ゐないからです。元來人の吐出した有毒な空氣は漸次下降して床の上に來て、比較的良い空氣は皆上昇します。恰どコップの水の中に一塊の粘土を投じたやうなもので。投じた時は直ぐに濁水になりますが暫時靜置すると、粘土はコップの底に沈み、上の方は再び淸水のやうに

なつて來ます。ですから寢臺を用ゐないで、すぐ床上に臥す人々は、室内の最も惡い空氣を呼吸してをるのです。此の點からも夜間空氣の流通は殊に必要です。

晝間の繁劇な働きは身體の全組織から體力を消耗させます、然して夜間の睡眠が之を回復させるのです。この大切な睡眠の時間に、空氣の流通を惡くしておくといふのは、實に愚なる事と信じます。

最も夜間の空氣を新鮮にするに就ては日本家屋の構造では、盜賊の要愼が惡いといふ點があるかも知れません、極端にいへば戸外に臥かせばよい譯ですが、そうもならねば鐵棒の窓或はレンヂ雨戸のやうなものを用ゐればよい事でせう。

或人がどうしたらば日本國民は歐洲國民の身體のやうに壯健になれようかと尋ねましたこれは實に興味ある問題です。勿論食物や、衣服や運動も關係しますが、幼時から兩親が新鮮なる空氣といふ事に注意を拂つたならば、二三世紀の後に至つて必らず著しい發達をなす事は爭はれません。

殊に日々の勉學に腦力を多く使用する男女學生の身にとつては、これが最も大切であります。

## 私の行ひつゝある實驗

私も日本へ來朝した當時は、深く此の點に注意しなかつた爲に、夜中僅かに四五寸だけ窓を開くを習慣としてゐましたが、近年は寢室の二個の窓を晝夜共に開放しておきます。雨の夜も雪の夜も變ずる事はありません。其の爲でせう、近年實に繁忙を極めましたが、至つて健康でよく之に堪へる事が出來ました。今や私は愛する諸氏と訣別して、暫時故國へ歸ります。歸國後も一層此の問題を研究して、他日再び諸氏と共に語り、幾分でも諸氏の益を圖りたいと希望してをります。

けれども又お前は異國人だから我國の事情に通じない。其麼事は昔氣質の老人のある間は到底行はれないと言ふ方もありませう。けれども現に健康に善いといふ事實が見えたならば、何は扨て置き、よく道理を申して一日も早く實行なさるがよろしいでせう。

# 衞生上より見たる食事の仕方

女醫　シユルツ夫人

## 食事法の三則

◎私は食事法に就きまして、常に左の三つの規則を立てゝ居ます。第一は緩りと食べる事、第二は善く嚙む事、第三は善く唾液を出す事、此の三箇條を守つて居ますれば、健康の爲に洵に結構であります。

## 急いで食べて可ない理由

◎御飯を餘り急いで食べますと、第一には善く嚙化さずして鵜呑にするから不可、第二には充分唾液が混ツて居りませんから不可、善く嚙化さないと、胃に齒の働きを爲せるやうになります。又充分唾液が混ツて居りませんと、膓に過勞をさせるやうになります。且つ又胃の腑が食物を消化するに非常に困難を覺えるのであります。

◎即はち善く嚙化すのは胃の作用を輕くするが爲に必要で、充分唾液を混せるのは消化を助ける爲に必要であります。加之ならず食物が小さく細かに粉碎されゝば粉碎される程、それ程胃液がしみ易いのであります。

## 齒の惡い人の取るべき方法

◎齒の惡い人は、齒醫者に伺つて入齒をして貰つたならば宜う御座りませう。然しそれが厭ならば、咀嚼器と云ふものを用ゐて食物を粉碎しても宜う御座りますが、人によりましては此の咀嚼器を用ゐるのを好まぬ者が多う御座ります。

## 子供の食事に就て注意すべき事

◎私は御婦人方が子供に幼い時から、緩り食べる習慣を附けるやうにして貰ひたいと思ひます。緩り食べると申しましても、遊びながら食べると云ふ意味ではありません、眞面目に嚙み碎いて、丸呑にしないやうにと云ふ意味であります。急いで食べるならば、食べない方が寧ろ優だと云か程でありますから、餘程注意しなければなりません。

## 食事と精神狀態との關係

◎よく世間で心持好く、愉快にして御膳を食べると薬になると云ふことを言ひますが、それは確に一應の理屈ある言葉であります。氣持の好い人は悲んで居る人怒つて居る人又は何か仕事に忙しがつて居る人よりも消化が良う御座ります、それ故食事中は成るべく消化の作用を妨げるものを避けなければなりません。

◎然らば消化の作用を妨げるものは何であるかと申すと例へば讀書ですとか、學問上の六箇敷いお話ですとか、複雜だ事件のお話ですとか、又は氣持を惡くさせたり、腹を立たせたり、感情を害したりするやうなお話は凡て不可、食事中凶報を傳へるやうなことも大變消化の害になります。

◎それでは何う云ふお話をして居れば可いかと申すとまア面白い愉快なお話が宜う御座ります。知らせて喜びになり、楽みになるやうなお話に限りますから、先づ普通一般の事柄に就きまして、餘り深く探らうなどと云ふ精神なく話して居るのが宜う御座ります。

◎つまり精神狀態と云ふものが食事と尠からぬ關係のあるもので氣持好く食べると云ふことは、消化の大變な薬になるものであります。

◎ですから、食事中餘り話を禁じて默らせて置いては不可、學校又は寄宿舍などで默食を規則として置きますが、餘り感心致しません。それからもう一つ注意しなければなりませんことは、食事中に子供を叱ることであります。或は又御膳を食べさせないで罰を課することであります。是れは世間の親達によくある話でありますが、大變な心得違であります。

### 食物の分量は如何

◎食物の分量を定めることは六箇敷う御座います。人にもよります、年齢にもよります、其人の健康又は職業などにもよります。例へて見ますると、人は丁度蒸汽々罐のやうなものであります。汽罐は組立と其の運用法に依ります、……然し一般の規則を立てますれば餘り小食も不可が併し大食は大いに不可、特に大食しますと消化器が充分働くと出來なくなつて了ひます。

### 年齢と食物の分量

◎先づ老人は成るべく小食の方が宜う御座います。子供は比較的に大食の方でありますが、成長しつゝある所ですから、自然多く食べる必要があります。大人になりますると、食べ過ぎる傾きがあります。即ちそれ程食べなくても可いものを、多く分量を過して了ひます。

◎然し充分食べたと云ふことは如何して分りませうか？それは丈夫な人ならば、食べ了ッて後約三分一位は食べられると云ふ程度に止めて置けば宜う御座います。何となれば空腹の三分の二だけ食れば健康は十分保てるからであります。



### 食事中飲物に就ての心得

◎飲物は少い方が宜う御座います。多く飲み過ごしますと胃を膨らませ、胃液を散らしまして却つて消化の妨げになります。

◎然し食事中多く飲む癖のある人がありますが、あれは何う云ふものかとの疑が起りませう。それは餘り早く食べるからであります。食物は唾液が充分混つて居りませんと、胃が乾涸の状態になりますから、どうしても唾液の代りに何か飲物

を飲まなければならぬやうになります。ですから爾う云ふ人には緩り食べる事と善く嚙んで食べる事が、一番好い藥であります。それからモウ一つは感情、疲勞厭倦などはどうしても唾液を止めますから、是非飲物を多く飲まなければならぬやうになります。能く辯士などが感激しながら演說をするとき、度々水を飲みますが、あれは口が乾いて來るからであります。唾液も胃液も同じ理屈であります。して見ると精神の落付いて居るのと愉快に暮して居ると云ふのは消化に取つて大切な條件であります。

### 飲物の溫度に就ての心得

◎凡て飲物は熱い方にしましても冷たい方にしましても、極端になるのは不可、それ故お茶の熱過ぎるのも飲物の冷た過ぎるのも避けなければなりません。亞米利加で胃カタルなどの流行りますのは、餘り冷たい飲物を飲み過ごすからであります。





# 憂愁の月

今日一日の暑氣を夫は如何に過し給ひしか、と思ふて夕ぐれ妻は湯浴して後、夫の部屋にゆきて扉を明くれば、暮れの色に雅び籠き八疊の室は、紋違の煙に籠められて、一層灰色にいぶせきを、夫は煙るにまかせて默然と長椅子に憑れたまゝである。

「まあ、良人煙いではありませんか」

と妻は直に東の窓を開けると、白龍の天上する如く、室に閉ぢ籠められた煙は濛々と窓より轉び出でゝ、一團となり一片となり細くなり幽になりて風に煽られつゝ遂に消えゆく煙の末を見守る妻の瞳に、映つたのは彼方の森に懸かつた滿月、今や森を離れて漸く三尺の處の玲瓏玉の如き月は、その麗顔を現はして居る、あまりに大きければいと近き想のして、天界の物とも思へず話でも出來さうに懐かしいのである、若き妻はあまりの嬉しさに叫んだ。

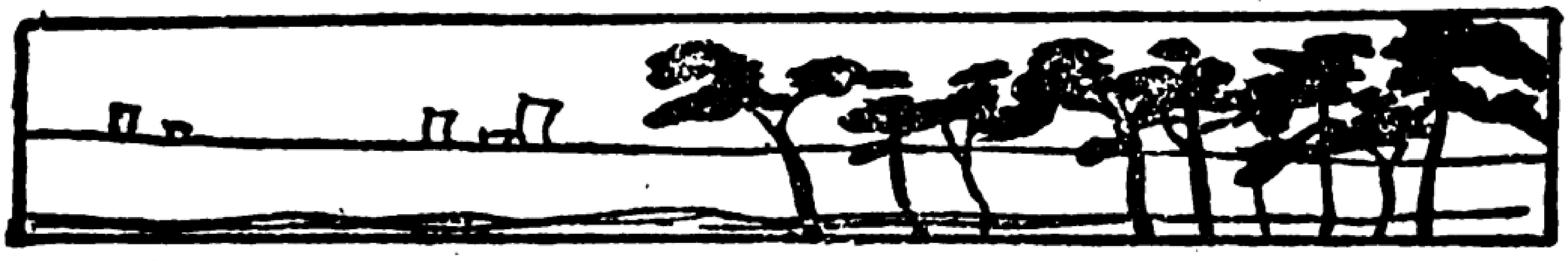
「まあ良人！　良い月、御覧な……」

と無意識にこゝまで云たものゝ、突然電氣にでも身を觸れたやうに、わな〳〵と身を慄したが唇に釘出たれた思ひ、二の句は告げないのである。

あゝ悪かつた、良人は盲目、名譽の負傷は遂に明を失したのである、自分は忘れたのでは無い、良人が病院から手を引かれつゝ歸て來たのを忘れたのではない、自分は滿腔の同情を捧げてこの雄偉なる夫に獻身の誠を以て終生看護の勞を執らんと固く誓つたのを忘れたのではないか、何を云ても失明の宣告を醫師から受けてから未だ廿日と過ぎないのである、自分の腦に深く印象されてる夫といへば、御眼いと涼しく鼻高く在すに、嘘のやうな餓盲目のたゞ夢のやうに思はれて、何の寫眞を見ても夫の御眼はいと健に、殊に涼しく星のやうなるを、夢、夢、夢、屹度この惡夢の醒める事があらう、いつかは光を隠す憂雲の晴るゝ時があるかのやうに妻は思ふためか、時々こんな不覺な言葉を云ひ出づるのである。

あゝ見せ度き心より見たき心こそ、猶に切なるものであらうに、況して明を失し給ひてより月に花にさらに思出多くましまさんは、誠に酷なる事を云ひし己れの甲斐なさよ、と妻は聲を呑んで其處に泣き倒れた。夫は長椅子に憑れたまゝ、細い項を垂れて太息さへも聞こえず默つて居る、恐らく持つて居た團扇が己れの手より滑り落つるのさへ知らなかつたのだらう、團扇は自と椅子から椽の上へカタンと音立てる。

其夜二人の間には一言の言葉も交されなかつた、灯もなき室に入りて夫は近頃手馴れしバイオリンを獨り奏して居る、閉ぢたる御眼、結たる唇、あはれ月は皎々と天地に輝けるものを、と妻の思ひである。(翡翠女)



# 平和の月

お鈴さん被入いな、と庭口に立つてお隣の富子さんは大きな聲で呼ぶ、取次もなしにその聲は奥の方で行水を使てる鈴子に達したと見え、「ハーイ直に行つてよ」と遠い處から直接の返事が來る。

富子さんは荒い辨慶縞の浴衣で、桃色の三尺を結び垂らして居る、矢張りお湯に這入つたと見えいつも汚ない鼻の下やお口の周圍が今日は奇麗である、間もなく廊下にパタ／＼と小走る音がする、見ると鈴子さんが濡れてる額を拭き／＼、浴衣の衣紋掻き合せながら出て來た、後毛澤山なお下げは元結が緩んで根が解つれかゝつて居る前髪や後の毛にはまだ雫がポタリ／＼として居る、湯上りの體をよく拭かなかつたと見えて、廊下には小さな足跡が幾個も捺してある。

「お嬢さんいけませんれ。」と下女は呟やきながら大きな手を平げて雑巾で足跡を消してゆく。

「あら、あなたお白粉つけてれ」と富子さんは妹鈴子の顔を熟々と見る。

成程小鼻の凹や眉毛の間に白いものが殘んの雪のやうに處々に消え殘つて居る。

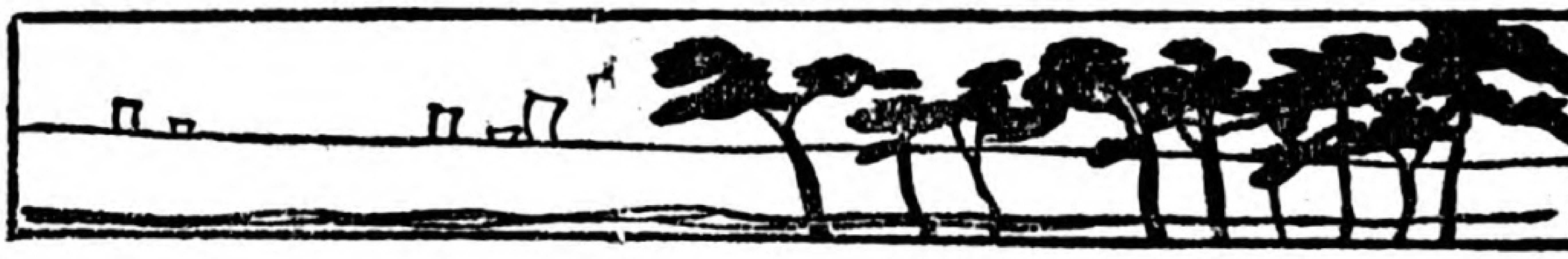
「嘘よあせもの藥だわ、れー姉さん」

と鈴子は私の方へ向いて、辯解の加勢を求める、兩手で顔を摩擦て居る。

「ホヽお洒れ」と二人は笑ひながら庭口を出る。

閻魔の炎に世は燒け盡すかと思はるゝ程、暑苦しかつた日も、今は既に西山に沈んで草も木も蘇生る思ひ、殊に蜩はカラ／＼と銀鈴を振るかのやうに涼しい聲で夕の清涼を讃歎して呉れる、蜩の聲が一つ歇み二つ歇むと次第次第に、野にも山にも暮が迫つて空には宵の明星が現はれる、「御飯ですよ」と呼ぶ聲に私は廊下傳ひに茶間へゆくともう内は薄暗く洋燈が點されて居る、軒に吊した走馬燈にも灯が這入つて、桃太郎やお供の雉子の影法師がぐる／＼と同じ運動を始めて居る。

いつのまにか月が登つたと見えて、南をうけた茶の間は水の流るゝ如く月の光が差込んで居る、庭に高い青桐を照らした月は、縁から座敷へと青桐の影を延ばして、疊



の上には枝ぶり葉ぶり面白き墨繪を描いて居る。

食卓を圍んで一同は皆白地の浴衣に着更へて居る、あちら向いたお父樣の大きな背中には月の光が正面にさして風鈴の影を宿して居る、風そよ〳〵と吹く毎にその短册が背中の上でゆら〳〵としてチリン〳〵と鈴が鳴る、あらいやビールや涼しいものばかり食卓に並べられて、どうも直い月だ、あゝ涼しい、といふ言が幾度も互に交されていと爽かに晩餐を終ると、何やら後園の方で頻に小兒の笑聲が賑々しいので行つて見ると、集つたわ〳〵、リボンやお雅兒が玩具箱を覆したやうに鈴子の友達が二十人ばかりで影捕りをして居る。澄み渡つた月の光で何物とも美化されて居る園は、水を打つた敷石まで、水晶のやうである、芝生には南京珠のやうな露がキラ〳〵として居る、是を繫いだら鈴子の指環が幾個も出來ようと思ふ。

「かげやとうろくじん」と歌ひながら多勢がちり〳〵ばら〳〵に逃げると、鬼は影を踏まうとして追ひ廻る、危くもう一歩で踏まれようとする時は人も鬼もキアーと刹那の聲を出しては賑やかに笑ひ合ふてゐる、月に輝く白妙の庭の面に劃然とうつる影を見れば種々である、背の高いお淸さんは如何しても踏まれ易い、坊主頭で筒袖着に太郎さんの肥つた影は奴凧が宙を舞ふやうで殊に可笑しい、いつのまにかポチも來て、尾を振りながら一同の袖や裾の動くのに戯れついて居る、面白さうな笑聲が堪えずして、リボンが片々、長い袖が飜々として千代紙散らしたやうに、稚き人の影が躍り廻つてこゝにも大きな走馬燈が出來て居る、お月樣は灯に代つて可愛い一同を見守つて居る、お父樣もお母樣も皆出て來てこの活きて る走馬燈を見て樂しさうである。

朝顔はもう眠つて居る、たゞ獨り夕顔は夏の夜の色を領して眞白に目離るやうに咲いて居る、これも今宵の月の寵兒に洩れないのである。（翡翠女）





# 雜錄

## 〇金に見積られたる流行

### 衣裳

流行は朝に晩に變つて行く今日此頃、衣服と裝身具の贅澤は絶頂に達して、贅が上にも贅を盡せば、今は早や黄金時代を通り越して寶石時代となり、別ても貴婦人邊は之れにのみ憂身を窶す有樣にて、或る貴婦人の如きは、此の夏の盛裝にとてお出入りの商人をして見積書を出させ、交情の好い二三の貴婦人に對し揃ひの晴着を作つては如何にと勸誘した處、二つ返事で應じ、打揃つて交際場裡に現はれ、アツト云はせる積りなりと云ふが、今其の値段書を見るに、肌襦袢麻で一圓二十錢、腰卷はメレンスで七十錢、長襦袢絽縮緬三十圓、着物は絽紋附にして白絽を重ね、此の價四十八圓は少し安いが、帶は綴錦の單にて五十圓、帶止は十八金金具附三十圓、帶揚は絽縮緬にて五圓、扱帶も同じく絽縮緬にて八圓、足袋は絹單で一圓は廉けれど、駒下駄の十二圓は滅法高し、之れだけにては僅か金百八十五圓九十錢なれば先づ普通としても、裝飾に古渡珊瑚の根掛けを用ふるとて三百圓、金製寶石入平打簪が百圓、本甲蒔繪附櫛笄が四十五圓、手柄が五十錢、夫れに目下流行の塵除はレツかン製で十圓、襟止はダイヤ入にて五百圓、洋傘が二十五圓、手巾が麻にて五十錢、時計は何うしても十八金の寶石入にせねばならずとて之れが三百圓、鎖も同じく寶石入にて七十五圓、紙入は綴取を用ゐて十圓、手袋絹製にて二圓六十錢、之れを合して一千五百五十一圓餘になるが、最も肝腎な指環は、一カラツト以上のダイヤを入れたもの二個とすれば、千二百圓を要すべく、其の外目下大流行を極めて居る中簪へ寶石を入るゝとせば、眞逆二三圓の新ダイヤも用ゐられず、眞正のを附けるとせば四個にて五百圓はかゝる、それに近頃美顏術流行もあり、夫れにも多少の費用は要す、又人力車の護謨輪を馬車に換へ、馬車を自動車にするとせば、數は限りないが、先づ貴婦人一人が鳥渡出るにもザツと四千圓近いものを身に付けて居ると思へば間違ひなしと云ふ。

## 〇岡部法相の夫人

岡部子爵は泉州岸和田五萬石舊藩主にて夫人福子（四十三）は侯爵前田利嗣氏の養大叔母に當代利嗣侯及び有栖川宮に御入輿ありし慰子殿下には叔母に當り、二條基弘公夫人の實妹なる由なるが、幼時加賀藩百萬石の大家に生れ多くの侍女に傅かれて何の憂き事知らずに育ちし故ありて、縛中の某が宗寺にお下となり寺内に蟄はれ居たるを岡部子爵の先夫人が靖子（卅二）綾子（卅三）の二女を殘して世を先立ち、家庭淋しくありし時に緣ありて子爵家に輿入あり、夫れよりは子爵と琴瑟相和して已に十一名の令息令嬢を擧げられたり、夫人は一時佛門にありたる

人とて仁惠の心厚く、各種の慈善事業等には率先して奔走せられ、先夫人の子に對しても己が腹を痛めし實子と異る處なく、殊に子爵が紳士として世に敬仰さるゝ程なれば、其家庭も實に美はしく、只管質素を旨として子女には可成華美なる服裝を避けしむると共に、教育に重きを置きて高田村の本邸より通學せしむるは時間を無益に費し、勉學を多少なりとも妨ぐ恐れありとて嚴重なる監督の下に本鄕西片町に子女を寄宿せしめて日曜日にあらざれば歸宅せしめずと。

## ○小松原文相夫人

夫人喜知子(五十五)は小松原氏が山陽新報記者たりし時代に娶りし者にて、爾來東京に遊學し評論新聞記者となれる間有ゆる艱難を共にし、後獨逸公使館書記官として赴任したる時、共に伯林に赴き泰西の交際社會に入り、其縱横の才氣を現し名聲を博するに至りたり、歸朝後明治廿二年の冬山縣内閣成立して山縣首相の秘書官となりたるが、夫人は甚く山縣公爵未亡人友子に愛せられて、友子夫人は片時も小松原夫人を離さず、氏が知事に榮轉の命出でし時も遠く東京を離れたる地にては何かに不便なりとの友子夫人の異議に依り、遂に埼玉縣知事に任ぜられ、用ある時は夫人を電報にて東京に招く事數々なりしが、當時夫人は一週に三回上京して友子夫人と語るを定めとなし居たりと、縱横の才氣を有し交際に巧みなるは夫人を知る者の何人も賞賛する處にて、夫人の前に出づる時は一種の魔力に打たるゝが如き感をなすと。

## ○後藤遞相夫人

夫人かつ子(四十三)は故九州探題安場保和男の女にて多く讀み、多く聞きて常識を養ひ、且つ實踐躬行を旨とせるなど良人男爵と相似たる處ありて、外人との交際に通辯を要するは相互の意志を滿足に通ずる能はずとて、爲し能ふ丈けは己れの口にて用を辨ぜらるれど、男爵に對しては全く善良なる夫人にて、性急なる男爵が時々夫人を叱責する事あるも、夫人は其是非を問はず其場は唯々諾々として命を奉じ、若し其の事が非なりしならんには後日機を見て辯解するより、流石に男爵も夫人の前に兜を脫ぐことありと云ふ、夫人は一男一女を有するが其の教育は最も苦慮せらるゝ處にて、連れ添ふ夫の事業及び立場より何時如何にして折角の準備も水泡に歸せずとも計り難く、努々子女が將來如何なる地位に立ちても困難せざらん樣常識を修養せしめ、心身も忠實に働く事に慣さんとの主義より、勉めて家事を手傳はしむる由なるが、之に反して子女の讀み物に就ては嚴に制限を加へず小說類の如きも世態人情の表裏を觀察せしむる一方便なりとて其自由を許し居れりと。

## ○新學士が内助の妻

四十四歲を以て新學士となつた齋藤福太郎氏の成功は確に晩學者の强き味方となつた、然も氏の成功は其内助の力に與かりし夫人ちか子(四十六)の性行に負ふ處少からずといふちか子は信州福島町の舊代官の用人の長女で幼い時から嚴格なる教育を受け福太郎氏が小學教員として同町に教鞭を執れる折に嫁した夫人の家には一子相傳として奇應丸の製藥法があるちか子は夙に此術を傳へて良人福太郎氏が出京の後は此製藥に努め女の手一つを以て南飛驒より三河尾張

の諸國へ行商に出懸け其實上げ金を以て良人の學資に送つてゐたが物價の騰貴は藥價と比例せず初め月十五圓づゝの送金が次第に廿圓となり廿五圓となり、更に福太郎氏の學業の進むにつれて學費も嵩んで大學に入學してからは每月卅圓づゝと送金した女の身で然も自分の口を糊した上に卅圓の金を缺かさず送り、前後九年の間營圓を續け只管良人の成業を祈つてゐた。

此九年間に於ける夫人の克己と忍耐とに就ては世の婦人の模範とすべき美談多く或は行商の歸り路木曾の境なる太平峠の絕頂に於て夜間怪しの男に追れて身を以て遁しことや或は同じく行商の途中大洪水に出會して河中に落ち溺死せんとして危くも救はれたとがあつたといふ。

## ○謠曲の流行

數年前より上流婦人の一部に能樂の研究が流行し、觀世、寶生、喜多等に就き謠曲の研究に務めらるゝ向頗る多き中にも、山內侯爵夫人綾子(二十四)、大河內子爵夫人美能子(四十二)井伊子爵夫人春子(四十七)、園世嗣夫人清子(卅)藤堂子爵夫人俊子(四十)等は何れも喜多流を學び斯界に有名なるものにて、就中井伊、藤堂の兩家の如きは自邸に完備せる能樂堂を設けある程なり、尙ほ寶生流にては岩倉子爵母堂俊子を筆頭に、春田直哉氏夫人雁子(四十四)本田子爵嗣子夫人伊萬子(三十四)、野田男爵令孃にて木多芳氏夫人玉子(卅二)、酒井鏡子(卅九)、關鐵道廳經理局長令孃等にて、此一派は春田夫人幹事の下に昨年より婦人素謠會を組織し、每月會合して研究せられつゝあるが、出席會員は每會十四五名宛ありと云ふ、猶又素謠の流行に連れて能樂の囃子の中小鼓も亦熱心稽古せらるゝ向多く、何れも幸流の鼓師三須金吾(七十七)、同平司(五十七)の兩人に就き學ばるゝものにして中にも前記岩倉子爵母堂、春田氏夫人本多氏夫人、酒井ぬい子の外、佐藤夫人靜子(五十八)、古川滑藏氏夫人直子(四十三)、久保扶桑氏夫人富子、江木衷氏夫人榮子(三十)內藤彥介氏夫人佐武子(四十九)、竹山萬三郎氏夫人靜子(卅八)鹽田大佐夫人捨子等又斯界に錚々たるものなりと云ふ、元來能樂は維新後更に振はざりした、明治十四五年頃、前田、池田、黑田の三侯爵を首め、重野文學博士等の奔走により、芝公園紅葉館側に一の能樂堂を造り、是が挽回策を勉たるも面白からで其儘に過し居る中、畏も英照皇太后陛下には非常に斯道を好ませ給ひ、前記大河內子爵夫人承りて其發展を圖りたるより、皇太后陛下には每年三回宛件の能樂堂に行啓あらせらるゝ事となり、並に創て貴婦人能樂會の設立を見るに至りしが、其後皇太后陛下の崩去と共に又漸々衰微し、殊に廿三四年頃は演劇流行の時代とて全く壓倒されした、三十七八年戰役當時より又々隆盛に赴き、何れの能樂堂にも男子は愚か婦人の出席を見ざるなきに至り、近くは今回の御前能の御催となりたる次第なるが殊に靖國神社能樂堂の如き每回婦人の入場者は殆んど男子と伯仲せる盛況を呈し居れりと云ふ。





小說

# お京さんの日記

秋雨

○八月一日　朝

遠雷の樣な音に眼を覺ます。おしんが枕頭の緣の戶をわたしに遠慮して靜かにひきずりあけて居たのであつた、夜着の襟から眼だけ上を向けて、

『おしん今日はお天氣かヱ』

ときく。殘り一枚を戶袋近く、引きよせて、欠伸をごまかしたおしんは、

『はあ？　お天氣で御座んすか？　お孃樣今日はきつと好いなぎでせうよ、昨夜波の音がよくきこゑるとおもふたら、けふはこんなお天氣ですもの』

『嫂樣はもうお起きなすつて？』

一廉星見の積りらしい。

『さうとつくに』

折角床を出樣と思ふた元氣はこれで崩れた。まけず嫌いな自分は人に先を越されるともう自暴腹になる癖がある。一層今日は此のまゝ寢て了ふかとも企たてゝ見るが、新らしく嫁た嫂に對してもさすがに羞かしいのでいやながら立つ。

柱時計はすぐに七時、濱近くの七時は都での十時にもまさるおそさだ。着物を改ためるのも懶うくて緣にピタリ坐り込むだ。

『今朝は殊更あたまが重い……』

重い筈、昨夜おそく東京から嫂樣が沼津へ着かれたの

で向ひに行くやら、話しを聞すぎたり、昨宵一と夜でグッツリとした様だ。こんな事から病が進むのではないかと方角ちがひの僻みを起すのである。

　朝の露を渡つて來る風は冷やりとして、汗ばんだいきれ臭い肌を消めて具れると、身體がかんてんの様に引しまる。

と、嫂様がわたしの起きたのを聞きつけて庭から這入つて來られた。今度はいはれぬさきに此方から、

　嫂様お早う御座いますッ」

「お京さんお早う、昨夜おそかつたのでお疲れでせう」

「否ェ嫂様こそ」

から照れ隠しを云ひ放つて置いて扨着物を改ために掛る。私しの日記は如何もかういふ前提が經過した後でなけりや本文には入れぬといふ難な性質なのである。しかし皆は身體が病いからだと許して居る。

　着替えながら折々嫂様をぬすみ見する、柴の袖垣にすらりッと立つて、色のかはつた紫陽花を見つめて居らつしやる。何と美い姿なのだらう。昨宵停車場で御目にかゝつた時は旅づかれに少しこめがみの髪がほつれて居たので御顔が険に見えたが、今見れば麗いつきたい様なあの襟足、顔全體の曲線、わが兄の、……親身と言つては兄一人の……、妻ながら私はむしろねたましさが胸にきざした、あの姿で、あの瞳で、外務通ひの罪のない人をときめかしたのかと今度は憎くなつて來た、現在わが兄もその一人であつたのではないか否兄と云はず女たる私自身も、今の時のうちに、わが魂を抜かれて居たのだ。と氣がついて改ためて嫂様を見る。依然たり紫陽花の精みた様な氣がした。

　しんが口洗ぎを持つて來たので、急いで足袋をはいてしまふ。

「お嬢様、お早く御飯をお濟しになつて濱へ奥様を御案内あそばせな」

この時フッと嫂は顧つた、そして庭下駄かろくこちらへ近づいて入らしつた。

「お京さんのお仕度は大分お暇が入りますのね」

にこ〱してかういはれた。「學校へ行かれないもの

は皆こんなですよ」ともまさかいはれず。

「嫂様が御出にならないともつと怠けて居りますわ」

どこまでも口の減らないことをいふ。

「嫂様は沼津は初めて？」

「エ、箱根迄は來ましたけれどこちらへは今度はじめてです」

「そして何故昨夜兄様も御一緒ぢや御座いませんでしたの？」

「今日横濱に御用がおありなさるので、それが濟むとすぐ行くつて仰つてゞした」




「ぢや今日は日本橋の方には居ませんのねエ」

母様になら京ちやん「くどいね」と叱られる處だが嫂様は温順しいから一々返事をして下さる。

木戸がすつと開いて茂助が箒を持ちながら、

「お早う御座いまする」

と挨拶して隅の方からそろり〳〵はき出した。

垣の外からおしんにであらう、

「お客樣がふえたゞね」

誰れのこゑともわからず通りすぎた氣配がした。處へおしんが牛乳を持つて來る。

「嫂樣に御飯をあげておくれ」

「お京さんは？」

「わたくし朝は牛乳だけですの」

「それでおよろしいのですか」

「エヽ藥の加減で固形物はあまりとれませんの」

「そんなにお惡いのでせうか」

と美くしい瞳が射るやうに私の眼へ映じた。

「もう三期ですもの保つた所で、この夏位でせう、これが眞實に避暑に來たのならどんなに面白いでせうけれど思ふ樣にならなけりやどこに居ても……」

毎時に似合はずシンミリ打ち明けた、そして嫂がどんなに吃驚するだらうとおもふた。しかし慈愛に富んだ、生氣のみなぎつて居る嫂の眼を見た瞬間には、ああ新婚の嫂にこんな無慘な事を明すのは情けなかつたのよと悔いて見たが仕かたがない。どうせ知れることをかくすのは私しに取つて心持ちよくない、まゝよかうして嫂樣に縋る方がと。

「まあそんなにお惡いのでせうか」

と同じ言をくりかへしてやがてきつぱりと、

「お京さん、あなたが死ぬとお思ひなすつてもわたしが死なせませんから、どこ迄病ひに勝てるか力だめしをして見ませうねえ、お京さん」

思ひ込むで、さも自信づよく嫂は言ひ切つた、かういはれると、頼みない身體にも何處か頼もしい所が出來てふいと氣が變る。娑婆に浮び出した樣な、肩の荷が下りた樣な。

三年前に計らず病ひを得てしかも所謂不治症と聞いた時は落膽もした、かきむしりたい樣な、弱者となつて強者を呪咀ふて見ようと迄おもふた自分は、人が「氣で保つ病、なになほらぬことがあるものですか」とは

げまされてもどうしても、強者が弱者の心をしるものかと、反抗こそしたれすこしも慰められるところはなかつた。それを今嫂から力つけられたとき、否エと反對する勇氣はどうもない。言葉にしひて反抗しても嫂の誠に戦かふことはとても出來ぬ。さうでなくても弱者の心は單純な依頼心のつよいものである。こゝに至つては醫者の藥が何であらう、私の身體は誠の手にすべてゆづる運命なのであるもの。

急に元氣が出て一と息に牛乳を飲み下した。嫂様は靜かに御飯をしたゝめられた。

＊　＊　＊　＊

正午近くまで千本濱の松風を四の袂に占領して心ゆく迄時をうつしたことは、曾てなかつた頁を日記に殘す材料である。

○八月五日　晝

嫂様を停車塲に迎へてから四日、兄様を此お座敷に請じ入れてから今日で三日、二日のうちに二人の味方を得たおもひである。

醫師の注意もあるので夜丈けは離室に二人は往つておしまいなさる、あとには浮世ばなれをしたおもひで自分ひとり冷たいベッドによこたはるそれが何より樂しみなのだ、病を得てからといふもの寢ることほど樂なものはない、この樂しみのとれた時はおそらく自分はこの世の中の人ぢやあるまい。

今日は嫂様買物にしんをつれて町にゆかれた。あとには兄様と自分きり。

急がしい兄様は却々旅行などする暇はないので嫂様をつれて一週間ほど當地に居られることに漸やく父様がおゆるしになつたのだ。馬鹿なとは思ひ消すけれど、兄様と樂しい日を送るのもこれが限りではないかとおもはれてならない。例の命は嫂の誠、兄の情に必らず蘇がへる否すくはれると信ずる、しかし身體はもうほとんど肉を持たぬ、生よりも死の手の方が廣い面積を有して我身邊に迫つてゐる。こんなことをおもふと晝寢して居られる兄様の顏をあかず凝つと見つめた。

うしろの森でミン／＼チイ／＼といふ蟬もうるさい

と云へばうるさいが、今の身には生前の友やがてうちつれてゆく可き暗き國への道案内であるとおもふと却つて可愛いゝといふ氣がして物めづらしく耳を澄す。

　緣側の金魚の水を更へてやらうと立ち上がつた時、兄樣はふつと眼をさまして血ばしつた瞳に自分を見上げながら、

「京、どうした」

「今金魚があぶくふいてるから、水を更へ樣とおもつて」

「お前がそんな事しなくともいゝ、金魚位少し死んでもいゝぢやないか」

「まあひどい兄樣ね、金魚だつてまだ生きてゐるのですもの、私も金魚みたいなものなのですね」

「さうか〳〵、それぢや兄樣が更へてやるからぢつとしておいで、此の間から大分氣をつかつてわるくなつたのぢやないか」

「否エどうせ太いか細いかの差だけですもの」

「そして此の頃さびしいといふ氣がしはしないかね」

「それやします、でも兄樣や嫂樣が來て下すつたので急に味方がふえた樣な氣がしましたのよ、この外には友達の手紙がなぐさめて與れるばかりですわ」

「それなら父樣母樣はなんとも思はないのか」

「兄樣それをきいてどうなさいますの、只過去の罪を告白させ樣とばかりなさいますのなら折角をさまつて居る胸の血を吐かせ樣となさるのも同じですわ」

兄樣に對して過言と思はぬでもないが苦しさ餘つてかう云はしめた、私しをして。すると兄樣はいかにも苦痛に堪へぬといふ面持ちで默然と坐つて居らしつたが

「どうしてもう京さんの病氣はなほらんのかなあ」

兄樣をしてかう惱ませるあるものが秘んで居ることは今迄にかつてない擧動である。

「京さんはさつき味方が二人だと云つたな」

「えゝ、それがどうかしましたの？」

「まあ今いふまい」

　折から嫂が歸つて來た、おしんは大きい荷物を持たされて眞赤な顏をしてゐる。

「嫂様おあつかつたでせう」

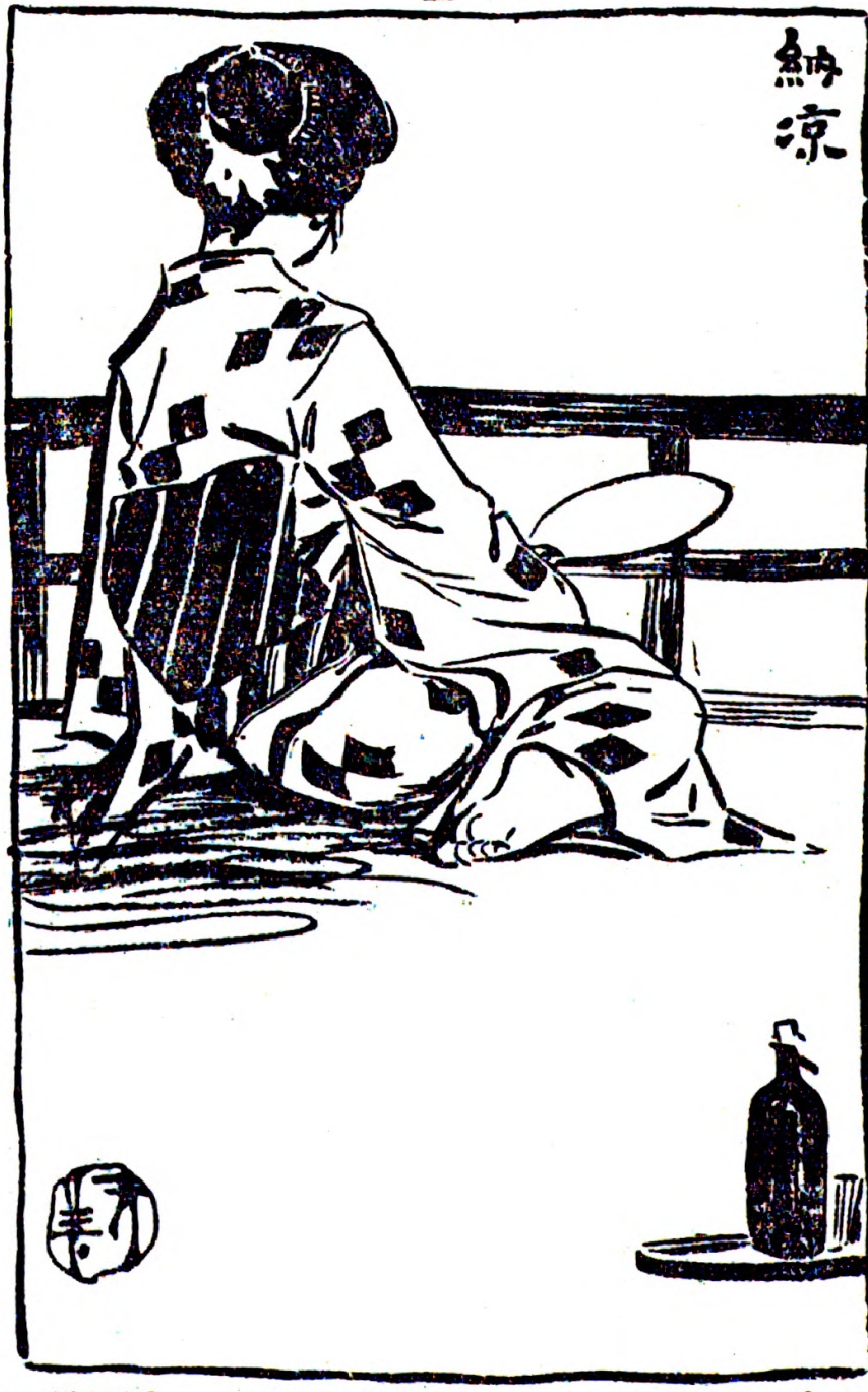
「しんも御苦勞だつた」

兄様は思ひついた様に、

「あゝすぐに海へ飛び込むでお出で、水風呂のかはりに」

しんは口惜し相に、

「旦那様それでは、藥罐色になつてしまひます、これでもなくつてならない人間で御座います」




その大氣焰で一同は失笑さずには居られなかつた。

私しの嫂様にお願ひした買物は何もかも白ばかりであつた。あとでおもふて變な氣がした。シーツ。ハンカチーフ足袋、卷紙、肌着にとての晒木綿。新が封書をお嬢様にと置いて行つた。何氣なくとり上げて裏を見て……落した一度は。

『園井忠』。兄樣は立つて釣棹を敷居の外に持ち出された。

○八月十四日　夜

何故か文字を見ることは一切ならぬと今日醫師はいふ。五日の夜大變熱が高かつたが近頃ではもう睡眠の樂しみが一日々々に減じてゆくそして始終夢の見通しである、あらゆる過去の追憶が繪卷物の樣になつてくりかへされてゐる。

嫂の誠も果して此の肉を支へることは困難しかつた、兄の情けも遂に、止まる呼吸を通はすことは至難の業であつた。もう日記をかくことも今かぎりである、只一言かき添へて置かう。五日の夜、すでに危うかつた私の手に兄樣は七寸程の京人形……白い顔に白い衣服、胸を締めてゐる帶だけは緋の燃ゆる樣な紋縮緬であつた……を手に持たせて、

「京さんもう一人味方のあつたのを忘れたかね」

人形は今も私しの手に無心で笑ふてゐる。

（をはり）



# 女事務員

基子

噫々漸と三時。未だあと一時間あると、不思つぶやいて、又しても力無く、机の上に頬杖ついた。

會計係が願ひましてはと讀み上げる、いつも〱同じ人の同じ聲の同じ讀み方。噫倦きた。吁厭だ。夫に伴ふてぱち〱と、さも達者だと云はぬ斗の高慢ちきな算盤の音。おゝ五月蠅い。蒼蠅い。耳八ケ間敷い。早く止めればいゝと、睨め付ける拍子に、其高襟頭、厭に毛の長い、變に油をこてつけて、奇麗に分けた其頭が目についた。何だか憎しくて堪らぬ。短いもみあげも氣に食はなければ、眞紅のネクタイも癪に

障る。讀む人も、彈く人も、揃ひもそろッたハイカラよと、一入何と云ふ事なしに、憎しさが增して來た。何もあんなに飾なくても可さゝうなもの女でも自分なんその關はない事を思へば男の癖にさと猶更思ふ。あんな頭よりか矢つ張りくり〳〵坊主の方が甚麼に薩張りして可いかも知れやあしない。捕まへて切つてやり度い樣だ。全で黑塗のかつらでも被つてる樣だ見つともないと、吾しらず冷やかな笑を浮べた。夫で漸と、少し胸が晴れたやう。何とはなしに清々して來た。自分乍ら、什麼して此麼ねちけた厭な根性に成たらうと怪む。以前は隨分快活だ、磊落だと人に好かれたものだッたが、近頃全で變て了た。で自分でも時折、なほさう〳〵と勉めるけれど、どうしてもなほらぬ。噫なほらう筈が無い。之も彼事故と思ふと、胸は既う堪へやらぬ思ひに閉される。

思へば、其人をこそ恨む可きだに、憎むべきだに、どうしても、恨む氣に成れぬ。憎む心が出ぬ。而て罪も無い人々が、癪に障てな



らぬとは、まあ何とした譯だらう、噫思ひますまいと氣を變へて、目を轉じた、今度は庶務課の相變らずの忙し相なのが眼につく、殊に昨今は、株主總會間近迚其繁忙、實に名狀すべからずである、やれ總會の通知が什麼した、委任狀が恁うしたと、殆ど戰場の有樣、左なきだに汗の流るゝ今日此頃だ、課中のどの禿頭からも汗所か、濁氣が立て、否々正に噴火でもしさうであるとは、餘りにひどい云ひ分かもしれぬ。

扨て又眼をば、移した所で、地味臭い何だか、陰氣ぽい地方係、華美やかで陽氣な市內係、いつも〱惡ふざけする契約係、夫へ助太刀する勸誘員等矢つ張り何時もと同じ事だ、眺め倦きると又、會計の例のが耳障りだ、目障りだ。如何にも厭で堪らぬので、うつ伏して見た、と今更乍ら騷々しさが耳につく。ちりんちり〱〱と、しつきり無しに懸つて來る電話、あゝ煩し〱と怒鳴る聲、左樣なら、ちりん〱と切る鈴の音、ちやら〱〱と給仕を呼ぶ鈴の音に應じて、ハーイと勢よく馳ける靴の音、おまけに、街を通る、電車、自働車、自轉車、人力車の響が、之に加はるのだから、堪らない、實に耳も聾する斗りだとは此事だ。よく是迄毎日々々此中で事務を執て來たものだ。と、吾乍ら感心する。折柄どつと後の方で笑ひ崩れる聲。見れば、例の騷ぎ好きの契約係で、つまらぬ惡戯でもしたらしい。おゝ何だか忌々しい。自分の沈み込んでるのを嘲けられた樣な氣がする。いゝ年をして、くだらない人達ばかりだと、又も冷笑を禁じ得なかつた。よくも見ないで、直ぐ目をそらして時計を見上げた。あゝ嬉しい。四時に僅か五分前。少し早いが、片附け出して、丁度四時を報ずると一緒に椅子を離れた。歸ても、別段樂もないが、と思ふと、堪らず厭に成つて、又腰を下した。

「オホゝゝゝ、何をそんなに、考へ込んで被居るの、お先きへ失禮致しますよ。」見れば、隣席の今井樣と向席の陽さんだ。何だ、今迄遠く斗り睨んでゐたので、近〱の者が何して居たか、少しも氣が附かなかつた。而し、二女のいつも〱元氣の可いのも、自分には、

太く妬ましい。つまり苦勞が少いんだらう。

「さあどうぞ、おかまひなく、」と會釋を返して、並んで出て行く姿を凝と見送る。水淺黄色のお對のリボンが黒い房々した髪によく配合て、又なく美いけれど、矢張り自分には、いゝ氣持がしない。何時迄ゐた迚、仕方が無いから、自分も立ち上つたそして、例通りの事を繰返して社員昇降口と札の掲げてある、出入口の例の四五段を馳け下りて通用門を出た。折柄颯と吹いて來た風に何ともいへぬ、いゝ心地がした。胸の煩ひも、頭の悶えも、多少吹き拂はれた樣である。否今日と云ふ日の勤を終へたのだから、頭も輕く、肩の



重量さへ、大分減じた樣思はれるのは事實である。

ガラ／＼ッ、ハイ／＼、驚いて振り向けば、何だ、二三臺の俥を揃へて、藝者が來るんだ。皆流行の衣裳、流行の裝飾、美いものだ。却てあんな商賣も徳だなと思ふ。だが此麼時にてく／＼歩いて、側をスーッと通り過ぎた。車上の人抔を、執拗く見えずなる迄、見送るなどは、餘りよい圖でも無い。

おゝ暑い／＼、全でゆでられる樣だ。おまけに、ぽつぽ／＼／＼と、朦々たる砂煙に、絶間なくのべつ幕なし襲はれるのだもの。汗は流れる。足は疲れる。其上昨日洗つた斗の髮が、兎もすれば、崩れかゝる。吁電車に乘せて貰ふよ

り外仕方がない。折よく來た。本郷本所行へ飛び乘た。車中は、存外すいてゐる。先づ、取付の右側へ腰を下して。一寸四邊を見廻してぎよつとした。「呀ッ」と小聲に叫んで、降り樣としたが、間に合はぬ。車は情け用捨も無く走り出した。夫れともと思つて見直して、思はず、吹き出して了ッた。何て眼だらう。似てもつかぬ人を夫と見るなんて、是で漸く胸撫で下した。而し今の聲を、人に聞かれはせぬかと内々案じたが、さる樣子も見えぬは、猶の事有難い。だが一寸似てはゐる。白絣の着物を短かく着て、薩摩下駄を穿いた工合や、帽子の被り樣など、いや、まだ／＼色のあさ黒くて、硬肥りのとこ、濃い太い眉、凉しい眼、却々似たとこが有る。一寸見て夫れと驚いたも、あながち、無理でも無かつたと獨り點頭いた。夫につけても、彼人はひどい。手紙の一本位寄こしたつて、よささうなものだ。あんなに巧い事云ッて置いて、男の心つて本當に秋の空の樣なものかしら。と、つく／＼感じた。之を考へ出すと、どうも、胸がいら／＼して堪らない。如何して紛らさうと、そこらきよろ／＼見廻はすと、向側にゐる、十七八の美しい高襟風の二人連の女學生が目に移ッた。吁自分の常日頃羨んでゐる女學生である。まあ何て、樂な人達なんだらうか。親に大枚のお金で仕込んで貰ふを、有難いとは露思はず、全で、親の爲にでゝもある樣に、勤めでゝもあるかの樣に、通學するのをば、何につけ彼につけ恩がけて、そして、あんな生傲しい、程度の低い、女學校なんぞへ、通つて。但し一寸斷つて置く。どうせひがみ根性の自分の觀た事聞いた事故、隨分お氣に障る方もあらう。が是が彼女の病だと、憐んで、云ひ過しの所は幾重にもお許しを乞ふ。

扨て又ひがみを續ける。兎に角、そんな所へ、お金を費て、暇をつぶして通つて、覺えるものは、生意氣と、虛榮心と、それから、英語をちーつとばかり操るのが、普通だと或人から聞いた。やれ編物をします、それ裁縫を致しますと、其都度親のふところ傷めて、扨てどんな物が出來るかと云へば、つまらぬ巾着や、

くだらないよだれ掛、手も通されぬ、着物や羽織、夫れでも威張りかへつて女學生で候、の女書生で候のと、大道せましと大手を振て濶歩遊せば、どんな人でも恐れて、途を讓る。まあ何て偉い勢なんだらうか。そんな時、自分なんぞは、兩手を抱へて、小さく成つて、溝板の上でも歩んだ。同じ人間で、同じ女で、同じ年頃で、何と云ふ違ひだらう。馬鹿々々しい。そして理想の夫だとか、理想の家庭だとか、自分等には、解らぬ七六ケ敷い事ばかり仰せられる。夫れを又、世の人は、氣に入るのかして、非常に歡迎する。今は何といつても女學生が勝だ。事務員なんぞしてゐる者が、いくら踏ん張つたつて、到底足許へもつかれない。「お隣りのお嫁さんは、大層何かお出來なさるんですつてね、さうでせうよ、女學校出た相ですもの」と、一方は云はれるものを、此方は「お向ひのお嫁さんはそんなに、敎育のある方ぢや無いわ、何しろ、お里が惡くて、早くから、勤めとかに、出て被居たんですつてもの」と、云はれる。だから、自分は何につけ、彼につけ、女學生が羨敷い。何故もつと工面のいゝ家へ生れなかつたらうと、何時も身の不運を嘆つ。

あゝ、世間には、斯ういふ人好のする女學生が、播いて寄せる程ゐるんだもの、彼人も乾度此方がよくなつたんだらう。えゝ忌々しい。而し考へれば、尤千萬だ。怨む者の方が無理である。自分だつて、男だつたら、矢張り、さうなるは必定である。

「鍛冶町、々々、お降りの方は。」おや既う來たのか、「降ります」と聲かけ乍ら、飛び降りた。外は未だひどひ暑さである。風鈴屋の店が、如何にも、心持が佳い。いつもの横を曲つて、家へ着いて、格子に手を懸た、刹那、未練がましくも亦考へた。あんなに云つたんだもの、殊に依つたら、今日らは手紙が來てゐるかも知れない。さう／＼土曜日ではあるし、乾度、と思つて、何時に無く、勢よく、ガラ／＼ッと明けた。姪の友達が大勢來て、相も變らず騷いでゐる。急いで上つた。義姉樣が、例の通り、微笑して「お歸んなさい」と云つて下つた。自分は「只今」と答へた儘、義姉さ

んの顔を見てゐた。郵便でも來てゐる時は、いつでも、直ぐ出して呉れるのが、常だからであるが何とも云はれぬ。出しても呉れぬ。あゝ今日も亦來ないのかと、落膽して、二階へ上りかけた。それでも若しや机の上にでもと思つた。前にも一度其麽事が有た樣だがと、少し力づいて、馳け上る樣にして、一番に机に目を放たが、無い……、ない……、吁ない。失望と落膽とで袴もとらず、どつかりそこへ坐り込んで了つた。思へば斯うして、待つたのが、丁度今日で一月近くになる。其間つて云ふもの、人の足音、格子の明くのにも、郵便屋かと、早合點して馳け出した事が、まあ幾度だつたらうか。

其折々の胸の中、思ひ起す毎、涙の種となる。もうもう望みは絶え果てた。諦めるより外はない。而し譬へ、今後一年經たうが、二年經たうが、五年、十年五十年、否、一生たつた迚、是ばかりは諦められぬ。それ程の思ひであり乍ら、何故か、打ち明けて云つてやる其勇氣は無い。出ない。いや〱負惜みのひがんだ自分には、夫が出來ないのである。

あゝ斯うして自分は、一生こんな悶えに惱まされてあはれ果敢なく、朽ち果つべき悲しき運命と生れて來たのではあるまいか。噫。

## 鎌倉の一日

村雨女

### ◎鶴ヶ岡

見様々々と樂しみにして來た鶴ヶ岡の靜が舞殿、一ト目見て飽足らず戀しぬ。

聞ゆる女の多き中に、我れは常に靜を好めり。白拍子より出でゝ義經に侍し、別離の後もなほ當時の面目を保たんとて幾度び泣き幾度び苦しみしぞ、藏王社頭の悲しきすさび、梶原武者に怒りし見識、又權勢并びなき鎌倉將軍に召されて君前に双袖を舉ぐる時、儼然誤りなき面に、其欲するまゝを舞ひしは、素より義經を慕ふ情の餘りあるに依るとはいへしかも貴の權勢に屈せざる丈夫の魂にあらずや、實に靜は[illegible]にして[illegible]

む可き美人なり。聞く、後白河法皇神泉苑に雨乞ひありし日、百をもて數ふる白拍子の中に靜は歌舞容姿丼びすぐれて日本第一との宣旨を蒙りしが、此時初めて義經にま見へて遂に翠幄に召されしとぞ、世態のきわまりなきに會ふて常に軍陣の中に侍しつゝ羅綾の袖に刃を包みける。

されば鶴が岡の舞殿は定めて其折を偲ぶに餘る昔のかたみのかずかずを殘して古色なつかしき御簾の樣、綠の色、朽ちかゝる階段、あれも是れも實にゆかしき趣あるべしとて我が空想はなか〳〵の者なりしに來て見れば、眞率の舞殿は餘りに單調にして張合なきに少からず望を失ひ、願はくば、しづのおだまきくり返し、見ざりし昔の美しき想ひを今になす由もとぞいと口惜しく殘り多く久しく築きし空想の舞殿も遂に毀たざる可らざるなり。

## ◎建長寺

總門より總て建築のさま境内の樣子まで流石壯嚴にして寺林尊とく將たおもむき深く、塔然とせし山門に釣り下げし燈籠の紙はおほかた剝げて骨のみあらはなり、旅人此の檐端に居睡りす。この古びて趣味ある大なる中に、ひとり小さく見えて餘念なく午睡するさまは何とはなく太古の如く見えて心ゆくばかりなり。

## ◎半僧坊に登る

茶店の女がしましく呼ぶ中を進めば人家離れて兩側の樹木色濃くつまさき上りの坂の上に丸木の鳥居建つ。一二の宮も過ぎ、なほ深く入らんとする見先きへ、「是より奥の院」と建札あり。何樣のましますかは知らねどこゝまで來し甲斐に探ぐりて見たき念ひにかられて樹の葉の繁りに風の香もゆかしき中を進み行く、路は滑くけはしく土を排ひて露る幾條の木の根は蛇の如くうねり〳〵てまつはる樣に足の自由を妨げられ凄氣どこからともなく迫りて左ながら深山に入りたらんやう、いかにも之は半僧坊大權現にてありけるよ、小暗らき坂路、ひやゝかな風、日は木の葉の繁みにさへぎられて濕氣立ち迷ふ山の半腹。行手いよいよ狹く路の左右に太き鐵の鎖のたるく引きたるに加へて所々天狗の羽の樣を見る。ます〳〵高く急なる坂に動氣はげしく汗は肌をうるほして息つきあへず登ればひと際小暗き古檜の中、一字の祠を見て進む。四隣の淋しさに伴ふ奥の院の祠の荒れたる、雨にさらされし色白々と、なめくじのあと幾條、そげ〳〵せる喜連格子に氣味惡るくもつれ亂るゝ女の髮の毛、そも誰が何を祈りの捧げものぞ、迷ふ女の茲にひれ伏す無慘な姿あり〳〵と目に浮びておもはず總毛立ちぬ、足早に裏手にまはりてさゝやかなる茶店に憩みて見渡せば向ふは一帶の開濶地、風涼しくして稍人心地す。

## ◎賴朝の墓

草の香かほる道を左りに折るれば稻田黍圃、風は習々と渡りて路芝枯れ枯れに、小さきひる顔の花こゝかしこに咲き、双胡蝶、何を目指すやひら〳〵と舞ふ。儚なげなる趣味の小路を行けば、こんもりとせし一ト木の繁れる其處は、青苔滑らかに見る影もなき五輪塔、香の煙りほのかに迷ふて花は色なく墓前にうなづく、こゝろから鎌倉將軍の末路をおもひぬ。

威風も榮華も醒めては一睡の夢に似たり松杉深くとざして蟬の音よ

わよわときこえ、哀れ荒涼たるおもひに撲たれて暫くは去りもやらず。

## ◎鎌倉宮

高からぬ石だんの左右に芙蓉ありき、花いまだ咲かず、登れば廣くと静なる宮の構造、玆と目に立つ飾りはあられど、只大きく淋しく心に染みし史上の薄命兒、護良親王が上を思ひまゐらせば自から心沈みて氣塞りぬ、宮に添ふて廻れば後ろの方の小高き丘に柵かたくめぐらしたり。奥の方、樹木欝蒼たる中より蔦かつら幾重か延びて柵の外にまでまつはり下りぬ、扉固く錠前もて締りたるが何となくあはれを添へぬ。

## ◎片瀬の里

片瀬の里に暫しやすらう折、縁に添ふた六疊の小座敷、朝顔咲ける中庭を隔て丶離れにも二三の客あり、料理は運ばれて朱塗の膳に珍味のかずかず中にも美事な鰹魚の刺身赤い大きな海老の立派さ、給仕のひとに笑はれやせんかと遠慮しながら箸とる初旅の可笑しさ。やがて爰を出んとする時、「江の島へお越しあらばこの宿屋に御泊り下され御叮嚀に致し升ると送つて出たあるじがいふ。」先きを急いで日歸りの身も、さぬきや、と書きし少さき紙きれ受け納めつ丶行道は、人家絶えつ續きつ、やがて松原にはさまる路に出れば次第に砂地に成りて吹く風は磯の香をこめ、松ばやしを渡る濱の遠音や海水浴の帽かむりし乙女や。袖も裾もひらひらと行く、最う海には近しと思へば嬉しさに胸もとゞろく、百姓屋一軒、傾くのきに源氏節の看板見ゆ。未だ海水は見えざれど行手明るく廣き世界は何處ぞと急ぎ走れば袖は俄かに吹き拂はれしか とおもふ間に身は海岸に立てるなり。

## ◎由井ヶ濱

時は夏の最中照る日のつよき輝き華々しく映りて水か空か髣髴たる相模海上、瑠璃の如き艶、銀の如き水色、更らにこなたへ紺青のくまどり。それかと見る間に雪白の波忽ち崩れて龍の如く狂ひうねり。この雄大なる波浪、爽快なる濤聲、吹く風つよく袂はたはたとあふりて踏める砂地は音もなし。天と海と我が立つ磯と世は此の外に何物のありとも知らず、濱に立てる白衣の少女、裸體に遊ぶ無心の蜑の子、さながら天つ使ひが伽陵頻伽の音に誘はれ紫の雲に包れて下界遙かにゆく様なり。

## ◎農夫婦

由井ヶ濱に來て小高き丘を歩む、右手は山左り手はさゝやかなる野菜畑、薄桃色のなでしこの花しほらしく咲いて雄大な海を見た目には殊更ら可愛らしく思はれぬ。道の向ふより人かげ三ツ、近づけば農夫なり、夫は鍬を肩に婦は籠を脊に子は無心に笑みて睦み語らひつゝ行く、山と海との間にこの夫婦の對照いかに温和に見ゆるよ、幸福なるかな彼等、天に受けたる本分に滿足して望外の慾を抱かざる他愛なきその顔、共に働らき共に勞れて幾年平和につとめを果すらん、つくづくと我身を顧ればなまじいに世の憂さを知る故か、あるひはなやみあるひはくるしみ。斯くして限りなき世と戰ひて遂に何の得る所もなし、實に我が一生はこの農婦に如かざるか。

物思はんとする時、サツと吹く汐風に連れて轟々たる濤の響き目を放てば澎湃たる水面、際涯なき濱は双袖を展げて恰も我れを迎ふに似たり心機忽ち一轉し彼方を望めば烏帽子のごとき島ほの見ゆるほとり、蜿々たる棧橋波中にあらはる、すなはち江の島に來りしなり。

# 和歌



## 三宅花圃女史選

（天）白百合　青森　三浦愛子

匂ふ香の闇にもそれと知られたり
　色にほこらぬ白百合の花

評、ほこらぬ色こそまことになつかしけれ。

（天）雷　麹町　豊子

馬車をともとゝろになる神の
　雲の下ゆく岡こえの道

評、此車の響にはかみも鳴をひそめつべきか。

（地）青嵐　大阪　木村花子

磯寺の庫裏家をぬけて松すきて
　白帆にせまる青嵐かな

評、磯てらあらしも風情あり。

（地）草花先秋　麻布　倉重千枝子

すゝむよの都の大路七草の
　花をひさけり秋またすして

評、まことにときな今の世はめではやすなりけり。

（地）夕納涼　横濱　服部花子

ゆふまぐれつゞく千まち田うちそよぎ
　青海原とみゆるすゞしさ

評、たれもまひよる景色いとうつくし。

（人）懐舊　静岡　中村正子

垂髪にあちさゐさして姫御前と
　たはむれあひし昔こひしも

評、子等のたはむれをよくみなれたればなかしうて。

（人）夕立　大分　佐藤ひで

小山田の田ぬしの水のあらそひは
　にはかにはるる夕立の雨

評、水にながしゝ争ひいとよし。

（人）金庫　静岡　河合粂子

火水にもさはらぬ庫に咲みてる
　黄金の圀はちるへくもなし

評、黄金の花の咲さかえたるさまめでたし。

（人）箱庭を見て　東京　原三幸子

うらやましわらふきやねの此いほり

山をうしろに海をまへにて

評、まことにうらやましうこそ。

（人）川邊納涼　京都　しげ子

氷賣る旗もなひきて夏川の
小橋にきはふ夕涼み哉

評、里はづれのけしきみゆ。

## 佳調

○　相模　きみ子

二つ三つとひゆく螢影きえていよ〳〵暗し梅雨の空

夏月　越後　木曾芳子

わき出づる音もさやけきま清水にやられる月の影ぞ涼しき

夏草　下野　岡萩枝

花咲かむ秋を思へば庭もせにしげる小草も苅られざり鬼

夕立　東京　矢澤民子

なつの日のけしきをかへて夕立の雨すゝしくもかゝりけるかな

病める身の姉とたのみし友よりのやさしきたより
をくりかへし見て　大阪　波奈子

情ある君がみ文を頰にあてゝひとり泣きいる夕さびしも

新樹　大阪　天野香

雨かせをいとひしはるのはなよりもこゝろしつけきなつ木立かな

折りにふれて　下野　高畠かつ

ともすれば濕ひはりせし古袷またとり出る梅雨の頃

里にめでたき少女を見て　岩代　川俣のり子

ましりてもひときはめたつ姫ゆりのぬしなき花をたか手をりけん

失戀　本郷　なでしこ

しのぶれどなほもえ殘る胸のうちにつれなき人を思ふ悲しさ

夏山里　攝津　細見榮子

夕日さす松のこのまに見つゝろかな暮わたり行く夏の山里

失題　淸國　福田つる

あまき香の夢とたゝよふ夕闇に花ほの白し瓜はたけみち

失題　相模　きみ子

わか宿のまと蕀の陰に蟲のきて夜每にうたふ秋は來にけり

音樂　秋田　佐々木蘭子

乙女子がてなれの小琴かなづれば芝生の蟲もなきいでにけり

題しらず　備後　藤木於才

里遠き川そひ堤たそかれて牛飼ふ子等のうたかすかなり

五月雨　東京　服部倫子

さま〳〵と談りあひつゝ梅雨の晴間賑はし井戸のあたりは

折にふれて　肥前　嬉野登子

君がみ手にまかれしたれのもえいでゝみのらむ秋を今よりぞまつ。

郭公　三河　豐江とよ子

ものみなは死せるかのごと靜なるやみをやぶりてなくほとゝぎす

水鷄　足利町　奈良葉蘭子

小夜ふけて月はかたふく狹夏瀨の河へさひしくくひなゝくなり

亡母の法會に詠める　京都　松井芳子

なき母のみたままつりてはら〳〵としのふ涙にたもとぬらしつ

思ふ心　三河　山内惠子

子等はみなゆめ路にいりぬいましばし宵の蛍草のたれなつまはや

五月雨　美作　性全千嘉子

なやみなく降る梅雨にわが心みだれて君を戀ひぬ日はなし

折にふれて　上毛　花岡ふく子

高野山み寺詣ての人絶えて雲のみのぼる梅雨の頃

夏山家　美作　性全紫女史

夏木立日は葉隠れてひぐらしの鳴く聲すゞし清水湧く宿

山里　福岡　大屋ひさえ

言とはん人もなき身は山里の松の嵐を友としてゆく

五月雨のつれづれ　兵庫　性全華代

つれづれに日記繙けばまたしても涙あらたに亡き人の御名

失題　神奈川　笠原りん子

亡き母の面かげしのぶ春の夕かすかにひゞく古寺のかね

吉野の暮　美作　香木公子

夕つく日色なく暮て夕風の花にさゝやくみよしのゝ山

折にふれて　京都　白百合

菅笠は軒につるして干されけり乙女の田植も今日終ぬらし

琴　千葉　内山元子

ふく風のしるべなるらんつまことのこゑおもしろくかよひきにけり

夏草　丹波　戸出繁子

夏草にふみわけかたくなりにけり花をたつれし山のほそ道

月の夜に　伊勢　佐々木らく子

我のみは餘りに惜しき心地してちぎらぬ友もまたれぬるかな

失題　筑前　山本登代子

さゆりかなる背戸の清水に君と我れ笹船流しゝ戀なき昔

失題　岩代　木下はる

朝まだき夏草深くわけゆけばさぎりがくれにほとゝぎすなく

長旅しける折汽車の窓にて　岩代　横田孝子

見るものは只田と畑と山とのみさて待遠き汽車の旅かな

故郷の秋　岩代　木口霽子

きゝすてしたか秋風の宿ならむひとりおきふす閨の下萩

夏の夕　丹後　旭ますゑ

さらさらと稲の葉ゆれて田の面にすゞしく宿る夕月のかげ

汽車旅行　丹後　旭のりゑ

あさの富士夕べの明石須磨のうらひと日たのしきまがれ路の旅

五月雨の一日　下野　きぬ子

思ひなやみとぼそによれば夕ぐれを雨細うして梅の實おちぬ

能持院に詣で蓮池を見て　下野　吉村嶺子

さと開くはちす花より露ゆれて靜にあくる山寺の朝

夏月　京都　林戸多美

暮しくれいつしかやみて山の井にやどるも涼し夕月の影

かきつばた　韓國　波奈子

さみだれの露をふみつゝ行く道にひとり淋しくかきつばたさく

杜鵑　讃岐　守屋よしみ

露くらく空さみだるゝ宮城野の木の下やみをなくほとゝぎす

垣夕顔　美濃　傍島小枝子

蚊やり火のけぶりなびける垣ねみち三日月うすし夕顔の花

三年の昔隆盛を極めし隣の空家を見て　紀伊　向畑いく代子

すむ人も出入る人も多かりし隣の庭に草しげりけり

上京して二年あまりになれと未た入學試驗の
出來さる人に送る　筑前　内野ひさを

待ちわふるこゝろを知らは梅の花ことしは送れたかきかたりな

外國なる夫の許へ忘草撫子にそへて
札幌　橋本みさ

忘れじな歸りきまさん日を待ちて日々につちかふなてしこの花

蚊遣火　本郷　本木ため子

夕されば月よりさきに蚊火たきてひと待つさまの夕顏の庵

○　羽前　毛呂信子

濱荒きうき世の海に舟出して初めてさとる親のいましめ

失題　越前　坂野よれ子

牛追は野路のあなたに影消えて螢呼ぶ子の歌靜なり

○　美濃　花橋はる子

野の夕べいそぎの路を立もどり思はず知らず手折白百合

○　島根　木村清子

玉琴をかきなすことに偲ふかな遠く隔たる君のおもかげ

新樹　神田　中田壽美子

なつかしき花はいつしかちりはてゝ新葉しけれるみよしのゝ山

旅　香川　三村早子

行き暮れて荒野か原の一つ家に宿れは月に時鳥なく

首夏蝶　名古屋　岩岡花子

みつ枝さす若葉かくれにとぶ蝶はむなしく過ぎし春やたづぬる

失題　山形　嚴靈子

すみなれし門を選りて思はずも涙ぐまれぬ夏の夕ぐれ

年を隔てゝ故鄕に歸りて　横濱　村瀨由子

亡き母のおくつきあれて故鄕にむかしかたらん友もあらなく

夏草　大隅　林幸子

わか門の小川にかけし土橋もかくるゝはかりしげる夏草

失題　國府津　菊地峰子

濱松のかなたに人の行く見えて七日の月の影ほのかなり

海上眺望　横濱　秋庭俊子

梅雨はれて白帆ゆきかふ青海に大島見ゆる磯の宿かな

つばめ　紀伊　生馬亀代

岩かとにふれてたはしる瀧津瀨のしふきをくゞるつばくらめかな

あまこひ　河内　陰山建子

河上の神よあはれみて見そなはせをたのさなへは今かれんとす

撫子　河内　竹内敬子

水かくれのたきの水音きゝなからしはしいこひぬ卯の花の宿

夕立　名古屋　山田八重野

遠方はまだ降りしきる頃ながらかたへ晴れ行く夕立の空

夏衣　山口　末田貞節子

花したふ心は春にかはられと今日ぬきかふる蟬の羽衣

雨後月　紀伊　佐田錦子

一としきり夕だちすぎて露やどす竹の葉ごしに月を見るかな

折にふれて　長野　池田和代吉

つゝじ咲く松原小道分け行けば早わらび萠えてほとゝぎす鳴く

見沼の螢を東宮御所に奉るよし承りて
越後　坪井わか子

みし人も見沼の螢こそ光ある身のさちをしるらめ

卯花盛　河内　櫻井貞子
咲きなよる卯の花月夜明けぬやといくたび窓の戸をおしにけん

○　伊勢　佐々木らく子
ひねもすのつかれ忘れて語りなれば夕顔棚に月かたぶきぬ

野百合　神奈川　飯田榮子
旅人かふみまよひたる山みちにかをりゆかしく姫ゆりのさく

○　京都　砂川澄子
澄む月を見るにつけてもなか〳〵にあはれは深し物思ふ身は

杜鵑　伊豫　渡邊梅子
三日月の新葉に匂ふ此夕ぬかつき居れは杜鵑なきぬ

失題　京都　清子
三年ふりあすはかへらむふるさとの母にははやもゆめにかたりぬ

杜鵑　茨城　榊八重子
一聲をあとに殘してほとゝぎすいつちゆきけん短か夜のそら

橋上納涼　水戸　榊八重子
ふけぬるか納涼の人のかげたえて月のみさめる勢田の唐橋

○　姫路　尾田四鶴子
風清き乳母が故郷の五月闇遠く蛙の啼聲聞こゆ

山ぶき　横濱　小澤さだ枝
いたづらに花のみにほふ山吹は人のよににてはかなかりけり

夕立　山口　山本登子
筑波ねの雲の絶間に見え初めて夕立晴るゝ葛飾の里

菊　吳　竹内まため
亡友の手植の菊の花盛りみるも泪の種となりけり

夏菊　佐賀　野田由緣
涼しさは町かとぞ思ふ打水の雫に匂ふ夏菊の花

螢　宮崎　木吉そよ
ともし火に代て文見し古の人こそしのへ螢とぶ夜は

草花　對馬　伊藤彰子
折るとしもなくて手折りし草の花束れつ解きつ物おもふかな

失題　伊勢　鈴木つる
夕されば蚊やりいぶせき賤が家の軒にも通ふ風の涼しさ

扇子　愛知　絹子
打ちならす風にあつさもわすられてうれしきものは扇子なりけり

螢　伊豫　熊谷巴
小夜更てまた寢もやらぬ窓の月に光り涼しく飛螢かな

失題　岩代　岸野常子
谷川のながれすゞしき松かげは夏の外なるこゝちこそすれ

逸題　備前　龜山逸子
梅雨に山田の水や増りけむ聲もあふれて蛙なくなり

夏山　長崎　角田秀子
梅雨の晴れゆく雲のたえまよりあらはれわたる青葉茂山

摘茶　京都　清子
さすらひて我かせとゝもによを宇治の里に木の芽をつみくらしつゝ

⊙　越後　淺見ゆき子
緣のきのふ植ゑたるひなぎくの花はてる日にしほれぬるかな

梅雨　本所　蝶子
晴れ行くを見ればふるなり梅雨のそらもあやしき里の夕暮

月の夜船のくだるを　名古屋　松久あき
しづ波に月さえ照らす川面をかじ音涼しくくだる船かな

○ 越後 菅 いと

酒もよし月ものぼりぬ鐵鍋はそこにおきませ我あらはなん

雲間月 下總 伊藤 壯

大杉に雷落ちて雨はれて雲間に青し片われの月

○ 橫須賀 吉田 順子

夕顔まつ子等のためにとかへり路の月に摘みたる常夏の花

○ 神戸 春 蝶子

昨日見し人に逢ふやと今日も亦そゞろ歩きぬ青柳のもと

煙 西須磨 有村 とみ子

煙さへ一きは高しいさほしをたてゝみ國にかへるみ艦は

○ 西須磨 有村 紫芳子

小夜ふけてねられぬまゝにながむれは月にさえ行淡路島山

松島艦沈沒御殉難の方々を悼みて 澁谷 平原 千代子

松しまの松もろともに散りうせしさくらの花の惜しくもあるかな

○ 京都 山下 藤子

みしか夜のあしたに見れは大空にみれこしかれて殘る月かな

漁業 土佐 ちどり子

玉の浦よせくる波の間より國のたからやかつぎあぐらん

夕風 山口 石崎 のぶ子

小女子が去年の衣のみじかさに脛あらはなり夏の夕風

納涼 麻布 中村 房子

河風にゆらぐ柳の下影は暑さ流れてすゞしかりけり

折りにふれて 福岡 あこがれ女

七とせを英の國に使して今日みる富士のなつかしきかな

○ 牛込 平塚 いと子

栗樹のみどりのしづくそとおちて鮎にげまどふ里の砂川

○ 愛知 小林 芳枝子

磯の海鳴る巖に我が立ちて男の歌を歌はゞやとも

夏田家 麻布 松岡 きみ

時鳥さやかになるの聲はしてひる靜なる小山田の庵

夕田蛙 長崎 春 子

人はみな家にやすらふ夕暮をいそがしげにもなく蛙かな

惜花 山口 喜智 子

惜みてもなほおしまるゝ櫻花夜中の嵐に散るそかなしき

眠れる兒 香川 三村 早子

眠りつゝ時々笑ふ幼子は夢のうちさへ樂しかるらむ

玉 讃岐 森 君江

磨き得し心の玉も大君の光澤はずは甲斐なかるらむ

髮 河内 竹内 敬子

病む母のみ胸のまゝにけふもまた殘りし髮放ちやる哉

庭噴水 青森 佐藤 とし

さら／＼と吹上の水の音のして夏も涼しき庭の面かな

折にふれて 大阪 貼前 千鳥

うきことのかさなる身には夜からすの鳴く聲にさへ心驚れる

矢聲 日本橋 前野 りき子

讀經の聲もしめりて古寺ののき端にしけく五月雨の降る

閑居卯花 宇都宮 松元 のぶ子

人とはぬくさのいほりのやれがきに骨なうの花のさきにほふかな

○ 牛込 平塚 白百合

波しばや棹のしづくに月ゆれて柳のかげにかはほりのとぶ

○　沖縄　吉永和歌子

水無月のてる日まかりもうりあるく氷の聲はすゞしかりけり

題しらず　下總　岩瀬不二野

船浮けて君しきまさばいとはじな離れ小島にひとり住むとも

夏の夕　廣島　加藤よし子

乘りすてしあしまの小舟さゞ波にゆらぎてすゞし夕月の影

寄旭憶母　在米　なほ子

はる〳〵とあふともうれし朝日子ののぼれる方に母やますらむ

時鳥をきゝて　神戸　古川しな子

まだの音は四條啼かほとゝぎす和田のみさきの闇をやぶりて

○　岩代　樺山楢子

綠葉はおのづからなるひがさにてあつさをよそにふむ山路かな

梅雨晴　信濃　松尾節子

幼子のむれにましりて梅の實をひろひても見る梅雨晴の朝

友へかへす　長門　田中はな子

青葉かげ君が許ずせばあたゝかきみてに抱かるゝむちこそすれ

新蘭　茨城　長岡たみ子

美しくかゝれる蘭の姿みて今朝はうれしく文おくりけり

○　豐後　吉眞靜子

野の川に小舟うかべてさほさせばゆれてくだけぬ夏の夜の月

納涼　神奈川　小川房子

なすゞふく風にしのぶのつゆちりて夕すゞしきおばしまのもと

水鷄　京都　藤田りふ子

有明の月影くらき山のはの麓のさはに水鷄なくなり

折にふれて　大阪　後閑八重子

名もしらぬ庭の草葉のまゆらぎもしみじみ嬉しいたづきの身は

雨後の夏月　名古屋　花岡二三子

五月雨の小やみを軒の松が枝にしばしやどれる夏の夜の月

海水浴　青森　佐藤喜代

友どちと大磯の海にしほあみてなつのあつさもわすれけるかな

折にふれて　伊勢　佐々木らく子

のがれ得ぬ花のさだめといさぎよく散るを惜しまぬ山ざくらかな

○　千葉　今井なほ子

まぼろしやわが願出のもの皆にはぐれし心地春の夜をまつ

女郎花　京都　上田いく

草刈の鎌にこぼるゝしら露は花がうらみの涙とや見む

塔の澤玉の湯にゆあみして　山梨　岩井たまよ

世のちりも暑もともにたまのゆのきよきいでゆにあらひおとしぬ

約せし友どちはさはりありとて文のみおくりければ　鴻ノ巣　鈴木茂登子

音づれぬよしを詫たる其文の中より落る花すみれかな

古寺避暑　攝津　岡千代子

いにしへはをみな踏まぬ古寺に暑をさくる御代そうれしき

折にふれて　大阪　田中たまき

ふうりんの音も涼しきはなれ屋に詩集ひもとき一日くらしぬ

折にふれて　長岡　小坂都眞子

この夏もかならずこよと文のなかに封しこめたる白百合の花

折にふれて　大阪　田中千枝子

三日ぶり梅雨晴れし夕ぐれのまとゐ涼しく月出でにけり

夕顏　越後　坂野きち子
賤かやの垣根ゆかしく咲き出てゝ闇にもしろき夕顏の花

郭公　横濱　鈴木まつ子
さみたれのしばしはれまを郭公なく一と聲のさやかなるかな

○　美濃　櫻井育子
朝に面す簾を捲きて撫子の父に參らす湯あかりの衣

樹下泉　近江　中川はな子
木のめより酒よりうましのぼりきていこふ木蔭の山の井の水

歌道にさそはれし君に　埼玉　萩野くに子
迷ひつる孤の手をしきしまのみちに嬉しくさそひたびけり

故鄕　常陸　荒木よし
窓先の植木の鉢に水そゝぎはるかにおもふ故鄕の山

○　三河　村上逸子
背の君のかへさ迎ふる門のあたりときえかほに蝙蝠のとぶ

あしまのほたる　名古屋　高橋かき
濱花かたあしの葉擦るさゆらぎのかぜにみだれてとぶほたるかな

川夏月　四谷　松田春子
よどみなく流るゝ川の岩の瀬に月影ゆれて涼しかりける

首夏　肥前　江口れい
紅の花染衣ぬぎすてゝ白妙かくる夏は來にけり

小學校　神戸　足立ゑい子
雲井にや終に聞えむ雛鶴の學びの窓の業餘りのこゑ

花蓮　越後　古澤ふさ子
大海も埋もれてさく花はちすゆらぐあしたの風ぞ香れる

夏草　靜岡　はま子
うなゐらよふみな荒しそくさむらの中に秋まつ花もあるらむ

夏の風　函館　野田なる子
夏の夜に簾動かす風もきて團扇忘るゝひまもありけり

磯の鷲　岡山　石井富惠
荒磯や大波狂ふ巖の上のはゞたく鷲に吹く風かな

夢の浮橋　備中　石井廷子
草枕かりねながらに故里の空にはかゝる夢の浮橋

○　愛知　福島田鶴子
賤か家ののきにつるしゝしのぶにもかけ水ましぬけふの暑さに

夏月　磐城　秋子
その主はつま子相手にこざかもりたゝよふ舟を月にまかせて

故鄕　牛込　猪野春子
をのかみのおさなきときを思ひ出たしにはかに戀し故鄕の空

夏草　長門　三隅光子
なつくさに道の石ふみ埋れぬいつれなるらん伊勢路近江路

雲雀　新潟　加藤きい子
うら〳〵とかすみにほへる大空にあがるひばりの聲ののどけさ

故鄕庭　京都　凞子
もろ人の遊ふ園生となりにけりわかすみすてし古里の庭

母なき稚兒　岡山　石井富惠
秋風か門邊に父を待つ稚兒の衣の袖にきりぎりす鳴く

野百合　豐前　賀來文子
賤の男のゆかしきこゝろしのばるゝ刈りのこしたる姬百合の花

〰〰〰〰〰〰〰〰

小說「女事務員」の作者の住所御報知あれ

# 短文

【甲賞】

## 最後の一片

京都　下山げん

小闇い樹の下蔭に山椒薔薇が咲いてゐる、一花捥ぎ取らうとすると、朝露が涙のやうに零れかゝる、自分は情無いとは思ひながら、西洋の戀する人のするやうに、「吉か」「凶か」と一つ宛花片を捥りかけた、鐘のやうな花片は私の喜びと悲とになつて次へ次へと零れ落ちた、さうして最後の一片が「吉」と囁いて笑ふやうに落ちて往つた時、自分は指に殘つた蘂の絲の微かな響を、心ゆく迄嗅いで見た。

【甲賞】

## 夏の一夜

牛込　平塚白百合

お庄家の白壁もかくれて、だん／＼日はくれる、鳥もねぐらにいそぐのであらう、頭の上を鳴いてすぎた。馬方千兩の大森樣よくわへぎせるで日をくらす、と餘韻ながくすきとほつたこゑが街道の方からたゞよつてくる今まで見えた森もぼかしたやう、中からぬつと人が出て來る、おそろしいやうである、ひろまは氣もつかない並木の松が墨繪のやうにあらはれる、名しらぬ花が眞白く闇をそめぬくと、黒羽山に二十日月があらはれた。

【乙賞】

## 子供の晝寢

千葉　山口秋子

やつと寢かした、そろりと手枕を引く、輕いふとんをふうわり掛けて靜かに立つ、足音を忍ばせて蠅よけを頭からかける、庭の杉の木で油をいる樣にせみが啼き出す、一寸髪をかき上げて、急ぎの仕事にかゝる、と大きな聲で「エー奥樣、今日は鰻の上り立てゞす、如何でせう」、子供の樣子を伺つてはら／＼思ふ。

【乙賞】

## 笛の音

姫路　大槻かつ子

午後一時、御茶のけいこに行つて、靜かに釜のふたを拭ひて居ると、何處からともなく妙なる尺八の音がかすかに聞えたので思はず身がピリ／＼とした、どうしてあんなにゆかしい音が出るだらう、たしか千鳥の合の手の樣であつた、今一度聞きたいと思つたが、何となく胸がさわいで、モー聞き取る事が出來なかつた、故郷ではよく合せた事があつたあの文夫さんは、此頃どうして居らつしやるかしら。

乙賞

# 宮子

下總　小澤蝶子

宮子は逝きぬ、曉清き少女は果敢なくなりぬ、玉の形骸は土に歸らむ、されど清き靈は天に昇らむ、形見の墳墓は新に立ちぬ、あゝ銀河の波に袖を返して、父よと彼女は叫ぶらむ、されど父は汚れし人の子なるを如何にせむ月の宮居に小手かざして、母よと彼は慕ふらむ、されど母は汚れし罪の子なるを奈何せむ、夜中銀河を望めども深更月を眺むれども、逝いたる彼女が影は見るべからず、あゝ。

丙賞

# 小包

東京　信子

夫は何んなに喜ぶだらう、此小包の中には大好な〳〵森永のバナトマシマローと、セムもコーヒーも入つてゐる、韓國は江原道の首府に居るとはいひ乍ら至て不便な土地ださうでお菓子等滿にしたくも無いと云ふ、そんな所に居たらさぞ心細いであらう、此品が着いたら何んな顔して喜ぶのかしら、何だか返事が待遠しい、手紙にはきつと夫の喜んだ顔が寫つて來やう。

丙賞

# 政策

日向　佐藤やす

尺八は上手だつたし、オルガンも可なりに出來た、又なり〳〵は私の彈いている琴を無理やりに取り上げて、耳覺えの六段かなんかを自分勝手にペン輪でたゝかれた、そして我輩は乙姫の化身だなど言つて得意がつて居られたのは常の事であつた、然しそれは六年の昔、丁度本鄕の學校に通ふて居なすつた頃の事、が妾が此處に來てからはヘメと止んで音樂の事は話にも出ぬ、たまさか此方からだそうとすると、外の話でまぎらかしてしまはれるあまり變なので、或時音樂はあなたのお命ぢやなかつたのですかと聞へば、ナニあの時は政策す。

丙賞

# 法會

京都　松井秀子

或は高くあるは低くかなしき讀經の聲につれて亡母の法會は始まりぬ、佛前には美くしき草花かざられ、くさ〳〵の供物などうづ高きまでに供へられて、線香の煙はかすかにたなびきぬ、あゝ母上はおのれまだいたいけ盛りの九歳の時みまがりたまひしなり、其折弟はまだ東西をも知らぬみどり子なりき、母は數多き同胞の中にてもわきておのれをいつくしみ給ひきとか、殊に弟は女のみ打ちつゞきしなかの一人の男の子なれば、まことや掌中の子

と慈くしみたまひしとぞ、さるをかゝる子等の生ひ先きをも見たまはで、一朝無情の風にさそはれてみまかり給ひしことなか／＼にかなしけれ、かのみどり子なりし弟は人並すぐれし成績以ていまは早中學の四年に通ひ居りおのれは他家に嫁げる身となりぬ、かくばかり成長せし同胞のさまを一目にても見せまひらせなば、いかばかりよろこび給ふらん、同じ思ひにや、親族の方々もかたみに袖をしぼり給ひぬ、かゝる樣を側にて見たまへる父上の御心のうちやいかならん、折から心なき花も一ひら二ひら散りそめぬ。

丙賞

## 昔の戀人へ

尾張 白萩

あゝ運命とや、限りなき恨みをいだいて、妾は今宵結婚致すべく候、明日よりは人の妻となるべき身の、今更如何に悶へ候共、かひなき事と存じ候、されど、あゝされど忘れ難きは君が俤にて候、思へばたのしかりし三年の戀も、あはれはかなきものに候ひしよ、あゝ何も／＼運命に候、さはいへ一度受けし此胸のいたでは、あゝ何時いゆべしとも思はれず候、さらば永久に幸多く在せなつかしの君よ。

丙賞

## 流星

本郷 しらはぎ

身はいつしかつき山の上に在り、すゞ風さつと頬をかすめて、木の葉は音を立てぬ、見上ぐれば高き杉の木の間より月は弱き光をなげて、今し雲におほはれんとす、星ひとつ北に流れぬ。

あゝいかに靜けき樣なるよ、物おもふ身にはなか／＼に嬉しうて、新らしきおもひは更に泉とわきぬ。

## 歸省

能登 粟倉すみれ

想ひは故郷の空に走つて左右の景色は更に心に止まらない、想ひは夫から夫へと波紋を作る、やがて戀しい故郷の山や凸出してゐる海岸の家が微かに見ゆる、車夫に問へばもう一里斗りだと云ふ、父母には何う云ふて御挨拶を、仕やう、兄さんや義姉さんにはこう申さうなどゝ、小さい胸の中に幾度か繰り返す、程なく町端へ着いたと思ふと早や我家が見ゆる、「お歸り――と」一聲、梶棒を下すとバタ／＼と弟の小さな足音がして、つゞいて兩親始め皆樣が滿足の色を以て迎へて下すッた、自分はたゞもう嬉しいやら懷かしいやらで胸が一杯になッて、途すがら考へて來た挨拶は一言も云ふことが出來なかッた。

## 外風呂

牛込 とみゑ子

お納戸色の空を仰ぎながら、庭にわかしたお風呂にはいる、萱の隙々しかつた有樣は、どこへか去り、木々の葉は月の惠を受けて、白銀の玉を飾つてゐる、何が哀れか蟲が消えるやうな聲で鳴く、枇杷の葉と柿の葉の囁きかサラ〳〵とかすかに音がする。月が雲に入つて、あたりが薄ぐらくなると、池の蛙がヤァヤァ〳〵と鳴き出す。

## 御飯炊き

大阪　紅花子

親が病氣だとかいつて下女が國へ歸りました、明日の朝は私が引きうけますといふと、サアどうだかむつかしい子と伯母樣は笑ひながら仰しやる、これでも學校で御料理の稽古をしてるんですよ、なんて大きな事をいつたから、今更弱い事も言へず、どうぞうまく出來ます樣にと祈りながら、瓦斯に火をつける、顔を洗つてゐる間に、早やフツ〳〵と湯氣が出かけた、外の事もしないでかまどの前につゝ立つて、泳の樣な物の出るのを今か〳〵と胸をどきつかせながら待つて居たが、いくら待つても出さうにも無い、とやがての内に何んだかこげくさくなつて來たサアしまつた、伯母さん早く來て下さいと大聲で呼びますと、奥からマア絹さんどうしたんだよと云つてかけてゐらした、こんなに心配しながら炊きましたのに御飯はボロ〳〵でそれは〳〵ひどいものでした、朝ごはんの時に兄樣から、絹さんは二三年御飯たきを勉強して來なくちやならないねと言つて笑はれました。

## 池畔の夕

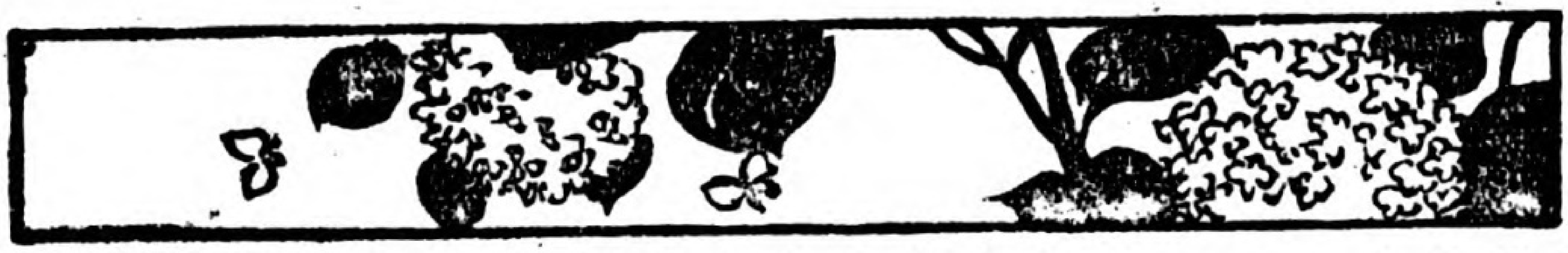
靜岡　堀口美代子

涼しい風が吹いて來る、風鈴がチリリンと鳴る、入相の鐘が響き渡るふと思ひ附いて蓮池の畔へ行くと、大きな螢が水面を縫ふ樣にして飛び來る、團扇でそつと播はうとすると、他の方へ飛んで仕舞ふ足下で蛙がゲツゲツと嘲ける樣に鳴く、笛の音が聞こえる、若々した草の中で何蟲かチリン、キリリンとさも哀れ氣に鳴く、秋が來た樣に思はれる、满圓るい御月樣が、池の面に映つてにこにこして居る。

## 親切

鎌倉　名もなき花

雷がゴロ〳〵なる、空は俄かに曇つて今にも大雨になりさう、降らぬ間にと急ぐと、なさけない、伊井樣の坂で下駄の鼻緒がプツツリ、袂から懐から探すがあいにく紙一枚もない、往來の人は一寸見ては其儘行過ぎる、しかたなしに引きすり〳〵行くと、十二三の小僧が來懸つて通りすぎんとして又戻り、「鼻緒が切れたんだね、なほして上やう」と、自分の手拭を裂いてなほしにかゝる、顔白さうな顔に似ぬ深切としみ〳〵嬉しく思つて見てゐる、やがて出來上ると、「拙いが勘辨して下さい、丁寧にするといゝがをかしいやれ、女に親切をすると――」、マセオ



事ないふのでおかしくなる。私の云ふ禮もロクにきかずすぐかけ出してゆく後姿、どうしても勇み肌の江戸ッ兒の卵だ、私は御かげで雨のふらぬ前に家についた。

## 花子の君

京都　美智子

まことや、其の名の如く優しかりし花子の君は、あしたの露のきゆるが如く神のまれきに、天つ御空にのぼりましぬ。

神の御膝には、はやなつかしき母君のまちますあり、いとしきはらからの迎ふるあり、されども君を杖とも柱とも頼みましゝ父君は、けふよりいかにさびしく過させ給ふらむ。

姉とも妹ともむつび合ひし我身は、あすよりたれを友と打ちかたらはむ、花にうもれし君が最後の御姿ーあゝ忘れんとして忘れがたし、なつかしきは君が面影。

## 田舎の家

姫路　鈴木ふじ子

南と北とは開け放して風が心地よく通る、今日お友達がきました、今燈下になつかしい顔に接してゐるのです、お友達とは女學世界です、面白い記事に魂を奪はれて前後も知らず讀み耽つてゐますと、鬢のほつれ毛が田から吹く風に五月蠅く頬にかゝる、つと左手で鬢を押へ、右手に頭の櫛を取つた時遠に汽車が水田に美しい灯影を綴してゴトゴトと走つて行くのが見える、シグナルの青い火がカツタリと下りると、蛙の鳴聲は更に一倍した。

## 心ゆく夕

神奈川　内藤千代子

指折りて待ちわびしもいよいよ明日となりぬ、明日は兄君の、歸り來まさん日なり、君のためにとて我が心をこめし夏羽織は、今朝出來上りぬ、お居間も清めぬ、花さへ活けぬ、髪もあらひぬ、風呂にも入りぬ、湯上りの、おばしま近う端居すれば、涼風颯と浴衣を吹いて、あたりに打ち散るローズの香、暮れ行く空に夕月匂ふ。あゝ、我が胸は春駒の蹄となどりぬ、明日は君と相見ん日なり。

## 雨

熊本　秋晴子

窓によれば、五月雨細う青葉をたゝきて、いと寂しう友ほしき心地す、雨の小みちを眺むれば、青葉の中より、ぬけ出でし樣なる蛇の目の傘一ツ過ぎ行く、卯の花垣の下をや、くゞり來りけむ、床しの白き花蹟き、水色合羽美しゆう、袖よりはもゆる樣なる江も見えぬ。

## 興津より

駿河　片平よし子

綾子さま、私は此の一日から當地へ避暑に參つてゐます



百姓家ですから隨分穢なうございますよ、けれどうれしいことには、前はすぐ濱見潟、右と左は松林で全く繪のやうな境地です、それに鮮魚は飽きる程です、どうかお弟さんを御つれなすつて被行つて下さい、何も御馳走はございませんが、松風に機嫌とられながら、ヘンモツクで午睡でもしませうぢやありませんか、是非れ、私しずゐぶん日に焼けてよ、オホヽヽヽ。

## 夏の朝

廣島　生田優子

お隣と云つても十二三町は隔たつてゐる、都會のやうに水道はないが堀の側の小川にはいつも清水がチヨロ〳〵と流てゐる、朝は萬葉にかけし蜘蛛の巣に露の玉をとゞめて水晶をつられたやう、清い風がサツと吹くと、なびく稻葉は小波をうつて、田の面の水のそれかと見える、上の山道を草刈りの女が二三人、何か大きな聲で話しながら通る。

## 日中

甲府　山田榮子

カラリと開け放した座敷の、東窓下に立てたよしず屏風を透いて紫と白のかきつばたの眞盛りなのが見える、机の引き出しから出た白紙くづ紙が雜然と亂れた中に恍りとした眼で敦子は庭石を見て居る、蛙が青葉からやうやう石の上に昇つた、敦子は妙な顏付で視つめてゐたが、やがてクルリと向き直つて紙の仕末付ける。靜かであつた空氣が一ゆり搖れて今夏の樹に青葉の香が通ふた。

## 或る夜

名古屋　岩間花子

囁り合ふ若葉を洩れる新月の影が如何にも夏らしい、そよ〳〵と吹いて來る風にどこからともなく橘の香がして誠に心地のいゝ晩である、此樣な晩にこそ杜鵑が鳴くのであらうと思ふと、何だかなつかしくなつて、先頃書拔いて置いた杜鵑の歌集をよむ、わづか三十一文字の上にも詠んだ人の心がよくあらはれて其折の樣が見えるやうだ。

## レンズ

栃木　きぬ子

兄樣が釣つて下さつたヘンモツクに、病後の身を横へると、薄く彩られた大空が、青葉越しに恐ろしく高く見える、うつとりと雲の行えを眺めて居ると、すーと涼しい風が音づれる、お池の方で餌に飛ぶ鯉の音がポチャ〳〵と聞える、不意に兄樣のお聲がした、垣根の邊んで呼んでゐらつしやる樣子、起き上つて見ると、何時の間にか三脚の構へ、レンズはたしかに此方を指して居る、怪しいと思ふと、もう撮れたよ有難うと笑つてゐらつしやるいやな思ひであつた。

## 雨あがり

府下　八木富美子

セッセと妹の單物を縫ひ上げたが、さて他に仕事がないので、指ぬきをかちんと針箱に入れると、背戸の鳥屋で鷄が高く鳴く、ボーッとした目を青々とした庭にはなつと、雨は何時の間にか晴れて何處かで蟬の聲がする綺羅の樣な白雲を破つて濕ッぽい芝草の上にパッと日が照つた、垣に絡んだ朝顏は萎れた花をつけてゐる。

## 夕暮

下涉谷　西野秋子

月は山の端にあらはれた、その影が小川に映つて得も言はれぬ美觀である、堤の上に在る家からは煙がゆる〳〵と上つて大きな輪をゑがいては、だん〳〵と消へてゆく向ふから十五六の女學子が何か歌ひつゝやつて來る。

## 韓山の一夜

韓國　掛井いは

今宵韓山の漢江にて舟遊びして歸るさ、もはや電車もなかりしまゝ月見がてらの反て興ありと京城指してトボトボ歩いた、あたりはいとも靜かでまばらに燈る韓人の家は寂れに、漢江に渡せる鐵橋まで如何にも淋しく目にうつる、月は何處もかはらない、やがて京城の朝市場に至れば、明朝の仕度にと實菜つみあげし其傍に、韓人がむしろも敷かで地べたにねむれる白き姿に無限の感慨を催した。

## 小猫

東京　清香

幾度膝を拂つても〳〵亦這ひ上る、つい癇癪も起つて、打たうとすれば、直ぐ又其手に戯れる、其手つきなら顏つきなら、またなく愛らしいので、つい張詰た氣もゆるんでしまふ。

## 少女

金澤のぶ子

暮れ行く夕榮の空仰ぎつゝ、樓上欄干近く佇める少女は其やさしき目に涙湛へて、面いたく愁めり。暮れ行く雲に人の世の、はかなき運命を泣けるにや、それもまたあせ行く夕榮の果敢なきを啣つにや、わき出る涙にやさしきほゝはうす紅にうるほへり。されど少女よ！、歎くを止めよ、其定めなき雲にこそ、やさしき星は宿れるを。

## 音樂會

伊勢　佐々木らく子

今宵も美いちやんの發起で、例の緣側に音樂會が始まる兄樣のオルガンに、私のヴアイオリン、弟はハーモニカを吹く。美いちやんは一人で歌ひ役、曲は御得意の兎と龜、三四と御父樣の合圖に彈き出す、歌ひ出す、母樣迄がお歌ひなさる若葉の風がそよ〳〵と來て少さな歌手の白いリボンがかすかにゆれる美しい御月樣と、御父樣とは只ニコ〳〵として靜かに聞いて居らつしやる。



## 女學世界

肥前　宇都宮八重子

私は女學世界の發行期日が待ち遠うて一日まではモー讀日と日々指折らぬ事はない、其一日になれば、朝も早く起き髪もそこ〳〵に結ひ、家事を仕舞へば一分でも早く飛び出でる、書店迄は一里餘あるのに、遠いとも思はず一生懸命急いで歩く時の姿は側から見てはドンナに可笑敷いでせう、買へば外に用事もないので直に歸路につく歩きながら開いて見る、道の小石につまづいてはハット思ふ、往く時の二倍も時間をつひやして家につく。

## 寫生

越前　露子

もう寫生の材料もなくなつた、ぼんやり机にもたれてゐると、玄關でお隣りの梅子さんの聲がする、嬉しやと思ふと早自分の居間の障子が開いた。「アラよく入らしたわ子」と見ると、美しい〳〵雛けしの花を四五輪、田舍からもらつたと言つて下さつた、早速花瓶にさし換ると、室の價値が二三段も上つた樣に思はれた、暫くして梅子さんは歸られた、愈々雛けしの寫生にかゝる、大分出來上つた頃、一寸した拍子に手が花に障つて、中の一輪がパラ〳〵と散つた。

## 正確な人

東京　松田西華

私は毎朝六時半に宅を出て通學致します、途中で何時も拾五六の女工らしい人に出逢ひます、雨の日も風の日も必ず海苔屋の前で逢ふのです、もしも手前のパン屋の前で逢ふたら、驚いて八ツ山迄走ります、走れば屹度剛引電車の間に合ひます、ほんとに内の時計よりも正確な人で、いつも起されながら寢坊して駈出す私などは誠にはづかしう御座います。

## 一時間

伊勢　細野ふみ子

チン〳〵〳〵と時計が十一時を打つ、表を空人力車が二三臺大聲で話しながら通る、と後はまた寂然、次の室から弟の鼾が微かに聞える、やがて芝居も濟むであらうと火鉢へ炭をついで鐵瓶をかけて置く、仕事がやう〳〵の事に出來上つた、ヤレ嬉しやとキチンと後を片付けて、雜誌でも見よと思つて火鉢の前へ坐ると、時計は早や十二時を打つた。

## 初秋

浦鹽斯德　宮脇楓子

人の息のやうな蒸しつぽい風が吹く、空瓢簞の樣にポカンと體が浮き上りさうになる、と思ふと今度は稍涼しい風がスーと吹いて來た、心地がいゝ、野の八千草はみんな早く咲きたさうに齒んだ小さい其頭からチヨンボリと花瓣の端を見せてゐる。



## 追懐

宇都宮　飯沼きぬ子

日當りのいゝお縁側で、猫の背をさすつて居なさつたお祖母様が、「これがお前十五の春一人で飼つたり紡いだりして織つたものですよ」とさも感心した様に茶微塵の袷の袖口の處を引つ張つて見て居らつしやる。

私はまた、白いお頭の眼鏡かけたお祖母様にも十五なんて昔の時があつたかしらと、夢のやうなお話しを聞きながら、桑を切り初めました。

涼しい風が折々音づれて、ほんに心地のよい日和です。

## 弾琴

京橋　田邊けい

篠つくやうに降つて居た雨は、邊りの草木に露の玉を殘して、ぱつと晴れ渡つた、暑さも幾分かうすらぎ、時々涼しい風が吹いて、實にいゝ氣持である邊を眺めて居ると、彼方に何かすゞやかな音が聞える、琴の音のやうである。

## 小さき情

尾張　さびしきひと

今朝久しぶりで庭をあるいて居ると、向ふの櫻の木の下に弟がうづくまつてしきりに何かやつてるので、又例のいたづらだらうと思つて、ソツト近づいてみたら、昨日お隣の玉に殺された目白鳥を、可愛さうに〳〵と云ひながら埋めて居るのでした。

## 雷鳴

本郷　川邊美子

朝からむし〳〵する日だ、一しめりあるといゝと思つてゐるとまもなく一陣の筑波おろし、眞黒な雲が四方にふさがつて、辰巳の空にはいなづま一閃、雷はカラ〳〵となりひゞき、雨は沛々と降り出した、君ちやんはちゞまつて居る、祖母さん方々に線香をたいて桑原〳〵と一生懸命である。

## 数子

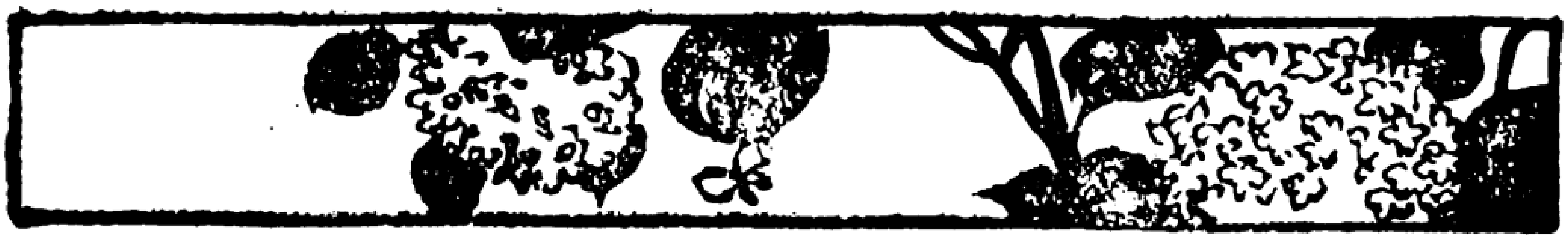
福井　都築球子

來年は先生にならうといふ姉さんが、雨のそぼ降る中を傘もさゝず、高足駄を穿き、とき色の三尺帯を輕るさうに結んで、一町も先きから手を打ちながら、数子ちやん〳〵とガタ〳〵驅け出して來る。

母に抱かれて居る数子は、手足もピン〳〵してうれしがる。

数下ちやんおんぶといふて後を向くと、大よろこびで、紅葉の様な手を姉さんの肩にかける。

姉さんと遊んで居る間は、かあちやんに來ようともしないで、キヤツ〳〵と笑つて居る。



## 夕暮の町

清[illegible]秀子

日は早や西にかたむいて、夕映えの空美しく、家々の軒には火がともされた、電車もあかりをつけ角の交番にも赤い電氣がついた、今迄きこえて居た豆腐屋の賣聲も、何時しか絶えた、横町に棒きれを持つて騒いで居た子供達の姿も見えなくなつた、紅く彩られた西の空の色が追々うすれて、遂に墨色となつたと思ふ、ともう東の空には十三日頃の月がさやかな光を投げて、星が三つ四つ光つて居る。

## 琴

名古屋　つる子

湯あがりの身もかろく、庭に面した座敷に得意の残月を手ずさみぬいまし月は森をはなれて庭のやり水は、さながら玉の如く、ふきくる風にはら〳〵とこぼれぬ、かゝる夜は御隣の芳男様の笛の音ぞほしき心地ぞする。

## 晩餐

名古屋　田鶴子

父上と妾等とはたのしく夕食の卓を圍みぬ、フライなどきりて父上に參上ぐれば父上フチータを持ちて、「左手で食べるのはどうも不得手だ」と仰せらる。夫と妾はわらひながら食すビールの量がかさなるにつけ、夫は例の謡をうたはれ、父上は熱心にきいてゐらる、折しも一陣の涼風さと吹き來て、やり水の露はら〳〵散りぬ、あゝたのしい氣心地のよい宵にこそ。

# 新刊紹介

▲主婦の友　櫻井ちか子編

本書は新時代に適應せる新家庭を作らんとする若き婦人の爲に其の導きとなるべき事柄を書きたるものなり、英和對譯になり居りて、最も西洋料理法に重きを置き、次で食卓上の作法獻立の例、一週間の仕事の日割、其他臺所の設計、必要器具の名稱、或は家庭寶寶として數十ヶ條の日常心得的のものを揭ぐる等周到なる注意を以て記されたり、且つ編者は自ら試みて我が國の大抵の家庭に於て實行し得らるゝものゝみを選みたる由なれば、現に主婦たり又はたらかんとする婦人は何人が讀みても有益ならん、定價金壹圓。日本橋區通一丁目大倉書店發行

▲實用造花のおけいこ　岡本蝶子編

著者は造花研修會の主幹、此の道に堪能の聞えあり、本書は嘗て雜誌に連載したる造花術に增訂を加へて一卷となしたるものなるが、解説却々丁寧なれば、本書に依りて少しく習練の功を積まば、期月ならずして此の術を巧にする事を得んか、定價四拾五錢。牛込區市ヶ谷仲町造花研修會發行

▲白光　與謝野晶子選

女史の選にかゝる歌集なり、孰れも中學世界其他の新聞雜誌に出でたるもの、筑紫潟潮鳴はのにひゞくとき松の青葉に春の風ふく、朝うつくし朧かかぐる友染の袖のひまなるむらさきの鳥、憂き事もあへて悲ひずあるゆゑに幸びと呼ばれむもよし、とりどりに面白し、定價金參拾八錢。麴町區土手三番町新潮社發行

▲御意のまゝ　淺野馮虛譯

沙翁全集第八卷にて、翁が數ある喜劇中にありて最も神韻を具へたる佳作なりと稱せらるゝもの、譯文平易、滑稽趣味も克く現はれたれば趣味津々として盡きざるものなり、定價金九拾錢。京橋區銀座一丁目大日本圖書株式會社發行

▲月魄(假文字の卷)　菊池幽芳著

每日電報に連載されたる小説にして、第一編は藤の卷とて數月前に上梓され、これは其の第二編なり、先に東京座に上場されし事あるが、却々好評を得たりと云ふ、製本はハイカラ、文章は例に依つて面白し、定價九拾錢。京橋區元數寄屋町二丁目金尾文淵堂發行

▲寸光錄　綱島梁川著

故梁川子が遺稿なり、明治三十四年以後四十年九月に至る間の隨筆日記及び友人に贈りたる書翰數十通の中より三十六年七月以後の隨筆を撰びたり、寸光錄、隨感錄・梁川隨筆、枕頭雜筆、病間日記の五部に分たる、故人の性行と思想の變遷とを知らんとするには、病間錄、回光錄等と共に必ず通讀せざるべからず、定價金一圓二十錢。京橋區南小田原町獅子吼書房發行

▲新書翰　池田鶴二　薄　泣菫　共著

書翰は如何に記すべきか、如何に記せば現代の要求に適するかと云ふ所よりして、其の組立認め方及び文例等を示せり、文章簡潔、家庭或は男女學生の爲めには却々重寶なる書なり、定價金四拾七錢。京橋區南小田原町獅子吼書房發行

▲靜なる森　齋部蟹石　紫雲女史　共著

兩氏の和歌集なり、靜やかに波にも搖れず、大海の底に立つごと霧の夜の森(蟹石)、大地みな凍りつめたる靜けさの森にきゝしよ鳥の私語(紫雲女史)收むる所數百首、斯かる調子にて寬く自然の美をうたふ、定價金四拾五錢。神田區神保町上田屋書店發行

▲詩集金盃　山本露滴著

北海の地、詩趣に富む、本書は即ち著者が同地に旅行してもたらせるお土產なり、和歌あり新體詩あり、並に一二を示して彼地の風趣に接せんとする人に一讀をすゝむ、よき人の聲の濱千のゆらぐごとみどり野長し秋夏のアイヌ地、[illegible]嶺の崩雪は海に消く氷濱壇に似たり嚴寒冬の月　小石川區小日向臺町二丁目美術評論支社發行

# ▲人事活斷▼

石龍子

▲自覺せつ子へ——蔓草の賴る物なくては生育し難き卦なり。故に何事も兩親に從ひ獨身にて暮さんなどの心、夢露あるべからず。而して再び良人に事へられては終生その良人より外に賴るものなしと心得らるべきなり。

▲長野曇りがちなる女へ——洪水汎濫して來らんとする兆あるにも拘らず、火山また爆裂せんとする恐ろしき卦なり。この卦によれば御身家に留つても到底之を防ぐに由なからん。故に早々家を出で、他に嫁がるる方萬全の策なり。而して恐しき光景の終りたる後、即ち家の紛擾が兎に角一段落を告げたる折姉上其家を繼がるゝが正當の順序ならずや。姉上は今年齡六かし、來年は目的を遂げらるゝの兆見ゆ。

▲神田樂玉女へ——伯樂良馬を見て之を得んと欲せしも、良馬逃ぐ、伯樂止むを得ず他の馬を求む、不幸にして駑馬なり、之を捨つ、而して先の良馬今やその伯樂の手に得られんことを望むの卦なり。これに依れば、御身は良馬にして二十五歲の人は伯樂なり、伯樂と良馬實に樂しからずや、早々良縁を求めて嫁がるべし、先方の破產せしことなれば却て後の幸運を招くの種なり聊かも憂ふるに足らず。

▲上毛の心配女へ——日光の當らざる小庭に植えてある小松の甚だ生育し難きに勞疑たり。之を原野に移し植えんが、如何なる棟梁の材となるらんも計られず、されば從妹をして望み通り教職に就かしむるを吉とす。

▲下野庭の白菊女へ——天、幸福を人に與へんとするには必ず先づ種々の艱苦を嘗めしむるが古今の例なり。而して御身を卜ふに御身は今一兩年この艱苦を忍ばざるべからず。忍ばゞ則ち大幸運の來るや疑ふべくもあらず。されば不平の心を起さずして從順婉曲に今一二年を待たるべし。

▲大阪九條の泣孃へ——君臣、父子、兄弟夫婦朋友この五倫の道は忠といひ孝と言ひ、その名は變れども、その實は唯誠の一つあるのみ。然るに養父母の御身に對する、御身の養父母に對する所の行を卜ふに、皆爲にする所あつてその表面を飾り、其間に誠の道は絕て無し。されば御身よ、兎に角十六年間の大恩あることなれば、再び先方に歸り、誠心誠意仕へらるべし、此より外に何等の道あることなし。

▲河內川村孃へ——雲に聳ゆる老松と、高さ數間に過ぎぬ若木との並び立てる間に、蔦ありて何れへ纏はんかと躊躇するが如し。而して御身は蔦、三十九歲の人は老松、二十五歲の人は發達の見込あれども、未だ若木なり。斯の如きの譬喩なれば判斷せざるも自ら分明ならん。

▲高輪煩悶女へ——眼前に寶あるを氣付かずして徒に遠方の寶を探らんとする卦なり。この卦に依れば東京に留つて縱ひ小利にもせよ專心一意之を得るの方法を講ぜらるゝべし。必ず塵積つて山となる曉あるや

異無し。

▲周防行末案じ女へ――之を物に譬ふれば貴女は四時色を變ぜざる松にして、先方の女は今を盛りと咲ける海棠なり。海棠の花美なりと雖もいかでかその色を變ぜざらん、必ず時來れば散つて果敢なき最後に終るや論を待たず、この時に至れば、良人必ず夢覺めて、汝の節操に氣付かざりしは全く余の不徳なり、許せ〳〵松よ。と悔いらるゝに違ひなし。故に貴女は飽くまでも松の松たる德を守つて再縁せられざるを吉とす。

▲臺灣の一小婦人へ――御身の言はるゝが如く、御身一生の過は御身の早婚に在り、有體に言へば婦德未だ備らずして既に人の妻となれるなり。それはさて置き、御身の良人は御身を愛せざるに非ず、時偶には御身に對して政榮の舉動ありと雖も、これ惡むに非ずして愛情より出るなり。斯る時に際し「戀しき父母と別れ、懷しき郷里を離れ、遠く海山越えて來りしは、唯良人を賴りと思へばなり、良人よ、手鍋下げても御身の爲には、厭はぬものを……」と、よしや口には出さずとも心の中に念ぜらるべし。斯の心を以て良人を遇すれば、振上げたる手も鈍り、良人は心底より貴女が可愛くてならぬやうになり、御身も亦心底より懷かしくなるべし。內地に歸つて學校に通ひたしなど、子供らしき考は更に起らず、樂しき月日を送らるゝやうになるなり。

▲武藏の秋野凉子へ――貴女は「女賢しうして牛賣り損ふ」といふ諺の味を深く解せられなば、末必ず目でたかるべし、これは別問題として、貴女は道德上より論じても、法律上より論じても、養子を迎へて家を相續すべき義務あるに非ずや、然るに己の欲せざることを妹に讓り、己その責任を遁れんとす、天何ぞ之を罰せずして止まんや。借問す、貴女にして他へ嫁せんとするには我が國の民法上相當なる理由を述べて裁判を仰がざるべからず、如何なる相當の理由ありや、聞かまほし〳〵。話は元へ回り、貴女はその性怜悧にして、父上と意見合はず、父上と意見合はざる位ならば、今後如何なる良人に嫁しても家庭圓滿ならざるや疑なし。嗚呼女賢しうして牛賣り損ふ我若し御身の父なりせば御身をして高女などを卒業させざりしものを。

▲島根の心配女へ――(島根縣の心配女)といふが三つあり。今後「心配女」「困難女」「深山女」「白菊女」「旅子」の如き有り觸れたる匿名は眞平御免なり。

天空の月を把らんと欲して、今や深淵に落ちんとするの卦なり。此卦によれば御身及び御身の御兩親の望みは、餘り高きに過ぐるなり。小學校教員よりの申込、何故に應じ給はぬか、噫。

▲備道の隅の方に居る女へ――貴女の望も捨てず、長者の言葉にも背かざるの策を取らるゝが最も可ならずや、即ち貴女は教育者に嫁し、飽までも良人と共に一生を教育界に送らるべし。嫁すれば教育界を離れねばならず、教育界に在りては人の妻となられずといふ道理決して有ることなきに非ずや。

▲淡路の一つ松女へ――御身の問は數多の令孃方の參考ともなれば、その全文を一すかい摘んでこゝに記すことを許し給へ。

其一、初戀――不圖した所にて其人に逢ひ、多くの言葉も交されど、その人の言葉から姿容何となう懐かしく、何となう忘れ難く、何うか斯る人と末樂しく暮さばや。斯うは思ひ亂れて居れど、幼な心の誰に語らん由もなかりき。

其二、再會――其後は、その人と絶て逢ふ機會もなかりしが、唯時の間も忘れられず。斯く思ひ續けて、或日外より家に歸れば、何ぞ圖らん兄はその人と睦まじく語り給ふ。その時の妾の心は、一種異樣の感に打たれ、胸は轟き、手は戰き、眼を閉づれば、金色の輪が空中に舞ふ。

其三、父の同情――その人はこれより時々來たまひしか、父は「彼は心優しくして勇氣に富み、才餘りあれども輕薄ならず、容貌も何處かに威嚴が備つてゐる、遉れ好男子ぢや、あの樣な男を、お前の夫に有たせたいものだがのう」と、妾の寐言でも聞きて、あてこすり言ひ給ふかの如く愧かしかりき。

其四、無上の喜――或日父が晩酌して、快げに笑ひ語り給ふ折も折、その人の來られたれば、先づ一杯と勸め、興の進むがまゝに、父は思ひ切つてといふ風にて、「不躾なことを申すやうだが………御身に定まれる妻君なくば、不束なる娘箕箒の妾となし下さるまじくやア、、、、」天の宣に洩れ聞く妾は、今更ながら父の恩は山よりも高しと、嬉し涙にくれつゝも、其人の返事いかにと胸轟らせば、「無骨なる拙者を其程までに信じ下さるとは、實に感謝に堪へませぬ誓つて終世の正妻と致しまする」その言葉の明確と爽々しかりしには、妾の嬉しさ何に譬へんやうもなし。夢には非ずやと、[illegible]の四邊を見廻しゝは愚なる心の所爲か。

其五、遊學――夫も術修業最中の身、のみならず妾とても、今の身にては、人に優れ給ふ大丈夫の妻たる資格なし、されば都に出でゝ學問及びその他の技藝をも覺え、いとしき夫の友にならんものと、その由父に告げたれば、父も快く承諾せられ、心いそ〳〵故郷を離るゝことゝはなりぬ。

其六、父を失ふ――都に學ぶこと足掛五年、其の間に言葉にも筆にも到底盡されぬ大切な父上は、彼の世の人となり給ひき。其の時の悲しさは嗚呼申上ぐまじ。唯この上は人に勝れて勉め、やがて彼の人と目出たく三々九度の杯を擧げ、せめては亡き父の靈を慰め奉らん。さなり〳〵と勵みし甲斐ありて、業も優等に卒へ、勇み〳〵て歸りしは夢か。

其七、失望落膽――歸れば間もなく思ひ詰めたる戀しき夫の家に行かるゝことゝ思ひの外、親戚に故障を申立てたる者ありて、母や兄は心ならずも之に從ひまア何たる事ぞ、彼の人に破談を申込み、彼の人は非常な失望にて、遂に遠國へ行かれしと聞き妾はカツパと伏し轉び、泣く涙さへ出でざりき。されど一縷の光明とも思ふべきは、再び彼の人に、妾が切なる心を述べんものと、それよりそれと、彼人の住所を聞き正し、先づはふり落つる涙を拭りて、一封の手紙を出せば、その返事に、「我早まれり、我過てり、然れども既往は奈何とも追ふべからず、今は妻を有てる身、何卒我の如き輕忽なる者を忘れ給ひて、天晴英雄の人と[illegible]の交りを結び給へ云々」とこれにて妾は精神的の未亡人となりたるなり。音聲

神的に殺されたるなり。

其入、活断を乞ふ――妾は更に彼の人を怨まず唯此の上は彼の人夫婦の幸福を願ひ、妾は一生独身にて菩提を弔はんと思へども、母は妾が身を心配し、日に痩せ衰へ給ひ、何うか再縁して呉れよと、手を合さぬばかりに勧めらる、妾は何くへなりとも出奔して、他日その不幸を謝せんと思ふことも、度々なれど、目のあたり、窶れ給ふを見れば、心鈍りて思ふに任せず。

石龍子先生よ、将来の幸福などは、つゆ望まず候へ共、いかにせば人らしき道を踏まるゝものに候や、お教へを乞ふ。

活断――すら／＼と、書かれたる文章も手蹟も実に敬服の至なり。そはともあれ、亡き父君、現在の母上、姉上、又忘れ難き人、及び御身の為に、再縁せらるゝことを石龍子は極力勧め申すなり、然るに再縁せずして、一生鬱々日を送られんか、亡き父上の本望にも非ず、母は現に窶れ給ふ、姉上も心配なされば、之を聞く彼の人も（事の理非を了解する正しき士ならば）御身が夫を有たざる間は、何となく気にかゝりて安心し能はざるべし。我が国には、古来一旦許嫁したるのみにて、一生空閨を守りたる武士気質を余は常に美風として賞歎する一人なれども、彼と是とは大に趣を異にす。何となれば彼の人は、御身の志をも確めずして既に二度目の妻を娶り、御身を捨てたるが故なり。御身よ御身よ心機を一転して、良縁を求めらるべし。御身が優しの心、御身の技倆あれば、如何なる善き夫も思の儘なり。

◀千葉縣濘山の狂女へ――剛なれば吉、柔なれば凶なるの卦見ゆ。これによれば貴女は声を大にして義父の乱行を告白詰責し、母上に諄々と正義の尊ふべきを諫めまゐらせ、義父を放逐する決行あらしむる事、これ貴女が行衛不明の父に対しての孝、これ母が行衛不明の夫に対するの貞ならずや、追ふべし／＼義夫を。

◀近江のすみれ女へ――現在に婚姻の式を挙ぐる能はざる事情ありて只約束だけに止めたるものが、末目出度なりたる例甚だ少し。石龍子この原因を考ふるに、此事や多く不正の分子を含まざるはなきが故なり、されば某大尉の人を断然諦め、家内一同と進退を共にせらるべし。

◀越後山吹の一枝女へ――貴女が金城鉄壁の心実に感服の至なり。されど妾子は必ずしも気概なしと断定すべきものに非ず、同役二十八歳の人と、正式の結婚せらるべし。然れども左の一言を貴女に呈せんとす。

昔は昔、今は今、心の駒の手綱弛めよ

◀須磨の浦の神田文子へ――不正なる行為にて得たる財を以て、親を養ふは孝に似て孝にあらず、貴女は身を仲居奉公までに落してもと言はるれど、それほどの決心あらば、再び舅姑の家に至りて「何卒私を二人の子の乳母と思召し、一生亡き夫の菩提を弔はせ下され」と縦ひ押出されてもその家を去らざるの覚悟あるべし。舅姑は鬼に非ず、蛇にあらず、必ず貴女の誠意に感じて、我が子同様に慰はるゝや必せり、これ舅姑の家の為にして、又貴女の幸福なり。

## 讀者文藝　投書歡迎（締切八月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以內）

▲小說（二十枚以內）

▲小品文（十枚以內）

◎和歌、短文は必ず端書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事但し鉛筆にて認めたるものは採用せず◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

### ◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢
▲三等參拾錢（圖書切符）
▲小說と小品文は選考の上相當の謝禮を呈す


## 毎月一日發行

### 定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

### 廣告料

| | 二十四字詰一行 | 半頁（十二行） | 一頁（六十四行） |
|---|---|---|---|
| 特等 | …… | 二十三圓 | 四十五圓 |
| 一等 | …… | 十九圓五十錢 | 三十八圓 |
| 二等 | 五十五錢 | 十六圓五十錢 | 三十二圓 |
| 三等 | 四十七錢 | 十三圓五十錢 | 二十六圓 |

▲等級の位置ハ切日等御照會次第御報可致候

### 註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ





明治四十一年八月一日發行（第八卷第拾號）

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

新刊二種

與謝野晶子作　◎岡田三郎助、中澤弘光畫

# 最新歌集　夏より秋へ

◎新しき歌壇この優艶の花を加へ情趣更に深し

全壹册

（著者肖像挿入）
裝禎頗美麗
正價金九拾錢
郵税金六錢

櫻井女塾主　櫻井ちか子編

# 主婦之友

米國敎育及び家庭の制度を視察し歸朝後私塾を開きて専心敎育に盡瘁せる編者が親しく米國の家庭に學びたる新時代の主婦の心得を原語原文と對照して記載せる最良無二の家庭寶典にして併せて英語學習の好伴侶なり

洋裝頗美麗
全壹册
正價金壹圓
郵税金八錢

記略載目

食卓禮式の心得●獻立の一例●米國一般家庭に於ける一週間の仕事の日割●英文―小さき主婦●家庭重寶●簡易病氣治療法●洗濯法●汚點拔き法●手輕料理法●菓子の拵へ方●雜之部●臺所の設計圖●臺所必要品の名稱●英文食卓對話（實話）

文學士 久保天隨君解

# 日本外史字解

全一冊 洋裝四六判 紙數百八十頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

本書は、外史中より、難字奇句を、抽出し、精細なる解釋を著けたるものにして、その用意の周密なる、從來世に出でしもの丶、比に非ず。初學者これを津梁とすれば、勞少くして功多く、まことに、机上の良師友たるべし。

文學士 久保天隨君釋

# 唐詩選新釋

正價一冊金三十錢郵税八錢 全部五冊金一圓卅錢(要郵税)

新刊 全五冊菊判和裝紙數二百五十頁

唐詩選の世に行はる丶、すでに久しく、家絃戸誦、今に至りて衰へず。從つてその註解、亦た多しと雖も、或は高遠に過ぎ、或は通俗に失し、取るべきもの殆んど之なし、本書は善く其衷を折し繁簡宜しきを得、周匝精當、著者の學力を傾注し、すべて、集めて之を大成したるの觀あり。なほ卷首には、精細たる解題を附し、唐詩の大略を論述し、作家小傳を載せ、ひとり、これのみを以てするも、支那の詩學史として、絕大の價値あるを疑はず、世の文學に志あるもの、必ず一讀せざるべからず。

文學士 久保天隨君訂

# 重訂 日本外史

(再版)

全一冊四六判 洋裝總クロース 紙數八百餘頁 正價七十五錢 郵税八錢

頼氏の外史、一たび世に出づるや、幾んど家ごとに一篇を藏し、刊本亦た數種の多きを算す。然れども、迭に多少の得失あり、終に完本と爲すべきものを見ず、本書は、あらゆる異本を蒐集して、この長處を合せ字體の詭異卑俗に渉るものは盡く其正に從ひ字句の異同は皆之を註し。なほ篇中人物の官位通稱小字を欄外に載せ、校訂嚴密、一字の誤訛なきを期す、庶幾はくは以て外史の定本たるを得む。加ふるに携帶便又他書の比に非ず。

東京本町 博文

女(後付の三)

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱君著

# 歌學論叢

全一册　洋装四六判總クロース　紙數約五百五十頁　近刊

歌學論叢は、佐々木信綱氏が、數年前より、帝國大學文科大學に於て、和歌の歴史を講せらるゝ、其研究の餘材として成れるものなり。研究の深邃考證の精細は、これを『仙覺以前の萬葉研究』『戸田茂睡』等に見るべく、見識の卓拔はこれを『萬葉集私見』『人麿と赤人』『紀貫之』『香川景樹論』等に見るべく、趣味津々汲めども盡きざるものには、『萬葉集の女歌人』『建禮門院右京太夫』等あり。又『六人部是香』『大隈言道』『野村望東尼』等、未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國文學史上に一新事實を提供せるものなり。其他、『時勢と和歌』『歌學に就て』『上世の和歌』『歌格の研究に就て』『山家集の後に』『金槐集の終に』『近世歌人雜話』『家集のいろ／＼』『和歌の將來』等、すべて廿編。國文和歌に興味を有する人々にとりて、必讀の好著なり。

東京（博文館）本町

佐々木弘綱翁遺著
佐々木信綱君校訂

# 和歌世々のあと

全一册　洋装四六判美本　紙數約二百五十頁　近刊

本書は、詠歌自在千代田歌集等の撰者として、明治の和歌壇に多大の功勞ありし故佐々木弘綱翁が遺著にして、國初より近世に至る凡ての歌人の代表的作品を時代を追うて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、和歌の小歷史として、作歌の模範として、獨習用に、また高等女學校の教科書に、最も適當なる書なり、長く草稿の儘秘藏せられしを、今般翁が十七年回忌に際し、息信綱氏の嚴密なる校訂を經、かつ年表系統圖等を添へ、紀念の爲出版せらる。江湖がこの好著を驩迎せられむ事は、弊館の信じて疑はざる所なり。

東京本町 博文館

（後付の四）

# 肺病患者よ告ぐ

女(後付の八)

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥した猶ほ横東獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚して骸骨同樣に成最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥褥の內と雖ども常に書見する癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に望みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告け試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名つけ內務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘內地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及ひ**印度バタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

**藥價** 七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●七十日分十四圓遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

**主治効能** ●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功ある

用治及ひ詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

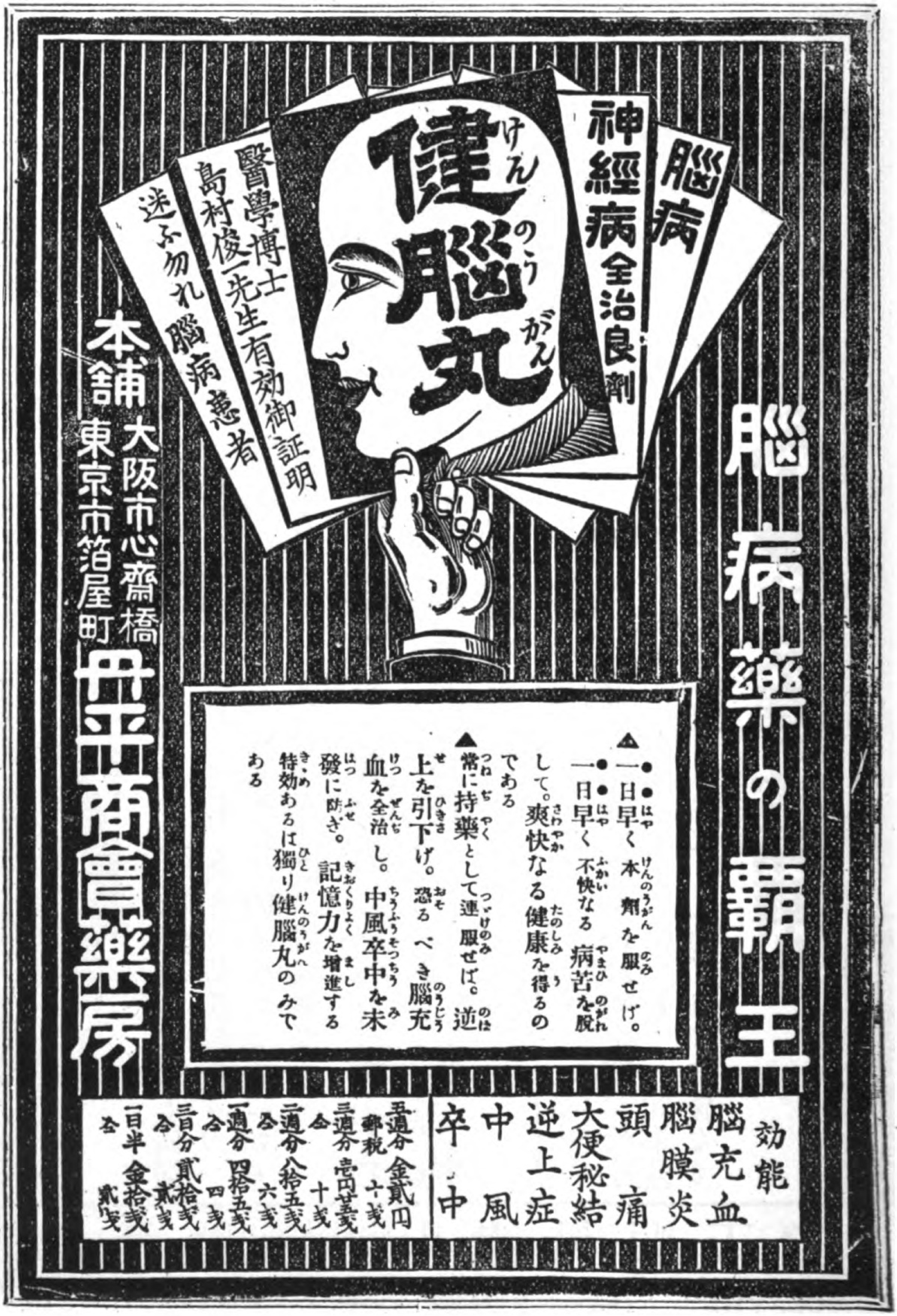
**調劑本舖 川名助次郎**

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
大阪心齋橋筋二丁目 丹平商會
橫濱吉田町二丁目都橋際 永井永進會
信州諏訪郡永明村鬼場 藤森草樂堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
北海道函館辨天町 國領平七
埼玉縣熊ヶ谷町 櫛田金造

**肺治散特約店**

東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
大阪西橫堀舟町橋西 詰賣藥卸賣株式會社
馬關西南部町 賣藥會社
東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀨戸物町 玉置金八
東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂
相模橫須賀汐入町 茶木商店
東京神田區鍛冶町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
越後國長岡町 藤井卯吉
東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通大野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 谷回春堂
長野市大門町 小林傳兵衛

(全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す)


脳病薬の覇王
健脳丸
神經病全治良劑
脳病
醫學博士島村俊一先生有効御証明
迷ふ勿れ脳病患者
本舗 大阪市心齋橋 東京市箔屋町 丹平商會藥房
▲一日早く本剤を服せば。一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持薬として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき脳充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記憶力を増進する特効あるは獨り健脳丸のみである
効能
脳充血
脳膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円 郵税 十戔
三週分 壹円廿戔 仝 十戔
二週分 八拾五戔 仝 六戔
一週分 四拾五戔 仝 四戔
三日分 貳拾戔 仝 貳戔
一日半 金拾戔 仝 貳戔

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版61
明治41年7月（第8巻第9号）、8月（第8巻第10号）

2009年7月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3619-3 C3321